

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

加茂B古墳群 金谷遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書X V

平成20年3月

東日本高速道路株式会社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

か も こ ふん ぐん
加 茂 B 古 墳 群
かな や い せき
金 谷 遺 跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書 X V

平成 20 年 3 月

東日本高速道路株式会社
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。北関東自動車道建設整備事業も、その目的に添って計画されたものです。

このたび、東日本高速道路株式会社は、桜川市加茂部地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定しました。この事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である加茂B古墳群が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、東日本高速道路株式会社から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成17年6月から同年9月、平成18年10月から平成19年3月まで加茂B古墳群の発掘調査を実施しました。

本書は、加茂B古墳群及び金谷遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である東日本高速道路株式会社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人 見 實 徳

例 言

1 本書は、東日本高速道路株式会社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度及び18年度に発掘調査を実施した、茨城県桜川市加茂部799番地の3ほかに所在する加茂B古墳群と、同市西飯岡金谷882番地の2ほかに所在する金谷遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査 平成17年6月1日～平成17年9月30日、平成18年10月1日～平成19年3月31日

整 理 平成19年8月1日～平成20年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

平成17年度

首席調査員兼班長 川又 清明

主任調査員 稲田 義弘

主任調査員 田月 淳一 平成17年6月1日～平成17年6月30日

主任調査員 市村 俊英 平成17年7月1日～平成17年9月30日

平成18年度

首席調査員兼班長 樫村 宣行

主任調査員 稲田 義弘

主任調査員 小藪江 徹朗 平成18年10月1日～平成19年1月31日

主任調査員 小川 貴行 平成18年11月1日～平成18年11月30日

調査員 川井 伸也 平成18年12月1日～平成19年3月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員川井伸也が担当した。

5 本書を作成するにあたり、当遺跡から出土した旧石器時代の遺物においては窪田恵一氏、ガラス小玉の材質同定においては筑波大学世界文化遺産学専攻保存科学博士松井敏也氏、弥生土器においては茨城県立歴史館行政資料室長海老沢稔氏、鉄鏃においてはひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化振興課文化財調査事務所主幹稲田健一氏、古墳時代の土器においては財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査官（当時）坂野和信氏、墨書土器の判読は国立歴史民俗博物館平川南氏に御指導いただいた。直刀のレントゲン撮影においては、財団法人とちぎ生涯学習文化財団栃木県埋蔵文化財センター主査車塚哲久氏、土壌分析においてはパリン・サーヴェイ株式会社に委託した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標Ⅹ系座標に準拠し、X軸 = +38,760m、Y = +29,200mの交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いた。北から南へはA, B, C……, 西から東へは1, 2, 3……0とし、「A 1区」, 「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c……j, 西から東へ1, 2, 3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」, 「B 2 b2区」のように呼称した。

- 2 土層の観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 3 本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SK-土坑 SD-溝跡 SA-柵列跡 TP-陥し穴
TM-古墳 PG-ピット群 P-ピット K-攪乱

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品
N-自然遺物 G-ガラス製品





土層 K-攪乱

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、遺構は60分の1の縮尺での掲載を基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物実測図中の表示は次のとおりである。

	焼土・施釉・赤彩・還元部		炉・火床面・鹿沼土				
	竈部材・粘土・炭化材・旧表土・黒色処理		煤・柱あたり痕・ガラス質滓・油煙				
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品 (旧石器集中地点に限り●で示した)	△	金属製品
▲	自然遺物	☆	ガラス製品	-----	硬化面		

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、法量をm, cm, 重量をgで示した。なお、現存値は () で、推定値は [] を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、竪穴住居跡については炉または竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸(径)方向」は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	かもびーこふんぐん かなやいせき							
書名	加茂B古墳群 金谷遺跡							
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第304集							
著者名	川井 伸也							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
加茂B古墳群	茨城県桜川市加茂部 799番地の3ほか	08231 - 324084	36度 20分 52秒 〔36度 21分 03秒〕	140度 09分 23秒 〔140度 09分 11秒〕	84 ~ 107m	20050601 ~ 20050930 20061001 ~ 20070331	1,737㎡ 4,171㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査
金谷遺跡	茨城県桜川市西飯岡 かねたに 金谷882番地の2ほか	08231 - 324081	36度 21分 54秒 〔36度 21分 42秒〕	140度 03分 53秒 〔140度 04分 05秒〕	48 ~ 51m	20060525 ~ 20060526	53,419.04㎡ (内4,025㎡ の報告)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
加茂B古墳群	包蔵地	旧石器	旧石器集中地点 2か所		剥片		第6号墳は墳丘上に埋葬施設が2か所あり、第2主体部から直刀やガラス小玉などが出土した。古墳に隣接して墳丘や周溝などの施設を持たない小形の石棺を3基確認した。 東斜面は段切り状に整形され、奈良・平安時代の集落跡が形成されている。北側には、平安時代より続く加茂大神御子神主玉神社が立地し、関連性が考えられる。	
		縄文時代	陥し穴 7基					
	集落跡	弥生	竪穴住居跡 10軒		弥生土器(壺),土製品(紡錘車),石器(鎌),ガラス製品(小玉)			
		奈良・平安	竪穴住居跡 18軒 掘立柱建物跡 5棟 土坑 1基		土師器(坏・碗・皿・甕),須恵器(坏・高台付坏・盤・蓋・高坏・高盤・鉢・壺・瓶・甕・甑),灰釉陶器(長頸瓶),緑釉陶器(蓋),金属製品(刀子)			
古墳群	古墳時代	方墳 1基 円墳 8基 石棺 3基 墓坑 3基		土師器(坏・碗),須恵器(坏・蓋・壺),鉄器(直刀・鎌・刀子),ガラス製品(小玉)				
その他	時期不明	溝跡 7条 柵列跡 4列 道路跡 1条 土坑 29基 ピット群 5か所 舟止め石 1か所						
金谷遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物跡 1棟 溝跡 1条					
	その他	時期不明	土坑 2基 ピット列 1列		土師器(坏・高坏・甕),土製品(土玉・支脚)			
要約	旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡である。山頂から西斜面にかけて古墳が築造されている。東斜面は、段切り状に整形されており奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が構築されている。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 加茂B古墳群	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 旧石器時代の遺構	8
調査方法	8
石器集中地点の記載方法	8
石器集中地点	8
2 縄文時代の遺構と遺物	14
陥し穴	14
3 弥生時代の遺構と遺物	18
竪穴住居跡	18
4 古墳時代の遺構と遺物	41
(1) 古墳	41
(2) 石棺	71
(3) 墓坑	76
5 奈良・平安時代の遺構と遺物	79
(1) 竪穴住居跡	79
(2) 掘立柱建物跡	125
(3) 土坑	132
6 その他の遺構と遺物	135
(1) 溝跡	135
(2) 柵列跡	139
(3) 道路跡	142
(4) 土坑	143
(5) ピット群	148
(6) 舟止め石	151
(7) 遺構外出土遺物	153
第4節 まとめ	155
第4章 金谷遺跡	169
第1節 遺跡の概要	169
第2節 遺構と遺物	169
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	169
(1) 竪穴住居跡	169
(2) 掘立柱建物跡	170
(3) 溝跡	170
2 その他の遺構と遺物	170
(1) 土坑	170
(2) ピット列	171
付章	
写真図版	
付図	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

東日本高速道路株式会社は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長（現東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に現地踏査を、平成12年2月16日及び3月2日に試掘調査を実施し、加茂B古墳群の所在を確認した。平成12年9月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、事業地内に加茂B古墳群が所在する旨を回答した。

平成13年3月26日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年3月27日、茨城県知事あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年1月25日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる平成17年度埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成17年2月14日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、加茂B古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年6月1日から9月30日、平成18年10月1日から平成19年3月31日まで加茂B古墳群の発掘調査を実施することとなった。

金谷遺跡については、すでに取扱いが済んでいたが、工事中に遺構が発見されたため、平成18年5月25・26日に財団法人茨城県教育財団が補足調査を実施した。

第2節 調査経過

加茂B古墳群の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程	平成17年度				平成18年度			平成19年度		
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備										
表土除去										
遺構確認										
遺構調査										
遺物洗浄										
注記作業										
写真整理										
補足調査										
撤収準備										

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

加茂B古墳群は、茨城県桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）加茂部799番地の3ほかに所在している。

当遺跡が所在する旧岩瀬町は、茨城県の西部に位置し、北部には富谷山、高峯山があり、栃木県真岡市、益子町、茂木町に接している。東には雨引山、加波山、南には筑波山があり、丘陵性の山々に囲まれた盆地をなしている。町の中央部を北東から流れる桜川は、北東部に位置する鋤柄峠の山間、鏡ヶ池に源を発し、霞ヶ浦へ注いでいる。平地は、桜川、大川、築輪川などの流域と山間部に入りこんだ谷状の低地などに広がる。当遺跡は、桜川市の南東部に位置する標高100mほどの緩やかな丘陵に立地している。

当町域を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層と、これを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、鹿沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また水田に利用されている桜川流域一帯は、河川の浸食・堆積作用による沖積地である¹⁾。調査前の現況は、山林である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する岩瀬盆地と、それを望む丘陵地や桜川及びその支流域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している²⁾。

旧石器時代の遺跡は少なく、遺構や出土状況が明確ではない。上野原地内では石槍が発見されているほか³⁾、加茂遺跡⁴⁾〈2〉、辰海道遺跡⁵⁾〈3〉からは、尖頭器や石刃、松田古墳群⁶⁾〈4〉からは、ナイフ形石器などが出土している。

桜川とその支流には沖積地が形成され、この沖積地を取り囲むような丘陵の縁辺部に、縄文時代の遺跡が多く立地している。主な遺跡は、磯部遺跡〈5〉、松田古墳群、加茂遺跡、花園遺跡〈6〉、裏山遺跡〈7〉、犬田神社前遺跡〈8〉などがある。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布している。主な遺跡は、長辺寺遺跡〈9〉、松田古墳群、加茂遺跡、裏山遺跡、防人遺跡〈10〉、高幡遺跡〈11〉、当向遺跡〈12〉、辰海道遺跡、犬田山神古墳〈13〉、犬田神社前遺跡、大日下遺跡〈14〉などがある。当遺跡周辺に位置する松田古墳群、加茂遺跡、高幡遺跡からは、弥生後期の集落が確認されている。出土土器は、栃木県から茨城県西部にかけて分布している二軒屋式土器の要素が確認できる。また、茨城県北部に分布の中心をもつ十王台式土器の要素をもつ土器も出土しており⁷⁾、県北部域との地域間交流を考えるうえでも重要な地域である。

この地域には、古墳時代の遺跡も多く分布し、なかでも古墳の数が多。古墳群は46か所周知されており、確認されている古墳の総数は170基を超え⁸⁾、桜川や大川、筑輪川の沖積地を望む丘陵部に多く分布している。大川と桜川の間にある長辺寺山の丘陵には、狐塚古墳〈15〉、その山頂には長辺寺山古墳〈16〉が位置している。狐塚古墳は、全長約40mの前方後方墳で、主体部内は粘土棺であり、副葬品として銅鏃や短甲などが出土している。この墳形や副葬品から、狐塚古墳は岩瀬地域の最も古い古墳とされている⁹⁾。長辺寺山古墳は、

未調査のため墳丘の規模など明確ではないが、全長約120mを測る岩瀬地域最大の前方後円墳とされている¹⁰⁾。

調査された古墳には、間中古墳〈17〉、西沢古墳〈18〉、青柳古墳群〈19〉、松田古墳群、稲古墳群〈20〉、花園古墳群〈21〉、山ノ入古墳群〈22〉などがある。青柳古墳群の2号墳は、山稜地形を利用して作られた外径42mの円墳である。埋葬主体部は粘土郭で、粘土の状況から胴張りの木棺と考えられ、時期は6世紀前半とされている¹¹⁾。松田古墳群は、6世紀前半から後半にかけて築造された古墳群である。埋葬施設が確認されている3基は、それぞれ埋葬形態が異なり、6世紀前半とされる前方後円墳の1号墳は粘土郭、6世紀後半とされる円墳の2号墳は半地下式の横穴式石室、6世紀後半以降とされる円墳の3号墳は竪穴形の石室である。1号墳は、副葬品として直刀や銅鏡、ガラス小玉、銅釧、鉄鎌などが出土していることから、首長クラスの権力者が被葬者と想定されている¹²⁾。松田古墳群と対峙する当古墳群と同じ斜面の低地部には、加茂A古墳群〈23〉が位置しており、関連性が想定されている。

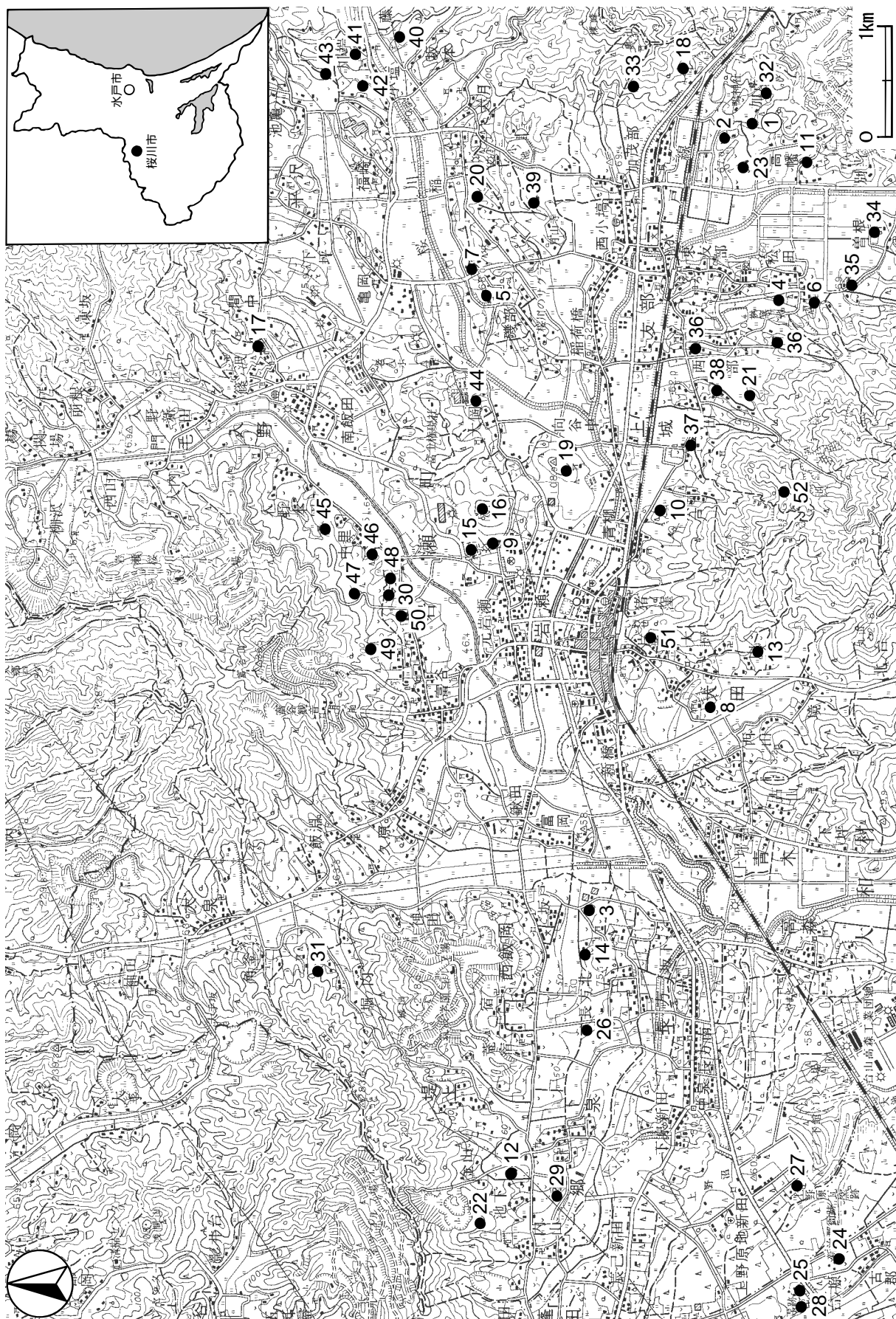
奈良・平安時代に入ると、この地域は新治郡大幡郷に編入される。新治郡には、国土統一神話や古代史に関わる神社の鴨大神御子神主玉神社、鴨鳥五所神社、稲田神社や加茂部、加茂といった地名が多くみられる。「カモ」を冠する神社や地名があることから、古代の豪族賀(加)茂氏との関わりがあると考えられている。賀茂氏の祖は、大国主命と伝えられ、出雲系の中核の氏族である。賀茂氏一統の地は大和葛城地方で、その地には賀茂氏の祖霊を奉祀する社があり、その社は「伊波瀬の杜」とも呼ばれていた。これらのことから、当地域は出雲地方からの移住者、あるいは賀茂氏ゆかりの氏族集団によって開拓が進められた地域と推測されている¹³⁾。

旧岩瀬町と旧協和町の境に新治郡衙跡〈24〉が位置しており、そこから北西約600mに、新治郡の郡寺とされる新治廃寺跡〈25〉が位置している。集落跡は、辰海道遺跡、磯部遺跡、当向遺跡、犬田神社前遺跡、金谷遺跡〈26〉といった大集落が確認され、そのほか生産遺跡も周知されており、新治廃寺跡の周辺には瓦を焼成していた上野原瓦窯跡〈27〉や久地楽長町瓦窯跡〈28〉、本郷瓦塚遺跡〈29〉が位置している。さらに、富谷山の山裾には郷の窯跡〈30〉、城山から北に約9kmには須恵器焼成を行っていた堀の内古窯跡群〈31〉が位置している。新治郡は下野国と接する位置にあり、下野国との交流の深い地域であったと考えられる。また、窯跡も多く見られることから、新治群営の土器や瓦の生産地であったと想定できる。この当時の新治郡は、文化的にも物質的にも交流の場として繁栄した地域であった。

※文中の〈〉内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

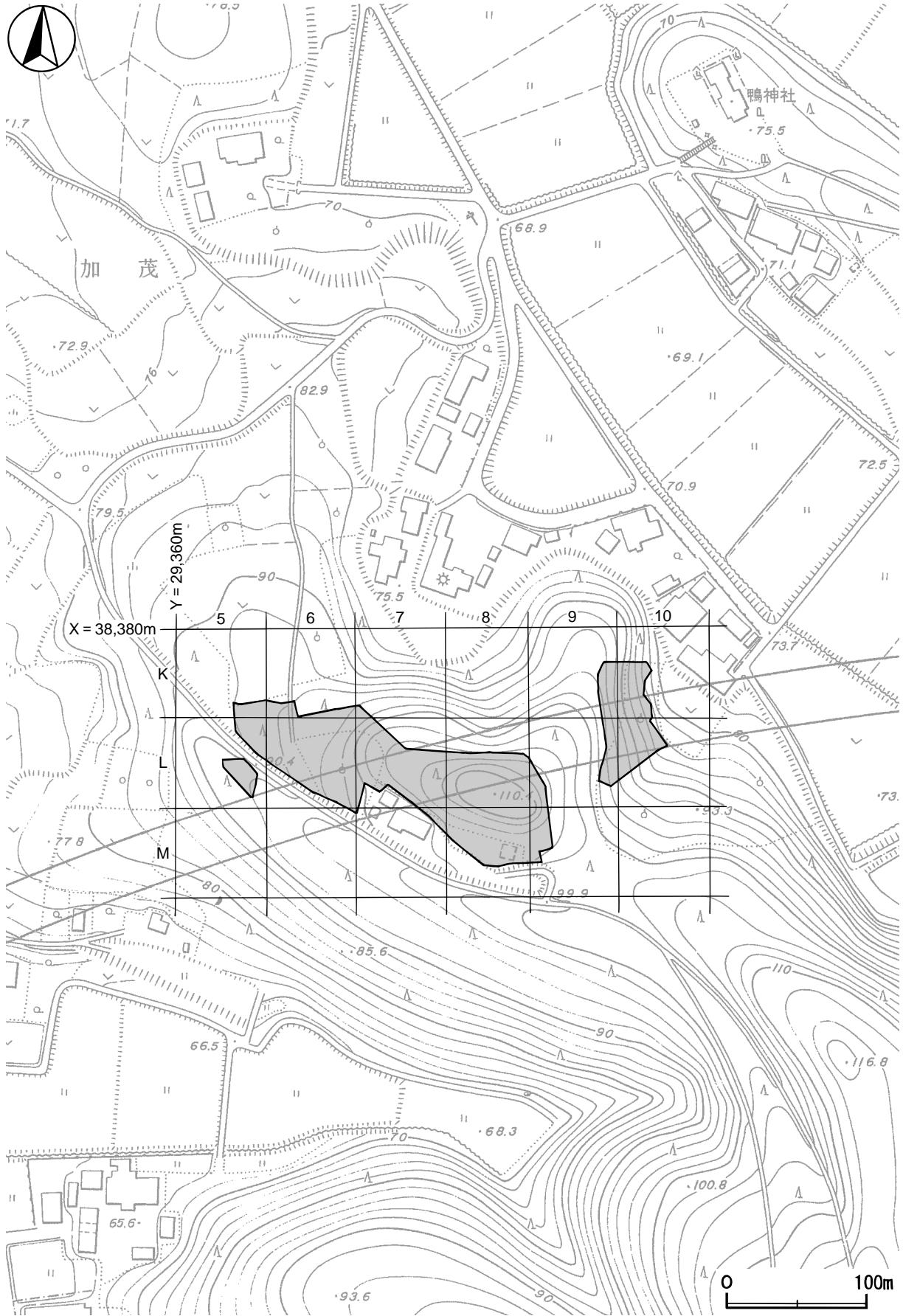
- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編)(地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年3月
- 4) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書X I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第249集 2005年3月
- 5) 仲村浩一郎 後藤一成 宮田和男 芳賀友博 鴨志田祐一「辰海道遺跡I 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書I」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第222集 2004年3月
- 6) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書III」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第224集 2004年3月
- 7) 前掲4)と同じ
- 8) 瓦吹堅「岩瀬盆地考古学点描」『領域の研究-阿久津久先生還暦記念論集-』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 9) 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- 10) 前掲9)と同じ
- 11) 伊東重敏「青柳2号墳調査報告」『岩瀬町文化財調査報告』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 12) 前掲5)と同じ
- 13) 前掲3)と同じ



第1図 加茂B古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院「真岡」1：50,000を使用）

表1 加茂B古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
	加茂B古墳群								27	上野原瓦窯跡							
2	加茂遺跡								28	久地楽長町瓦窯跡							
3	辰海道遺跡								29	本郷瓦塚遺跡							
4	松田古墳群								30	郷の窯跡							
5	磯部遺跡								31	堀の内古窯跡群							
6	花園遺跡								32	加茂東遺跡							
7	裏山遺跡								33	諏訪古墳							
8	犬田神社前遺跡								34	曾根古墳群							
9	長辺寺遺跡								35	庚申塚古墳							
10	防人遺跡								36	ますみ古墳群							
11	高幡遺跡								37	御領塚古墳							
12	当向遺跡								38	花園遺跡							
13	犬田山神古墳								39	池下古墳群							
14	大日下遺跡								40	山口寺前古墳							
15	狐塚古墳								41	磯古墳群							
16	長辺寺山古墳								42	小塩古墳群							
17	間中古墳								43	向孫七古墳群							
18	西沢古墳								44	大岡古墳群							
19	青柳古墳群								45	剣前古墳							
20	稲古墳群								46	中里古墳群							
21	花園古墳群								47	富谷弥陀古墳							
22	山ノ入古墳群								48	岩屋家古墳							
23	加茂A古墳群								49	富谷古墳群							
24	新治郡衙跡								50	郷の塚古墳							
25	新治麩寺跡								51	猪窪古墳群							
26	金谷遺跡								52	車塚古墳群							



第2図 加茂B古墳群調査区設定図

第3章 加茂B古墳群

第1節 遺跡の概要

加茂B古墳群は、桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）加茂部799番地の3ほかに所在し、桜川市北東部の標高84～107mの緩やかな丘陵上に位置している。調査前の現況は山林である。

平成17・18年度に、5,908㎡について調査を行った。検出された遺構は、旧石器時代の石器集中地点2か所、縄文時代の陥し穴7基、古墳9基（円墳8，方墳1），石棺3基，墓坑3基，竪穴住居跡28軒（弥生時代10，奈良・平安時代18），掘立柱建物跡5棟，溝跡7条，柵列跡4列，道路跡1条，土坑30基（奈良・平安時代1，時期不明29），ピット群5か所，舟止め石1か所などである。

調査の結果、古墳時代を中心に、旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが確認された。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に43箱が出土している。主な出土遺物は、弥生土器（壺），土師器（坏・碗・皿・甕），須恵器（坏・高台付坏・蓋・高坏・盤・高盤・鉢・壺・瓶・甕・甑），灰釉陶器（瓶），緑釉陶器（蓋），土製品（紡錘車），石器・石製品（鏃・砥石），金属製品（直刀，刀子）などである。

第2節 基本層序

調査区中央部（L 8 d5）にテストピットを設定し、基本層序の観察を行った（第3図）。

第1層は、表土であり、層厚は22～26cmである。

第2層は、極暗褐色を呈するソフトロームへの漸移層である。焼土を微量含み、粘性・縮まりともに普通であり、層厚は15～19cmである。

第3層は、極暗褐色を呈するソフトロームへの漸移層である。粘性・縮まりは普通であり、層厚は17～35cmである。

第4層は、暗褐色を呈するソフトローム層で、粘性・縮まりが強く、層厚は7～25cmである。

第5層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性は普通で、縮まりが強く、層厚は5～16cmである。

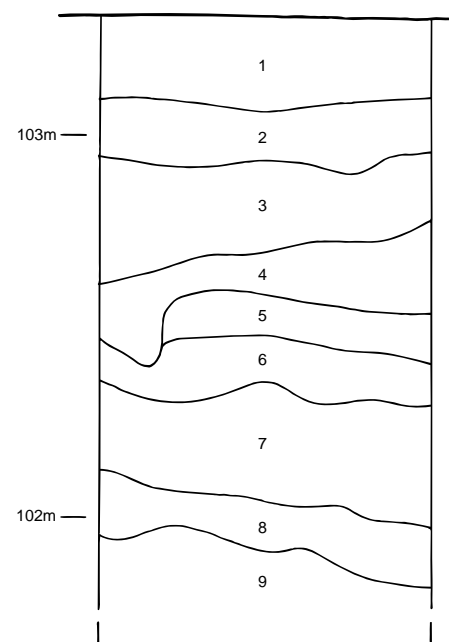
第6層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性は強い。縮まりも極めて強く、層厚は7～17cmである。

第7層は、褐色（第6層より彩度が高い）を呈するハードローム層で、粘性は強い。縮まりも極めて強く、層厚は15～24cmである。

第8層は、褐色を呈する鹿沼軽石層（以下KPと略す）への漸移層で、粘性・縮まりは普通であり、層厚は9～17cmである。

第9層は、褐色を呈するKP純層で、粘性・縮まりは普通である。層厚は、下層が未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は第4層上面で確認された。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の石器集中地点と遺物

(1) 調査の方法

遺構確認作業及び各時代の遺構調査を進めていく過程で、旧石器時代の石器が出土したため、それらの地点に調査区を設定し、ローム層の掘り下げを行った。

調査区は2か所設定した。第1調査区は、標高94.5～95.0mの緩斜面部であり、第2調査区は、標高105.00～106.25mの山頂付近の斜面部である。

調査の結果、第1調査区ではL 6 b7～L 6 d9区から34点、第2調査区ではM 8 a6～M 8 b9区から104点の石器が出土した。

調査の過程で出土した石器などは、原位置を保持しながら該期の遺構に配慮して掘り下げ、出土状況の写真撮影及び位置と標高の計測を行った。

(2) 石器集中地点の記載方法

2か所の石器集中地点から出土した石器などの総数は138点である。遺物番号は石器集中地点ごとに付した。実測図未掲載の剥片なども一覧表で記載した。(記載内容は「遺物番号」「器種」「石質」「グリッド」「標高」である。)

時期の特定については、「茨城県後期旧石器時代編年案」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題— 発表要旨・資料集』2002年)を参考にした。

(3) 石器集中地点

第1・2調査区において確認された2か所の石器集中地点を、それぞれ第1・2号石器集中地点とし、以下その特徴と出土した石器などについて記述する。

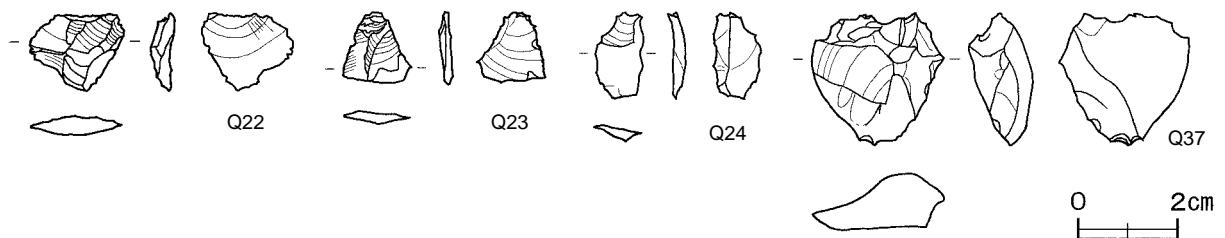
第1号石器集中地点 (第4・5図)

位置 調査区西部のL 6 b7～L 6 d9区、標高96mの丘陵西斜面に位置している。

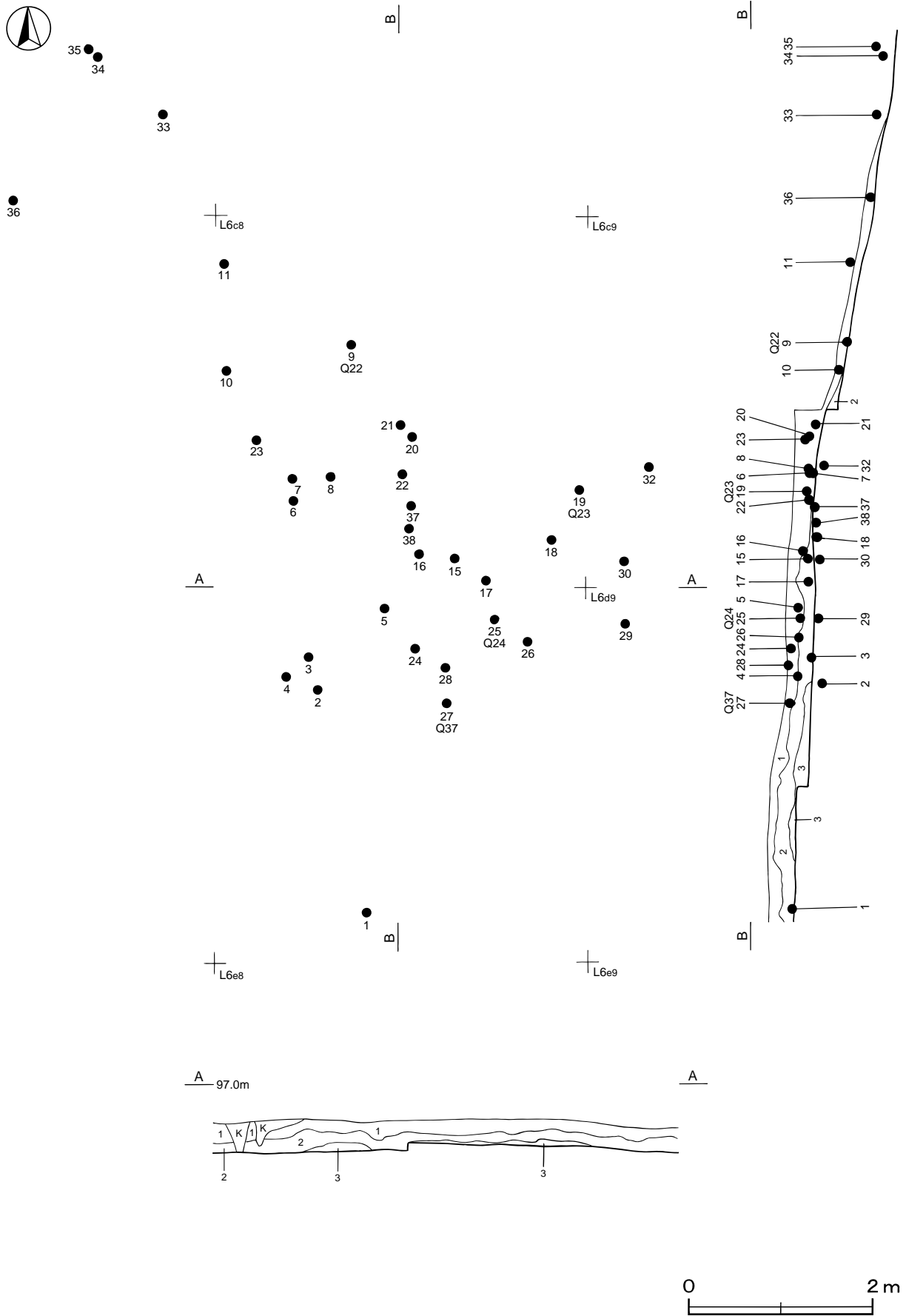
遺物出土状況 L 6 c8区を中心とする南北9.6m、東西7.0mの範囲で、34点の石器や剥片が出土している。垂直分布は標高95.621～96.670mで、基本層序の第3層(土層断面図の第1層)から第6層の上部(土層断面図の第3層上部)である。

遺物 搔器1点(チャート)、剥片33点(黒曜石15, チャート18)が出土している。Q22・Q23は、二次加工された鱗状の形状をする剥片で、石材は黒曜石である。

所見 本地点は、黒曜石、チャートを素材とした石器製作の場と想定される。石核は確認されず、搔器と剥片のみである。尖頭器製作の際に剥離したと思われる鱗状の形状をする剥片がみられるため、尖頭器製作の場と考えられる。第2号石器集中地点と同様にIIc期と考えられる。



第4図 第1号石器集中地点出土遺物実測図



第5図 第1号石器集中地点実測図

第1号石器集中地点出土遺物観察表（第4図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q22	剥片	1.50	1.90	0.40	0.81	黒曜石	二次加工痕を有する 押圧剥離	L 6 c8	
Q23	剥片	1.40	1.35	0.25	0.30	黒曜石	二次加工痕を有する 押圧剥離	L 6 c8	
Q24	剥片	1.68	0.93	0.33	0.28	黒曜石	押圧剥離	L 6 d8	
Q37	搔器	2.60	2.57	1.13	5.60	チャート	押圧剥離で刃部形成	L 6 d8	

表2 第1号石器集中地点出土石器一覧表

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量 (g)	標高 (m)	備考	番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量 (g)	標高 (m)	備考
1		剥片	チャート	L 6 d8	1.60	96.613		21		剥片	チャート	L 6 c8	0.30	96.420	
2		剥片	チャート	L 6 d8	0.50	96.331		22		剥片	チャート	L 6 c8	0.50	96.488	
3		剥片	チャート	L 6 d8	0.70	96.372		23		剥片	チャート	L 6 c8	1.30	96.198	
4		剥片	黒曜石	L 6 d8	2.00	96.524		24		剥片	チャート	L 6 d8	2.10	96.616	
5		剥片	チャート	L 6 d8	0.70	96.563		25	Q24	剥片	黒曜石	L 6 d8	0.28	96.521	
6		剥片	チャート	L 6 c8	0.10	96.405		26		剥片	黒曜石	L 6 d8	0.20	96.542	
7		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.20	96.395		27	Q37	搔器	チャート	L 6 d8	5.80	96.624	
8		剥片	黒曜石	L 6 c8	6.70	96.402		28		剥片	チャート	L 6 d8	0.60	96.670	
9	Q22	剥片	黒曜石	L 6 c8	0.81	96.053		29		剥片	チャート	L 6 d9	3.30	96.310	
10		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.30	96.111		30		剥片	チャート	L 6 c9	0.50	96.311	
11		剥片	チャート	L 6 c8	0.60	96.013		32		剥片	黒曜石	L 6 c9	1.00	96.289	
15		剥片	黒曜石	L 6 c8	1.40	96.480		33		剥片	チャート	L 6 b7	2.50	95.700	
16		剥片	チャート	L 6 c8	0.70	96.486		34		剥片	黒曜石	L 6 b7	0.20	95.621	
17		剥片	チャート	L 6 c8	0.40	96.444		35		剥片	黒曜石	L 6 b7	3.30	95.661	
18		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.50	96.396		36		剥片	チャート	L 6 b7	2.10	95.730	
19	Q23	剥片	黒曜石	L 6 c8	0.30	96.461		37		剥片	チャート	L 6 c8	0.40	96.377	
20		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.20	96.461		38		剥片	黒曜石	L 6 c8	1.00	96.378	

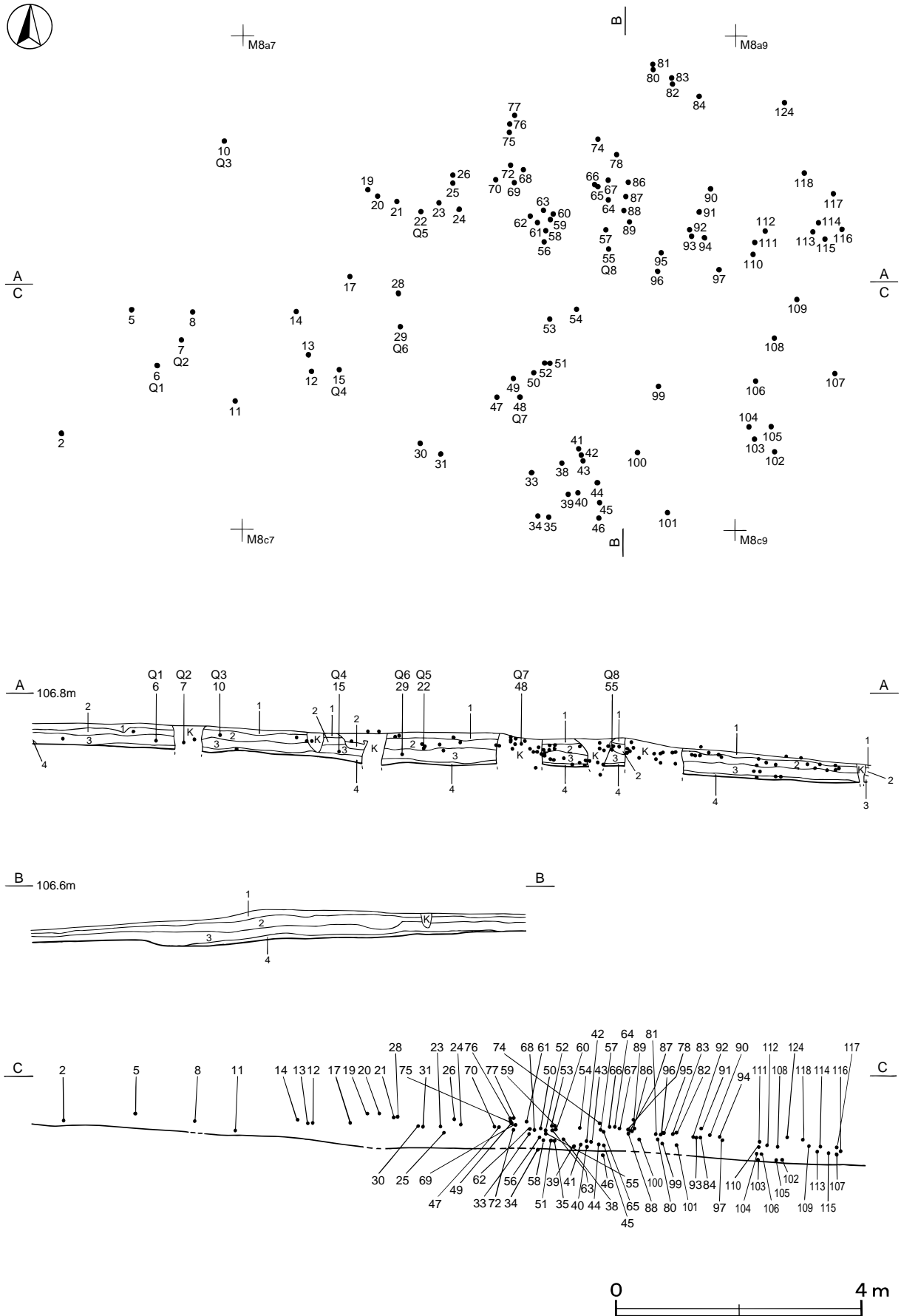
第2号石器集中地点（第6・7図）

位置 調査区中央部のM 8 a6～M 8 b9区，標高106mの丘陵頂部に位置している。

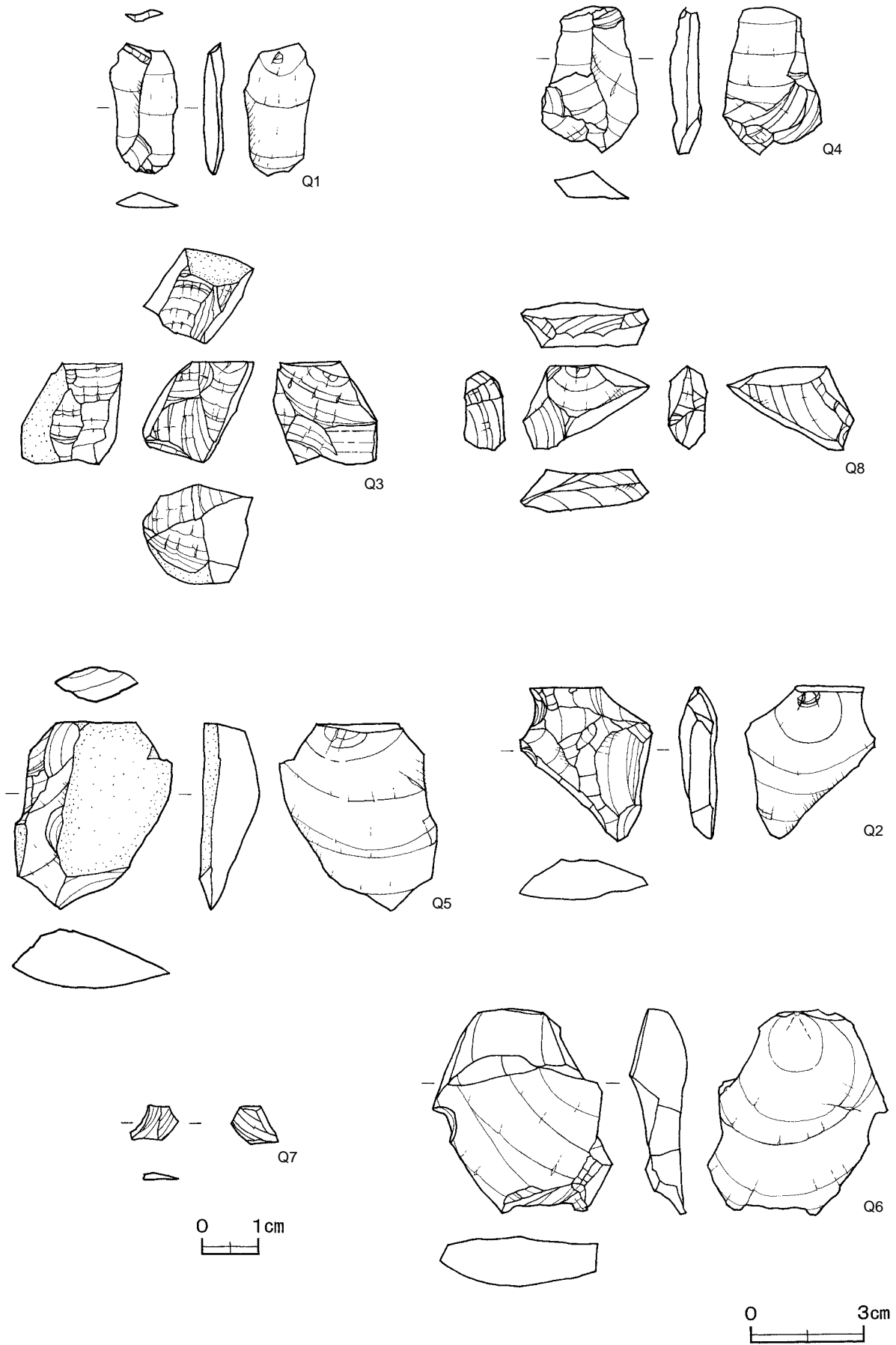
遺物出土状況 M 8 b8区を中心とする南北8 m，東西13mの範囲で，104点の石器や剥片が出土している。垂直分布は標高105.410～106.276mで，基本層序の第3層（土層断面図の第1層）から第8層上部（土層断面図の第4層上部）であるが，基本層序で見られる第6・7層のハードローム層は確認されなかった。

遺物 石核2点（石英，チャート），縦長剥片5点（頁岩1，チャート4），剥片97点（頁岩3，石英7，チャート83，瑪瑙1，ホルンフェルス3）が出土している。Q 1・Q 4は頁岩の縦長剥片である。Q 3は石英の石核で，自然面を有する。Q 7はチャートで，二次加工痕を有する鱗状の剥片である。

所見 本地点は，出土している石器の様相から，チャートを主体とした素材を用いた石器製作の場と考えられる。石核は石英とチャートの2点が確認され，その他は剥片のみである。尖頭器製作の際に剥離したと思われる鱗状の形状をする剥片がみられるため，槍先形尖頭器製作の場と想定され，第1号石器集中地点と同様にⅡc期と考えられる。



第6图 第2号石器集中地点实测图



第7图 第2号石器集中地点出土遺物実測図

第2号石器集中地点出土遺物観察表(第7図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	縦長剥片	3.50	1.84	0.55	2.26	頁岩	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b6	
Q 2	剥片	4.00	3.50	1.30	1.31	頁岩	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b6	
Q 3	石核	2.75	3.00	2.50	24.50	石英	上部・側部を打面として剥片を剥離	M 8 a6	
Q 4	縦長剥片	3.90	2.60	0.87	6.45	チャート	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b7	
Q 5	剥片	5.00	4.17	1.63	30.30	頁岩	正面に剥離痕を有する	M 8 a7	
Q 6	剥片	5.00	4.26	1.50	32.40	頁岩	正面に横方向の剥離痕を有する	M 8 b7	
Q 7	剥片	0.65	0.82	0.16	0.09	チャート	二次加工痕を有する	M 8 b8	
Q 8	石核	2.20	3.40	1.00	7.70	チャート	多方向の剥離痕を有する	M 8 a8	

表3 第2号石器集中地点出土石器一覧表

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量(g)	標高(m)	備考	番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量(g)	標高(m)	備考
2		剥片	瑪瑙	M 8 b6	0.40	106.006		44		剥片	チャート	M 8 b8	0.40	105.677	
5		剥片	チャート	M 8 b6	0.60	106.191		45		剥片	チャート	M 8 b8	0.40	105.637	
6	Q 1	縦長剥片	頁岩	M 8 b6	2.24	106.071		46		剥片	チャート	M 8 b8	0.10	105.486	
7	Q 2	剥片	頁岩	M 8 b6	13.10	105.944		47		剥片	チャート	M 8 b8	0.40	105.981	
8		剥片	チャート	M 8 b6	0.40	106.098		48	Q 7	剥片	チャート	M 8 b8	0.08	105.950	
10	Q 3	石核	石英	M 8 a6	24.50	106.154		49		剥片	チャート	M 8 b8	1.60	105.975	
11		剥片	石英	M 8 b6	7.50	105.869		50		剥片	チャート	M 8 b8	0.40	105.908	
12		剥片	チャート	M 8 b7	0.60	106.109		51		剥片	チャート	M 8 b8	1.00	105.715	
13		剥片	チャート	M 8 b7	0.10	106.020		52		剥片	チャート	M 8 b8	0.30	105.941	
14		剥片	石英	M 8 b7	0.40	106.058		53		剥片	チャート	M 8 b8	0.20	105.948	
15	Q 4	縦長剥片	チャート	M 8 b7	6.45	105.869		54		剥片	チャート	M 8 b8	0.10	105.974	
17		剥片	チャート	M 8 a7	2.20	105.996		55	Q 8	石核	チャート	M 8 a8	5.76	105.913	
19		剥片	チャート	M 8 a7	0.90	106.133		56		剥片	チャート	M 8 a8	0.50	105.894	
20		剥片	チャート	M 8 a7	0.70	106.123		57		剥片	チャート	M 8 a8	0.20	105.909	
21		剥片	チャート	M 8 a7	0.20	106.110		58		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.865	
22	Q 5	剥片	頁岩	M 8 a7	30.30	105.900		59		剥片	チャート	M 8 a8	0.20	105.888	
23		剥片	チャート	M 8 a7	0.20	105.950		60		剥片	チャート	M 8 a8	1.10	105.907	
24		剥片	チャート	M 8 a7	0.10	106.022		61		剥片	チャート	M 8 a8	2.20	105.873	
25		縦長剥片	チャート	M 8 a7	0.40	106.092		62		剥片	チャート	M 8 a8	0.60	105.883	
26		剥片	チャート	M 8 a7	0.30	106.068		63		剥片	チャート	M 8 a8	0.50	105.807	
28		剥片	チャート	M 8 b7	0.80	106.060		64		剥片	チャート	M 8 a8	0.90	105.934	
29	Q 6	剥片	頁岩	M 8 b7	32.40	105.798		65		剥片	チャート	M 8 a8	0.90	105.914	
30		剥片	チャート	M 8 b7	1.60	105.952		66		剥片	チャート	M 8 a8	0.50	105.890	
31		剥片	チャート	M 8 b7	0.80	105.883		67		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.917	
33		剥片	チャート	M 8 b8	5.60	105.856		68		縦長剥片	チャート	M 8 a8	0.60	106.003	
34		剥片	チャート	M 8 b8	0.10	105.596		69		剥片	チャート	M 8 a8	3.40	106.052	
35		剥片	チャート	M 8 b8	1.80	105.702		70		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.958	
38		剥片	チャート	M 8 b8	0.30	105.724		72		剥片	チャート	M 8 a8	0.70	105.923	
39		剥片	ホルンフェルス	M 8 b8	0.10	105.610		74		剥片	チャート	M 8 a8	0.80	105.953	
40		剥片	チャート	M 8 b8	0.20	105.642		75		縦長剥片	チャート	M 8 a8	2.40	106.035	
41		剥片	チャート	M 8 b8	0.70	105.735		76		剥片	チャート	M 8 a8	1.00	106.065	
42		剥片	チャート	M 8 b8	0.60	105.697		77		剥片	チャート	M 8 a8	2.40	106.015	
43		剥片	チャート	M 8 b8	0.20	105.696		78		剥片	チャート	M 8 a8	1.00	105.971	

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量(g)	標高(m)	備考
80		剥片	チャート	M 8 a8	0.50	105.721	
81		剥片	チャート	M 8 a8	0.20	105.845	
82		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.822	
83		剥片	石英	M 8 a8	27.90	105.817	
84		剥片	チャート	M 8 a8	0.90	105.776	
86		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.899	
87		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.883	
88		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.913	
89		剥片	石英	M 8 a8	1.90	106.013	
90		剥片	ホソノエリス	M 8 a8	0.20	105.858	
91		剥片	石英	M 8 a8	2.20	105.883	
92		剥片	チャート	M 8 a8	0.30	105.806	
93		剥片	チャート	M 8 a8	0.20	105.856	
94		剥片	チャート	M 8 a8	0.10	105.818	
95		剥片	チャート	M 8 a8	0.50	105.867	
96		剥片	石英	M 8 a8	0.30	105.895	
97		剥片	チャート	M 8 a8	0.70	105.796	
99		剥片	チャート	M 8 b8	0.60	105.659	
100		剥片	チャート	M 8 b9	3.70	105.698	

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量(g)	標高(m)	備考
101		剥片	チャート	M 8 b9	2.10	105.647	
102		剥片	チャート	M 8 b9	0.60	105.437	
103		剥片	チャート	M 8 b9	0.90	105.570	
104		剥片	チャート	M 8 b9	0.60	105.530	
105		剥片	チャート	M 8 b9	0.30	105.423	
106		剥片	チャート	M 8 b9	0.30	105.572	
107		剥片	ホソノエリス	M 8 b9	0.30	105.514	
108		剥片	チャート	M 8 b9	0.40	105.603	
109		剥片	チャート	M 8 b9	0.30	105.618	
110		剥片	チャート	M 8 a9	3.50	105.410	
111		剥片	チャート	M 8 a9	0.90	105.723	
112		剥片	チャート	M 8 a9	0.80	105.724	
113		剥片	チャート	M 8 a9	0.50	105.627	
114		剥片	石英	M 8 a9	0.50	105.642	
115		剥片	チャート	M 8 a9	3.00	105.607	
116		剥片	チャート	M 8 a9	0.60	105.605	
117		剥片	チャート	M 8 a9	0.60	105.646	
118		剥片	チャート	M 8 a9	2.00	105.687	
124		剥片	チャート	M 8 a9	0.60	105.769	

2 縄文時代の遺構と遺物

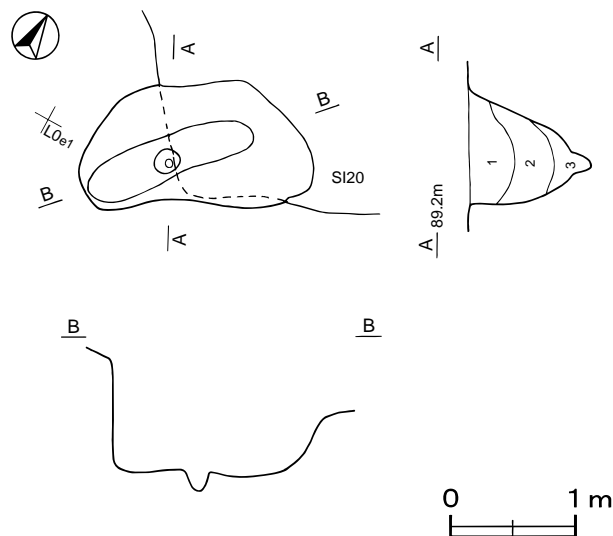
縄文時代の陥し穴7基を確認した。調査区東部に7基が確認されている。標高89m～89.25mと84.75m～85.5mの斜面部に位置している。主軸は、南北のものと、東西のものがみられる。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

第1号陥し穴（第8図）

位置 調査区東部のL 0 d1区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第20号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.74m、短径0.93mの不定形で、長径方向はN-51°-Eである。斜面に対して直交している。



第8図 第1号陥し穴実測図

深さは102cmで、壁は南壁が直立しており、北壁は外傾し、短径方向も外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、中央部には逆茂木を立てたと考えられる深さ16cmのピット1か所が検出された。

覆土 3層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 覆土上層から混入したと思われる土師器片2点（甕）、須恵器片6点（坏5，甕1）が出土している。

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

第2号陥し穴 (第9図)

位置 調査区東部のK 0 j2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。

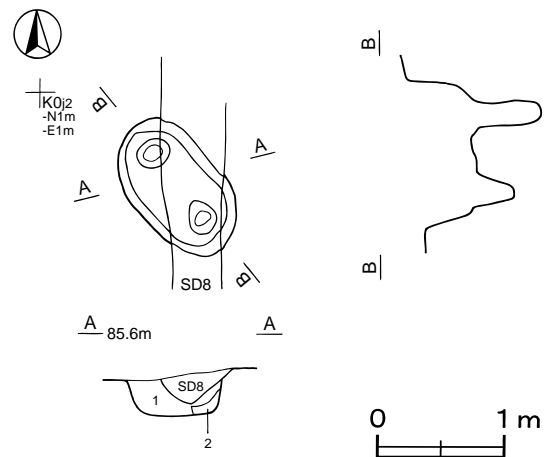
規模と形状 長径1.20m, 短径0.72mの楕円形で, 長径方向はN-40°-Wである。斜面に対し平行である。深さは105cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で, 逆茂木を立てたと考えられる深さ31cm・51cmのピット2か所が検出された。

覆土 2層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

所見 時期は, 遺構の形状から縄文時代と考えられる。

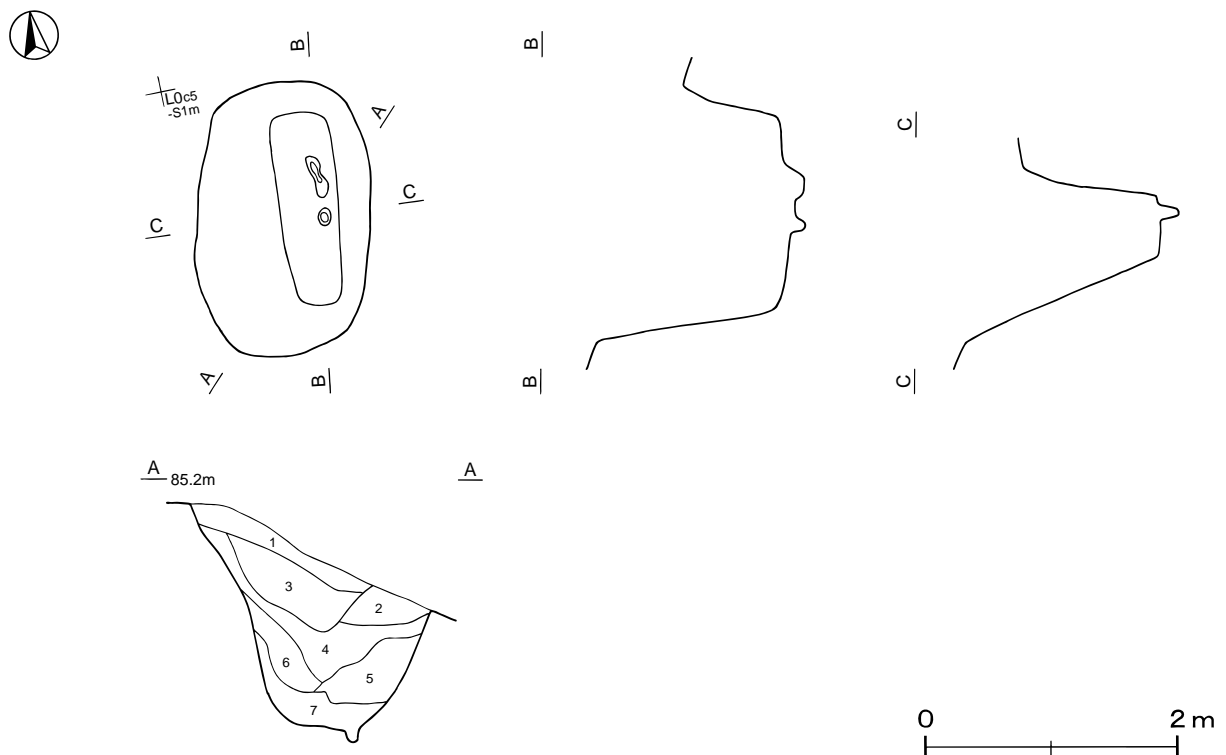


第9図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴 (第10図)

位置 調査区東部のL 0 c5区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 長径2.16m, 短径1.37mの楕円形で, 長径方向はN-13°-Eである。斜面に対して直交している。深さは154cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で, 逆茂木を立てたと考えられる深さ13cmのピット2か所が検出された。



第10図 第3号陥し穴実測図

覆土 7層に分層される。特に西側より土が流入した様相を示している自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | | |

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

第4号陥し穴 (第11図)

位置 調査区東部のL0c4区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 長径1.50m, 短径0.88mの不整楕円形で, 長径方向はN-55°-Eである。斜面に対して直交している。深さは160cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

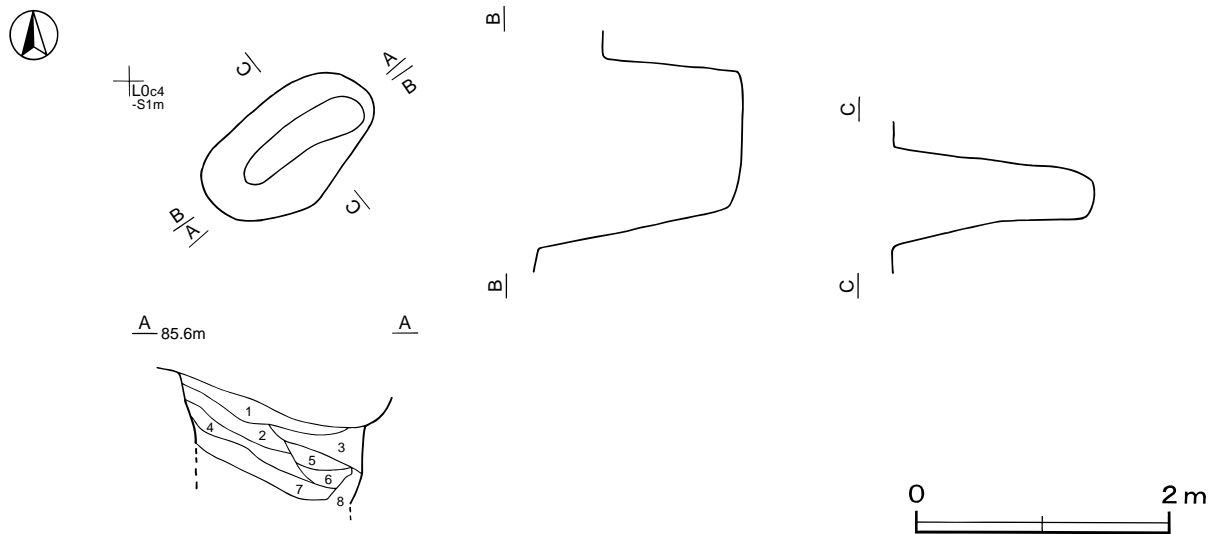
覆土 8層に分層される。特に西側から土が流入した様相を示している自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量 | 8 黒色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 覆土上層より混入したと思われる土師器片2点(坏, 甕), 須恵器片1点(高坏)が出土している。

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第11図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (第12図)

位置 調査区東部のL0c4区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第35号土坑を掘り込んでいる。

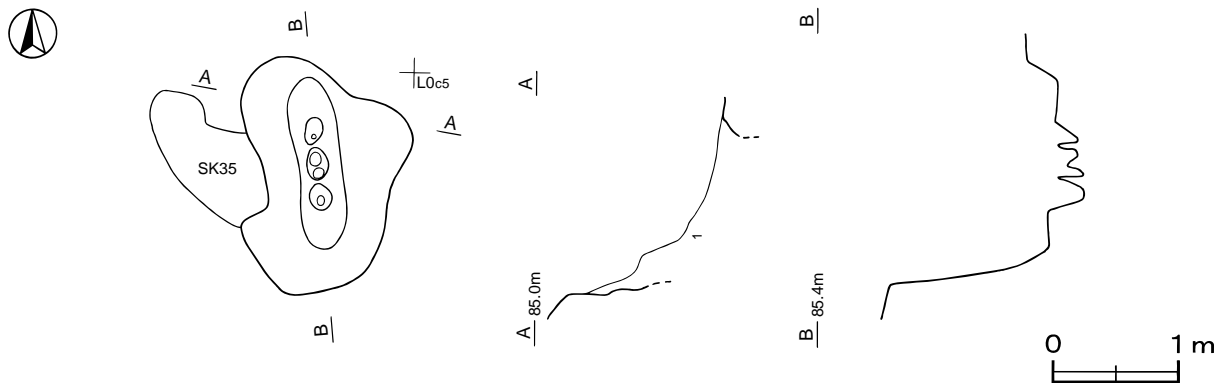
規模と形状 長径1.87m, 短径1.21mの不定形で, 長径方向はN-13°-Wである。斜面に対して平行である。深さは127cmで, 壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で, 逆茂木を立てたと考えられる深さ21~26cmのピット4か所が, 直線的に並んで検出された。

覆土 単一層である。自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第12図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴（第13図）

位置 調査区東部のL 0 f1区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

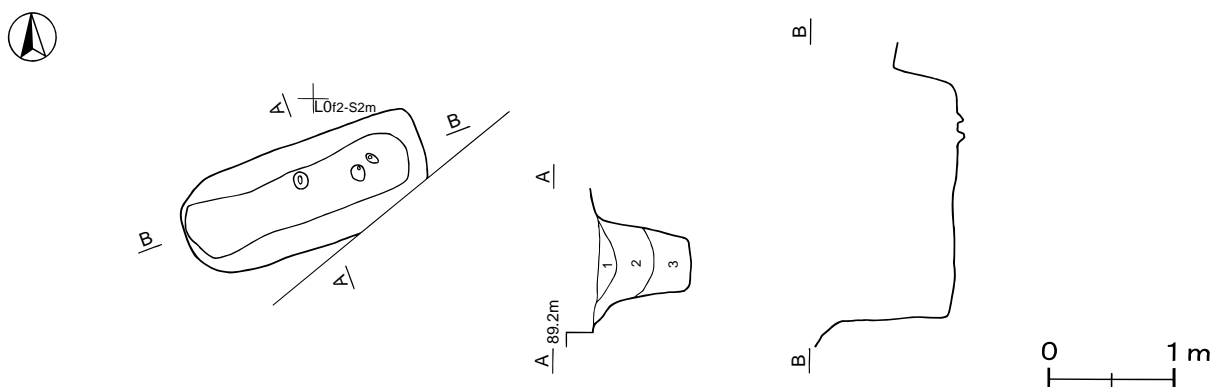
規模と形状 長軸2.03m、短軸0.86mの隅丸長方形で、長軸方向はN-69°-Eである。斜面に対して直交している。深さは84cmで、西壁は直立、東壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ7~10cmのピット3か所が検出された。

覆土 3層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
 2 黒褐色 ロームブロック少量
 3 黒褐色 ローム粒子少量

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



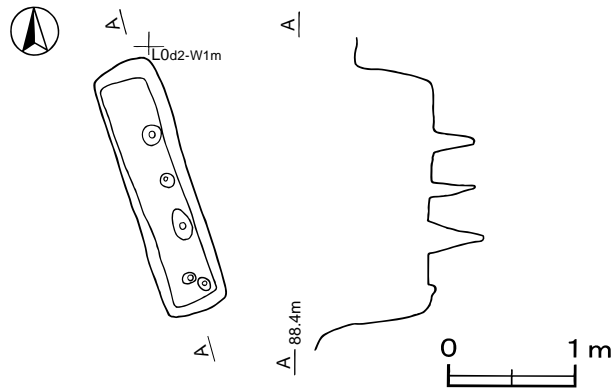
第13図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴（第14図）

位置 調査区東部のL 0 d1区、標高88mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第18号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.06m、短軸0.53mの長方形で、長軸方向はN-14°-Wである。斜面に対して平行である。



第14図 第7号陥し穴実測図

深さは88cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ36～47cmのピットが3か所、直線的に並ぶように検出された。

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

表4 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古・新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	L 0 d1	N - 51° - E	不定形	1.74 × 0.93	102	直立 外傾	平坦	自然	土師器片, 須恵器片	本跡 SI20
2	K 0 j2	N - 40° - W	楕円形	1.20 × 0.72	105	外傾	平坦	自然		本跡 SD8
3	L 0 c5	N - 13° - E	楕円形	2.16 × 1.37	154	外傾	平坦	自然		
4	L 0 c4	N - 55° - E	不整楕円形	1.50 × 0.88	160	外傾	平坦	自然		
5	L 0 c4	N - 13° - W	不定形	1.87 × 1.21	127	外傾	平坦	自然		SK35 本跡
6	L 0 f1	N - 69° - E	隅丸長方形	2.03 × 0.86	84	直立 外傾	平坦	自然		
7	L 0 d1	N - 14° - W	長方形	2.06 × 0.53	88	外傾	平坦	-		本跡 SI18・20

3 弥生時代の遺構と遺物

当時代の竪穴住居跡10軒が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

第1号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区西部のL 6 g6区, 標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側の壁は削平により残存していないため、規模や形状は明確ではない。確認された範囲は南北軸4.98m, 東西軸3.75mで、平面形は隅丸長方形と推定される。主軸方向はN - 21° - Wである。壁高は19～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南部のP 5付近が硬化している。

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ30～64cmで、規模と形状から支柱穴である。P 5は深さ22cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

覆土 10層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

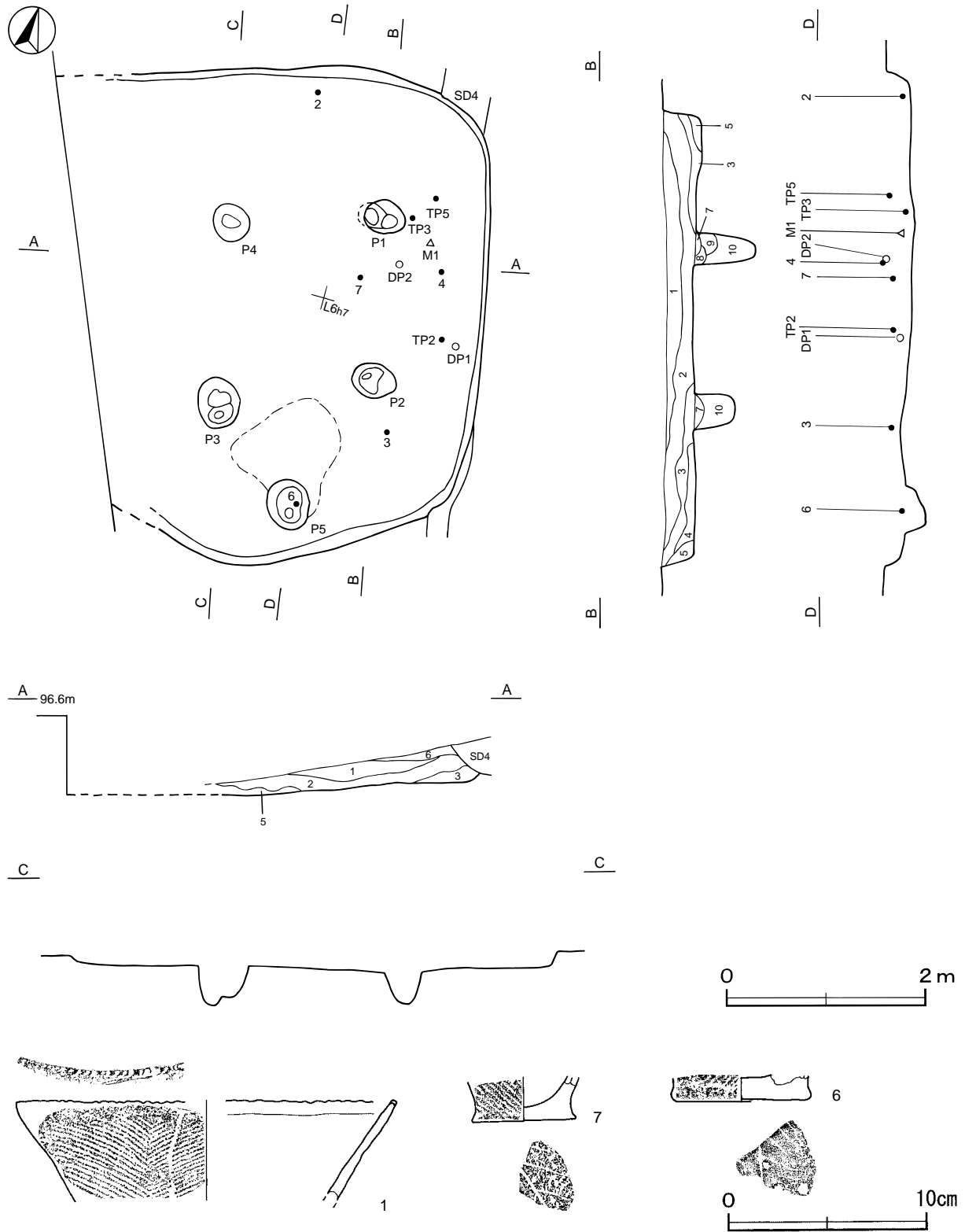
土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 極暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量, 焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量
5 褐色	ロームブロック中量	10 褐色	ロームブロック多量

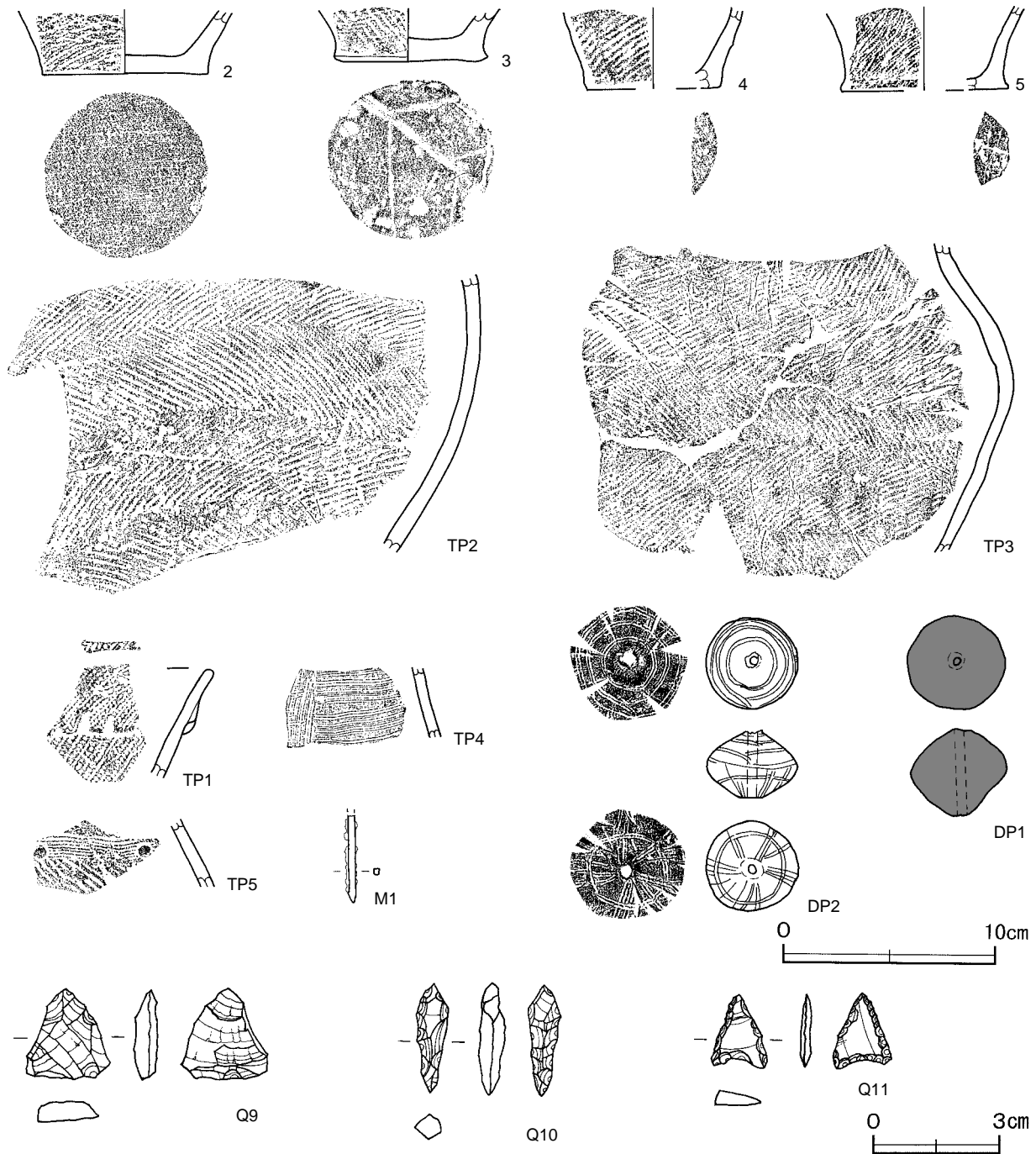
遺物出土状況 弥生土器片514点(壺)の他に、混入した須恵器片3点(坏), 土師器片3点(坏)が東部の覆

土上層から床面にかけて出土している。土器の多くが細片である。2は北壁際、3は南東コーナー部のそれぞれ覆土下層，TP 2・TP 5は東壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。Q10・Q11は南西部の覆土上層から出土しており，流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から後期中葉と考えられる。



第15図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第16図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	[19.0]	(5.1)	-	石英	黒褐	普通	口唇部縄文原体押圧 口縁部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成	南部覆土中	5%
2	弥生土器	壺	-	(3.0)	7.7	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	胴部付加条二種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	北部下層	10%
3	弥生土器	壺	-	(2.5)	7.5	長石・石英	黒褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成 底部木葉痕	南東部下層	10%
4	弥生土器	壺	-	(3.8)	[6.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	東部上層	5%
5	弥生土器	壺	-	(3.9)	[7.8]	長石・石英・雲母	オリーブ褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北西部覆土中	5%
6	弥生土器	壺	-	(1.2)	[7.0]	石英・雲母	にぶい黄褐	普通	胴部付加条一種(軸縄不明)縄文施文 底部木葉痕	P5覆土下層	5%
7	弥生土器	壺	-	(2.2)	[5.0]	石英・白色粒子・赤色粒子	橙	普通	付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	東部上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部付加条一種(付加2条)縄文施文	南部覆土中	5%
TP2	弥生土器	壺	-	(13.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成	東部上層	10%
TP3	弥生土器	壺	-	(14.5)	-	長石・石英	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成	東部下層	5%
TP4	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	頸部櫛歯状工具(10本櫛歯)による縦区画内に横走文充填	南部下層	5% P L 16
TP5	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	長石・石英	褐	普通	頸部下端に横走文施文後ボタン状の貼瘤付 胴部付加条一種(軸縄不明)縄文施文	北東部上層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	4.5	4.1	0.45	65.2	土(長石・雲母)	外面に煤付着	東部下層	
DP2	紡錘車	4.3	3.2	0.45	49.7	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	半截竹管により同心円状に施文 裏面放射状に施文後円状に施文	東部上層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	石鏃	2.10	2.00	0.51	2.12	石英	側面に押圧剥離痕 未製品カ	南部上層	
Q 10	鏃	2.60	0.65	0.67	1.12	チャート	両面に剥離痕 両先端部摩滅	南部上層	P L 21
Q 11	石鏃	1.78	1.10	0.30	0.54	チャート	両側面に押圧剥離痕	南部上層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	不明鉄製品	(4.1)	0.3	0.4	(1.28)	鉄	棒状 断面方形	東部下層	

第2号住居跡(第17・18図)

位置 調査区西部のL 7 h1区、標高99mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第8号墳、第1号土坑、第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外のため規模や形状は明確ではない。確認された範囲は南北軸9.68m、東西軸4.66mで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-3°-Eである。壁高は24~46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全体的に平坦で軟弱である。

ピット 9か所。P 1~P 9は深さ12~28cmで、規則性が認められないため支柱穴は不明である。

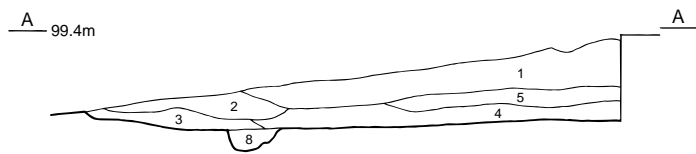
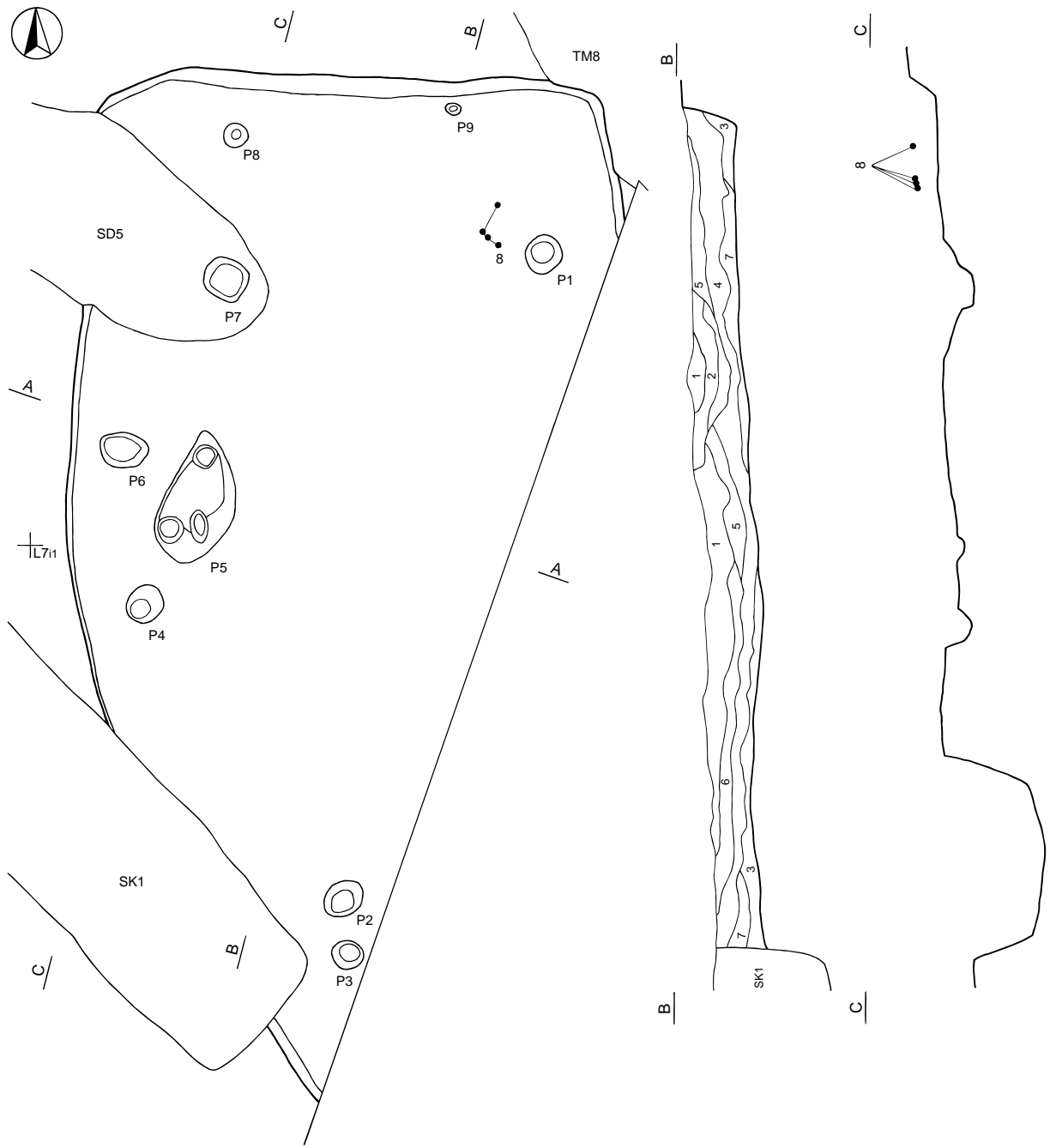
覆土 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

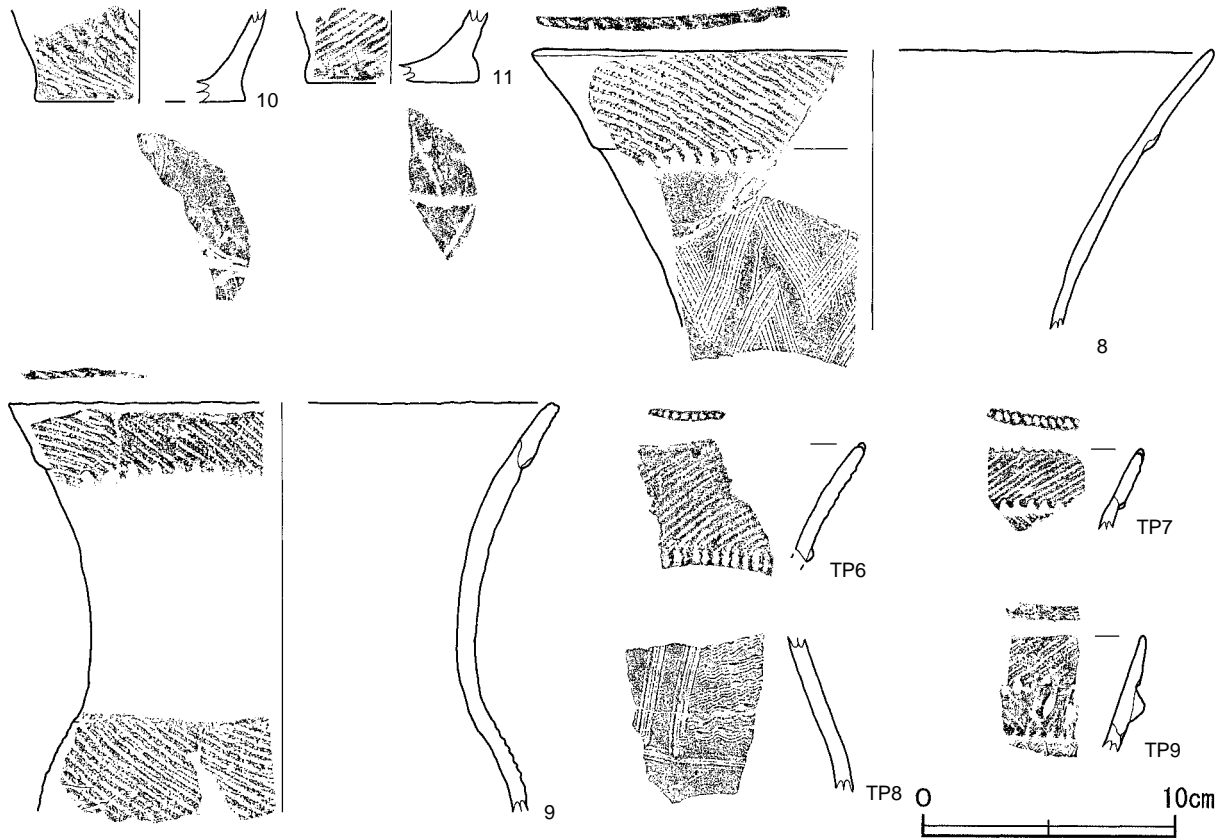
1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量	5	極暗褐色	ローム粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量、焼土粒子	6	黒褐色	ローム粒子少量
		微量	7	暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量
3	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土	8	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量
		粒子微量			
4	暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子			
		少量			

遺物出土状況 弥生土器片169点(壺)が東部の覆土上層から下層にかけて出土している。覆土上層からは土師器片3点(坏2, 小皿1)も出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。8は北東部の覆土上層, 10・TP 6・TP 7は北東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。出土土器が少ないため判断は難しいが、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。今回の調査で確認された弥生時代の住居跡の中では、大形の長方形を呈しており、第4号住居跡と同じような形状をするものと思われる。



第17图 第2号住居跡実测图



第18図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
8	弥生土器	壺	[26.8]	(11.1)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部附加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部に櫛歯状工具(9本櫛歯)による山形文施文	北東部上層	10%
9	弥生土器	壺	[21.6]	(16.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文施文 口縁部附加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部無文 胴部附加条一種(付加2条)縄文施文	南部下層	10% P L 16
10	弥生土器	壺	-	(3.7)	[8.3]	長石・石英	褐	普通	胴部附加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北東部下層	5%
11	弥生土器	壺	-	(2.9)	[6.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	南東部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP6	弥生土器	壺	-	(4.6)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口縁部附加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧	北部下層	5%
TP7	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部縄文原体押圧 口縁部附加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部附加条一種(付加2条)縄文施文	北部下層	5%
TP8	弥生土器	壺	-	(6.2)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(5本櫛歯)による縦区画内に波状文充填	南部下層	5% P L 16
TP9	弥生土器	壺	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口縁部二段に縄文原体押圧 貼瘤付 頸部に櫛歯状工具による波状文施文	南部下層	5%

第3号住居跡 (第19図)

位置 調査区西部のL 6 g8区, 標高97mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側と南側の壁は削平により残存していないため, 規模や形状は明確でない。確認された範囲は

長軸5.50m，短軸2.85mで，平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-27°-Eである。壁高は12~19cmで外傾している。

床 全体的に平坦で軟弱である。

炉 長径90cm，短径57cmの楕円形状の範囲が火を受けて赤変している。掘り込みを持たない地床炉と考えられる。

ピット 2か所。P1・P2は深さ12cm・60cmで，規模と配置から支柱穴と考えられるが，この他にピットは確認できない。

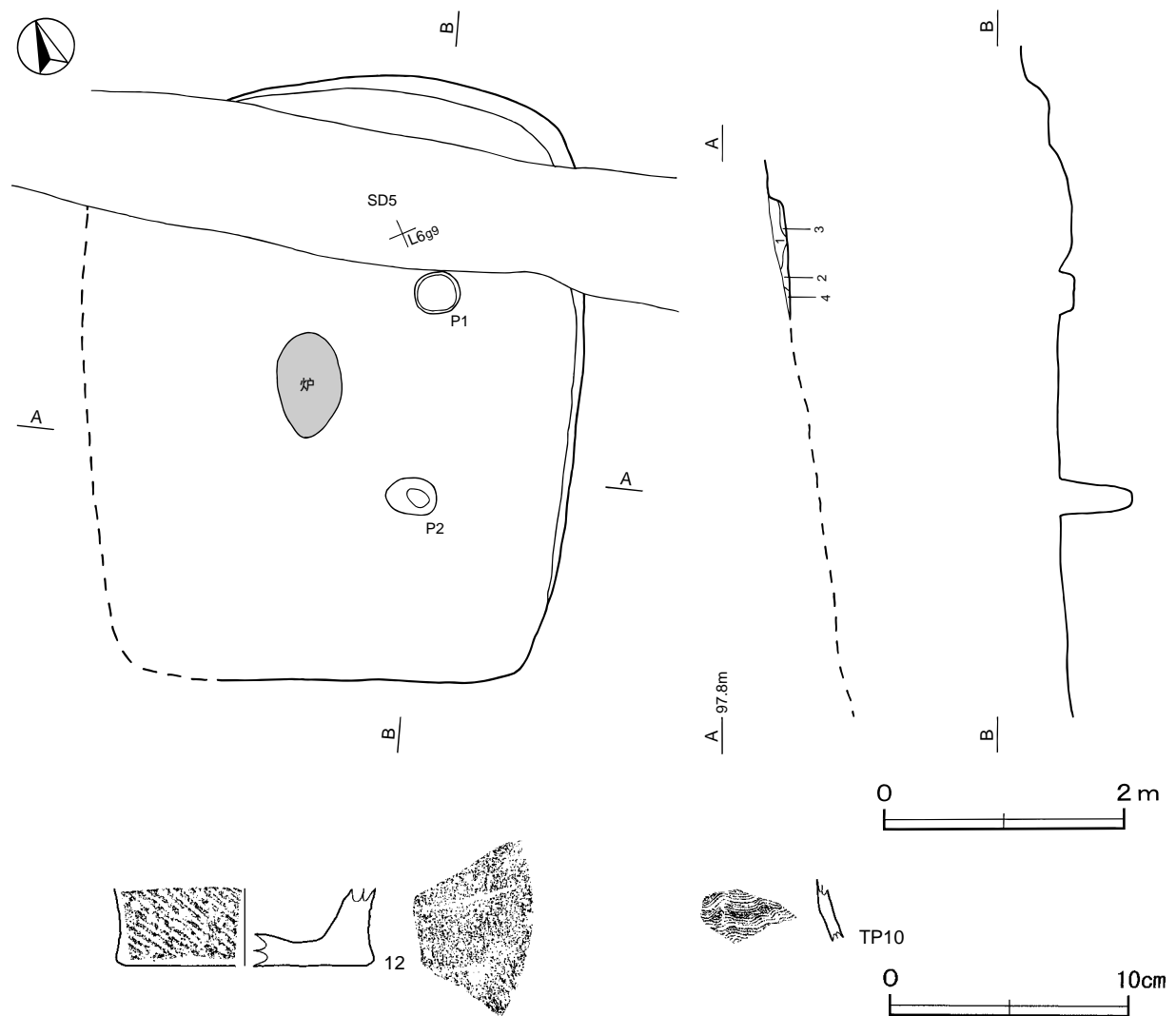
覆土 4層に分層される。堆積状況は，層厚が薄いため不明である

土層解説

- | | | | |
|------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量，鹿沼パミス微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 2 褐色 | 鹿沼パミス少量 | 4 褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片16点（壺），土師器片1点（坏）が出土している。床面が露出しているため，遺物はほとんどみられないが，土師器片は埋没途中に流れ込んだものと考えられる。12・TP10は北部の覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器から後期中葉と考えられる。



第19図 第3号住居跡・出土遺物実測図

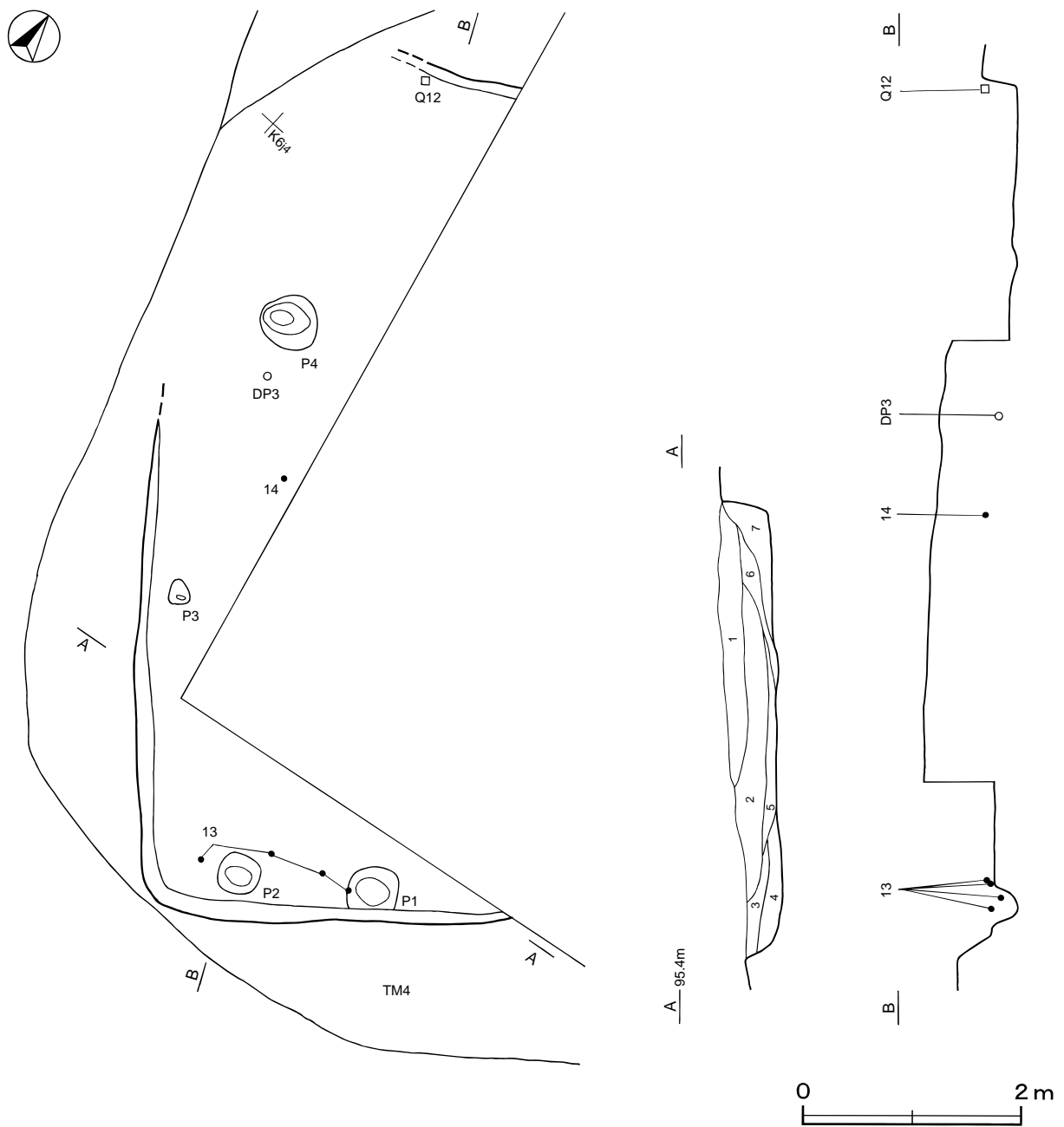
第3号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
12	弥生土器	壺	-	(3.2)	[10.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北東部覆土中	5%
TP10	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	石英	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文施文	北部覆土中	5%

第4号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区西部のK6j4区, 標高94.5mほどの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第4号墳の墳丘下に構築されている。



第20図 第4号住居跡実測図

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、規模や平面形は明確でない。確認された範囲は長軸7.86m、短軸は3.28mだけで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-40°-Wである。壁高は30~40cmで、外傾している。

床 全体的に平坦で軟弱である。

ピット 4か所。P1は深さ91cmで規模と配置から支柱穴と考えられる。P2~P4は深さ12~22cmで、性格は不明である。

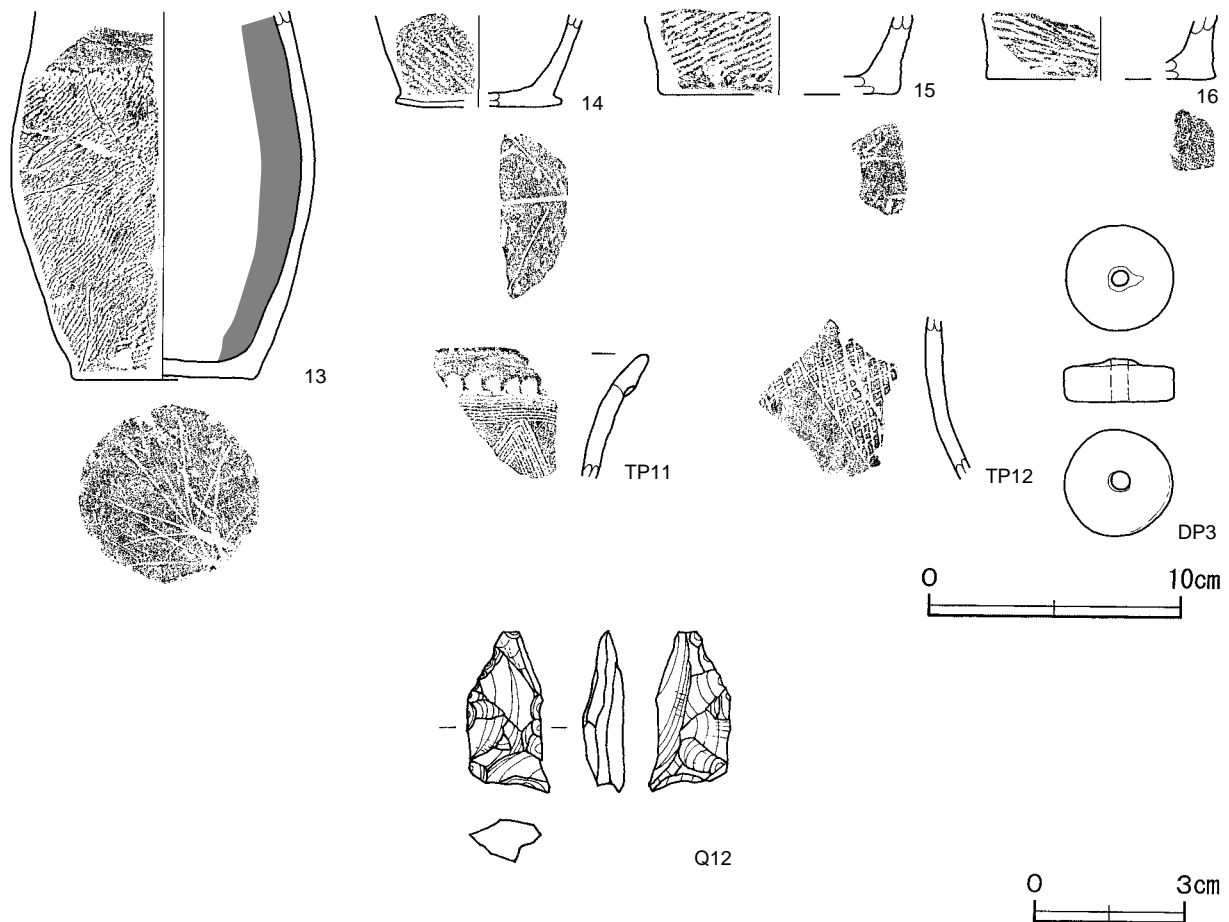
覆土 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 黒色 | 鹿沼パミス多量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片247点(壺), 土製品1点(紡錘車)が床面を中心に散在した状態で出土している。また、覆土上層からは陶器片1点(碗), 黒曜石の未製品が出土しており、埋没途中で流れ込んだものと考えられる。13は南部覆土下層, 14・DP3は、西壁付近の覆土下層から出土している。Q12は北壁際の覆土上層から出土しており、埋没途中で流れ込んだものと思われる。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第21図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
13	弥生土器	壺	-	(14.6)	7.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部無文 頸部下端に縄文原体端部押圧 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	南部下層	50%
14	弥生土器	壺	-	(3.7)	[6.5]	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	西部下層	5%
15	弥生土器	壺	-	(3.1)	[9.4]	長石・石英・雲母	明褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	覆土中	5%
16	弥生土器	壺	-	(2.5)	[9.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP11	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部下端に指頭押圧 頸部に櫛歯状工具(8本櫛歯)による横走文施文後山形文施文	南部下層	5%
TP12	弥生土器	壺	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	頸部ヘラ状工具による格子文施文	覆土中	5% P L 16

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP3	紡錘車	4.3	1.7	0.7	35.8	土(灰・靑)	完形 ナデ	西部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q12	未製品	3.2	1.7	0.81	3.10	黒曜石	押圧剥離 石鏃未製品カ	北部上層	

第5号住居跡 (第22図)

位置 調査区西部のL 6 c7区、標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込み、第1号墳の墳丘下に構築されている。

規模と形状 長軸5.20m、短軸3.67mの長方形で、主軸方向はN-42°-Wである。壁高は11~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南側の一部が踏み固められている。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径75cm、短径55cmの楕円形を呈し、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1~P 4の深さは60~75cmで、規模と配置から支柱穴である。P 5の性格は不明である。

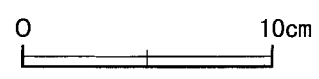
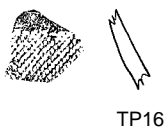
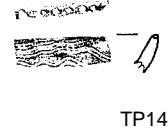
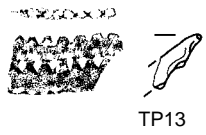
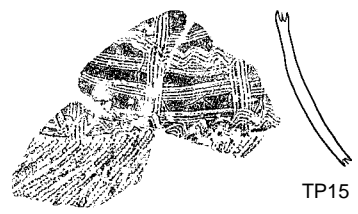
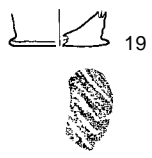
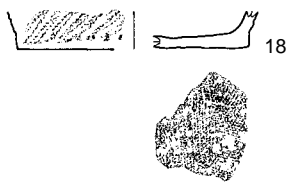
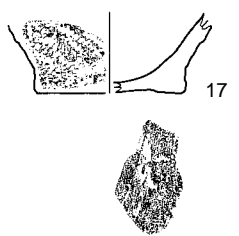
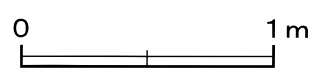
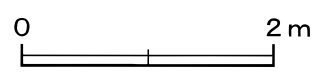
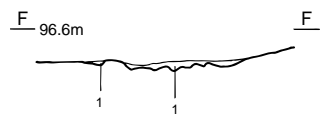
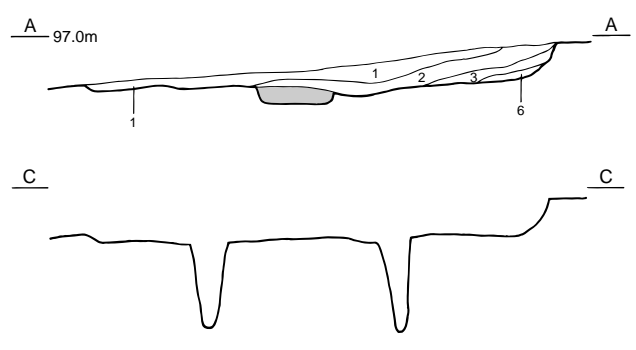
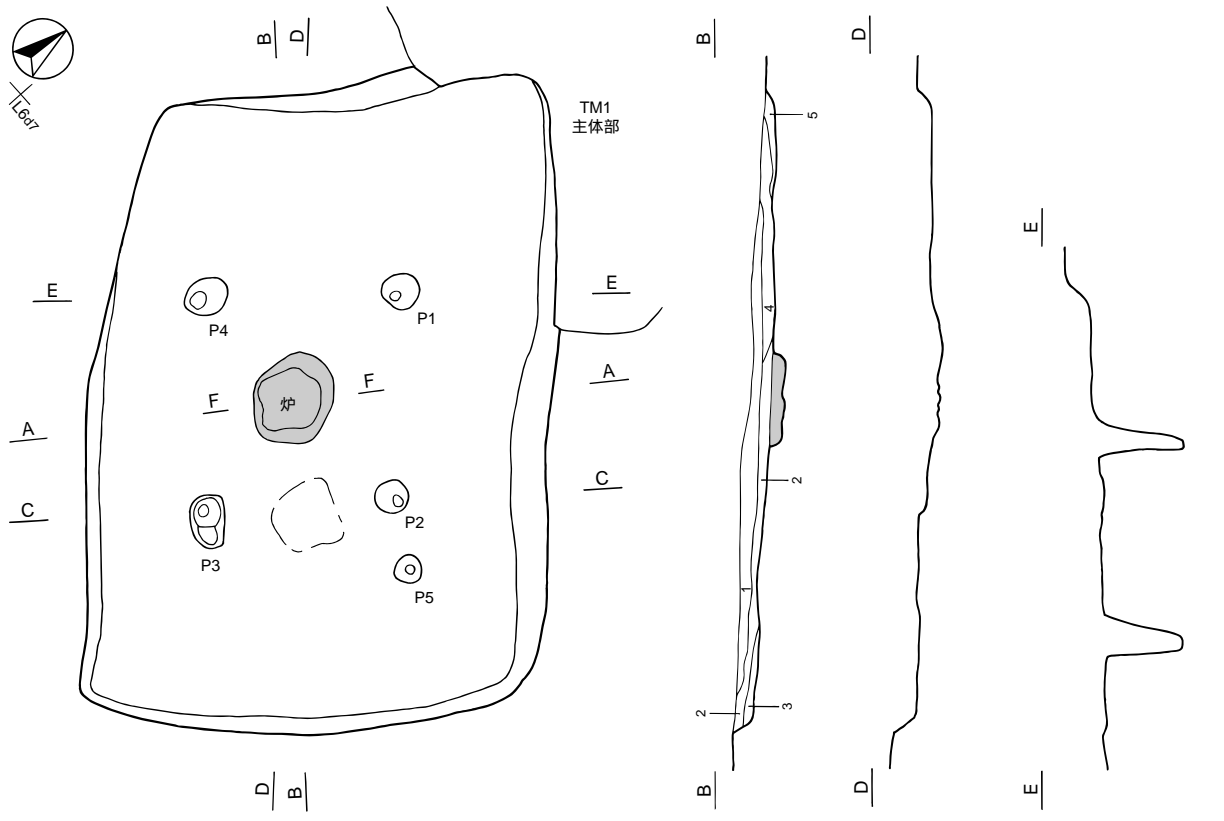
覆土 6層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・鹿沼パミス微量
 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片200点(壺)が出土している。土器のほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。また、黒曜石が5点覆土上層から出土しており、埋没途中で流れ込んだものと思われる。17・18・TP13は西部、19・TP15・TP16は南部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期と考えられる。第6号住居跡と類似する土器がみられるが、重複関係から若干時期が下るものと考えられる。



第22图 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
17	弥生土器	壺	-	(3.2)	[5.4]	長石・石英・雲母・小礫	にぶい黄褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部無文	西部覆土中	5%
18	弥生土器	壺	-	(1.5)	[9.0]	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	西部覆土中	5%
19	弥生土器	壺	-	(1.4)	[4.0]	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部付加条一種(付加2条)縄文施文	南部覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP13	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体押圧 2段の複合口縁 口縁部下端にヘラ状工具による刺突	東部上層	5%
TP14	弥生土器	壺	-	(1.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口縁部櫛歯状工具(6本櫛歯)による波状文	北部上層	5%
TP15	弥生土器	壺	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具(5本櫛歯)による横走文施文 縦区画施文後波状文施文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	南部上層	5%
TP16	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	石英	にぶい褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	南部上層	5% P L 16

第6号住居跡(第23・24図)

位置 調査区西部のL 6 b7区で、標高95.5mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第5号住居に掘り込まれており、第1号墳の墳丘下に構築されている。

規模と形状 長軸4.40m、短軸4.00mの方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁高は12~60cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉を囲むように中央部が踏み固められている。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径66cm、短径54cmの楕円形を呈し、床面を8cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。炉の中心部には、長さ30cmの石が1点確認された。石の表面は、火を受けて赤変しており、炉石として使用していたと考えられる。

炉土層解説

- 1 暗褐 色 焼土ブロック・炭化物中量
2 褐 色 ロームブロック多量
3 黒褐 色 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P 1~P 4の深さは67~78cmで、規模と配置から支柱穴である。P 5の深さは32cmで、南東壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットである。

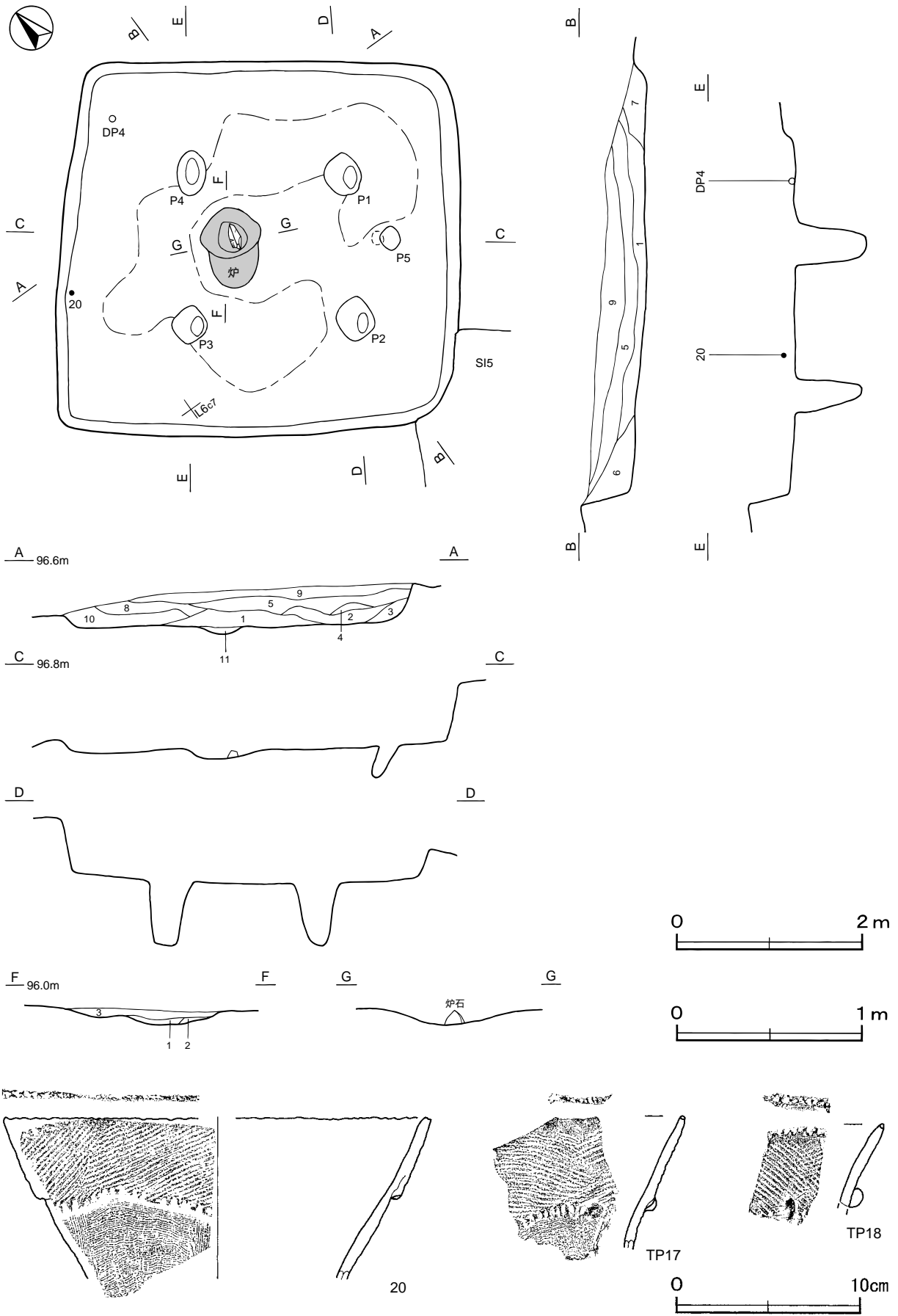
覆土 11層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

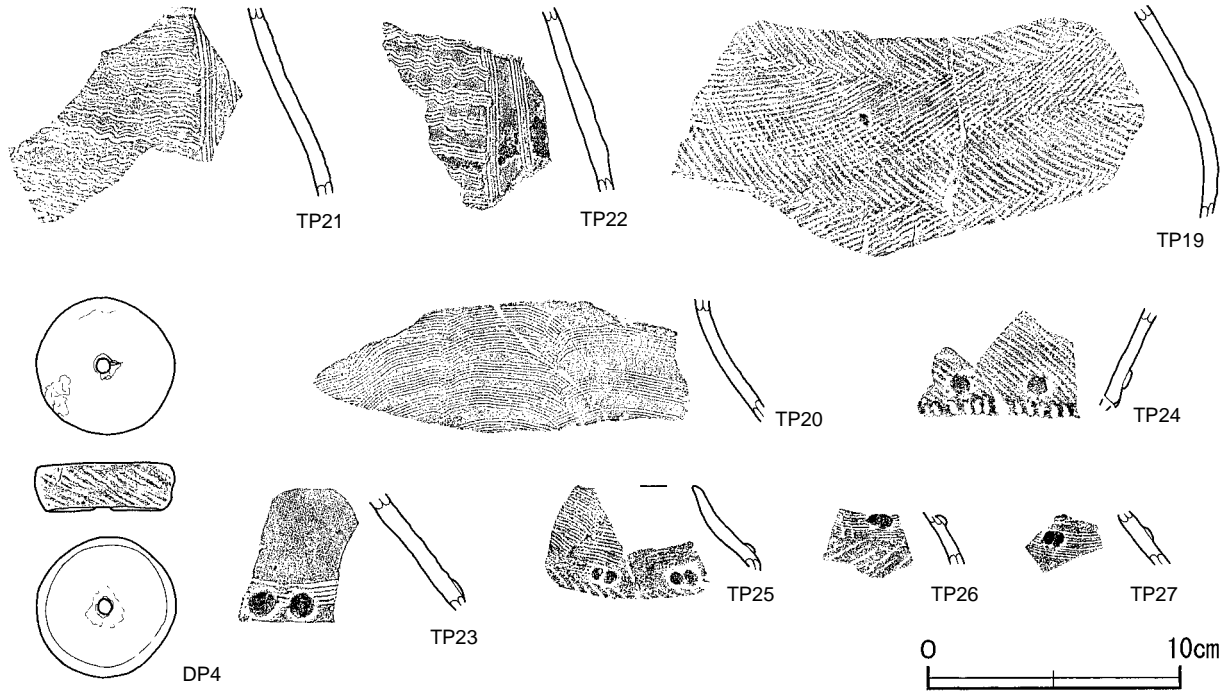
- 1 暗褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 暗褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量
4 黒褐 色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
5 黒褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
6 黒褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
7 黒褐 色 ロームブロック少量
8 暗褐 色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量
9 黒褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
10 黒褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
11 明黄褐色 ロームブロック・鹿沼バミス中量

遺物出土状況 弥生土器片184点(壺)、土製品1点(紡錘車)が全域に散在した状態で出土している。20は西壁際の覆土下層、TP17・TP21・TP23は西部の覆土中、TP20・TP22・DP 4は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 第1号墳の墳丘部の中心で、主体部の下に位置しており、古墳の主軸とはほぼ同じ主軸である。時期は、出土土器から後期と考えられる。



第23图 第6号住居跡・出土遺物実測図



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 (第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
20	弥生土器	壺	[22.8]	(8.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部櫛歯状工具(9本櫛歯)による縦区画内に充填波状文	西部下層	5% P L 16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP17	弥生土器	壺	-	(7.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成 口縁部下端に縄文原体押圧 貼瘤付 頸部櫛歯状工具による波状文施文	西部覆土中	5%
TP18	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体押圧 口縁部付加条1種(付加2条)縄文を羽状に構成 貼瘤付	北部覆土中	5%
TP19	弥生土器	壺	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成	東部下層	5%
TP20	弥生土器	壺	-	(4.8)	-	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	頸部櫛歯状工具(7本櫛歯)による波状文施文	東部覆土中	5% P L 16
TP21	弥生土器	壺	-	(7.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具(4本櫛歯)による縦区画内に波状文充填	西部覆土中	5% P L 16
TP22	弥生土器	壺	-	(7.3)	-	長石・石英	明黄褐	普通	頸部櫛歯状工具(4本櫛歯)による縦区画内に波状文充填	東部覆土中	5% 煤付着
TP23	弥生土器	壺	-	(4.7)	-	長石・石英・赤色粒子	暗褐	普通	頸部下端に櫛歯状工具(5本櫛歯)による横走文施文 貼瘤付	西部覆土中	5% P L 16
TP24	弥生土器	壺	-	(3.9)	-	長石・石英・白色	にぶい黄褐	普通	口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 貼瘤付 口縁部下端に縄文原体押圧	東部覆土中	5%
TP25	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	長石・石英	明黄褐	普通	頸部櫛歯状工具(5本櫛歯)による波状文施文 貼瘤付 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	北部覆土中	5% P L 16
TP26	弥生土器	壺	-	(2.3)	-	長石	黒褐	普通	頸部下端に櫛歯状工具による横走文施文 貼瘤付 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	東部覆土中	5% P L 16
TP27	弥生土器	壺	-	(2.1)	-	長石	黄橙	普通	頸部下端に櫛歯状工具(10本櫛歯)による横走文施文 貼瘤付	北部覆土中	5% P L 16

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP4	紡錘車	5.4	1.9	0.5	69.6	土(長石・石英・雲母)	側面に付加条一種(付加2条)縄文施文	北部下層	

第7号住居跡 (第25・26図)

位置 調査区中央部のM8c7区で、標高106mほどの丘陵南斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.82m、短軸4.10mの長方形で、主軸方向はN-62°-Wである。壁高は26~54cmで、外傾

して立ち上がっている。

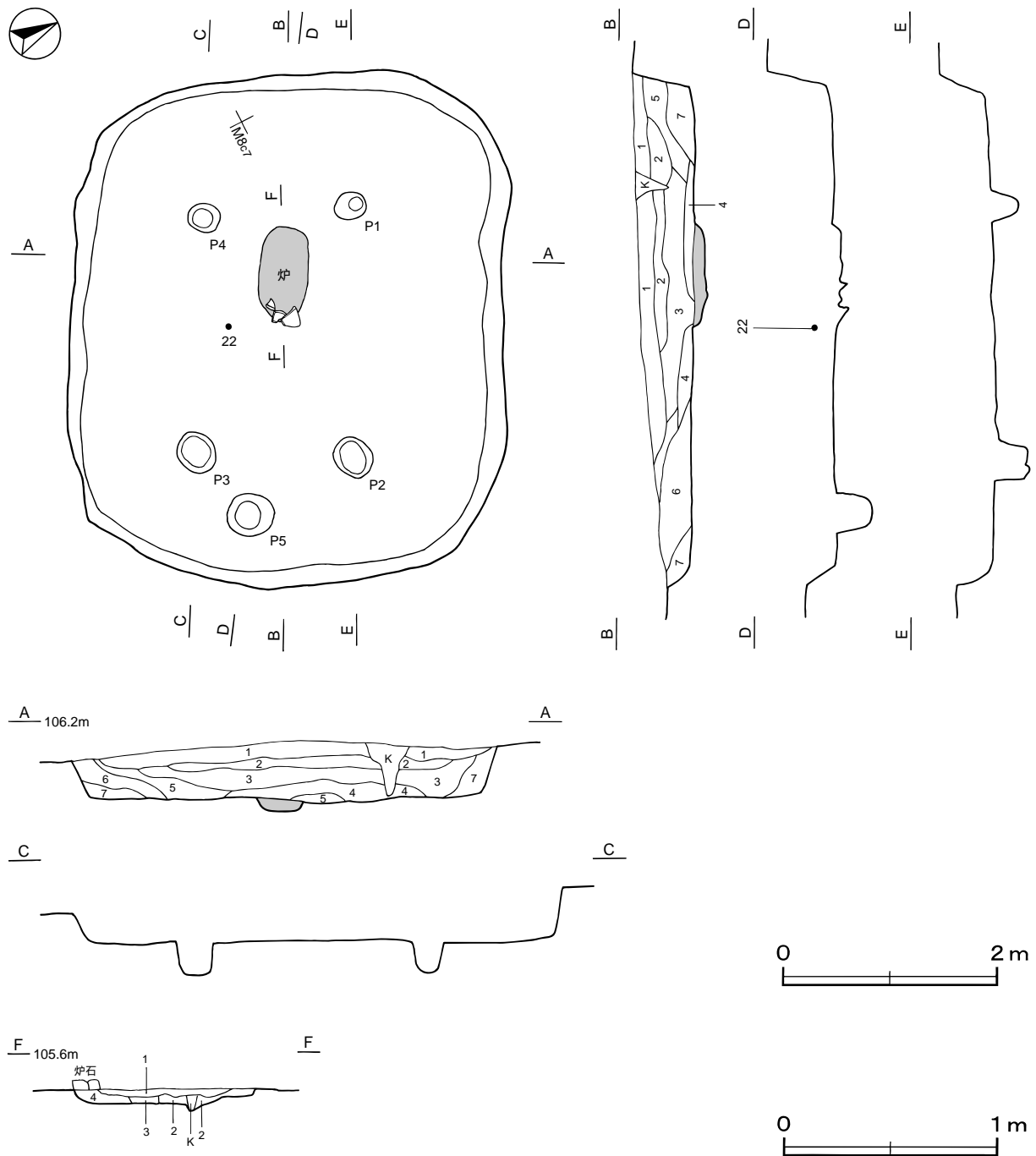
床 全体的に平坦で軟弱である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径90cm，短径46cmの楕円形を呈し，床面を7cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量，ロームブロック微量 |

ピット 5か所。P1～P4の深さは26～31cmで，規模と配置から支柱穴である。P5の深さは32cmで，東壁際に位置している出入口施設に伴うピットである。



第25図 第7号住居跡実測図

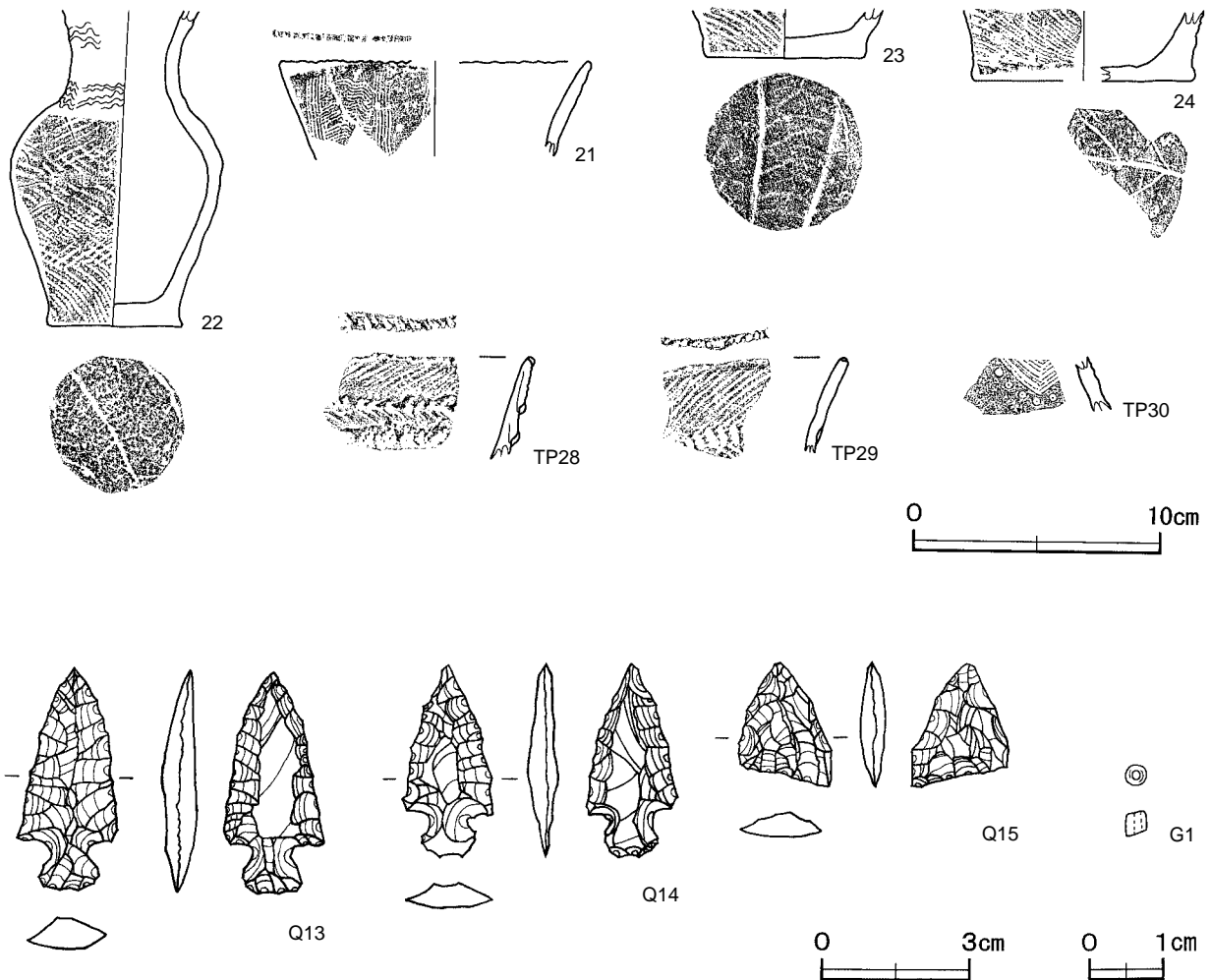
覆土 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片337点（壺），石器3点（石鏃），ガラス製品1点（小玉）が出土している。土器は全域から散在した状態で出土している。22は中央部の覆土下層から完形に近い状態で横位で出土している。Q13・Q14は北部の覆土上層，Q15は西部の上層からそれぞれ出土している。G1は，住居の覆土下層を1mmメッシュの篩にかけたところ1点のみ確認できた。

所見 完形に近い弥生土器が出土している唯一の住居跡である。アメリカ式石鏃やガラス玉なども出土している。弥生時代の住居跡のうち最も標高の高い場所に位置しており，他の住居とは出土遺物の様相が異なっている。時期は，出土土器から後期中葉と考えられる。



第26図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
21	弥生土器	壺	[12.3]	(3.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 口縁部櫛歯状工具(6本櫛歯)による縦区画内に充填波状文	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
22	弥生土器	壺	-	(12.7)	5.5	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部櫛歯状工具による波状文 胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成 底部木葉痕	中央部下層	80% P L 16
23	弥生土器	壺	-	(1.9)	6.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	東部覆土中	10%
24	弥生土器	壺	-	(2.8)	[8.8]	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	東部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP28	弥生土器	壺	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口唇部ヘラ状工具による刻み 2段の複合口縁付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧	北部上層	5%
TP29	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	長石	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧	東部覆土中	5%
TP30	弥生土器	壺	-	(2.1)	-	石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	頸部櫛歯状工具による山形文施文 竹管による円形刺突文施文	南部覆土中	5% P L 16

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	石鏃	4.50	2.10	0.75	4.74	チャート	両側面に押圧剥離痕 アメリカ式石鏃	北部上層	P L 21
Q14	石鏃	3.90	1.85	0.65	2.62	チャート	両側面に押圧剥離痕 アメリカ式石鏃	北部上層	P L 21
Q15	石鏃	2.50	1.90	0.53	2.04	黒曜石	両側面に押圧剥離痕	西部上層	P L 21

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G1	ガラス小玉	0.29	0.31	0.10	0.04	ガラス	水色	覆土下層	

第8号住居跡(第27・28図)

位置 調査区中央部のL7i0区で、標高105mほどの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.10m、短軸5.41mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は8~59cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全体的に平坦で軟弱である。

炉 中央部の床面に長径70cm、短径50cmの楕円形状の範囲に焼土が確認されていることから、この位置に炉が付設されていたと考えられる。

炉土層解説

1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量

ピット 5か所。P1~P4の深さは48~70cmで、規模と配置から支柱穴である。P5の深さは32cmで、西壁際に位置している出入口施設に伴うピットである。

覆土 6層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量

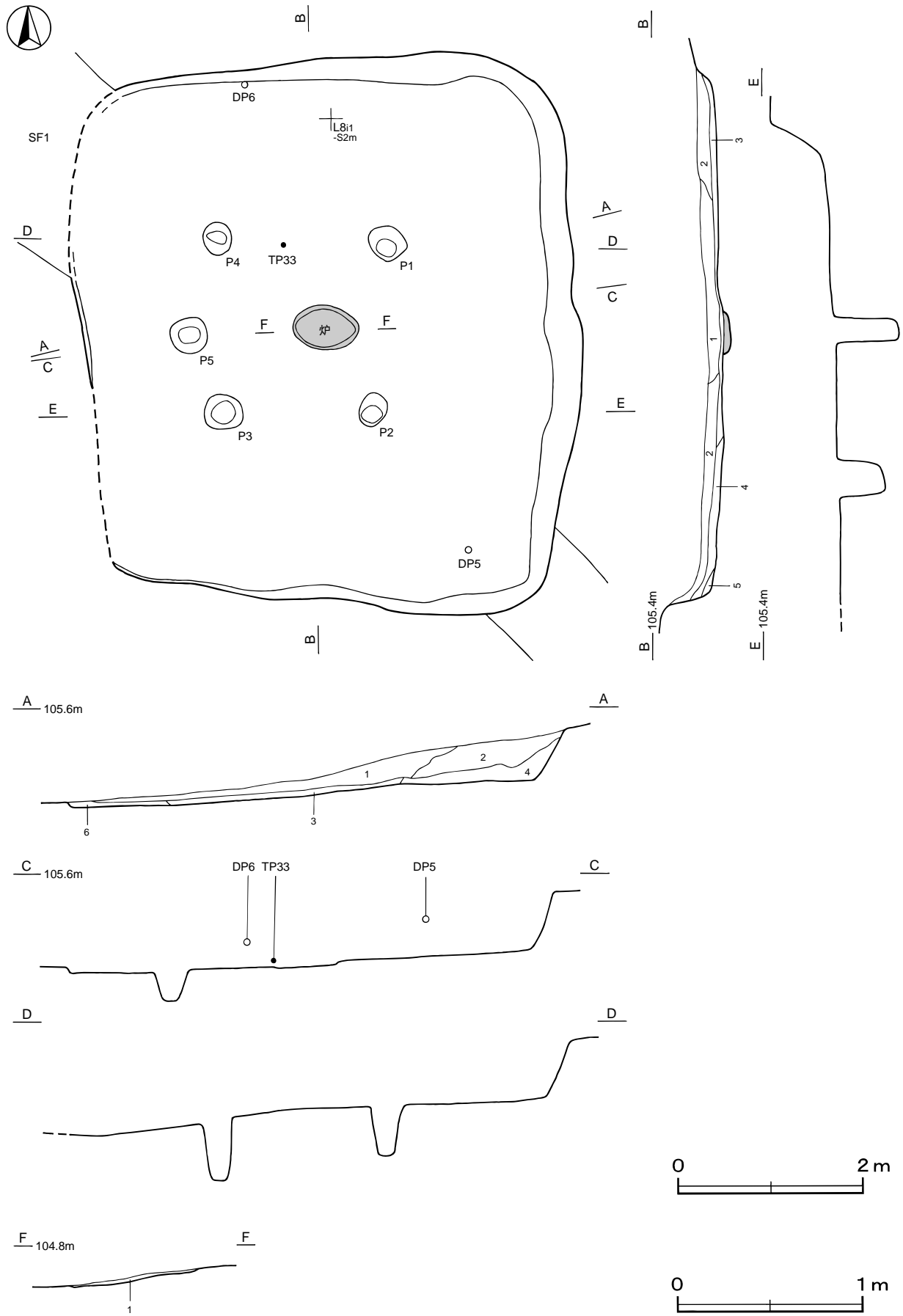
4 褐色 ローム粒子少量

5 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス微量

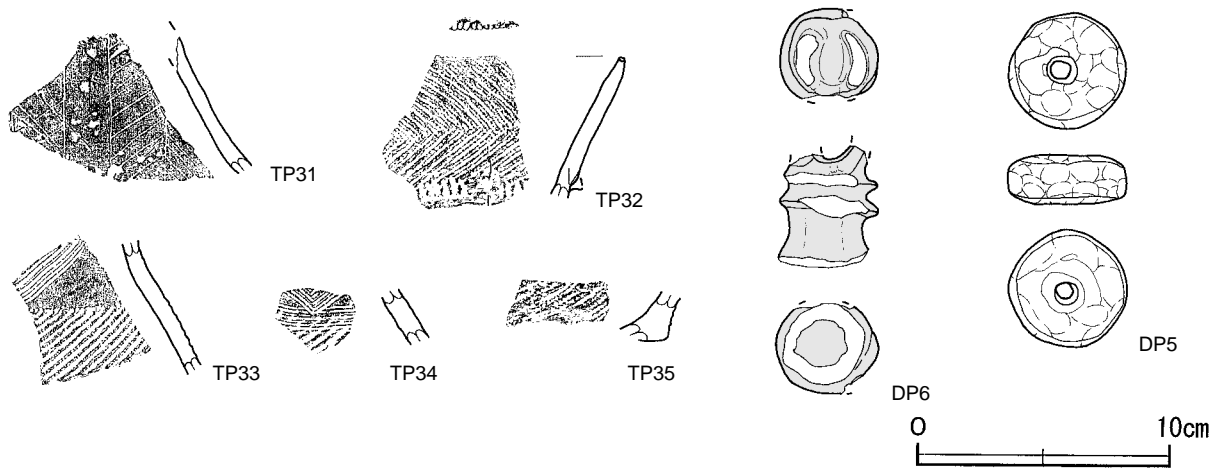
6 にぶい褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片295点(壺)が出土している。また、上層から土師器片4点(坏)、須恵器片1点(壺)、土製品1点(不明)が出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。TP31は北部の覆土下層、TP33は中央部の覆土下層から出土している。DP6は、赤彩が施されている土製品で、北壁際の覆土上層から出土していることから流れ込んだ可能性も考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第27图 第8号住居跡実测图



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP31	弥生土器	壺	-	(5.4)	-	長石・石英	明赤褐	普通	頸部へら状工具による縦区画内に格子文及び斜線文施文	北部下層	5 % P L 16
TP32	弥生土器	壺	-	(5.5)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成 口縁部下端に縄文原体押圧 貼瘤付	南部上層	5 %
TP33	弥生土器	壺	-	(5.4)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	頸部櫛歯状工具による山形文施文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	中央部下層	5 % P L 16
TP34	弥生土器	壺	-	(2.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部櫛歯状工具による山形文施文 頸部下端に横走文施文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	北部下層	5 % P L 16
TP35	弥生土器	壺	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部縄文施文	北部上層	5 %

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP5	紡錘車	4.7	2.0	1.0	46.2	土(長石・石英)	両・側面指頭痕	南東部上層	

番号	種別	長さ	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	不明土製品	(4.8)	(3.9)	(55.7)	土(長石・石英)	全面赤彩 上部二又 下部凹み	北部上層	

第9号住居跡 (第29・30図)

位置 調査区中央部のL7h8区、標高103mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 西部が削平により残存していないため、規模や形状が明確ではない。確認された範囲は、長軸6.0m、短軸4.5mで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-12°-Wと推測される。壁高は10~33cmで、外傾して立ち上がっている。

床 全体的に西に傾斜しており軟弱である。

炉 ほぼ中央の床面に長径70cm、短径60cmの楕円形状の範囲に焼土が確認されていることから、この位置に炉が付設されていたと考えられる。

炉土層解説

1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 2 黒褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1~P4の深さは6~64cmで、規模と配置から支柱穴である。

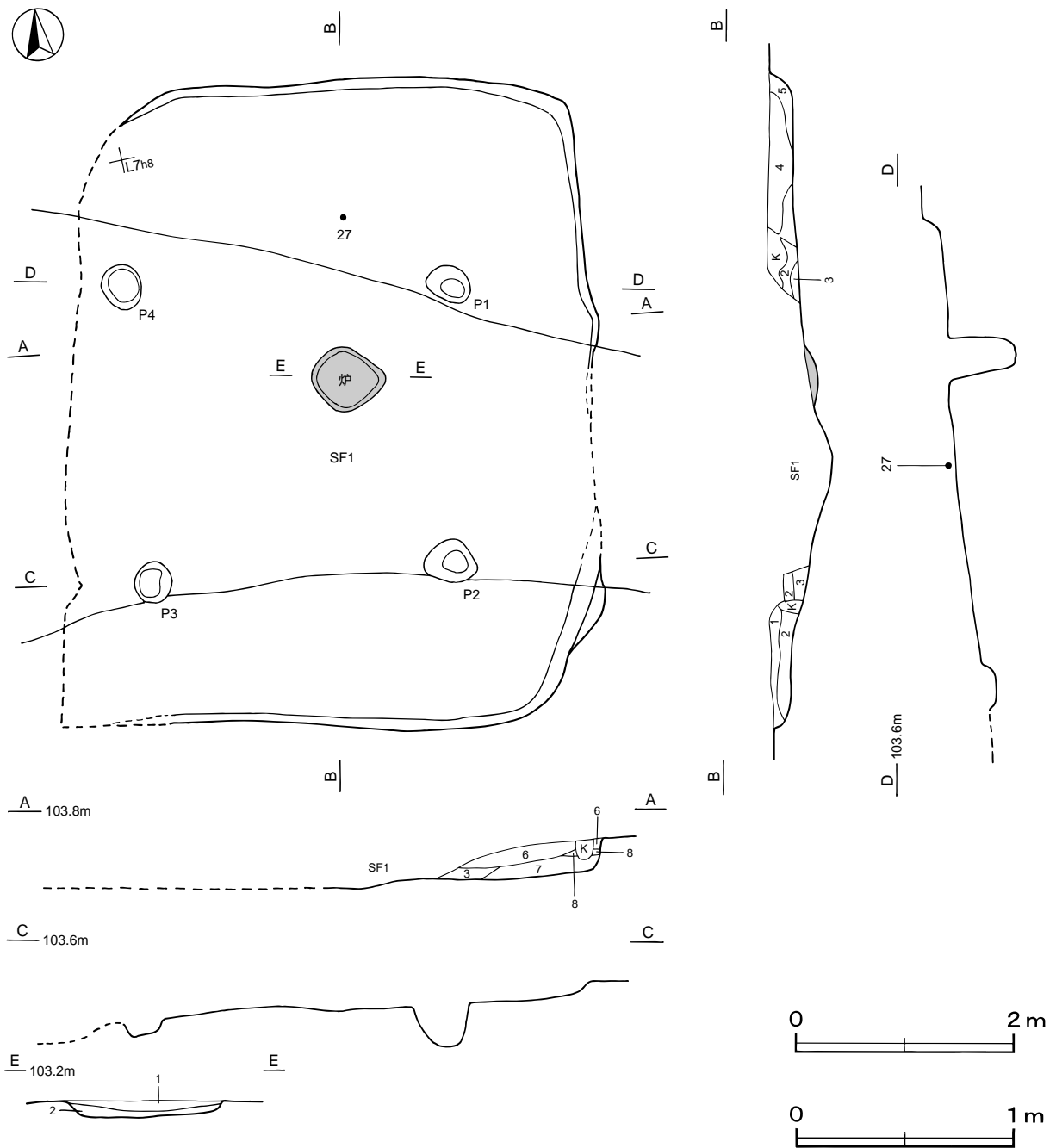
覆土 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

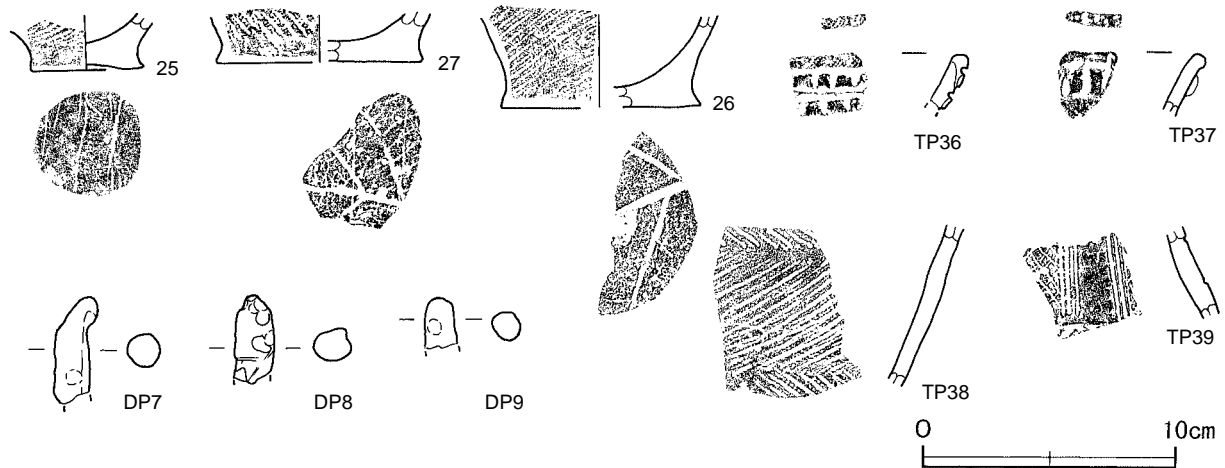
- | | | | |
|---------|-----------------|---------|--------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子微量 | 5 暗 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒 褐 色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量 | 6 黒 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 3 灰 褐 色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 | 7 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 黒 褐 色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 黒 褐 色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 |

遺物出土状況 弥生土器片348点（壺）が全域に散在した状態で出土している。また土師器片4点（坏2，甕2），土製品3点（不明）も出土しており，埋没途中に流れ込んだものと考えられる。26は北西部の覆土上層，27・TP37・TP38・DP7・DP8は北部の覆土下層，TP36は南部の覆土下層，DP9は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から後期中葉と考えられる。



第29図 第9号住居跡実測図



第30図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
25	弥生土器	壺	-	(2.2)	4.2	長石・礫	にぶい黄橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北西部上層	5%
26	弥生土器	壺	-	(3.7)	[7.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北西部上層	5%
27	弥生土器	壺	-	(1.9)	[8.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	北部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP36	弥生土器	壺	-	(2.2)	-	石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部縄文施文後ヘラ状工具による隆帯作出	南部下層	5%
TP37	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部縄文原体施文 折り返し口縁部に隆帯添付後連続刻み	北部下層	5%
TP38	弥生土器	壺	-	(6.5)	-	長石・石英・赤色	明黄褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文を羽状に構成	北部下層	5%
TP39	弥生土器	壺	-	(3.6)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具による縦区画内に格子文充填	北部下層	5% P L 16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	不明土製品	(4.2)	1.4	1.3	(7.7)	土(長石・雲母)	指頭痕 蚕形土製品カ	北部下層	
DP8	不明土製品	(3.5)	1.6	1.3	(6.5)	土(長石・雲母)	指頭痕 蚕形土製品カ	北部下層	
DP9	不明土製品	(2.0)	1.3	1.1	(3.1)	土(長石・雲母)	指頭痕 蚕形土製品カ	南部上層	

第10号住居跡 (第31・32図)

位置 調査区中央部のL 8 g8区、標高105mの丘陵北東斜面部に位置している。

規模と形状 長軸6.08m、短軸3.94mの長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は11~74cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、P 5北側の一部が踏み固められている。

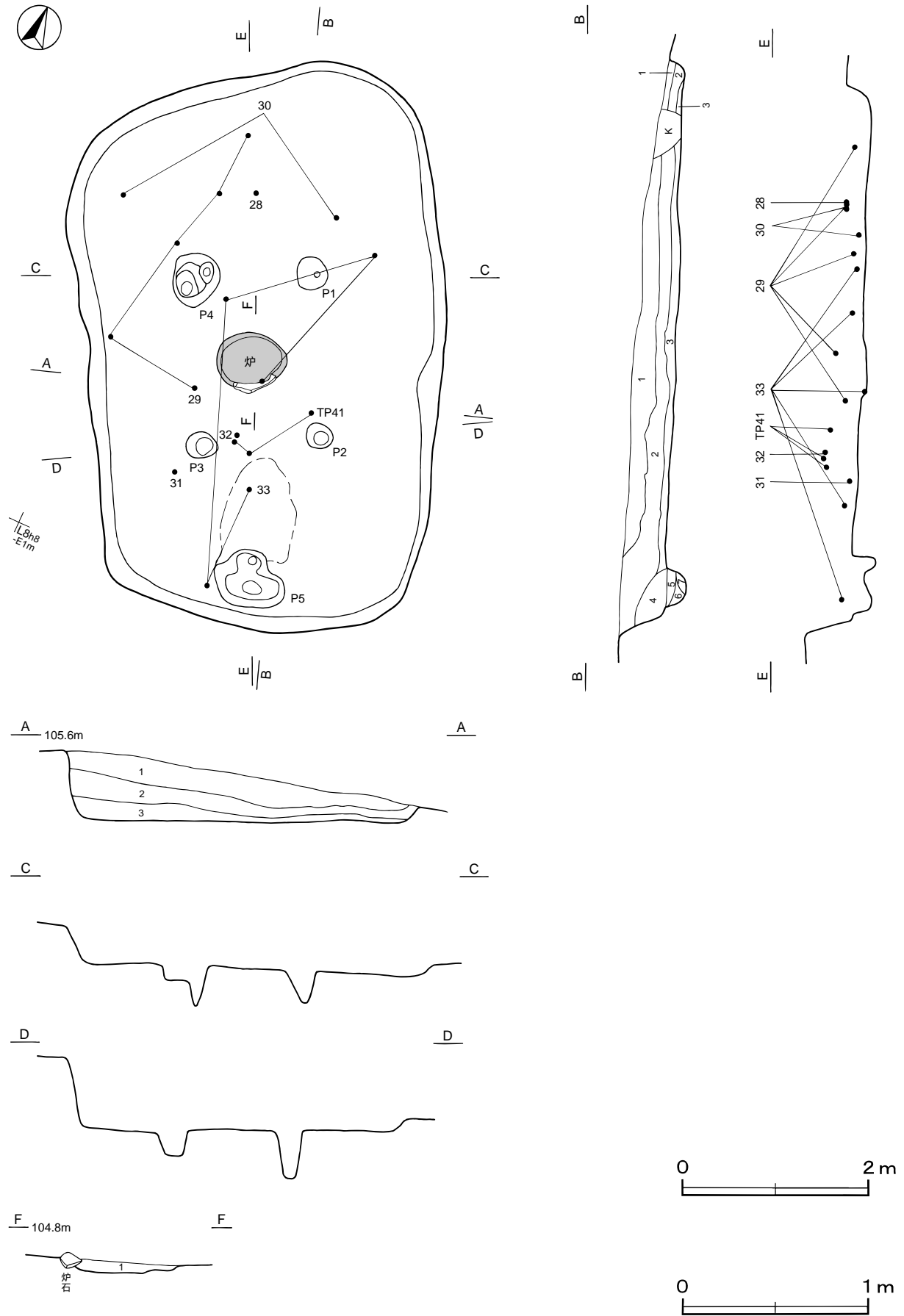
炉 中央に付設されている。長径78cm、短径62cmの楕円形で、床面を15cmほど掘り込んでいる地床炉である。

炉土層解説

1 黒 褐 色 鹿沼バミス少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1~P 4の深さは27~50cmで、規模と配置から支柱穴である。P 5は深さ26cmで、南東壁際の位置にあることから出入り口施設に伴うピットである。

覆土 7層に分層される。南西から土が流入した様相を示している自然堆積である。



第31图 第10号住居跡実测图

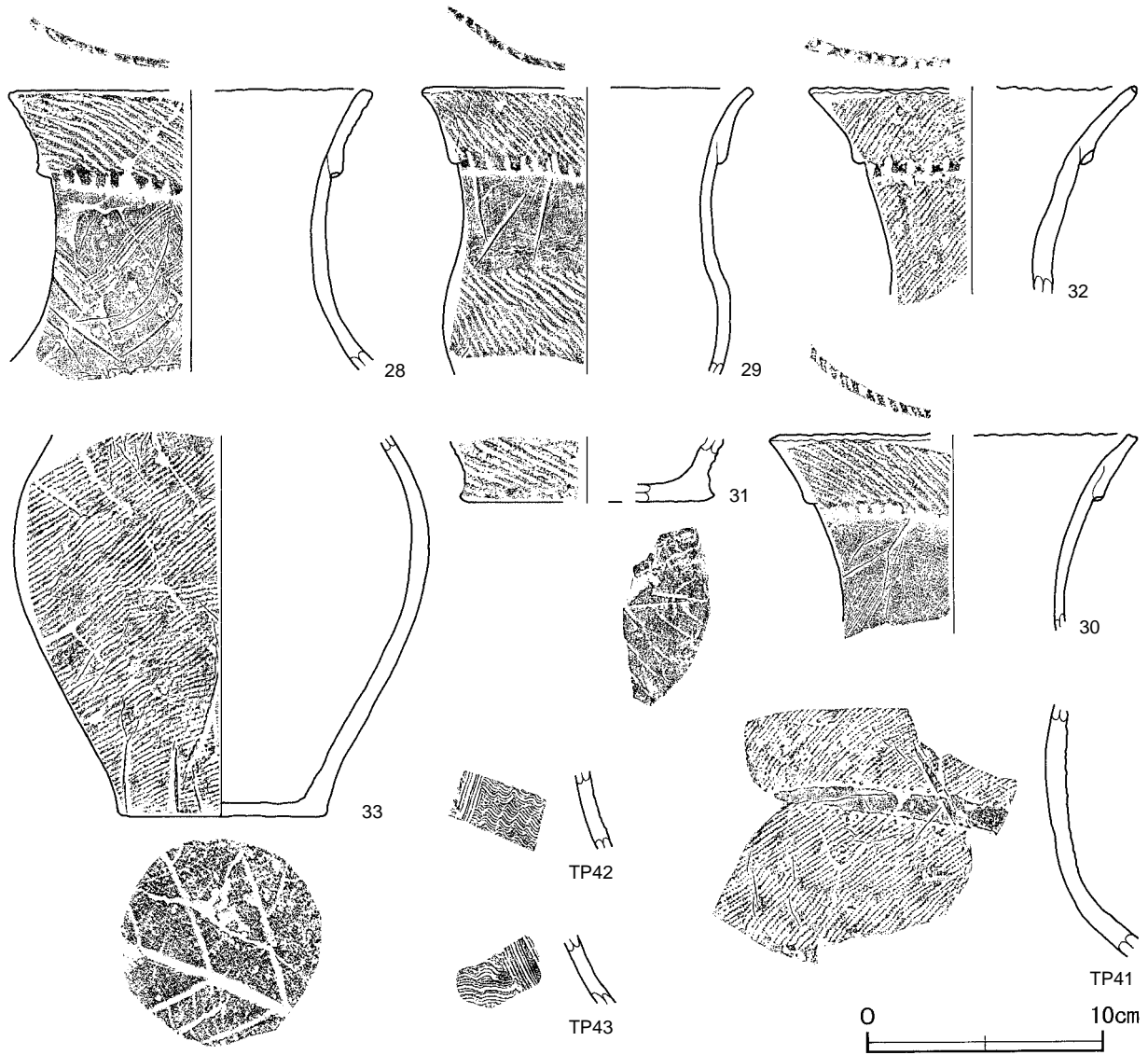
土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・鹿沼バミス微量
- 3 黒 褐 色 鹿沼バミス少量・ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 鹿沼バミス微量

- 5 暗 褐 色 ローム粒子少量・鹿沼バミス微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量・鹿沼バミス微量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子・鹿沼バミス少量

遺物出土状況 弥生土器片241点（壺）が、全域に散在した状態で出土している。また、上層から土師器片17点（甕）も出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。28・30は北部の覆土下層，31・TP43は南部の覆土下層，32は中央部の覆土上層，TP42は南部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。調査区内では北東の斜面部に構築された住居である。



第32図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
28	弥生土器	壺	[14.6]	(11.9)	-	長石・石英・雲母・礫	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部櫛歯状工具(7本櫛歯)による山形文施文 胴部付加条一種(付加2条) 縄文施文	北部下層	15% P L 16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
29	弥生土器	壺	[13.7]	(12.2)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部縄文原体施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に半截竹管による刺突文 頸部櫛歯状工具(5本櫛歯)による波状文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	北東部下層	35% P L 16
30	弥生土器	壺	[15.0]	(8.4)	-	長石・石英・雲母小礫	明褐	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部櫛歯状工具(11本櫛歯)による山形文施文	北部下層	5% P L 16
31	弥生土器	壺	-	(2.8)	[10.8]	長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	南部下層	5%
32	弥生土器	壺	[13.9]	(8.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口唇部縄文押圧 口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 口縁部下端に縄文原体押圧 頸部付加条一種(付加2条)縄文施文	中央部上層	5%
33	弥生土器	壺	-	(16.2)	8.7	長石・石英	褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	覆土下層	50% P L 16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP41	弥生土器	壺	-	(10.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部付加条一種(付加2条)縄文施文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	中央部上層	5%
TP42	弥生土器	壺	-	(3.3)	-	石英	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具による縦区画内に波状文充填	南部床面	5%
TP43	弥生土器	壺	-	(2.9)	-	石英	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具による縦区画内に波状文充填	南部下層	5%

表5 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	竈・炉	貯蔵穴				
1	L 6 g6	N - 21° - W	[隅丸 長方形]	4.98 x (3.75)	19 - 35	平坦	-	4	1	-	-	-	自然	弥生土器	後期	本跡 SD4
2	L 7 h1	N - 3° - E	[長方形]	9.68 x (4.66)	24 - 46	平坦	-	-	-	9	-	-	自然	弥生土器	後期	本跡 TM8,SK1,SD5
3	L 6 g8	N - 27° - E	[長方形]	5.50 x (4.10)	12 - 19	平坦	-	-	-	2	炉1	-	不明	弥生土器	後期	本跡 SD5
4	K 6 j4	N - 40° - W	[長方形]	7.86 x (3.28)	30 - 40	平坦	-	1	-	3	-	-	自然	弥生土器	後期	本跡 TM4
5	L 6 c7	N - 42° - W	長方形	5.20 x 3.67	11 - 30	平坦	-	4	-	1	炉1	-	自然	弥生土器	後期	SI6 本跡 TM1
6	L 6 b7	N - 50° - W	方形	4.40 x 4.00	12 - 60	平坦	-	4	1	-	炉1	-	自然	弥生土器	後期	本跡 SI5 TM1
7	M 8 c7	N - 62° - W	長方形	4.82 x 4.10	26 - 54	平坦	-	4	1	-	炉1	-	自然	弥生土器	後期	
8	L 7 i0	N - 0°	長方形	6.10 x 5.41	8 - 59	平坦	-	4	1	-	炉1	-	自然	弥生土器	後期	本跡 SF1
9	L 7 h8	N - 12° - W	[長方形]	6.00 x 4.50	10 - 33	傾斜	-	4	-	-	炉1	-	自然	弥生土器	後期	本跡 SF1
10	L 8 g8	N - 29° - W	長方形	6.08 x 3.94	11 - 74	平坦	-	4	1	-	炉1	-	自然	弥生土器	後期	

4 古墳時代の遺構と遺物

当時代の古墳9基，石棺3基，墓坑3基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

第1号墳(第33・34図)

位置 調査区西部のL 6 b7区を中心とした，標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 墳丘下から第5・6号住居跡が確認され，周溝が第4号墳，第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 周溝の北部が調査区域外に延びているため規模は明確ではないが，墳丘や周溝の形状から方墳と推定され，墳丘は一辺12～14mで，周溝外縁を含む一辺16～17mである。

墳丘 表土の下に旧表土が確認されたが，盛土の痕跡は認められない。旧表土面は緩やかに傾斜しており，西に向かって傾斜する斜面を利用して墳丘としたと考えられる。

周溝 上幅1.8～2.6m，下幅0.3～0.9m，深さ0.5～0.9mである。北側は上幅が広く，緩やかなU字状の断面形である。南側は上幅が狭く，U字状の断面形で，北側より20cmほど深く掘り込まれている。北側と南側では

1.5mほどの標高差があり、斜面部の地形を意識して掘り込んだものと考えられる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

墳丘・周溝土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	9 極暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10 黒色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	11 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量	12 黒褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	13 褐色	ロームブロック多量
6 極暗褐色	ローム粒子少量	14 褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス微量
7 褐色	ロームブロック中量	15 暗黄褐色	鹿沼パミス多量, ロームブロック中量
8 極暗褐色	ロームブロック少量	16 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量

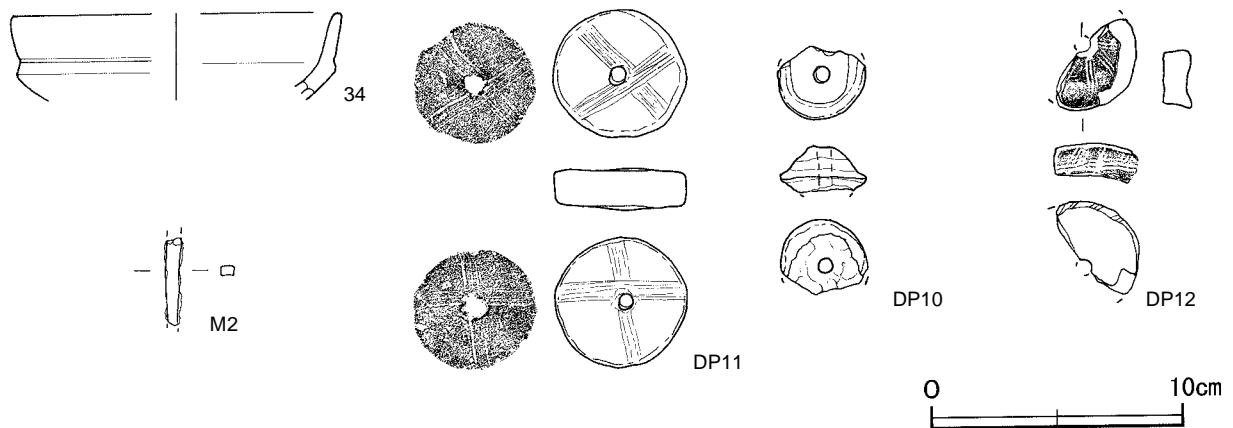
埋葬施設 墳頂部に位置する、木棺直葬である。掘り方は長径5.2m、短径3.4mの不整楕円形で、長径方向はN-48°-Wである。旧表土を深さ0.5m掘り込んでいる。掘り方内の外周部には、鹿沼土を多く含む黒褐色土や暗褐色土を埋め込み、その内側の長軸3.7m、短軸0.8mの長形状に暗褐色土が堆積しており、この部分に木棺が安置されたと推定できる。断面形より、割竹形木棺と考えられる。第1～6層は木棺部、第7～13層は掘り方の土層である。

主体部土層解説

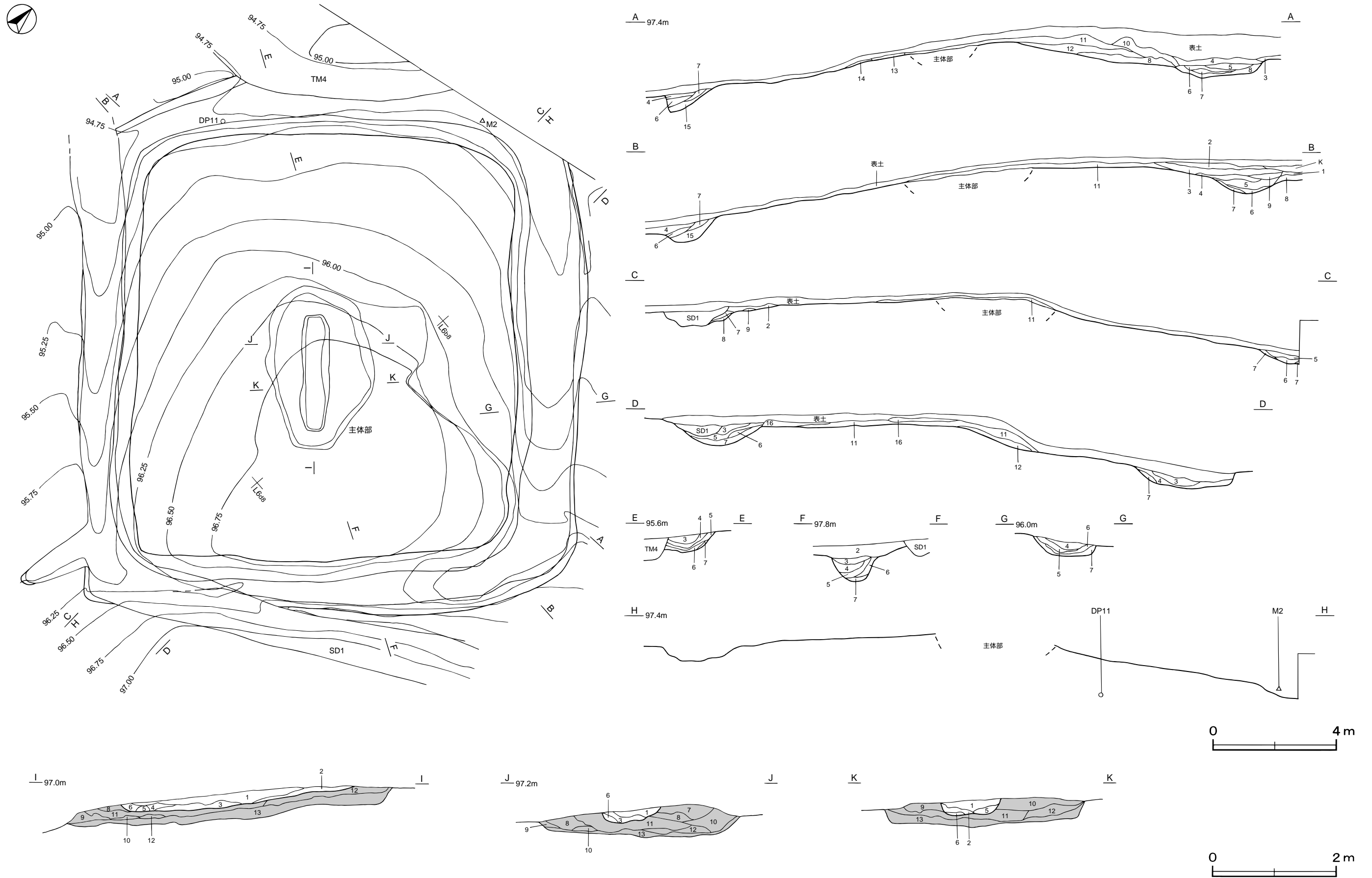
1 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子少量	8 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量
3 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	10 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
4 暗褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス微量	11 黒褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量
5 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	12 暗褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量
6 極暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	13 暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量
7 褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量		

遺物出土状況 周溝から、土師器1点(坏), 土師器片11点(坏), 須恵器片15点(坏3, 蓋1, 甕11)のほか、埋没途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片797点が出土している。また混入したと思われる土製品3点(紡錘車), 金属製品1点(鏃), 瓦片2点が出土している。34は北東部の覆土上層, DP10は南東部の覆土上層, DP11は西部の覆土下層, DP12は西部の覆土上層, M2は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。34は第4号墳に掘り込まれた部分の近くから出土しているため、第4号墳に伴う可能性が高い。

所見 今回調査された中で唯一の方墳である。主体部は木棺直葬であり、鹿沼層を掘り込んだ際に出た鹿沼土を木棺の周囲に埋めて柵としている鹿沼土柵である。南東に隣接する第2号墳は、本墳の周溝を避けるように周溝を極端に狭くして構築している。また、このことは南西側に位置している第3号墳にも共通しており、本墳の周溝を避けるように構築しているため、周溝の形状が若干ゆがんでいる。これらのことから本墳がこの2基の古墳より前に構築されており、古墳として認識されていたことがうかがえる。よって本墳の時期は、重複関係から5世紀中葉と考えられる。



第33図 第1号墳出土遺物実測図



第34图 第1号墳実測图

第1号墳周溝出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	土師器	坏	[13.0]	(3.1)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	周溝北東部上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	紡錘車	3.5	(1.8)	0.6	11.9	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	にぶい褐色	周溝南東部上層	
DP11	紡錘車	5.2	1.7	0.7	56.7	土(長石・石英)	両面ハケ状工具による施文 にぶい橙色	周溝西部下層	P L 21
DP12	紡錘車	[4.4]	(1.5)	(0.5)	(10.4)	土(長石・石英)	上面側面櫛歯状工具（3本櫛歯）による施文	周溝西部上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	鐵	(3.4)	(0.5)	(0.4)	(2.6)	鐵	茎	周溝北部下層	

第2号墳（第35・36図）

位置 調査区西部のL 6 d0区を中心とした、標高98mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 周溝の一部が第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 周溝の一部が掘り込まれているため規模や形状が明確ではない。墳丘や周溝の形状から円墳と推定されるが、歪んだ形状を呈している。墳丘径約8m、周溝外縁径約10mである。

墳丘 表土の下に旧表土が確認されているが、盛土をした痕跡は認められない。

周溝 上幅は1号墳のある北西部が0.4mと狭く、その他の部分は0.6～1.3mである。下幅約0.2～0.7m、深さ0.2～0.4mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

周溝土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |

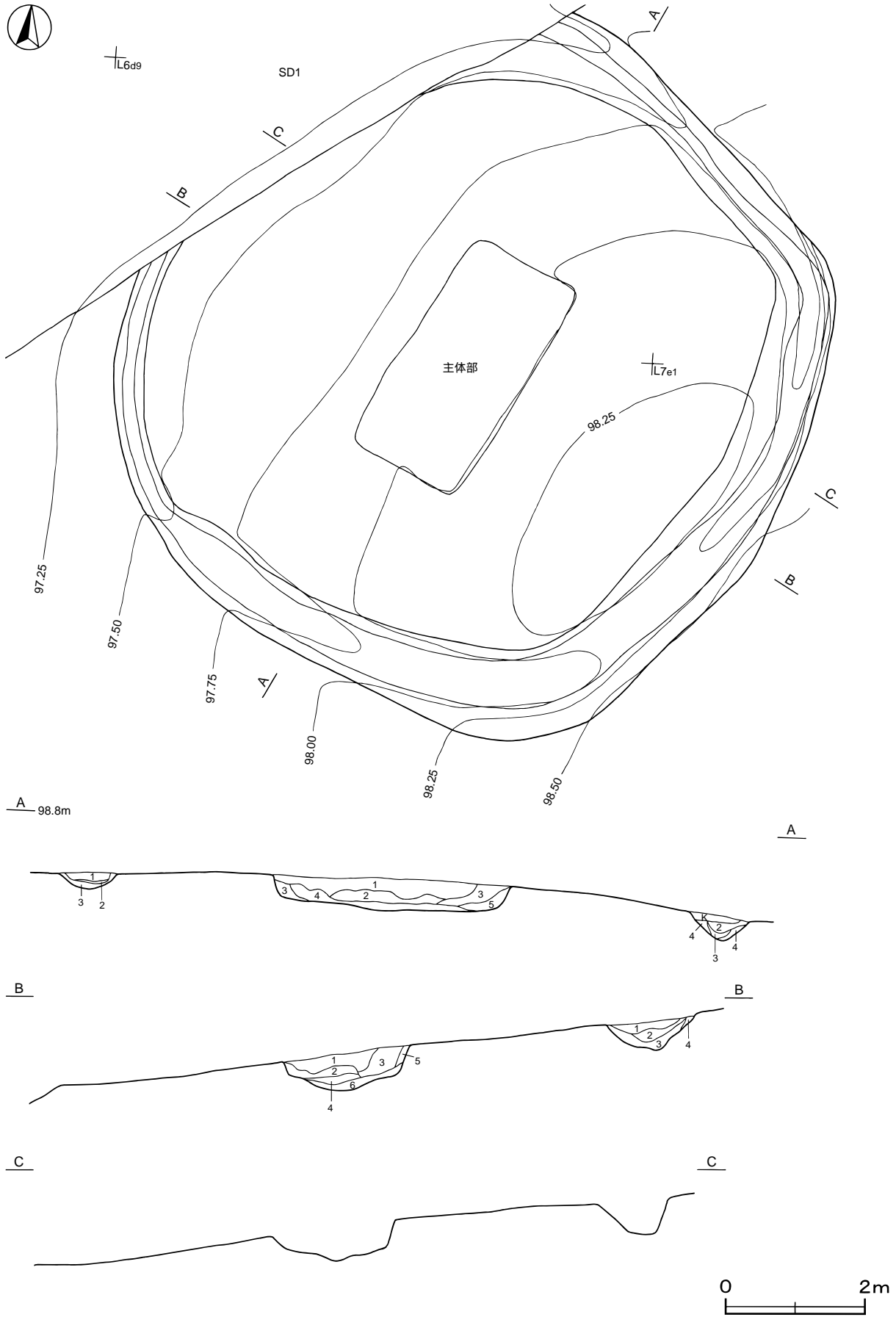
埋葬施設 中央部に位置する木棺直葬である。掘り方は長軸3.4m、短軸1.8mの長方形で、長軸方向はN-29°-Eである。旧表土を深さ0.5m掘り込んでいる。底面の中央部に楕円形にわずかにくぼむ部分がみられ、土層からは判断できないが、木棺が安置された痕跡と考えられる。断面や平面形より割竹形木棺と推定される。この底面からM3が鋒を南西に向けた状態で出土しており、副葬品として棺内に納められたものと考えられる。土層は人為堆積であるが、崩落したような様相も呈している。

主体部土層解説

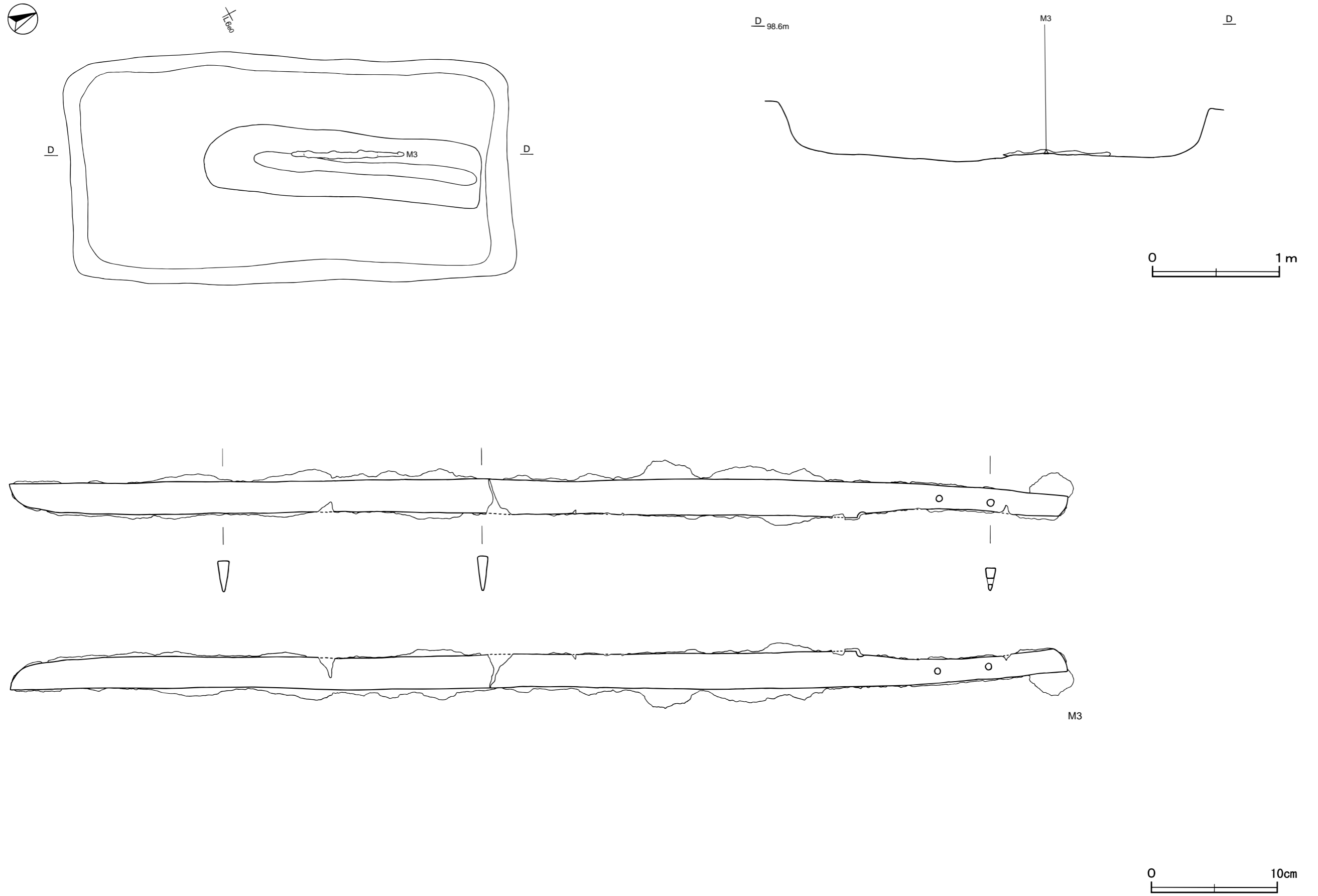
- | | | | |
|-------|-------------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス少量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 周溝から、土師器片2点（甕）の他に、埋没途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片73点が出土している。

所見 周溝は主体部の掘り方より深く掘り込まれている。他の古墳と比べて小規模な周溝であるが、主体部の規模は大きい。遺物は、主体部から出土した副葬品の直刀のみで、周溝内から伴う遺物は確認されなかった。時期は、5世紀後葉から6世紀代と考えられる。



第35图 第2号墳実測図



第36図 第2号墳・出土遺物実測図

第2号墳主体部出土遺物観察表 (第36図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	直刀	83.6	2.7	0.9	(540)	鉄	片開 目釘孔2ヶ所	主体部底面	P L 21

第3号墳 (第37・38図)

位置 調査区西部のL6e5区を中心とした、標高95mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 周溝の一部が第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側が削平により残存していないため、確認できるのは東側の一部分のみで、規模や形状は明確でない。墳丘や周溝の形状から円墳で、墳丘径約11m、周溝外縁径約18mと推定される。

墳丘 表土下は地山であり、盛土は認められない。

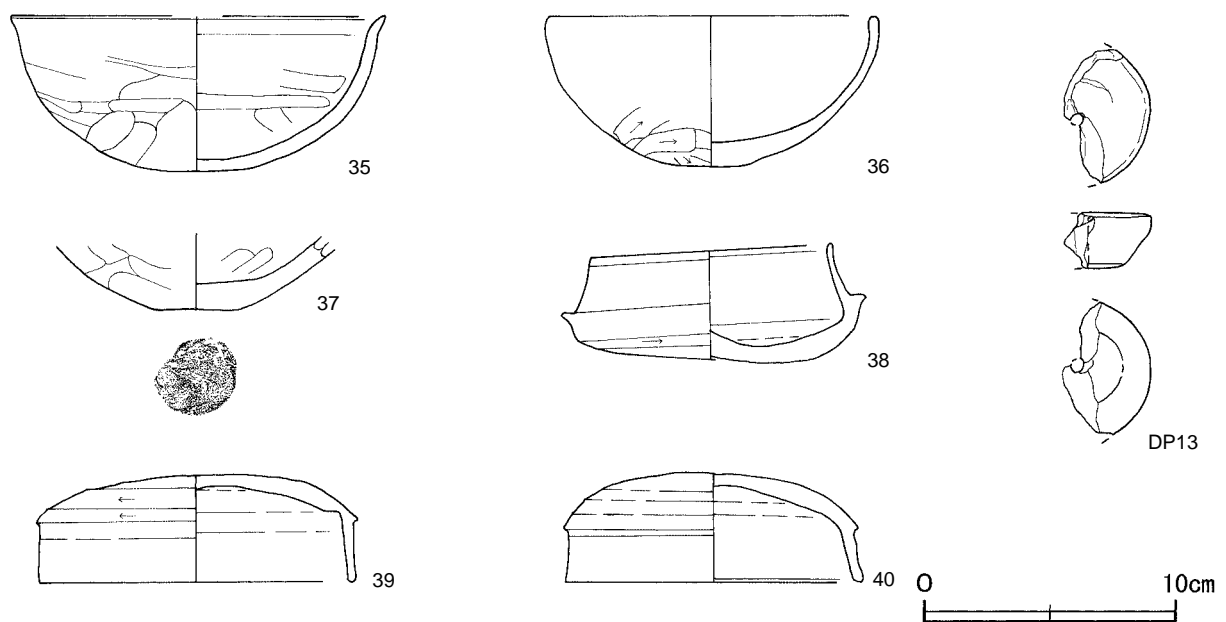
周溝 上幅2.1~3.6m、下幅1.0~1.6m、深さ0.3~0.9mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側からは、黒褐色土や暗褐色土が流入しているため、本来は盛土して墳丘を構築していたものと考えられる。

周溝土層解説

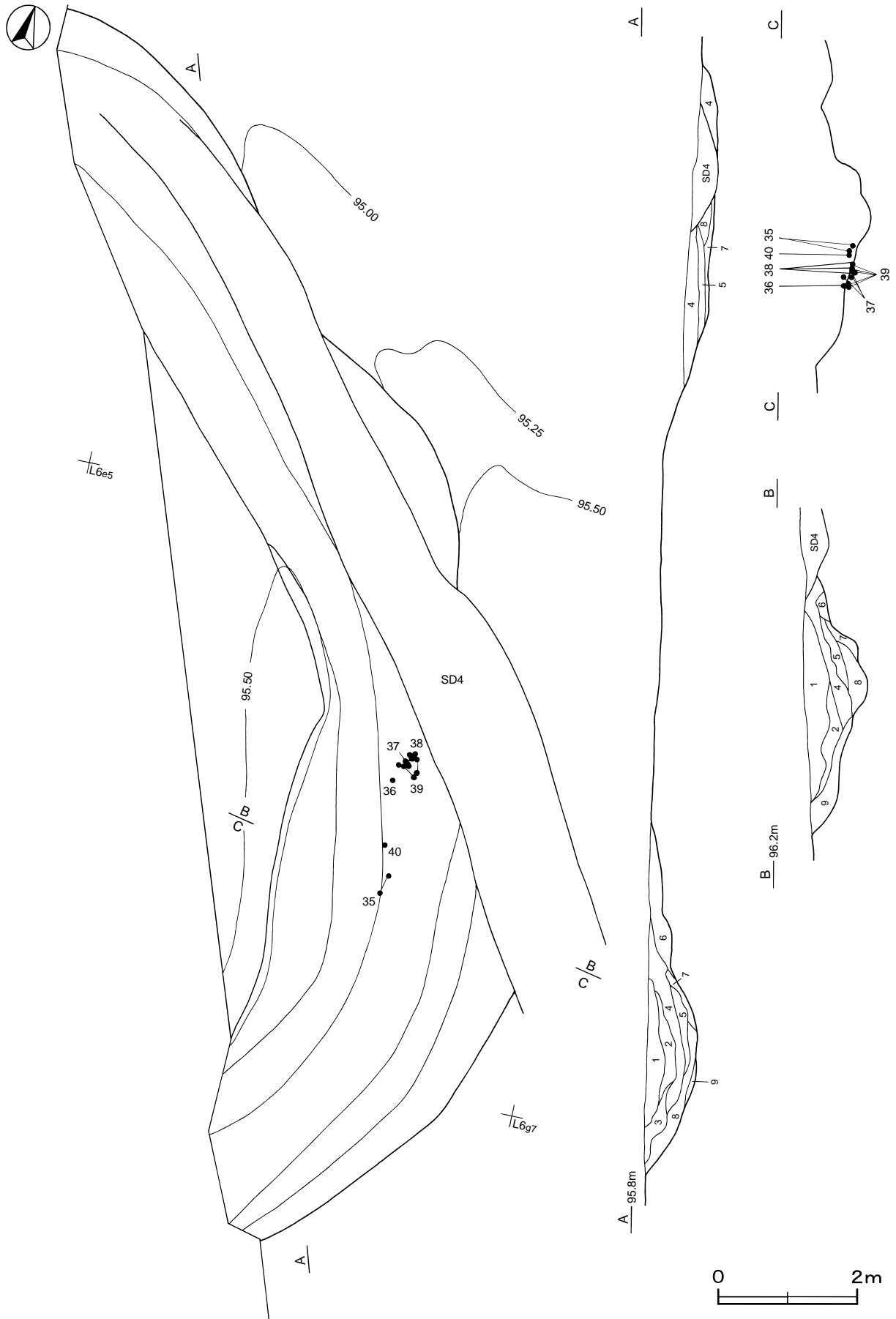
- | | | | |
|--------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 9 褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 |
| 5 極暗褐色 | 鹿沼パミス少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 周溝から、土師器3点(坏), 土師器片84点(坏61, 甕7, 壺12, 埴4), 須恵器3点(坏1, 蓋2), 須恵器片6点(坏1, 甕5)のほかに、埋没途中に流れ込んだと考えられる弥生土器259点, 土製品1点(紡錘車)が出土している。35~40は東部の覆土下層からまとめて出土している。

所見 南東に位置する第1号墳を避けるように構築されている。主体部は、丘陵という地形から墳丘の封土が流出したことによって失われたものと推測される。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第37図 第3号墳出土遺物実測図



第38图 第3号墳実測図

第3号墳出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師器	坏	[14.8]	6.2	-	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら削り 内面ナデ	周溝東部下層	80%
36	土師器	坏	[13.0]	5.9	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面手持ちへら削り 内面ナデ	周溝東部下層	70%
37	土師器	坏	-	(3.0)	3.2	長石・雲母	浅黄	普通	体部外面手持ちへら削り 内面ミガキ	周溝東部下層	20%
38	須恵器	坏	9.4	4.9	-	礫・黒色粒子	灰	普通	口縁部内・外面口クロナデ 体部外面回転へら削り 内面口クロナデ	周溝東部下層	95% P L 17
39	須恵器	蓋	12.6	4.3	-	長石・石英	灰	普通	内・外面口クロ調整 天井部回転へら削り	周溝東部下層	100% P L 19
40	須恵器	蓋	11.8	4.3	-	長石・雲母・黒色粒子	灰	普通	内・外面口クロ調整 天井部回転へら削り	周溝東部下層	95% P L 19

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	紡錘車	[6.0]	(2.2)	[0.5]	(35.3)	土(長石・石英)	両面・側面ナデ	周溝南上層	

第4号墳 (第39・40図)

位置 調査区西部のL 6 j4区を中心とした、標高95mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 墳丘下から第4号住居跡が確認され、周溝の一部は第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 北から東側は調査区域外に延びており、西側は削平により残存していない。確認できたのは南側の一部分だけで、規模や形状は明確でないが、周溝が弧状に確認できたことから墳丘径約9.5mの円墳と推定される。

墳丘 表土下は地山であり、盛土は認められない。

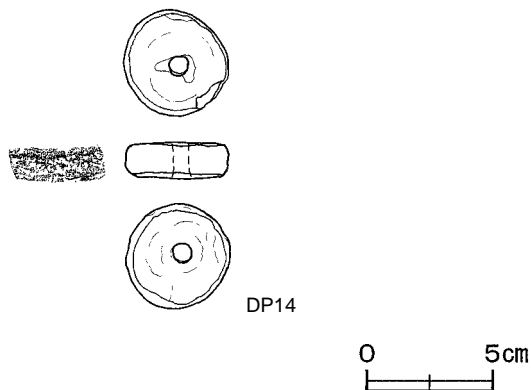
周溝 上幅約1.2~2.0m, 下幅約0.4~1.2m, 深さ0.2~0.8mである。緩やかなU字状の断面形をしている。覆土は土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側から多く流入しているため、本来は盛土をして墳丘を構築していたものと考えられる。

周溝土層解説

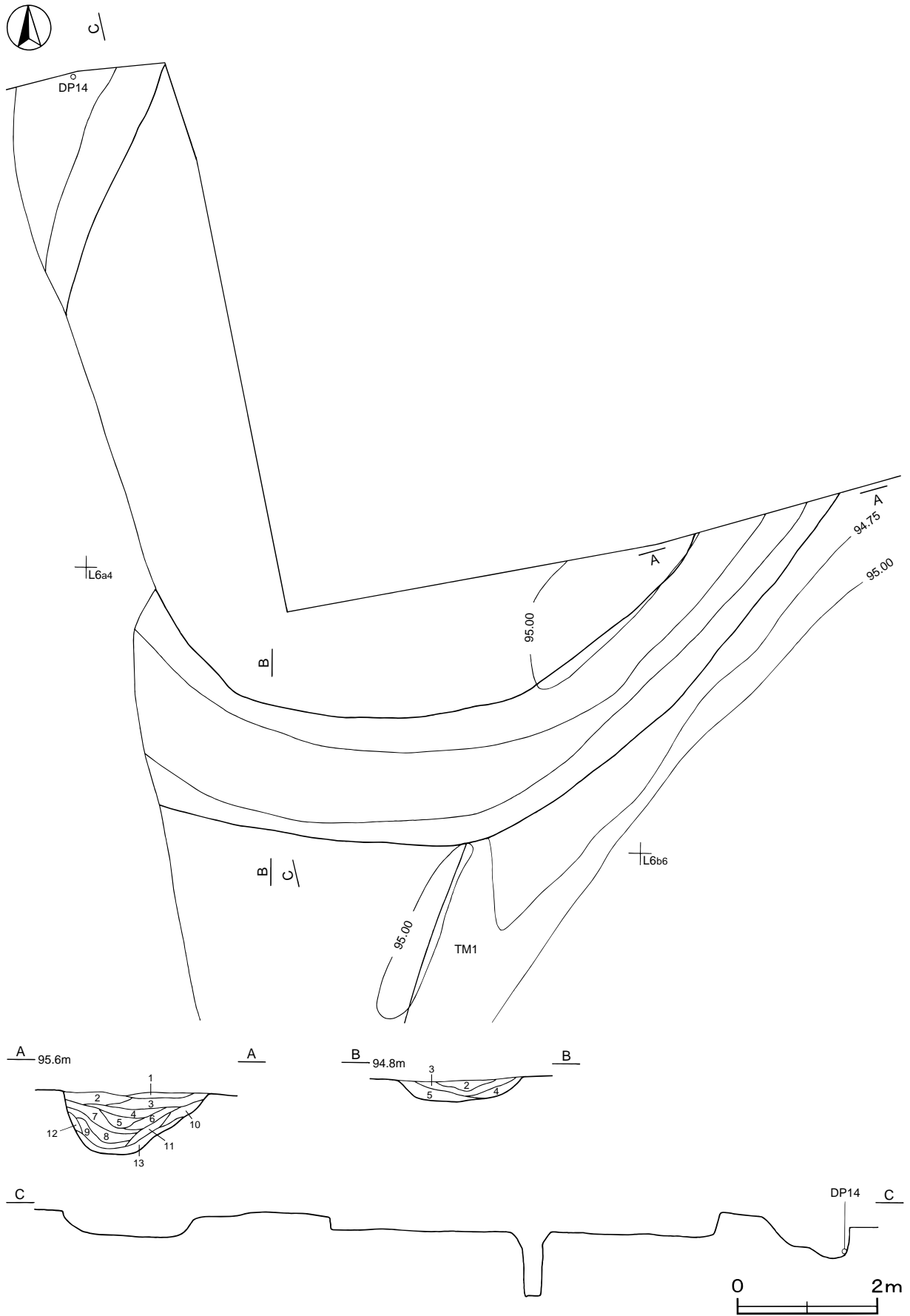
- | | | | |
|--------|-------------------|---------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 10 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量 | 11 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 13 褐色 | ロームブロック多量, 鹿沼パミス少量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 周溝から、土師器3点(甕), 土師器片3点(坏), 須恵器片2点(蓋, 甕)の他に、埋没途中に流れ込んだと考えられる弥生土器片143点, 土製品1点(紡錘車)が出土している。この他に混入した陶器片も1点出土している。DP14は周溝北部の覆土下層から出土しており、墳丘下の第4号住居跡に伴う遺物の可能性がある。

所見 第1号墳の周溝を掘り込んでいることから、第1号墳と本墳とは時期差が認められる。第1号墳と重複している部分から6世紀前半の土師器坏片が出土しており、本墳に伴う土器と思われる。時期は6世紀前半と考えられる。



第39図 第4号墳出土遺物実測図



第40图 第4号填实测图

第4号墳周溝出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP14	紡錘車	4.2	1.4	0.7	27.8	土(石英・雲母)	側面刺突文施文	周溝北部下層	

第5号墳 (第41図)

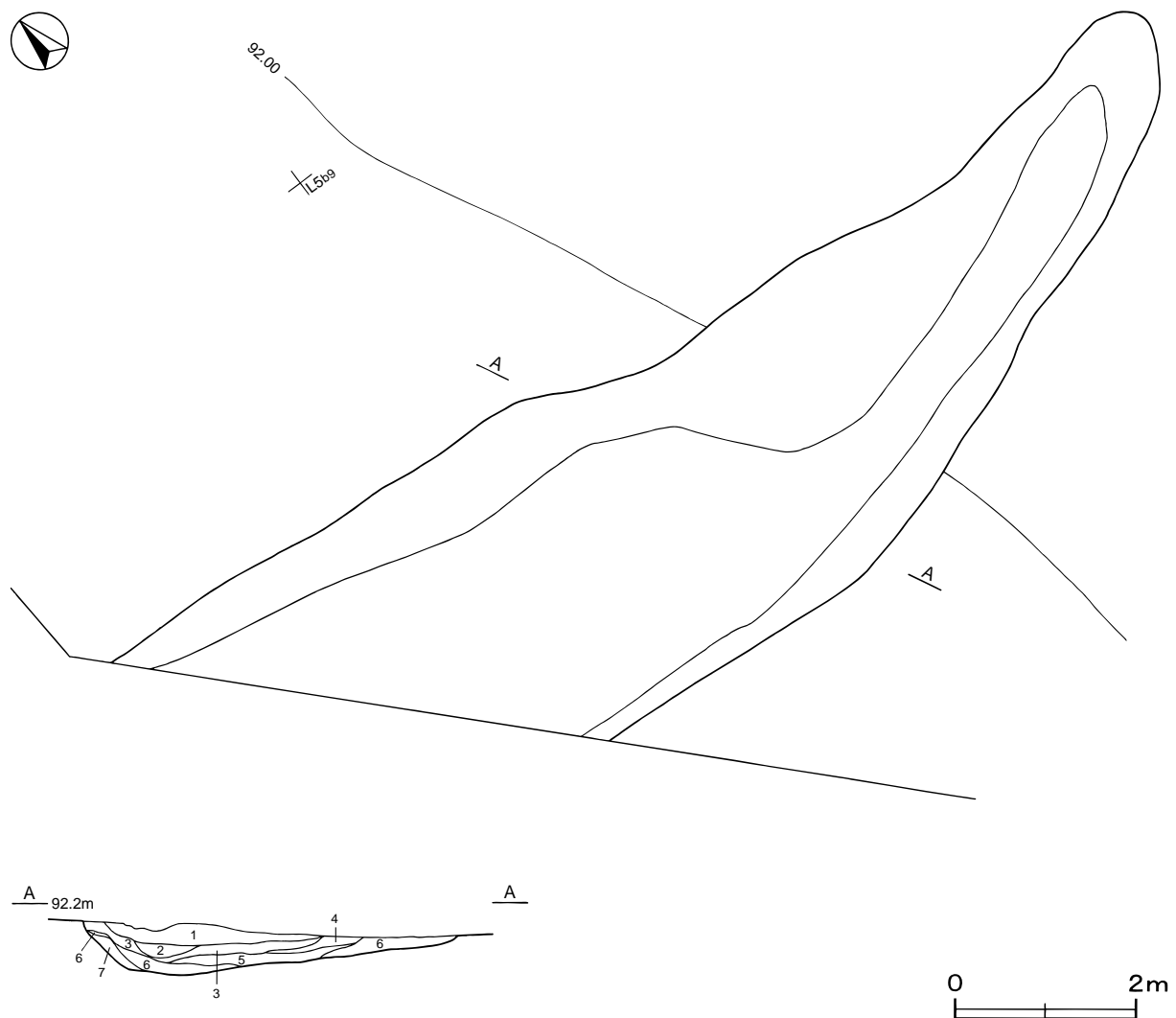
位置 調査区西部のL5c8区を中心とした、標高92mの丘陵西斜面部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、南側周溝の一部が確認された。

周溝 上幅1.3~3.6m, 下幅0.5~2.9m, 深さ0.5mである。緩やかなU字状の断面形である。緩やかに弧を描いていることから、円形に周溝が巡っていたものと推定される。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

周溝土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量 | | |



第41図 第5号墳実測図

遺物出土状況 周溝から、土師器片14点（坏4，甕10），須恵器片1点（坏）が、出土している。また、埋没途中に流れ込んだ弥生土器片105点が出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 古墳時代後期と思われる土師器埴の破片が出土していることから、時期は5世紀後半と考えられる。

第6号墳（第42・43図）

位置 調査区中央部のM8d0区を中心とし、標高104mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 南側の一部が削平により残存していないため規模は明確ではないが、墳丘や周溝の形状から墳丘径約13m、周溝外縁径約18.6mの円墳と推定される。

墳丘 旧表土上に黒褐色土や暗褐色土を盛土して構築している。高さは約0.2mである。

周溝 上幅2.0～3.6m、下幅0.8～2.0m、深さ0.5～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側からの明瞭な土の流入がみられないため、低墳丘であったと推定される。

墳丘・周溝土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，鹿沼パミス・細礫微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	16 暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・鹿沼パミス微量
3 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量	17 黒褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量	18 暗褐色	ローム粒子少量，鹿沼パミス微量
5 暗褐色	ローム粒子少量	19 極暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	20 黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	21 暗褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量
8 黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子微量	22 暗褐色	ロームブロック微量
9 暗褐色	鹿沼パミス・粘土粒子少量，ローム粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック微量
10 褐色	鹿沼パミス・粘土粒子中量，ローム粒子少量	24 黒褐色	ローム粒子少量
11 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，鹿沼パミス・細礫微量	25 褐色	ロームブロック微量
12 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	26 褐色	鹿沼パミス少量，ロームブロック微量
13 黒褐色	ロームブロック中量		
14 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量，鹿沼パミス微量		

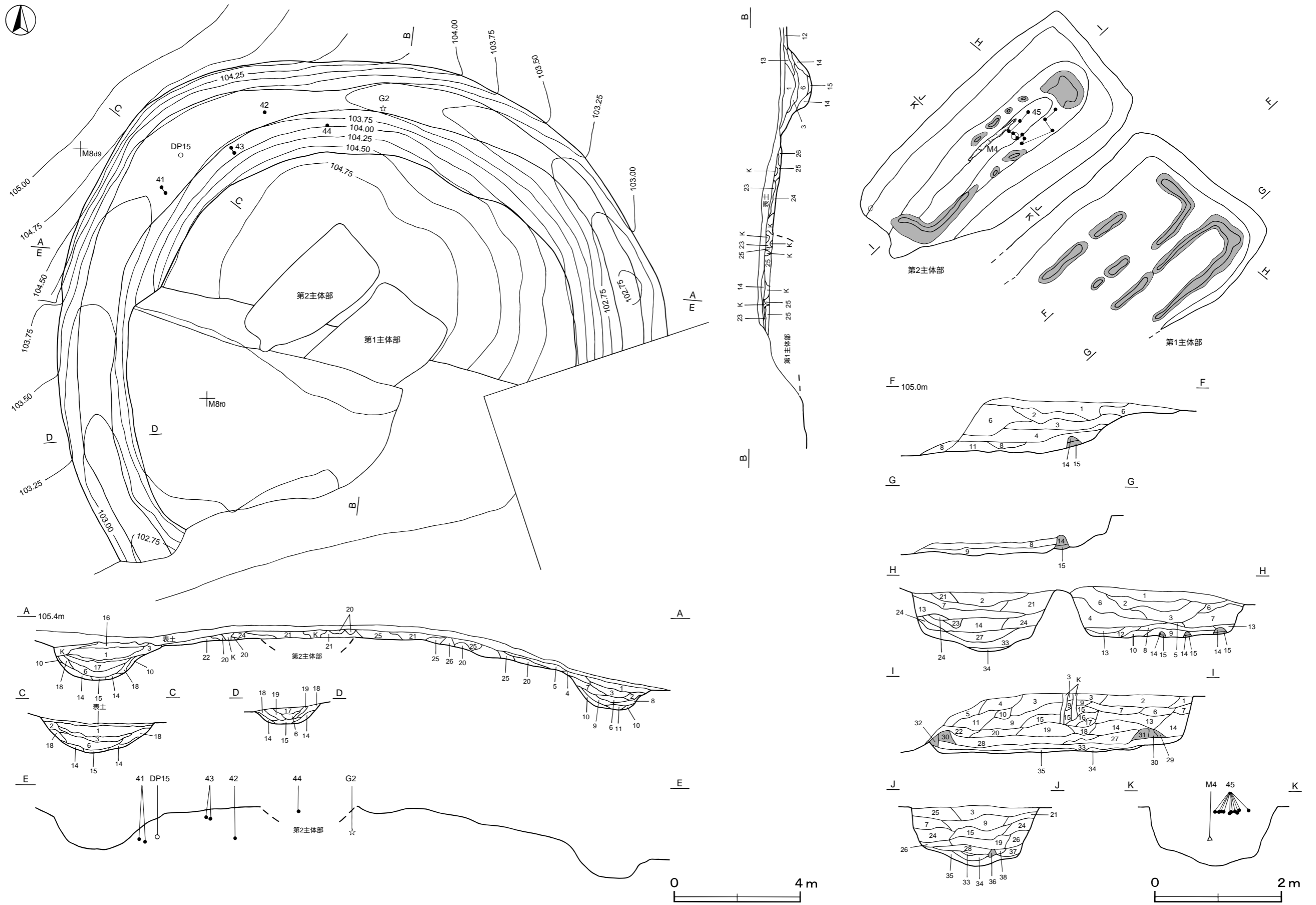
埋葬施設 墳頂部から2基の埋葬施設が確認できた。これらは0.3mの間隔で東西に並んでおり、東側を第1主体部、西側を第2主体部とした。

ア 第1主体部

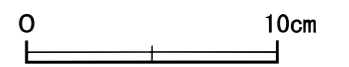
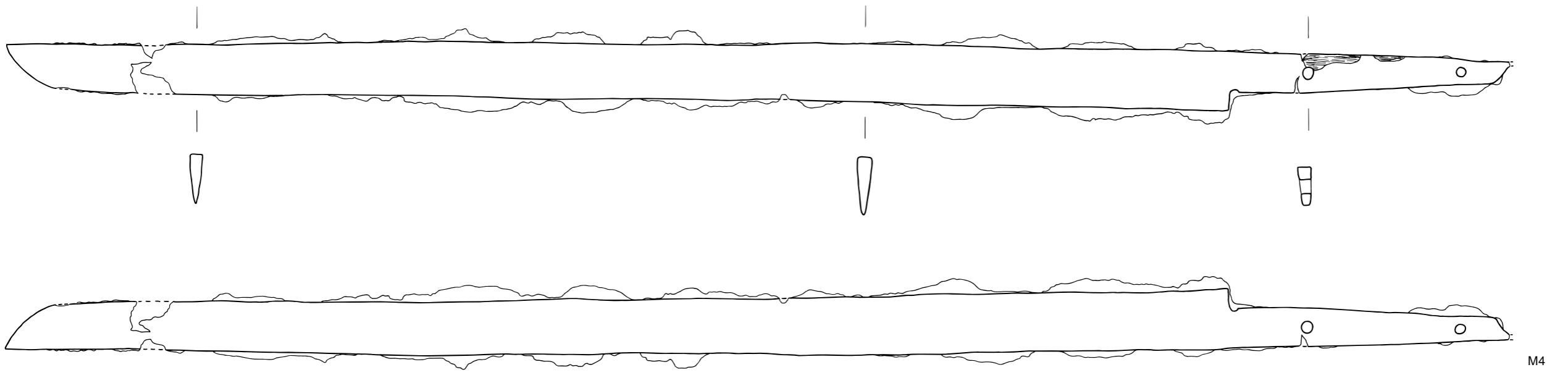
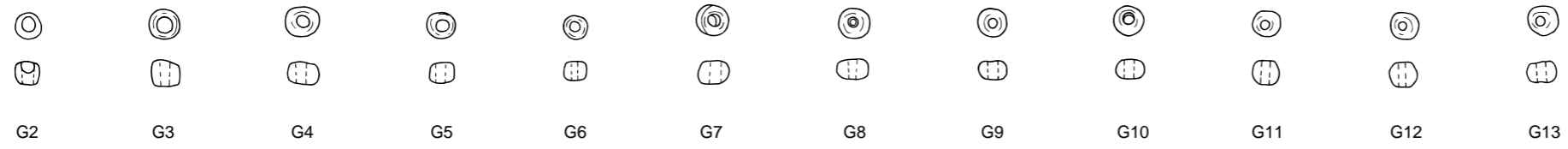
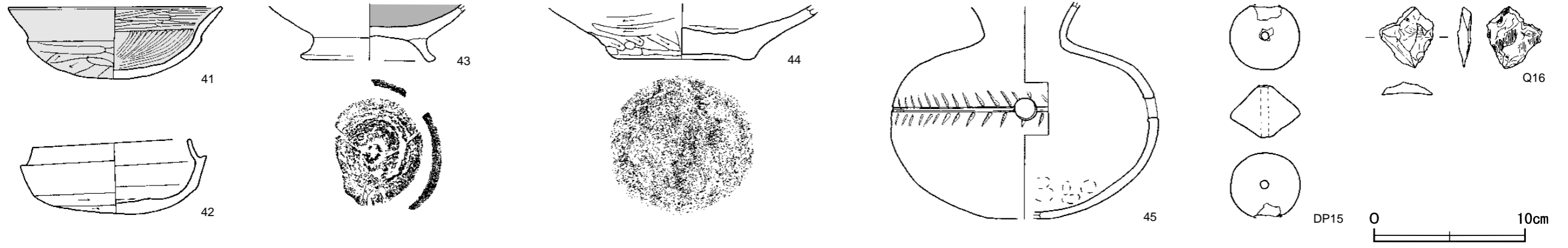
南側が削平により失われているため規模は明確でないが、残存する長軸3.0m、短軸2.6mの長方形の掘り方内に2基の木棺が安置されていた状況が確認できた。長軸方向はN-46°-Eである。深さ0.7mの底面は、隅丸長方形に浅く掘りくぼめられている。青灰色の粘土が残存しており、この他に粘土が敷かれているような痕跡もなく覆土中にも粘土は多く含まれていないため、木棺を固定するための粘土と考えられる。覆土は一度に埋めた様相を示しているため、2基の木棺を同時に埋葬したものと考えられる。断面形より割竹形木棺と考えられる。

イ 第2主体部

木棺直葬である。掘り方は、南側が削平により残存していないため規模は明確でないが、長軸4.6m、短軸2.1mの長方形と推定され、深さは1mで、断面形は逆台形である。長軸方向はN-45°-Eである。底面には長径4.1m、短径0.8m、深さ0.1mの楕円形状に掘り込みがみられ、断面形は緩やかなU字状である。この楕円形状の掘り込みの周りには青灰色の粘土が残存しており、楕円形状の掘り込みに木棺を置き、固定したものと考えられる。断面形より割竹形木棺と考えられる。



第42図 第6号墳実測図



第43图 第6号墳出土遺物実測図

第1・2主体部土層解説

1	灰 褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	20	灰 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
2	黒 褐色	ローム粒子微量	21	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
3	暗 褐色	ローム粒子微量	22	にぶい褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
4	黒 褐色	ローム粒子少量	23	にぶい褐色	ローム粒子微量
5	にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	24	黒 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
6	黒 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	25	にぶい褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
7	黒 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	26	黒 褐色	ロームブロック微量
8	灰 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	27	暗 褐色	ローム粒子中量, 鹿沼パミス・粘土粒子微量
9	暗 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	28	暗 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子微量
10	褐色	ローム粒子中量	29	暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
11	黒 褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	30	暗 褐色	粘土粒子中量, ローム粒子少量
12	灰 褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子微量	31	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
13	褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子微量	32	褐色	粘土粒子多量, ローム粒子少量
14	灰 褐色	ローム粒子微量	33	にぶい褐色	ローム粒子少量
15	暗 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量	34	褐色	ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量
16	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	35	明 褐色	ローム粒子中量
17	暗 褐色	鹿沼パミス少量	36	褐色	粘土粒子中量, ローム粒子少量
18	褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量	37	褐色	ロームブロック少量
19	褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	38	褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 周溝から、土師器3点（坏，高台付坏，甕），土師器片115点（坏5，甕110），須恵器1点（坏），ガラス製品1点（小玉）のほかに、埋没途中に流れ込んだものと考えられる縄文土器片29点，弥生土器片385点，土製品1点（紡錘車），石器1点（剥片）が出土している。41が正位，42が割れた状態で北部底面から，43・44は北部上層，G2は北部下層からそれぞれ出土している。43は9世紀以降の土器で，この時期に周溝が埋まりきっていないことがわかる。この遺物は東斜面に位置する平安時代の集落に伴うものと思われる。G2は主体部内から出土しているガラス小玉と様相が異なり，第7号住居跡から出土しているものと類似しているため弥生時代のものと思われる。第2主体部からは，須恵器1点（甕），金属製品1点（直刀），ガラス製品11点（小玉）が出土している。45が割れた状態で上層から，M4は楕円形状の掘り込み内から，鋒を南西に向けてそれぞれ出土している。G3～G13は，覆土下層を1mmメッシュの篩にかけて確認できた。出土している直刀とガラス小玉は副葬品と考えられる。

所見 主体部は墳頂部に2か所存在している。第1主体部には2人の被葬者が同時に埋葬されており，第2主体部は隣接するように位置していることから，縁故関係のあったものが被葬者であると考えられる。削平された部分の断面に，第2主体部が第1主体部を掘り込んでいるのが確認されており，墳丘の中央部に第1主体部が位置していることから，第1主体部が先に構築されたものと考えられる。副葬品は第2主体部のみから確認されている。第2主体部の上層から甕が破片で出土しており，破片や出土状況が人為的に破碎された様相を示していることから，埋葬に関する祭祀が行われたものと考えられる。周溝底面から須恵器坏である42が正位で，土師器坏である41が出土していることから，それらは据え置いていた可能性がある。時期は，出土土器から6世紀前葉と考えられる。

第6号墳周溝出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	坏	13.9	5.0	-	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 内面ミガキ 体部外面ヘラ削り	周溝北部底面	90% PL17
42	須恵器	坏	10.5	5.0	-	長石・雲母	灰	良好	口縁部内・外面口クロナデ 体部外面回転ヘラ削り 内面口クロナデ	周溝北部底面	100% PL17 自然釉
43	土師器	高台付坏	-	(3.8)	[8.2]	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	内面ミガキ 底部回転ヘラ切り後ナデ 高台貼り付け	周溝北部上層	20%
44	土師器	甕	-	(3.6)	9.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ナデ(摩滅) 外面ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り後ナデ 輪積み痕	周溝北部上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP15	紡錘車	4.6	3.9	0.5	(41.5)	土(長石・雲母)	算盤玉形	周溝北部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 16	剥片	4.05	3.60	0.70	8.35	水晶	剥離痕	周溝北部 下層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
G 2	ガラス小玉	0.31	0.35	0.20	0.04	ガラス	水色 銅と鉛で着色カ	周溝北部 下層	P L 21

第 6 号墳第 2 主体部出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
45	須恵器	甌	-	(14.3)	-	長石・石英・雲母	灰	良好	内・外面口クロナデ 外面沈線文 刺突文を羽状に構成	第 2 主体部 上層	50% PL20

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
G 3	ガラス小玉	0.37	0.42	0.20	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 4	ガラス小玉	0.31	0.48	0.15	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 5	ガラス小玉	0.24	0.42	0.20	0.06	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 6	ガラス小玉	0.28	0.38	0.10	0.06	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 7	ガラス小玉	0.34	0.47	0.20	0.11	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 8	ガラス小玉	0.31	0.46	0.17	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 9	ガラス小玉	0.29	0.46	0.15	0.08	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 10	ガラス小玉	0.30	0.47	0.15	0.09	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 11	ガラス小玉	0.37	0.40	0.12	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 12	ガラス小玉	0.37	0.41	0.12	0.09	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 13	ガラス小玉	0.33	0.48	0.16	0.08	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M 4	直刀	(96.8)	3.8	1.0	(836)	鉄	片関 目釘孔 2ヶ所	第 2 主体部 下層	P L 21

第 7 号墳 (第44・45図)

位置 調査区中央部の L 8 h5区を中心とした、最も標高の高い標高107mの丘陵頂上部に位置している。

重複関係 第16号土坑に周溝の一部が掘り込まれている。

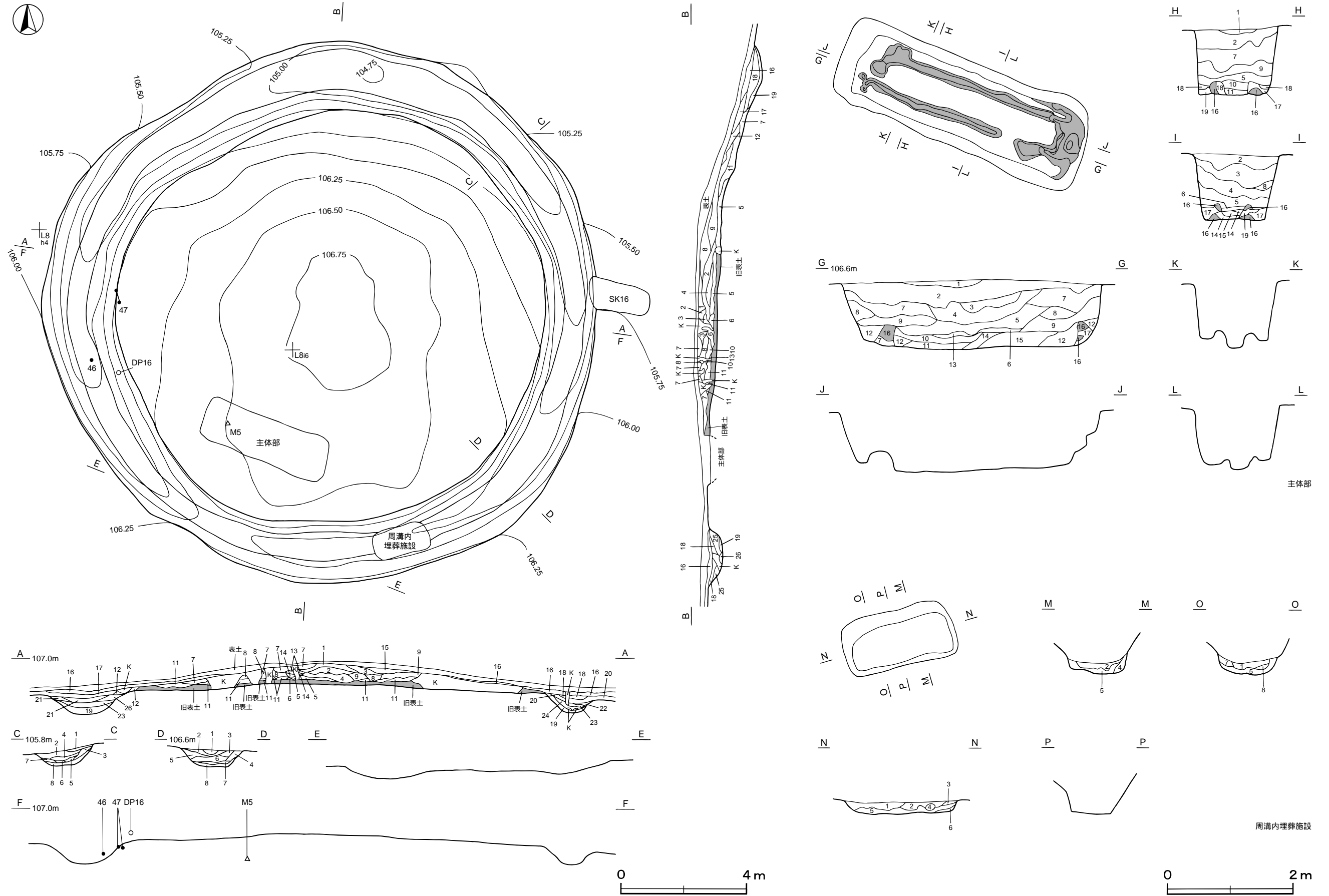
規模と形状 墳丘や周溝の形状から墳丘径約13m、周溝外縁径約17mの円墳である。

墳丘 旧表土の上に暗褐色土や黒褐色土を1～4層ほど重ねるように盛土して構築している。盛土は約0.5mで、北側に向かってわずかに傾いている。盛土はあまり高くなく、低墳丘であったことが推定される。

周溝 上幅2.0～3.6m、下幅0.8～2.0m、深さ0.5～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は土が流入した自然堆積の様相を示している。主体部南側の周溝内には地山を掘り残している部分があり、土橋として使用していたものと考えられる。

墳丘・周溝土層解説

1 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	14 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
2 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	15 褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化粒子微量	16 極暗褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	17 暗褐色	ロームブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	18 黒褐色	ロームブロック微量
6 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量	19 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	20 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、鹿沼パミス微量
8 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	21 黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
9 暗褐色	ロームブロック中量	22 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
10 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	23 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化物微量
11 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	24 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、焼土粒子微量
12 極暗褐色	ロームブロック中量	25 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
13 褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量	26 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量



第44图 第7号墳実測图

埋葬施設 墳丘南側と周溝内から埋葬施設が確認される。

墳丘主体部

墳丘南側の裾部に位置している木棺直葬である。長軸4.1m、短軸1.3mの長方形で、長軸方向はN-69°-Wである。深さ1.1mで、底面には、粘土が長軸2.9m、短軸0.4mの隅丸長方形に残存していることから、木棺を固定していたものと思われる。この他に粘土が敷かれているような痕跡もなく、覆土中にも粘土は多く含まれていない。鹿沼パミスを含む黒褐色土を埋土としているが、木棺が安置されていた部分は、粘土粒子や鹿沼パミスを含む褐色土が堆積している。遺物は、M5が西部下層から出土しており、副葬品である。

主体部土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	12 褐色	粘土粒子多量, ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量
2 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	13 褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス微量
3 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	14 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量, 粘土粒子微量
4 暗褐色	鹿沼パミス中量, ロームブロック少量	15 褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス・粘土粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量, 鹿沼パミス微量	16 灰オリーブ色	粘土粒子多量, ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量, 粘土粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス少量, 粘土粒子微量
7 褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量	18 極暗褐色	ロームブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック少量	19 暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量
9 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子少量		
10 褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス・粘土粒子少量		
11 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量, 粘土粒子微量		

周溝内埋葬施設

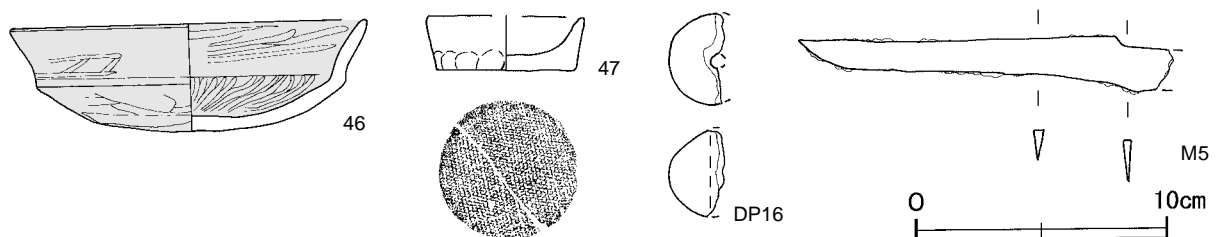
周溝南部に位置している、直葬である。長軸1.8m、短軸0.9mの隅丸長方形で、深さ0.2mである。長軸方向はN-73°-Eである。周溝の底面を掘り込んでいるが、覆土を掘り込んだ様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期、あるいは同時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。覆土はローム土や鹿沼パミスを多く含み、不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

周溝内埋葬施設土層解説

1 褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	6 黄褐色	鹿沼パミス多量, ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	7 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
3 褐色	ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量	8 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
4 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量	9 ぶい黄褐色	鹿沼パミス中量, ローム粒子少量
5 灰黄褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量		

遺物出土状況 土師器1点(坏), 土師器片121点(坏16, 甕105), 須恵器片1点(甕)のほかに、埋没途中に流れ込んだものと考えられる縄文土器片15点, 弥生土器片677点, ミニチュア土器1点が周溝から出土している。周溝内からは、46が西部の覆土下層, 47・DP16が西部の覆土上層からそれぞれ出土している。周溝内埋葬施設から遺物は出土していない。

所見 最も標高の高い位置に構築されている古墳である。主体部は墳丘の中心から南に外れており、第1・2・6号墳とは位置が異なっている。時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第45図 第7号墳出土遺物実測図

第7号墳周溝出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
46	土師器	坏	14.0	4.3	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ミガキ 体部 外面へラ削り 内面ミガキ	周溝西部 下層	100% PL17
47	ミニチュア土器	-	6.1	2.2	5.5	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内・外面ナデ 体部下端指頭痕 底部 布目痕	周溝西部 上層	90% PL20

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP16	紡錘車	3.6	3.3	[0.5]	(20.4)	土(長石・石英・雲母)	算盤玉形	周溝西部 上層	

第7号墳主体部出土遺物観察表 (第45図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	刀子	(14.7)	2.2	0.5	(19.6)	鉄	両開 茎欠	主体部西部 下層	

第8号墳 (第46・47図)

位置 調査区中央部のL7f4区を中心とし、標高101mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第2号住居跡、第19号土坑を掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が削平により残存していないため規模や形状が明確ではないが、墳丘の形状や周溝が弧を描いて巡ることから墳丘径約15mの円墳と推定される。

墳丘 旧表土上に盛土をして構築している。盛土は約0.2mである。盛土は少なく、斜面部の地形を利用して構築したと考えられる。

周溝 上幅1.6~2.8m、下幅0.6~1.0m、深さ0.3~1.0mである。緩やかなU字状の断面形である。標高の高い南東部は特に深く掘り込まれており、地形を利用して構築していることがうかがえる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

墳丘・周溝土層解説

1 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミス微量	10 にぶい褐色	ローム粒子中量
2 極暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量	11 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量	13 暗褐色	鹿沼パミス中量、ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	14 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量
6 極暗褐色	ロームブロック少量	15 灰褐色	ローム粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量	16 黒色	ローム粒子少量
8 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量	17 黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
9 黒色	鹿沼パミス少量、ローム粒子微量		

周溝内埋葬施設 周溝が最も深く掘り込まれている南東部の底面に2基の掘り込みがみられる。周溝の底面に沿うように並んでおり、北側を周溝内埋葬施設1、南側を周溝内埋葬施設2とする。

周溝内埋葬施設1

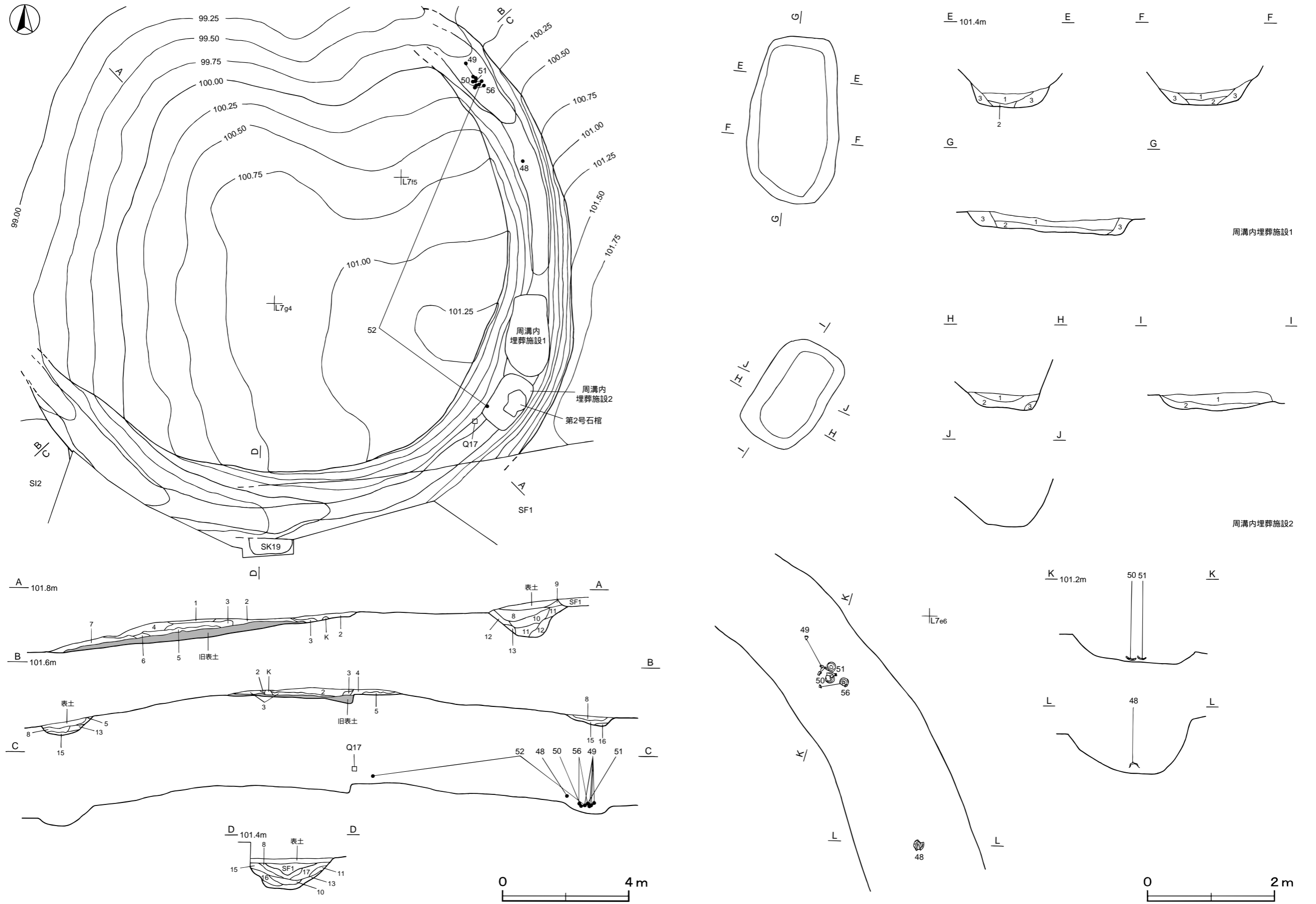
周溝の東部底面に位置している。長軸2.6m、短軸1.4mの隅丸長方形で、長軸方向はN-2°-Wである。深さは0.2mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦で粘土などはみられない。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他の遺物は確認されなかった。

周溝内埋葬施設1土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	3 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量
2 灰褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量		

周溝内埋葬施設2

周溝の東部底面に位置している。長軸1.6m、短軸1.0mの長方形で、長軸方向はN-32°-Eである。深さ



第46图 第8号墳実測图

0.2mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他の遺物は確認されなかった。

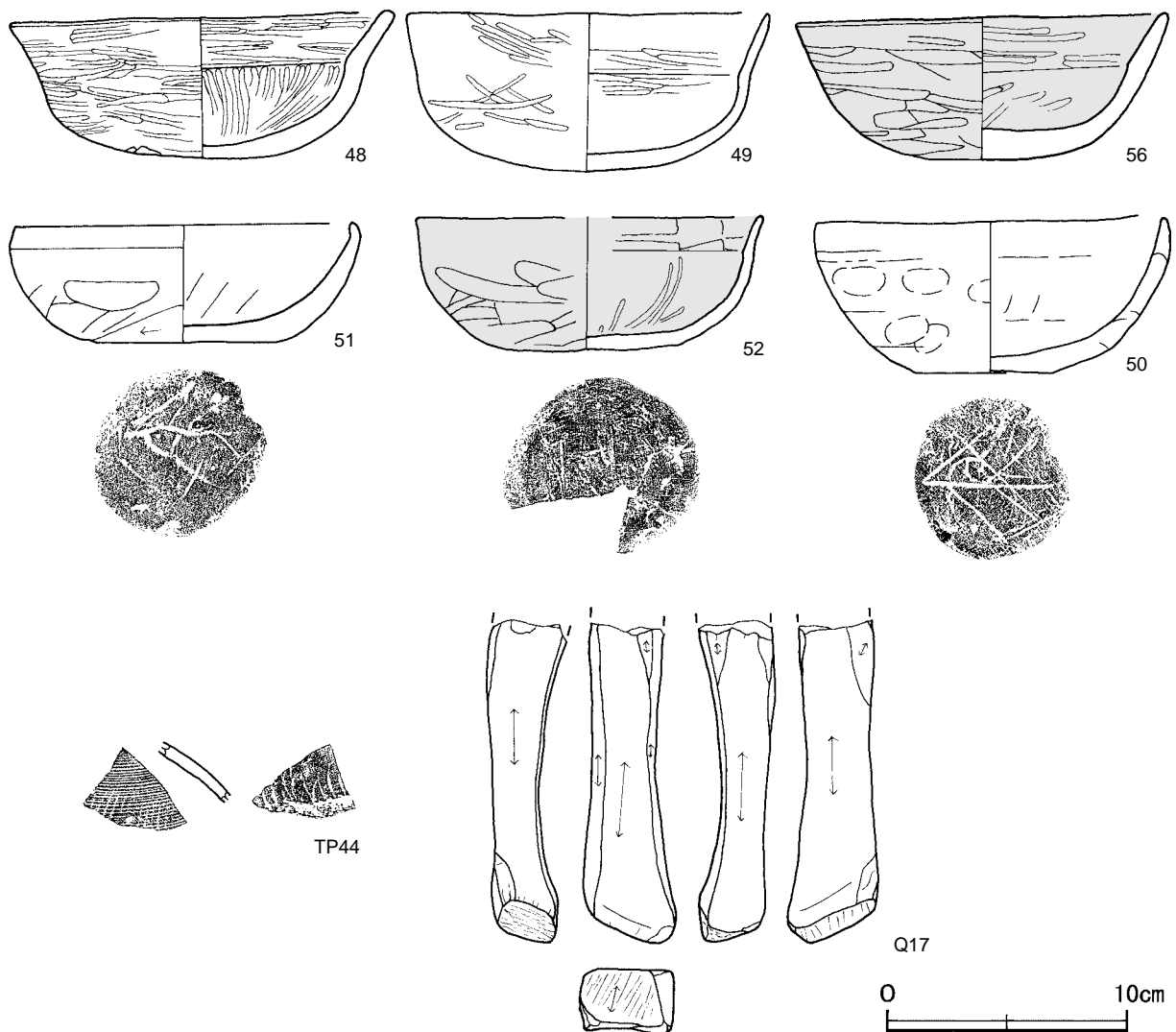
周溝内埋葬施設 2土層解説

- 1 にぶい褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス微量

- 3 暗褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス中量

遺物出土状況 土師器 8点（坏6，高台付坏1，甕1），土師器片23点（坏7，甕16），須恵器片1点（甕）のほかに、埋没途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片424点が周溝から出土している。また混入したと思われる石製品1点（砥石），瓦片1点も出土している。48～51・56は周溝北東部の覆土下層からまとめて出土している。52は南東部の覆土下層，Q17は南東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本墳の現存している部分から主体部は確認されなかった。最も深く掘り込まれている南東部の周溝内から土坑状の掘り込み2基が確認され、形状から埋葬施設のひとつと考えられる。大きさや形状が異なっているが、周溝底面を同じように掘り込んでいることから近い時期に構築されたもので、墳丘内に設けられたと想定できる埋葬施設後の追葬と考えられる。また、周溝の底面に正位で土師器坏が出土しており、第6・7号墳と同じように据え置かれていたもので、時期は出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第47図 第8号墳出土遺物実測図

第8号墳周溝出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師器	坏	15.8	5.9	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内・外面ミガキ	周溝北東部下層	95% P L 17
49	土師器	坏	14.9	6.5	-	長石・石英	明赤褐	普通	内・外面ミガキ	周溝北東部下層	95% P L 17
50	土師器	坏	14.4	6.4	5.7	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面指頭押圧痕 内面ナデ 底部木葉痕 輪積み痕あり	周溝北東部下層	90% P L 17
51	土師器	坏	14.0	5.0	7.0	長石・石英・雲母・礫	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面手持ちヘラ 削り 内面ナデ 底部木葉痕 輪積み痕	周溝北東部下層	95% P L 17
52	土師器	坏	[12.5]	5.5	6.7	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ 体部外面 削り後ナデ 内面放射状のミガキ	周溝南東部下層	40%
56	土師器	坏	15.2	6.0	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面ミガキ後ナデ	周溝北東部下層	95% P L 17

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP44	須恵器	甕	-	(2.6)	-	長石	黄灰	普通	外面横位の掻き目	周溝南部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	砥石	(13.4)	(3.8)	2.6	(176.0)	砂岩	砥面5面	周溝南東部上層	P L 21

第9号墳（第48・49図）

位置 調査区西部のL5g8区を中心とし、標高90mの丘陵西斜面部に位置している。

規模と形状 南西部の削平により周溝の一部しか確認できない。周溝が弧を描いて巡ることから周溝外縁径約19mの円墳と推定される。

周溝 上幅1.8～3.4m、下幅0.8～1.8m、深さ0.4～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。標高の高い東部は他の部分より深く掘り込まれており、地形を利用して構築していることがうかがえる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

周溝土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |

周溝内埋葬施設 周溝の北東部の底面に2基の掘り込みがみられる。周溝の底面に沿うように並んでおり、北側を周溝内埋葬施設1、南側を周溝内埋葬施設2とする。

周溝内埋葬施設1

周溝の北東部底面に位置している。長径2.0m、短径1.3mの楕円形で、長径方向はN-61°-Wである。深さは0.4mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他には確認されなかった。

周溝内埋葬施設1土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミス微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 | | |

周溝内埋葬施設2

周溝の北部底面に位置している。長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、長径方向はN-37°-Wである。深さは0.3mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他には確認されなかった。

れなかった。

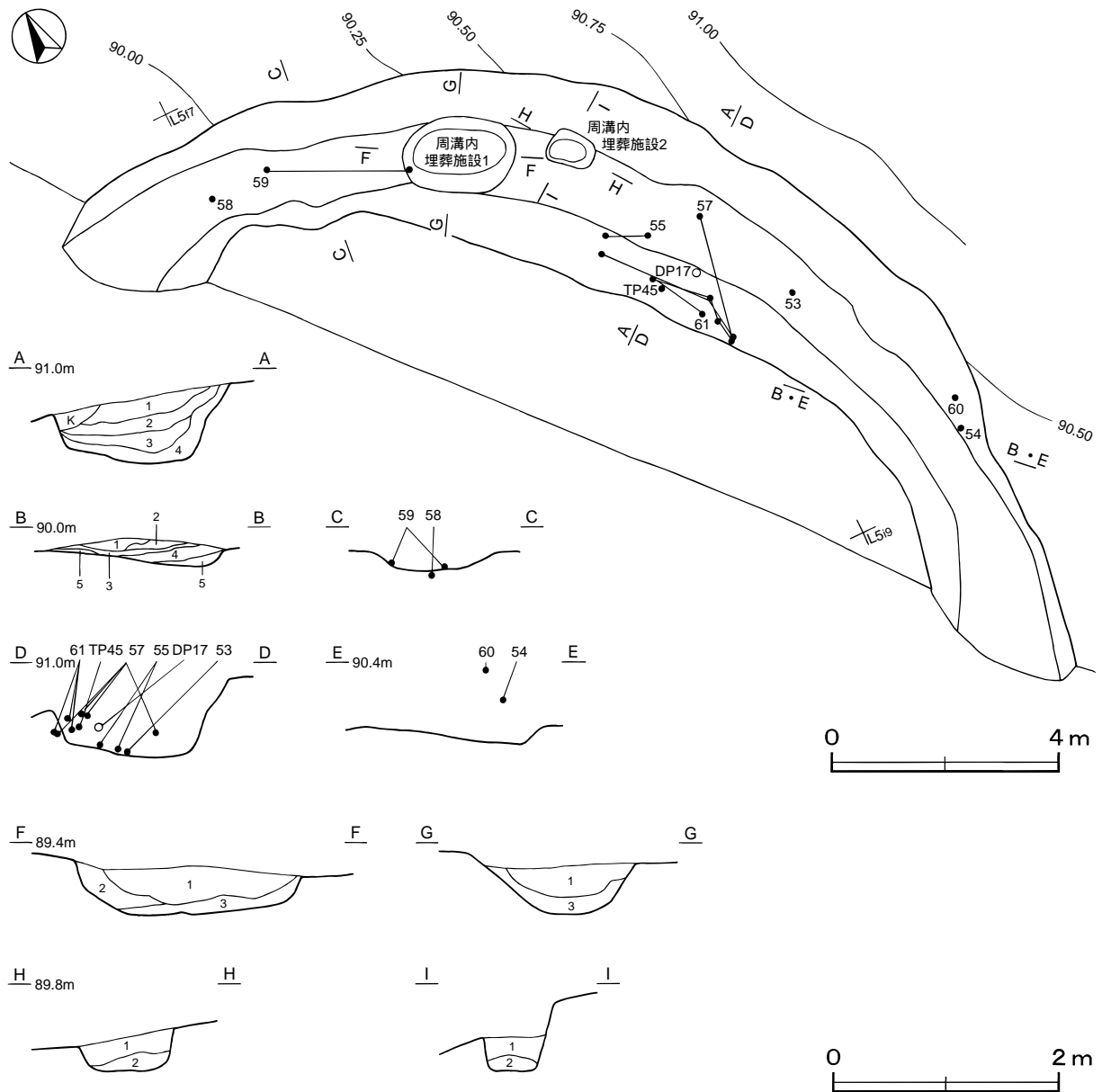
周溝内埋葬施設 2土層解説

1 にぶい褐色 ローム粒子多量, 鹿沼パミス微量

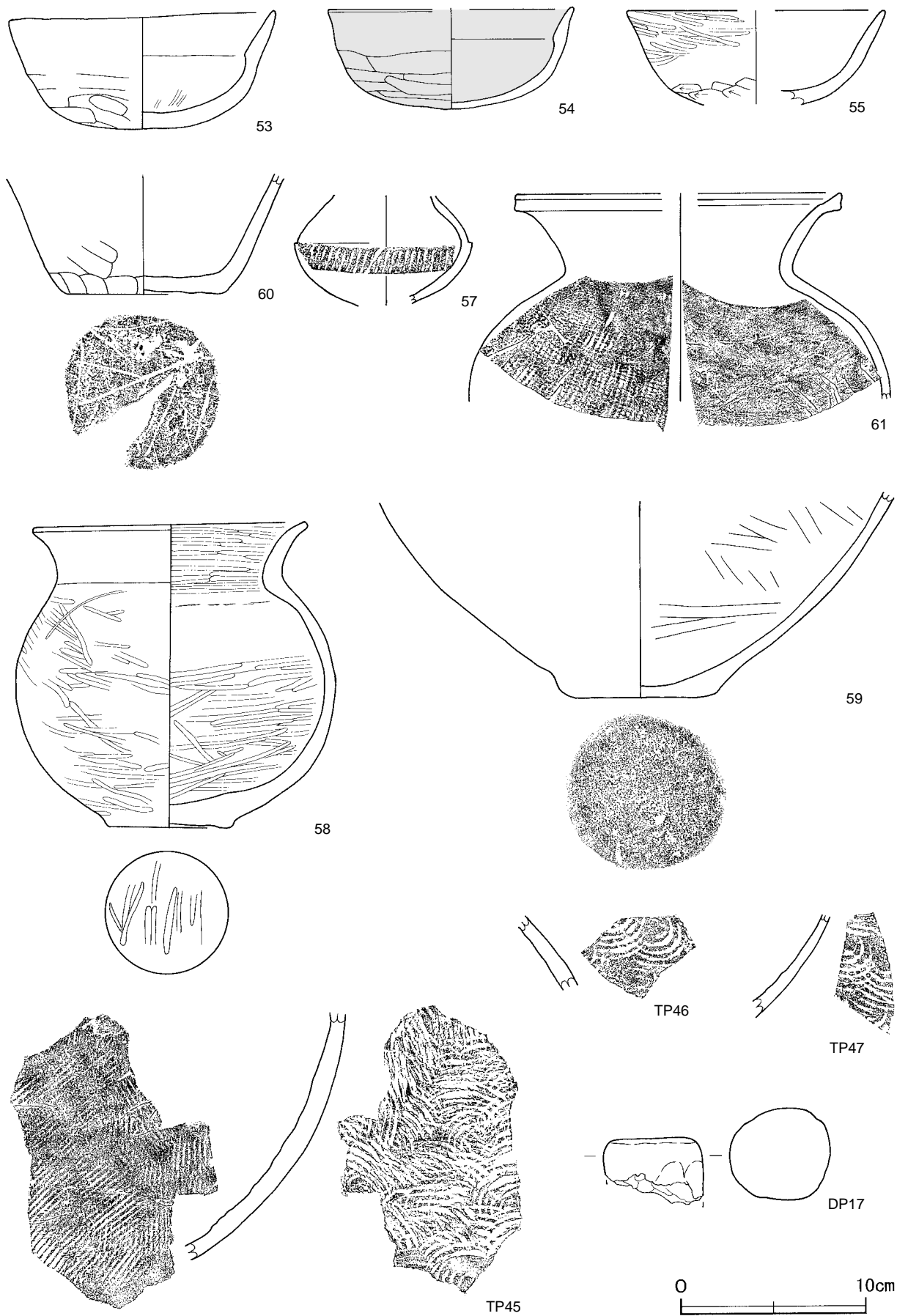
2 褐色 ローム粒子多量, 鹿沼パミス微量

遺物出土状況 土師器 6点 (坏 3, 甕 3), 土師器片 68点 (坏 6, 甕 62), 須恵器 2点 (甕, 甗), 須恵器片 23点 (坏 9, 蓋 2, 甕 10, 短頸壺 1, 甗 1) が周溝から出土している。他に埋没途中に流れ込んだと考えられる縄文土器片 5点, 弥生土器片 486点や, 混入したと思われる土製品 8点 (支脚), 鉄製品 2点 が出土している。53が東部の覆土下層, 54・60が南部の覆土上層, 55・61・TP45は北東部の覆土下層からまとまって出土している。58・59は北部の底面から出土している。

所見 周溝内から須恵器が破片の状態出土しており, 須恵器より耐久性の弱い土師器がほぼ完形で出土している。このことから須恵器は故意に破碎されたものと考えられる。第 6 号墳と同じような祭祀の可能性もある。時期は, 出土土器から 5 世紀後葉と考えられる。



第48図 第9号墳実測図



第49图 第9号墳出土遺物実測図

第9号墳出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師器	坏	14.1	6.3	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外面横ナデ後ナデ 内面横ナデ 体部外面削り後ナデ 内面ミガキ	周溝東部下層	95% P L 17
54	土師器	坏	[13.2]	5.4	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面削り	周溝南部下層	90% P L 17
55	土師器	坏	[14.0]	(5.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内面ナデ 口縁部外面ミガキ 体部外面へら削り	周溝北東部下層	50%
57	須恵器	甗	-	(5.9)	-	石英	灰色	良好	内面口クロナデ 外面刺突文施文	周溝東部下層	30% P L 20
58	土師器	小形甗	14.6	16.7	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面へらミガキ 体部外面へら削り後へらミガキ 火熱痕あり 底部削り後へらミガキ	周溝北部下層	90% P L 20
59	土師器	甗	-	(11.0)	8.0	長石・石英	明赤褐	普通	内・外面ナデ	周溝東部下層	20%
60	土師器	甗	-	(6.5)	8.2	長石・石英・雲母・礫	にぶい黄	普通	外面へら削り 底部木葉痕	周溝東部下層	15%
61	須恵器	甗	[17.5]	(11.2)	-	石英	にぶい黄橙	良好	体部外面平行叩き 内面同心円当て具痕	周溝北東部下層	10% 自然釉

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP45	須恵器	甗	-	(13.1)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面平行叩き 内面同心円当て具痕	周溝東部下層	
TP46	須恵器	甗	-	(4.1)	-	長石	黄灰	普通	内面同心円当て具痕	周溝覆土中	自然釉
TP47	須恵器	甗	-	(5.6)	-	長石・石英	灰	普通	内面同心円当て具痕	周溝覆土中	

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP17	支脚	(3.5)	-	5.1	(118.2)	土(長石・石英・雲母・赤色粒子)	ナデ	周溝東部下層	火熱痕

表6 古墳一覧表

番号	位置	墳形	墳丘主軸方向 主体部主軸方向	墳丘規模 (m)		周溝規模 (m)			埋葬施設	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古・新)
				全長(径)	高さ	最大上幅	最大下幅	深さ				
1	L6b7	方墳	N - 48° - W	13.8	-	2.6	0.9	0.2~0.5	木棺直葬 鹿沼土槨	土師器(坏)	5世紀中葉	SI6 SI5 本墳 TM4 SD1
2	L6d0	円墳	N - 29° - E	8.3	-	1.3	0.7	0.2~0.4	木棺直葬	直刀	5世紀後葉 ~ 6世紀	本墳 SD1
3	L6e5 [円墳]	-	-	11.5	-	3.6	1.6	0.3~0.9	-	土師器(坏) 須恵器(坏, 蓋)	5世紀後葉	本墳 SD4 SD1
4	K6j4 [円墳]	-	-	(9.5)	-	2.0	1.2	0.2~0.8	-	土師器(坏, 甗) 須恵器(蓋, 甗)	6世紀前半	SI4 TM1 本墳
5	L5c8 [円墳]	-	-	-	-	3.6	2.0	0.5	-	-	5世紀後半	
6	M8d0 [円墳]	N - 46° - E N - 45° - E	13.2	0.2	3.6	2.0	0.5~1.2	木棺直葬	土師器(坏) 須恵器(坏, 甗) 直刀 ガラス小玉	6世紀前葉		
7	L8h5 円墳	N - 69° - W	13.6	0.5	3.6	2.0	0.5~1.2	木棺直葬 周溝内埋葬	土師器(坏)	6世紀前葉	本墳 SK16	
8	L7f4 円墳	-	-	14.8	0.2	2.8	1.0	0.3~1.0	周溝内埋葬	土師器(坏)	5世紀後葉	SI2SK19 本墳 2号石棺SF1
9	L5g8 [円墳]	-	-	-	-	3.4	1.8	1.2	周溝内埋葬	土師器(坏, 甗) 須恵器(甗)	5世紀後葉	

(2) 石棺

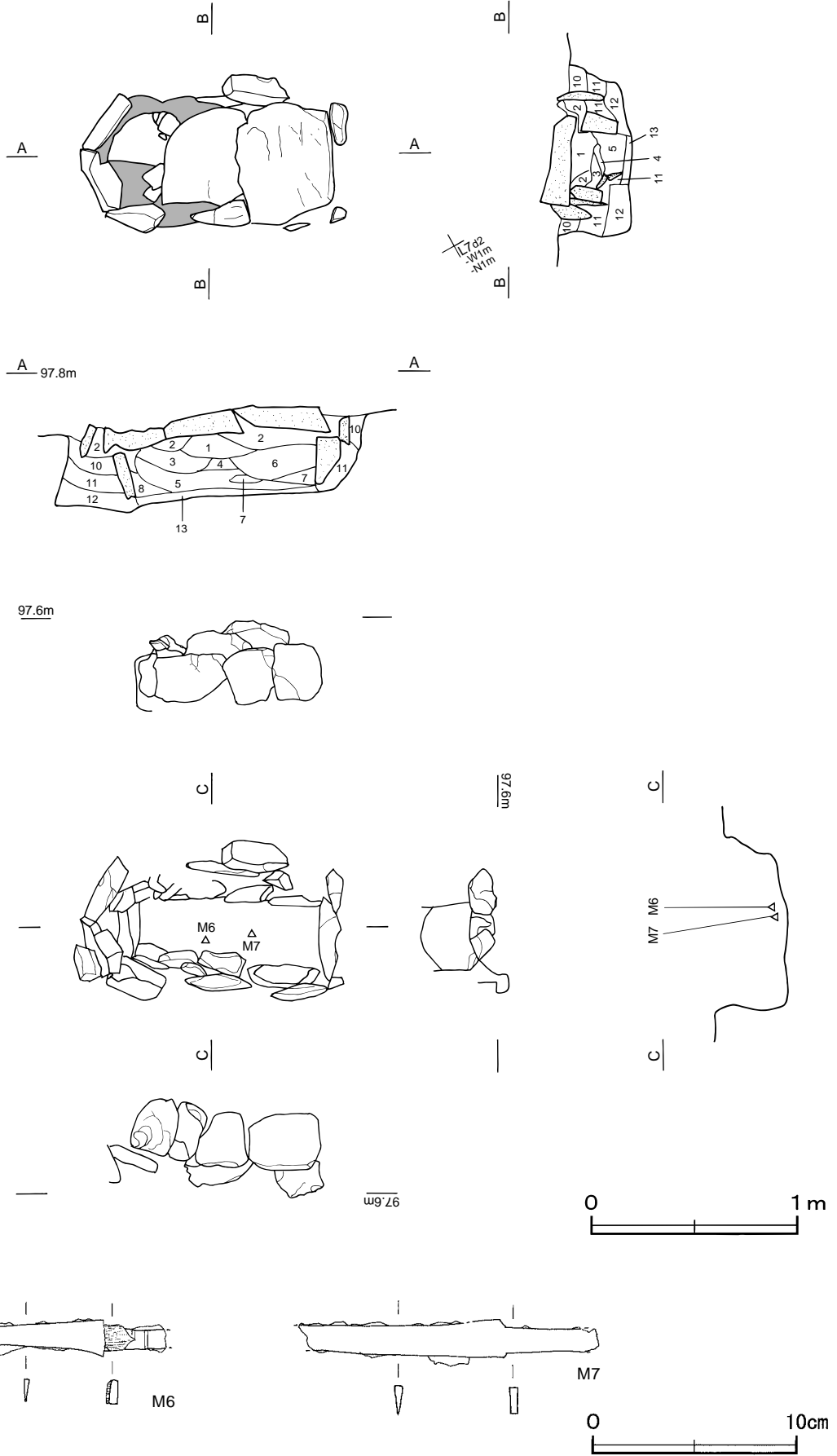
第1号石棺 (第50図)

位置 調査区中央部L7c1区、標高97mの丘陵西斜面部に位置している。

確認状況 第8号墳の北側に位置し、墳丘や周溝はみられない。遺構確認の際に蓋石が確認された。

規模と形状 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.93m、幅0.21~0.29mの長方形で、主軸方向はN-63°-Wである。

構築状況 長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さは0.4mで長方形に地山を掘り込み、その内部に石棺を構築している。側壁は板状の石を加工して、平坦な面を内側にするように組み合わされて構築されている。北・南側壁



第50图 第1号石棺・出土遺物実測図

は長さ20～35cm程の長方形や方形の石を3・4枚立てて構築し、東・西側壁は40cmほどの1枚の大きな石を使用して構築している。壁の隙間や裏側には、裏込めとして青灰色の粘土が充填されており、頑丈な作りをしている。床面に石は敷かれていない。蓋石は3枚の板状の石を使用しており、長さ40～60cmである。端の部分が加工されており、重なり合うように置かれている。石材は北西から順に、ホルンフェルス、砂岩、花崗岩である。

覆土 13層に分層される。第1～9層は石棺内、第10～13層は裏込めの土層である。いずれもブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

土層解説

1	褐色	ロームブロック多量, 粘土粒子少量	8	極暗褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ロームブロック・粘土粒子中量	9	灰オリーブ色	粘土粒子多量
3	褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	10	黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
4	にぶい黄褐色	ローム粒子多量	11	極暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック少量	12	暗褐色	ロームブロック中量, 粘土粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量	13	暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子多量			

副葬品 刀子2点が中央部の覆土下層から出土している。M6・M7とも鋒は北西方向を向いている。

所見 第8号墳の北西が残存していないため明確ではないが、推定できる第8号墳の周溝より外側に位置している。東側には同じような主軸で第3号石棺が位置していることから、近い時期に構築されたものと考えられる。今回調査された他の古墳の周囲からは石棺は確認されておらず、第8号墳を意識して構築したものと思われる。出土している2点の刀子はいずれも鋒を北西に向けていることから、埋葬された遺体の頭部は北西に向けられていたものと考えられる。時期は、岩瀬地域で石棺や石室が確認されている山ノ入古墳群や松田古墳群、間中古墳群の調査成果から、6世紀後半から7世紀代に構築されたものと考えられる。

第1号石棺出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	刀子	(12.4)	1.8	0.4	(12.3)	鉄	両関 茎に木質付着	石棺内下層	
M7	刀子	(14.6)	1.9	0.4	(20.4)	鉄	両関 茎に木質付着	石棺内下層	

第2号石棺 (第51図)

位置 調査区中央部L7g5区、標高100mの第8号墳周溝内に位置する。

確認状況 第8号墳の周溝南東部で、覆土中から蓋石が確認された。

規模と形状 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.78m、幅0.22mの長方形で、主軸方向はN-23°-Eである。

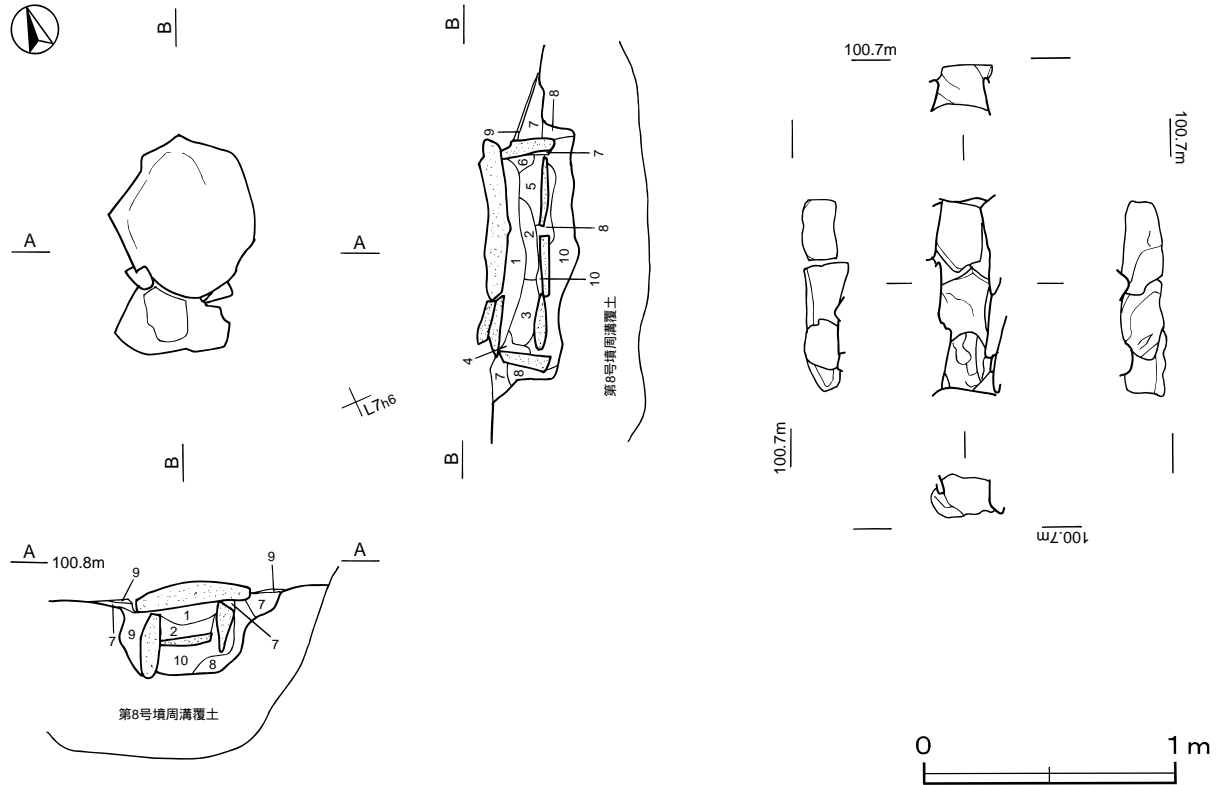
構築状況 長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ0.5mの不定形に第8号墳の周溝覆土を掘り込み、その内部に石棺を構築している。床面には長さ25～30cmの板状の石が3枚敷かれている。側壁は板状の石を加工して、平坦な面を内側にするように立てて並べられている。北・南側壁は長さ30cmの石を立てて構築しており、東・西側壁は長さ25～40cmの長方形の石を3枚立てて構築している。壁の隙間の一部には青灰色の粘土を裏込めとして使用している。長さ45cm・65cmの2枚の板状の石をわずかに重なるように置いて蓋としている。石材は花崗岩である。

覆土 10層に分層される。第1～6層は石棺内、第7～10層は裏込めの土層である。ブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|--------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量, 砂粒少量, 粘土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼バミス少量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子少量 | 10 暗褐色 | 鹿沼バミス中量, ロームブロック少量 |

所見 時期は、第8号墳の周溝の覆土中から確認されていることから、第8号墳の構築時期より若干時期は新しく、6世紀後半と考えられる。



第51図 第2号石棺実測図

第3号石棺 (第52・53図)

位置 調査区中央部L7c1区, 標高97mの丘陵西斜面部に位置する。

確認状況 第8号墳の北側に位置し、墳丘や周溝はみられない。遺構確認の際に蓋石が確認された。

規模と形状 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.9m, 幅0.18~0.25mの長方形で、主軸方向はN-72°-Wである。

構築状況 長軸約1.6m, 短軸約1.1m, 深さ0.5mで長方形に地山を掘り込み、この内部に石棺を構築している。側壁は板状の石を加工し、平坦面を内側にして1列に並ぶように構築されている。北・南側壁は長さ25~30cm程の長方形の揃った石を5枚重ならないように立てて構築し、東・西側壁は長さ30cm・50cmの1枚の大きな石を使用して構築している。壁の隙間や裏側には、裏込めとして青灰色の粘土が充填されており、頑丈な作りである。床面に石は敷かれていない。長さ24~60cmの板状の石を3枚使用し、蓋としている。石材は北西のものが玄武岩で、あとの2枚は花崗岩である。

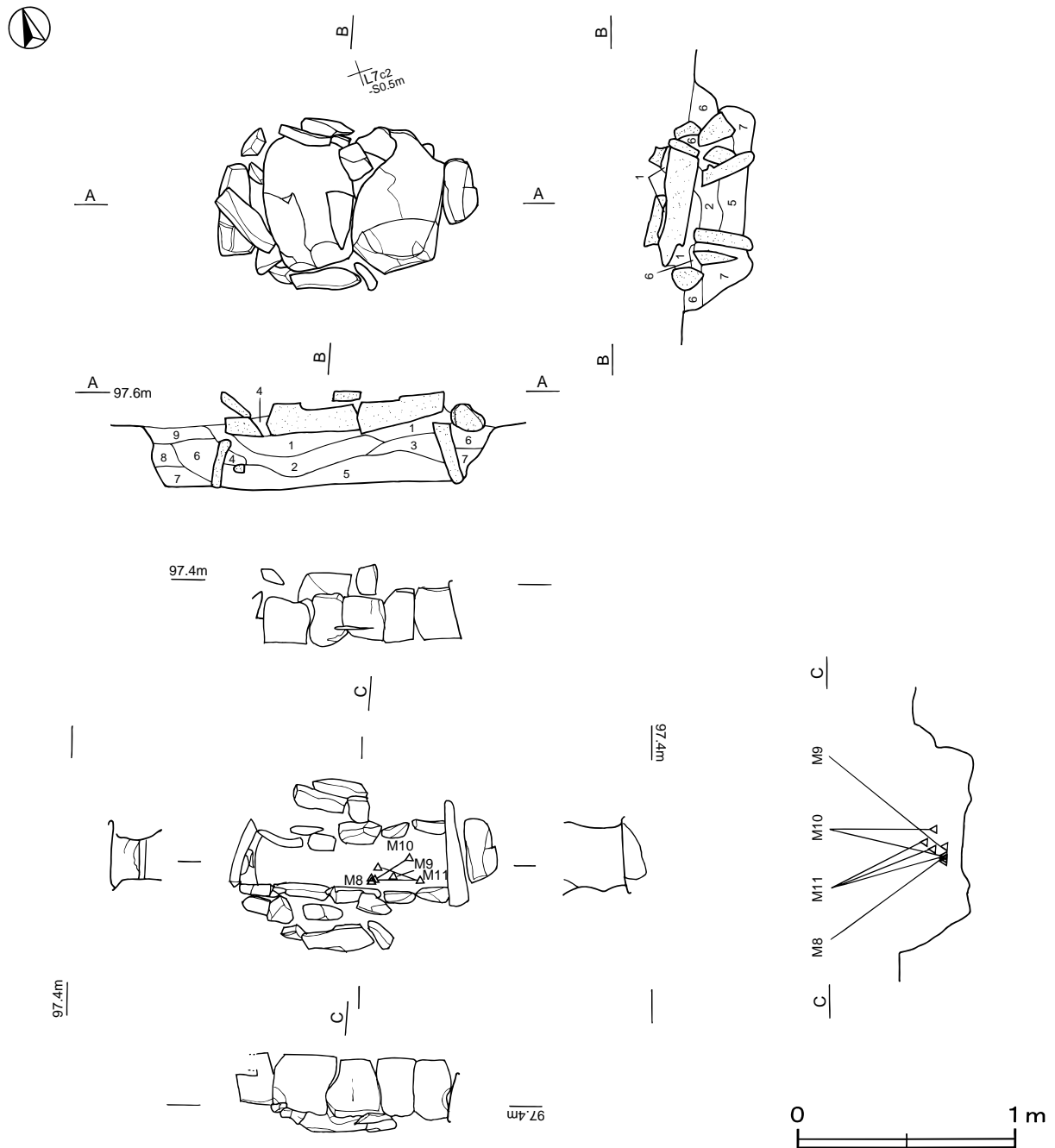
覆土 9層に分層される。第1~5層は石棺内, 第6~9層は裏込めの土層である。ブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

土層解説

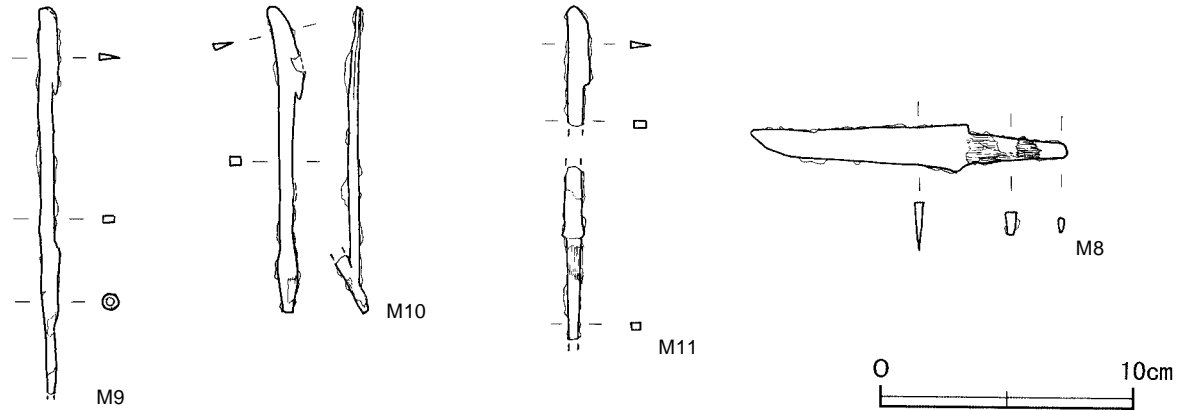
- | | | | |
|----------|-----------------------------|--------|-------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子少量, ロームブロック微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量, 粘土粒子微量 |
| 4 オリーブ灰色 | 粘土粒子多量, ローム粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| | | 9 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量 |

副葬品 東部の覆土下層からM8～M11がまとまって出土している。M8は刀子で、鋒を西に向けて出土している。またM9～M11の鉄鏃も同じように鋒を西に向けている。

所見 第8号墳の北西が残存していないため明確ではないが、推定できる第8号墳の周溝より外側に位置し、西側には第1号石棺が並んでいる。第1号石棺と同じように第8号墳を意識して構築したものと思われる。出土している鉄鏃は形状から5世紀後葉から6世紀前半のものである。時期は、岩瀬地域の石棺の調査成果から、6世紀後半から7世紀代と考えられ、出土している鉄鏃は伝世したものと想定できる。



第52図 第3号石棺実測図



第53図 第3号石棺出土遺物実測図

第3号石棺出土遺物観察表 (第52・53図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 8	刀子	12.6	1.9	0.5	16.5	鉄	両関 茎に木質付着	石棺内下層	P L 21
M 9	鐵	(15.2)	0.8	0.3	(8.4)	鉄	長頸鐵群 鐵身部片刃形 鐵身関部に逆刺 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21
M10	鐵	(13.5)	1.0	0.4	(9.0)	鉄	長頸鐵群 鐵身部片刃形 鐵身関部に逆刺 台形関 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21
M11	鐵	(11.5)	0.8	0.35	(7.3)	鉄	1個体 長頸鐵群 鐵身部片刃形 台形関 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21

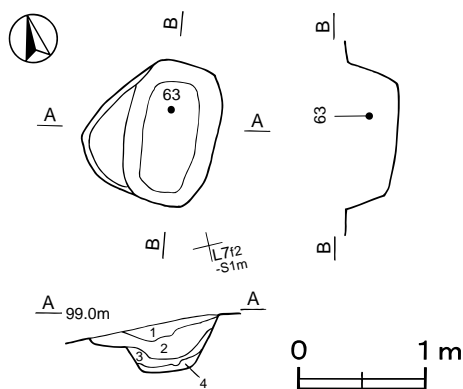
表7 石棺一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古・新)
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)			
1	L 7 c1	N - 63° - W	長方形	0.93 × 0.29	28	人為	刀子	
2	L 7 g5	N - 23° - E	長方形	0.78 × 0.22	12	人為		TM 8 本跡 周構内
3	L 7 c1	N - 72° - W	長方形	0.90 × 0.25	21	人為	刀子 鉄鐵	

(3) 墓坑

第1号墓坑 (第54・55図)

位置 調査区中央部のL 7 f2区, 標高99mの丘陵西斜面部に位置している。



第54図 第1号墓坑実測図

規模と形状 長径1.14m, 短径1.04mの長楕円形で, 長径方向はN-16°-Eである。深さ51cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

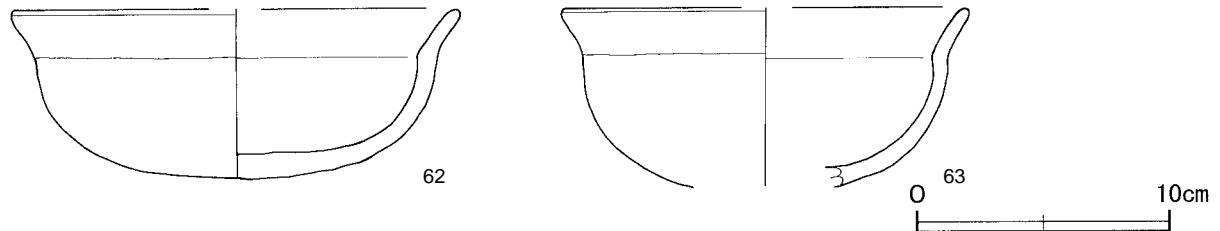
覆土 4層に分層される。ロームブロックが含まれており, 古墳の周溝内埋葬施設と堆積状況が似ている埋められた土層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量
- 4 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

遺物出土状況 土師器2点(坏), 土師器片4点(坏)が出土しているほか, 埋土中に混入したと思われる弥生土器片4点も出土している。

所見 時期は, 出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第55図 第1号墓坑出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表 (第55図)

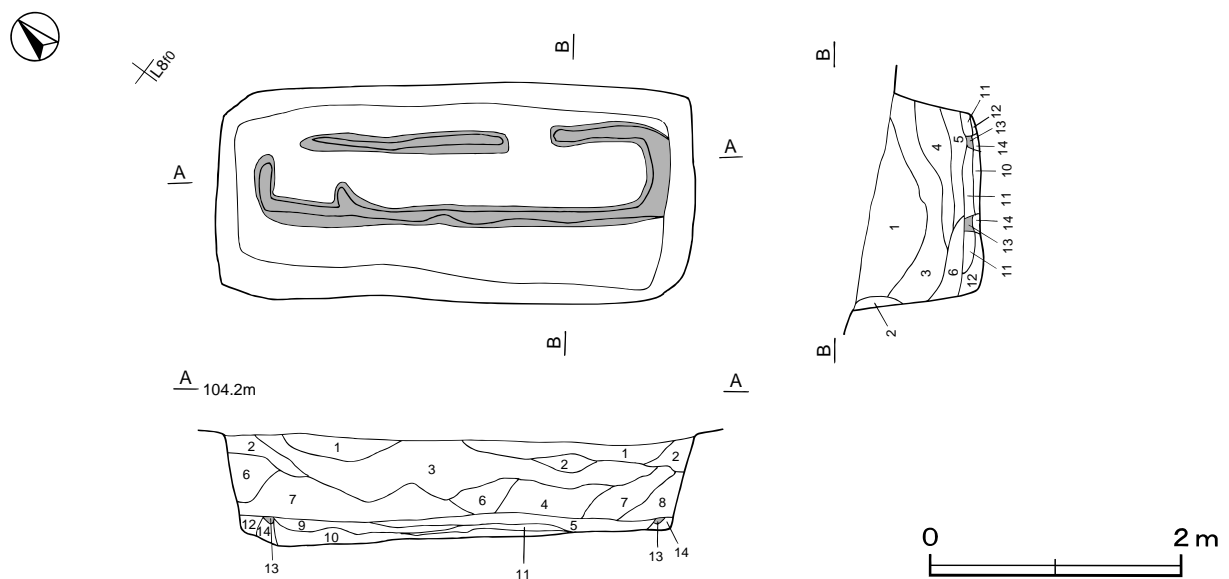
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
62	土師器	坏	[17.4]	6.7	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部・内外面横ナデ 体部内面ナデ	覆土中	50%
63	土師器	坏	[16.0]	(7.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部・内外面横ナデ 体部外面へラ削り後ナデ 内面ナデ	北部覆土中層	30%

第2号墓坑 (第56図)

位置 調査区中央部のL 8 f0区, 標高104mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 掘り方は, 長軸3.81m, 短軸1.72mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-39°-Wである。深さ98cmで, 底面は平坦である。第7号墳の墳丘主体部にみられるような青灰色の粘土がみられる。長軸約3.0m, 短軸約0.4mの長方形を囲むように粘土が残存しており, 木棺を固定していたものと思われる。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 14層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況や, 古墳の主体部と類似した堆積状況を示している。



第56図 第2号墓坑実測図

土層解説

- | | | | |
|-----------|--------------------|----------|--------------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 8 暗 褐 色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 2 極 暗 褐 色 | 鹿沼パミス少量, ロームブロック微量 | 9 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 10 褐 色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 |
| 4 暗 褐 色 | 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量 | 11 暗 褐 色 | ロームブロック少量 |
| 5 極 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 | 12 褐 色 | ローム粒子多量 |
| 6 褐 色 | 鹿沼パミス多量, ロームブロック少量 | 13 褐 灰 色 | 粘土粒子多量 |
| 7 暗 褐 色 | 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量 | 14 にぶい褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 埋土中に混入したと思われる弥生土器片32点が出土している。

所見 平面形や、木棺を固定していた青灰色の粘土が残存している状況が、第6・7号墳の主体部と特徴が類似していることから、埋葬施設と考えられる。時期は、第6・7号墳に近い時期と想定される。墳丘や周溝などの施設が確認できないため、それらを伴わない個別的な埋葬施設と推定される。

第3号墓坑 (第57図)

位置 調査区中央部のL7g9区, 標高104mの丘陵西斜面部に位置している。

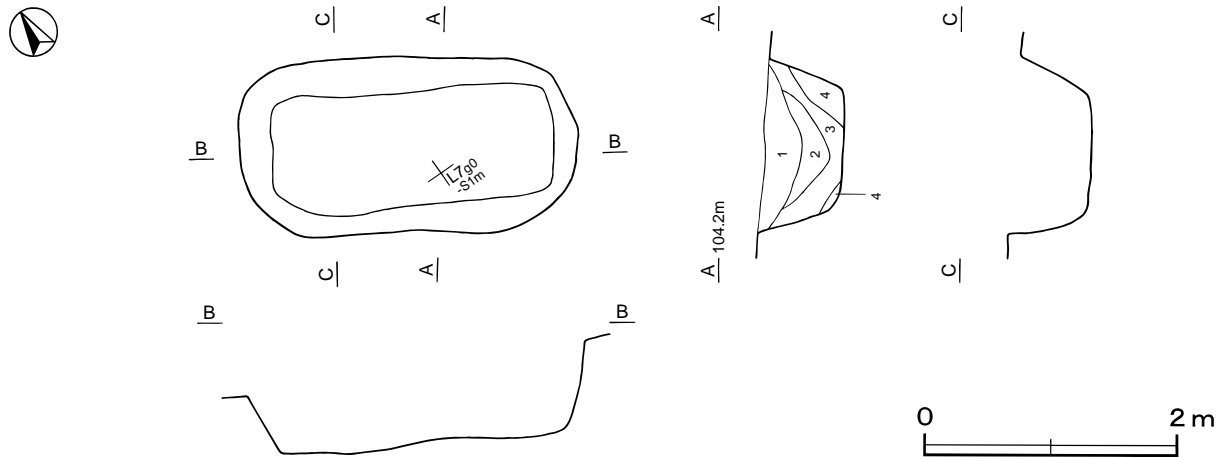
規模と形状 長軸2.68m, 短軸1.40mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-55°-Wである。深さ70cmで, 底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。土層は人為堆積であるが, 崩落したような様相も呈している。

土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗 褐 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 黒 褐 色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 褐 色 | ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量 |

所見 第2号墓坑より小形で, 床面に粘土などはみられない。時期は, 平面形が他の墓坑や周溝内埋葬施設に類似していることから, 古墳時代の墓坑と考えられる。



第57図 第3号墓坑実測図

表8 墓坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		覆土	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古 新)
				長軸(径) × 短軸(径) (m)	深さ (cm)					
1	L 7 f2	N - 16° - E	長楕円形	1.14 × 1.04	51	外傾	平坦	人為	土師器(坏)	
2	L 8 f0	N - 39° - W	隅丸長方形	3.81 × 1.72	98	外傾	平坦	人為		
3	L 7 g9	N - 55° - W	隅丸長方形	2.68 × 1.40	70	外傾	平坦	人為		

5 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡18軒、掘立柱建物跡5棟、土坑1基が確認されている。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第11号住居跡（第58～60図）

位置 調査区東部のL 0 a2区、標高86mの傾斜地に位置している。

重複関係 第29・47号土坑を掘り込み、第14号住居、第8・9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.48m、短軸3.38mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は64～82cmで、直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は西壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅149cmである。第7～9・12層は竈構築土で、袖部は掘り残した地山面を基部とし、第7・8・12層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を25cmほど掘りくぼめて使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に46cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。第7～9・12層は天井部の一部で、内面は火を受け赤変硬化している。

竈土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	7 褐色	ローム粒子・粘土粒子中量・砂粒微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	8 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒少量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい褐色	粘土粒子中量、砂粒少量、ローム粒子微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	10 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量
5 褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	11 褐色	ローム粒子中量
6 にぶい褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量	12 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、砂粒微量
		13 にぶい赤褐色	焼土粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子微量

ピット 6か所。P1～P4・P6は深さ5～14cmと浅く、不規則に位置していることから性格は不明である。

P5は深さ12cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

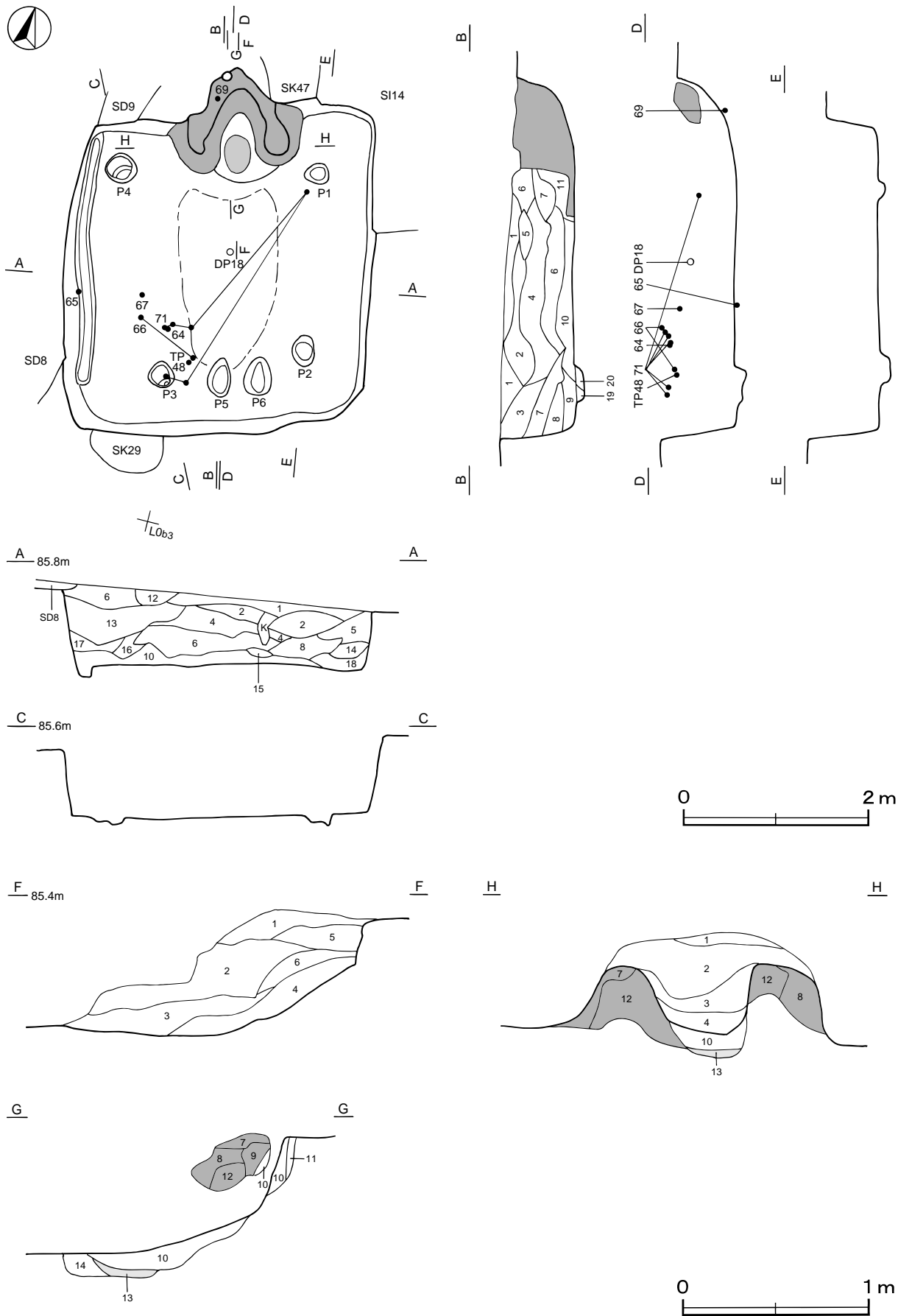
覆土 20層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

土層解説

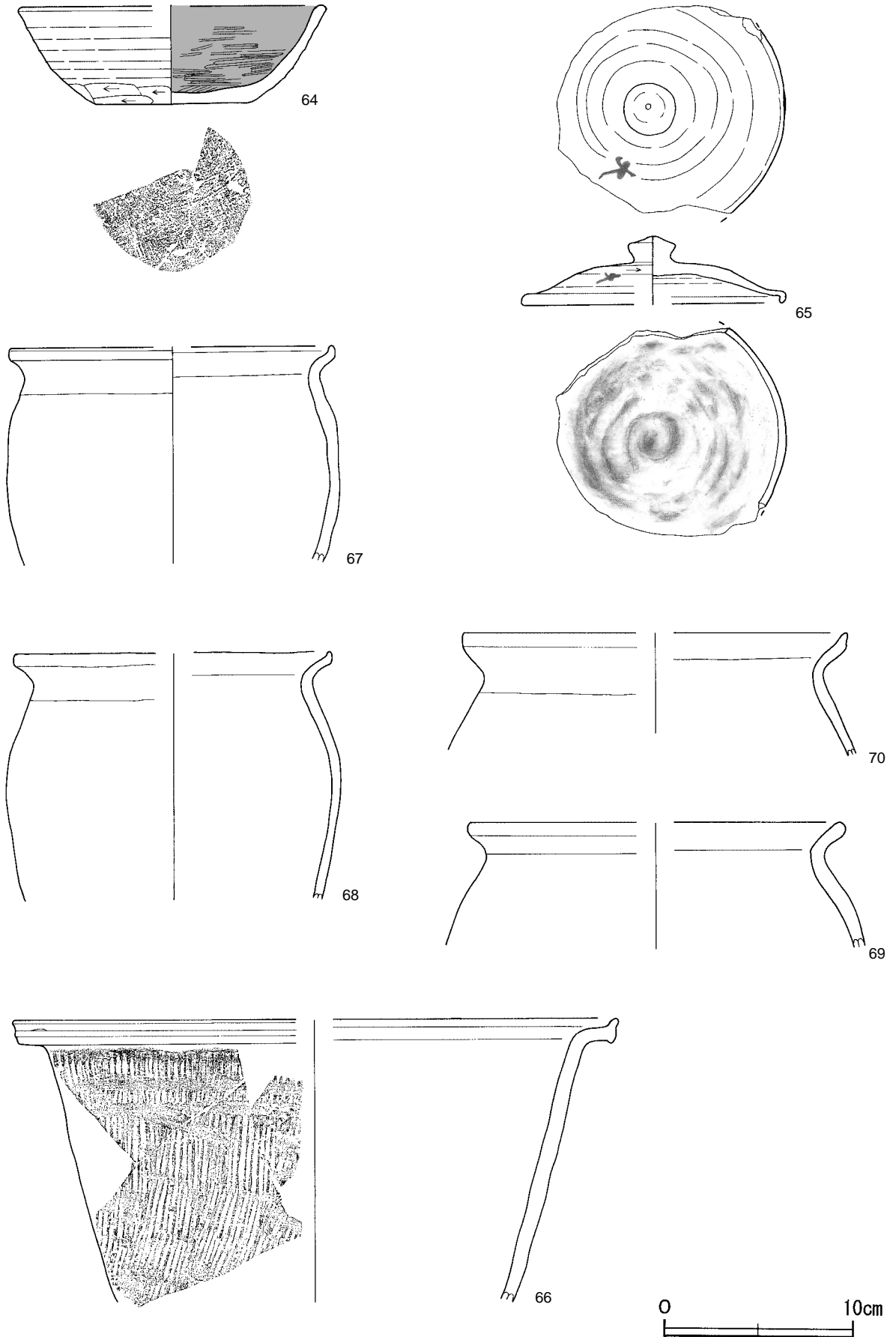
1 暗褐色	ローム粒子微量	11 にぶい褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量	13 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	14 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
5 褐色	ローム粒子微量	15 暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子微量	16 黒褐色	ロームブロック微量
7 褐色	焼土ブロック多量	17 灰褐色	ロームブロック微量
8 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量	18 黒褐色	ロームブロック少量
9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
10 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器7点（坏1，鉢1，甕5），土師器片116点（坏25，甕2，甌89），須恵器1点（蓋），須恵器片60点（坏39，高盤1，蓋8，甕12），土製品1点（羽口），石器1点（砥石）が出土している。土器片は、南部の覆土上層から集中して出土している。64・66・67は、南部の覆土上層から、65は西壁際の下層から縦位で出土している。DP18は中央部の覆土中層から出土している。

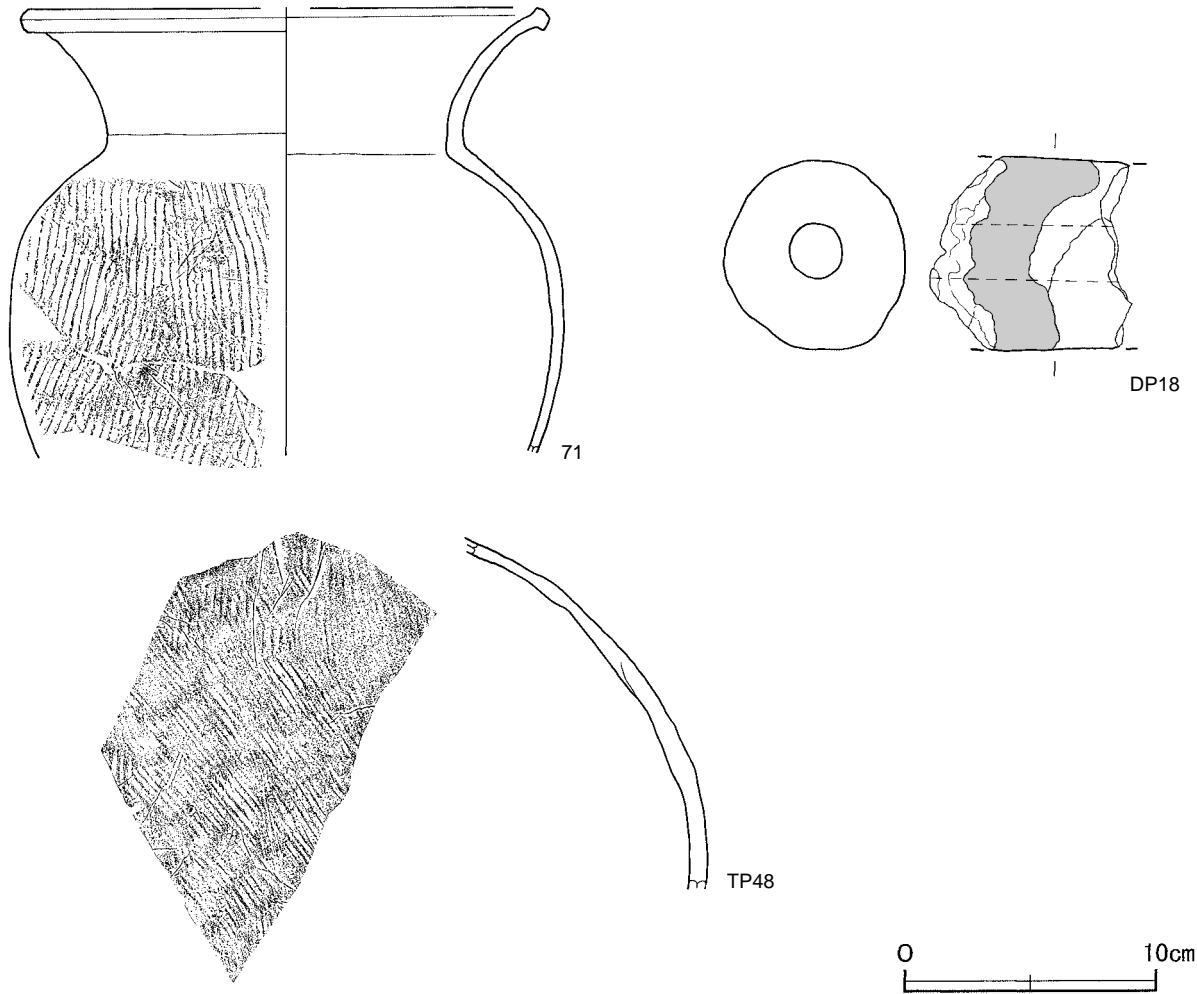
所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第58图 第11号住居跡実測图



第59图 第11号住居跡出土遺物実測图(1)



第60図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表(第59・60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	土師器	坏	[15.9]	5.2	7.9	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 体部外面ロクロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り後ナデ	南部上層	30%
65	須恵器	蓋	[14.0]	3.6	-	長石・石英・礫	灰	普通	内面ロクロナデ 外面上部回転ヘラ削り 下部ロクロナデ	西部下層	外面墨書「大」
66	須恵器	鉢	[32.0]	(14.9)	-	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	体部外面平行叩き	南部上層	20%
67	土師器	甗	[17.0]	(11.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	南部上層	20% 火熱痕
68	土師器	甗	[16.7]	(13.0)	-	長石・石英・金雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ナデ	竈覆土中	10%
69	土師器	甗	[19.6]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	竈下層	10%
70	土師器	甗	[20.3]	(6.5)	-	長石・石英・金雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ナデ	覆土中	5%
71	須恵器	甗	[20.3]	(17.8)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面平行叩き	南部上層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP48	須恵器	甗	-	(14.0)	-	長石・石英・礫	暗赤褐	普通	斜位の平行叩き	南部上層	

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP18	羽口	(8.0)	(7.5)	2.2	(370.0)	土(長石・石英・雲母)	側面に還元焰の痕跡	中央部中層	20%

第12号住居跡 (第61・62図)

位置 調査区東部のK 0 f3区, 標高94mの斜面部に位置している。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが, 確認された範囲は長軸4.06m, 短軸3.80mである。平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-17°-Wである。壁高は72cmで, 直立している。

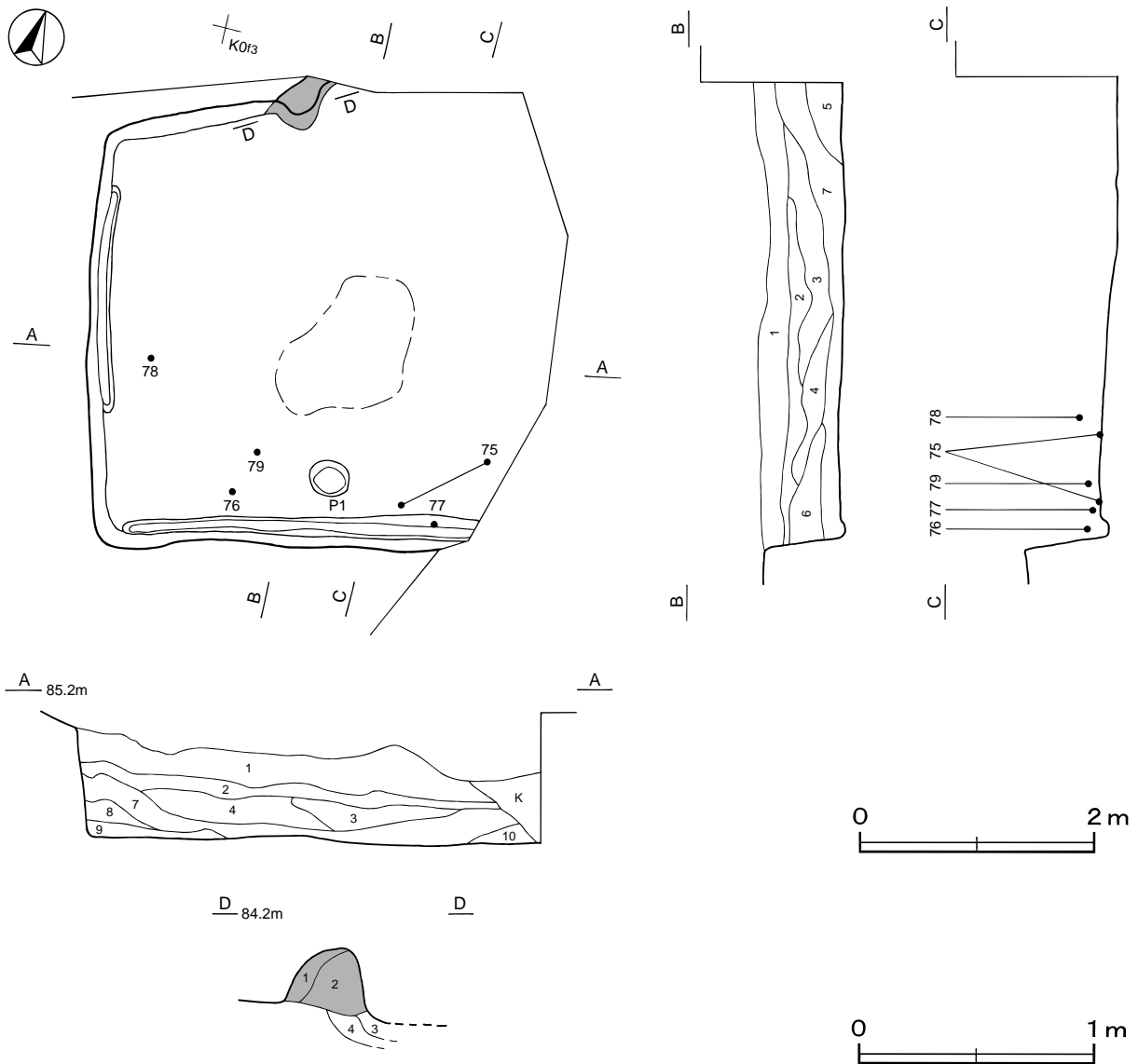
床 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝は西壁と南壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。第1~4層は竈の構築土で, 左袖部の一部が残存しており, 第1・2層を地山の上に積み重ねて構築している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量 | | |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | | |

ピット 深さ36cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットである。



第61図 第12号住居跡実測図

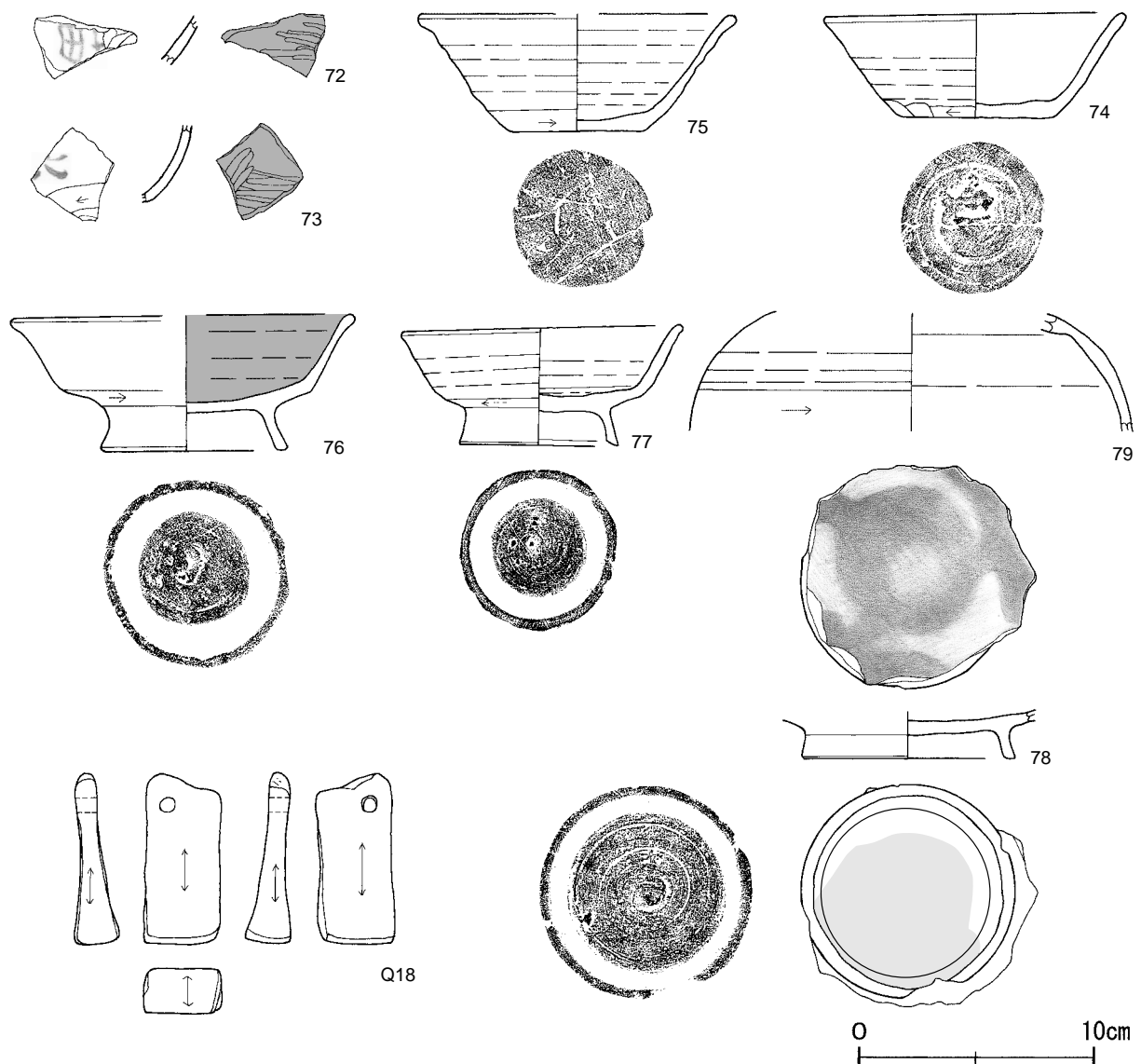
覆土 10層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量, 鹿沼バミス微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 10 極暗赤褐色 | 焼土粒子・砂粒中量, ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |
| 6 褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器 4点 (坏3, 高台付坏1), 土師器片194点 (坏23, 甕171), 須恵器 4点 (坏, 高台付坏, 盤, 瓶), 須恵器片151点 (坏103, 高台付坏13, 蓋14, 高盤4, 甕17), 鉄滓3点が出土している。また, 混入したと思われる弥生土器片1点が出土している。土器片は, 南部から多く出土している。76・77は南部の覆土下層から逆位で, 75・79は南部の覆土下層から床面にかけて, 78は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第62図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	土師器	坏	-	(2.1)	-	石英・雲母・赤色 炭化粒子	橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土下層	外面墨書「田」カ P L 20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
73	土師器	坏	-	(3.2)	-	長石・石英・金雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ 体部下端回転ヘラ削り	覆土中	外面墨書「大」カ P L 20
74	須恵器	坏	12.6	4.5	6.4	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面口クロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中	80%
75	須恵器	坏	[13.2]	5.0	5.6	長石・石英・雲母	灰	普通	内・外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り	南部下層	60%
76	土師器	高台付坏	[14.3]	5.7	7.5	長石・石英・金雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け後ナデ	南部下層	65%
77	須恵器	高台付坏	11.7	5.2	6.7	長石・石英・雲母・礫	暗灰黄	普通	内外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 高台部貼り付け後ナデ	南部下層	100% P L 18
78	須恵器	盤	-	(2.0)	8.9	長石・石英・雲母	青灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	西部下層	10% 底部内面墨痕 底部外面朱墨痕 硯転用力
79	須恵器	瓶	-	(5.0)	-	長石・雲母・黒色粒子	灰黄	普通	体部外面口クロナデ	南部下層	5% 自然釉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	砥石	7.2	3.2	1.9	232.0	凝灰岩	砥面5面 下げ砥石	覆土下層	P L 21

第13号住居跡（第63図）

位置 東部のL 0 b3区、標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第16号住居跡の上に構築し、第15・22号住居跡を掘り込んでおり、第23・24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.32m、短軸3.10mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は73～88cmで、直立している。

床 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝がほぼ全周している。

竈 東壁中央部に付設されている。煙道部と左袖部の一部が削平により欠損しており、焚口部から煙道部まで72cm、袖部幅80cmだけが確認されている。袖部は床面と同じ高さの上に第3・4層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を4cmほど楕円形状に掘りくぼんでいるが、赤変した部分は認められなかった。煙道部は火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|------|---------------------------------|---|-----|---------------------------------|
| 1 | 極暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量 | 4 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ18～32cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、西壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

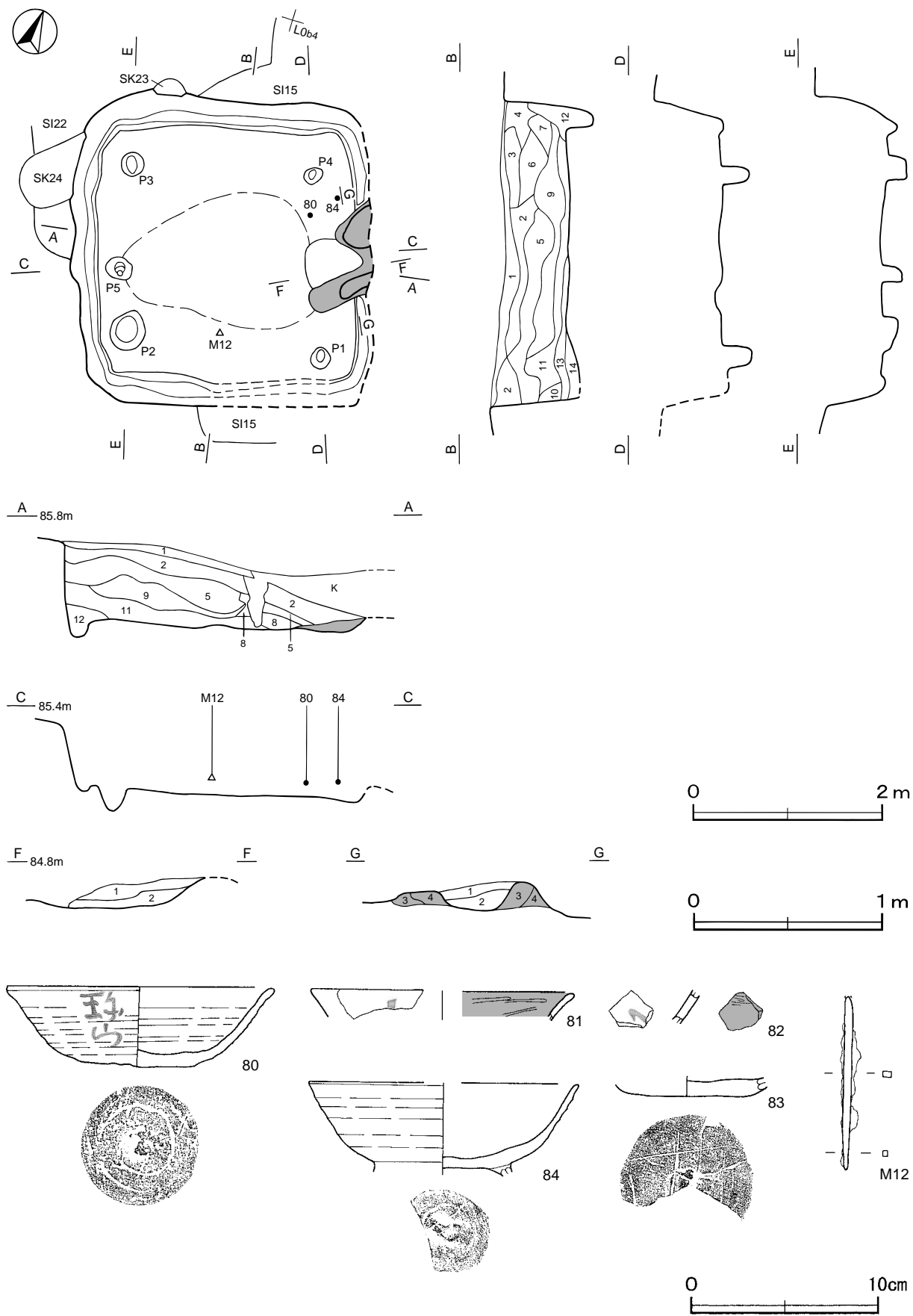
覆土 14層に分層される。第1～4層は、周囲から土が流入した様相を示している自然堆積で、第5～14層は不規則な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------|----|-------|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 | 灰褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 9 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 | 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 | 灰褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | 12 | にぶい褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 13 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 14 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器4点（坏3，高台付坏1），土師器片432点（坏146，高台付坏3，甕283），須恵器1点（坏），須恵器片85点（坏37，高台付坏1，蓋10，甕29，鉢8），土製品1点（土玉），金属製品1点（鏃），鉄滓1点が出土している。80・84は東部の覆土下層，M12は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



第63図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
80	土師器	坏	13.9	4.6	6.1	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	東部下層	85% 外面墨書「珣山」 内外面油煙 P L 18
81	土師器	坏	[13.9]	(1.4)	-	長石・金雲母	にぶい黄橙	普通	内面ヘラミガキ	東部下層	外面墨書「」
82	土師器	坏	-	(1.7)	-	石英・金雲母	灰黄褐	普通	内面ヘラミガキ	東部下層	外面墨書「」
83	須恵器	坏	-	(1.1)	6.9	長石・石英	オリーブ灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	ヘラ記号「x」
84	土師器	高台付坏	[14.2]	4.9	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面ミガキ 底部回転ヘラ切り後ナデ	東部下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	鐵	(9.3)	0.45	0.3	(7.2)	鐵	断面方形	南部下層	

第14号住居跡 (第64・65図)

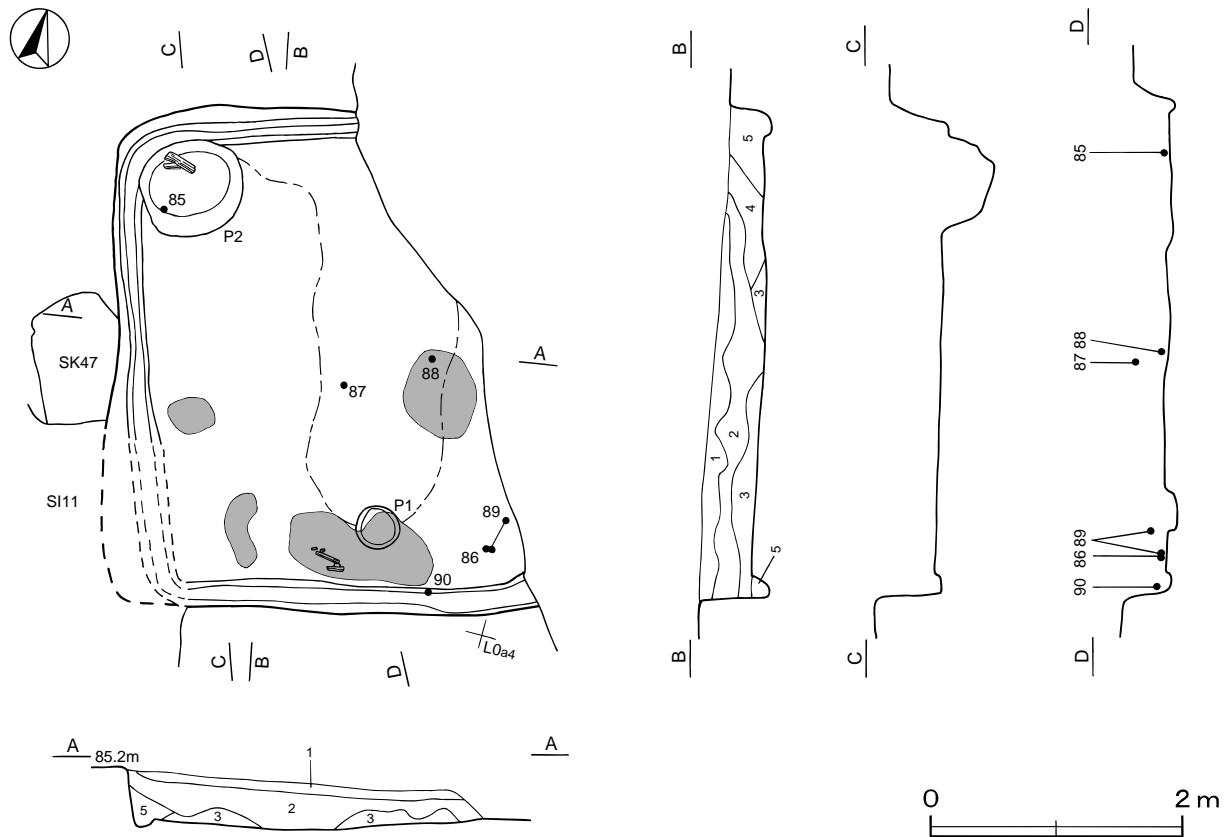
位置 調査区東部のK 0 j3区, 標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第11号住居跡, 第47号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状は明確ではないが, 確認された範囲は, 長軸4.00m, 短軸2.87mで, 主軸方向はN-21°-Wである。平面形は長方形と推定され, 壁高は33~53cmで, 直立している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。床面には炭化材が出土しており, 炭化粒子も散在している。壁溝は残存している壁際で確認されている。

ピット 2か所。P1は深さ10cmで, 南壁際中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考え



第64図 第14号住居跡実測図

られる。P 2は深さ36cmで、コーナー部に位置する貯蔵穴として使われていた可能性がある。

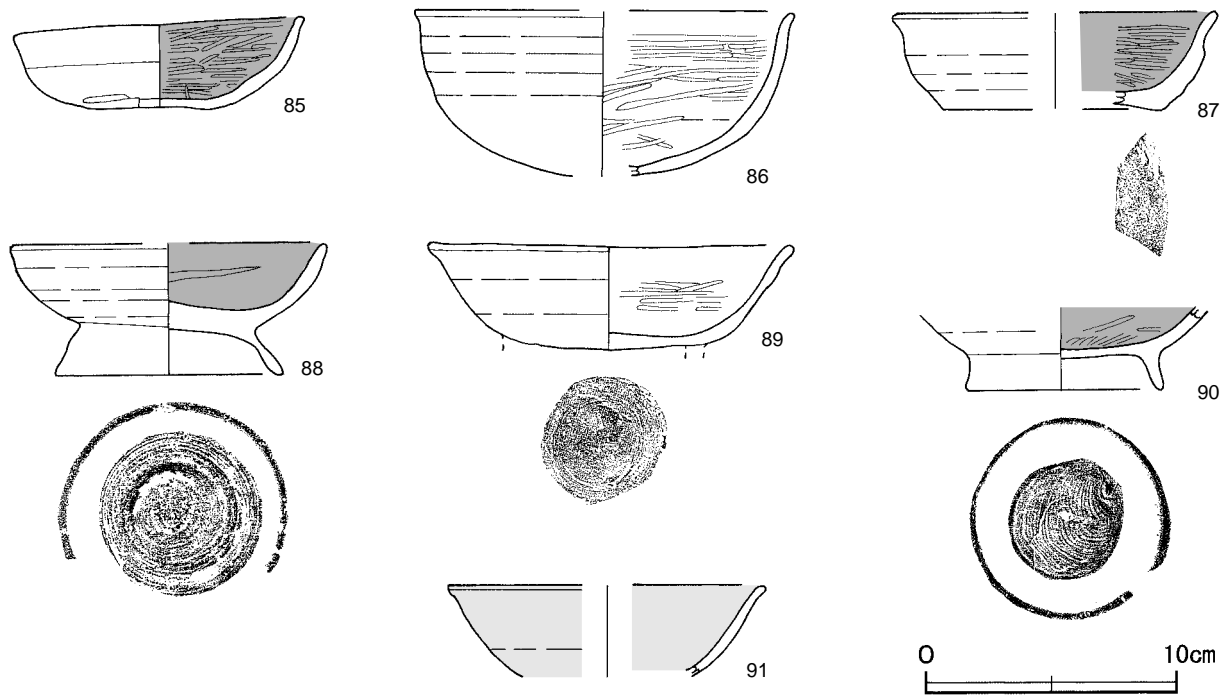
覆土 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化材・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器6点(坏3, 高台付坏3), 土師器片126点(坏56, 高台付坏2, 甕68), 須恵器片25点(坏16, 高台付坏3, 蓋1, 瓶2, 甕3), 緑釉陶器1点(碗)が出土している。86・89・90は南部, 87は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。85は北西部, 88は中央部の覆土下層からそれぞれ逆位で出土している。85~88は外面の一部に火熱痕, 90は外面, 91は内外面にそれぞれ二次焼成の痕跡がみられ, 火や熱を受けていることが認められる。

所見 床面に炭化材や炭化粒子がみられ, 出土している土器にも二次焼成などの火や熱を受けた痕跡が認められることから, 焼失住居と考えられる。時期は, 出土土器から10世紀代と考えられる。



第65図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
85	土師器	坏	11.3	3.7	-	金雲母	にぶい橙	普通	体部内面へラミガキ 口縁部外面横ナデ 体部外面ケズリ後ナデ	北部下層	100% 口縁部火熱痕 PL17
86	土師器	坏	[14.8]	(6.5)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面口クロナデ 体部内面へラミガキ	南部下層	35% 底部火熱痕
87	土師器	坏	[12.6]	3.9	[8.4]	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面へラミガキ 体部外面口クロナデ	中央部下層	10% 口縁部火熱痕
88	土師器	高台付坏	[12.2]	5.2	8.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面口クロナデ 底部回転へラ切り 後高台貼り付け	中央部下層	70% 口縁部火熱痕
89	土師器	高台付坏	14.4	(4.1)	-	長石・石英・金雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面へラミガキ 体部外面口クロナデ	南部下層	70% PL18
90	土師器	高台付坏	-	(3.3)	7.7	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面へラミガキ 体部外面口クロナデ 底部内面放射状へラミガキ 底部回転糸切り後高台貼り付け後ナデ	南部下層	15% 二次焼成
91	緑釉陶器	碗	[12.4]	(3.6)	-	緻密	黄褐	良好	体部外面口クロナデ 内・外面施釉	南部下層	20% 二次焼成

第15号住居跡 (第66・67図)

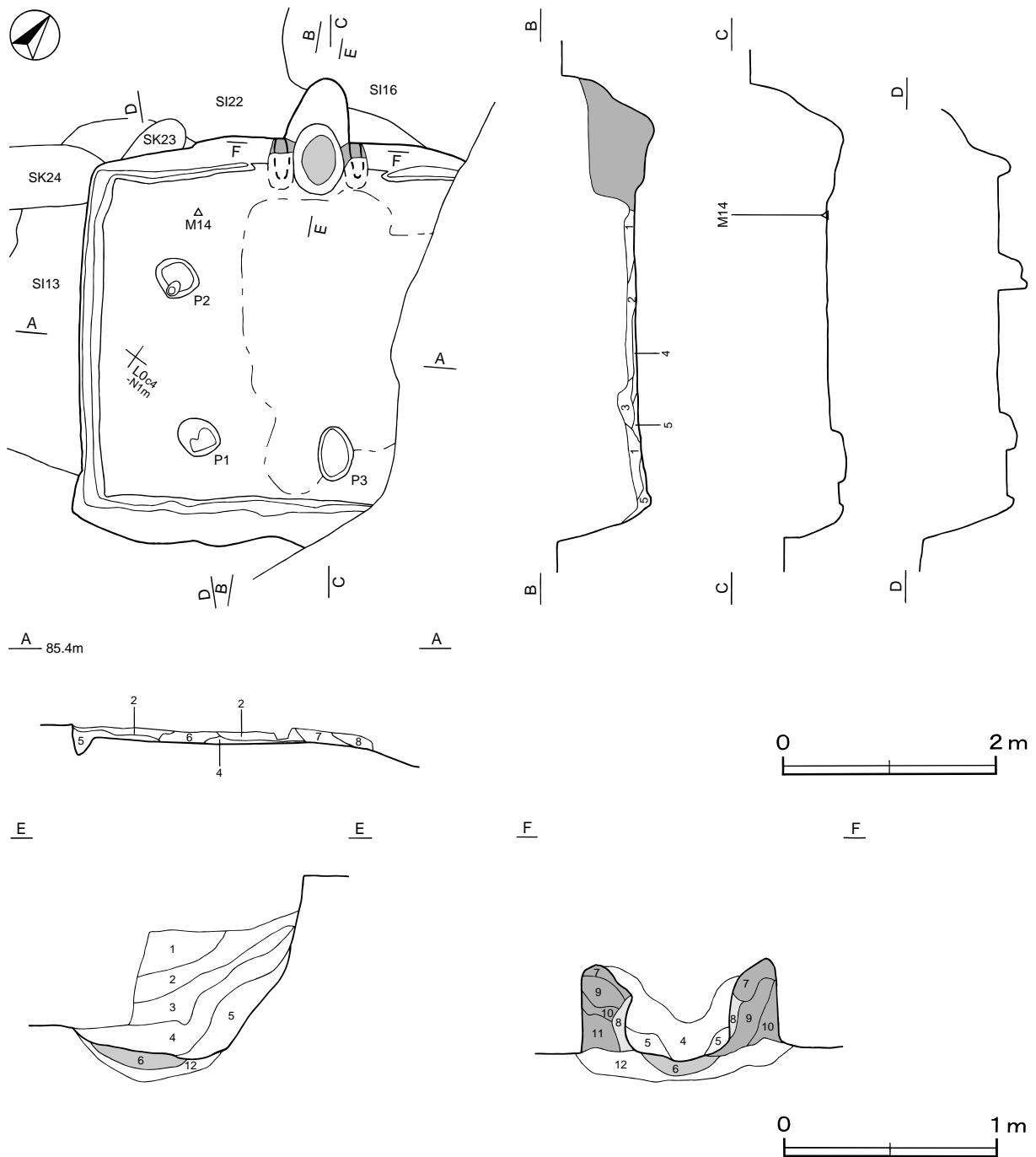
位置 調査区東部のL 0 b4区, 標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第16・22号住居跡を掘り込み, 第13号住居, 第23・24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状は明確ではないが, 確認された範囲は長軸3.52m, 短軸3.37mである。平面形は方形と推定され, 主軸方向はN-36°-Wである。壁高は50~85cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cm, 袖部幅91cmである。第7~11層は竈



第66図 第15号住居跡実測図

構築土で、袖部は床面を13cmほど掘り込み、第12層を基部とし、その上に第7～10層を積み重ねて構築されている。火床部は13cmほど楕円形状に掘りくぼめており、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に55cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------------|---------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量, 粘土粒子・砂粒微量 | 7 灰赤色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子・砂粒少量, ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 砂粒少量, ローム粒子微量 |
| 3 極暗赤褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 灰赤色 | 粘土粒子多量, 砂粒少量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック微量 | 10 灰赤色 | 焼土粒子・粘土粒子少量, 砂粒微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ロームブロック・砂質粘土粒子少量 | 11 暗赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, 粘土粒子微量 | 12 暗赤褐色 | ロームブロック少量, 粘土粒子微量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ6cm・13cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ5cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

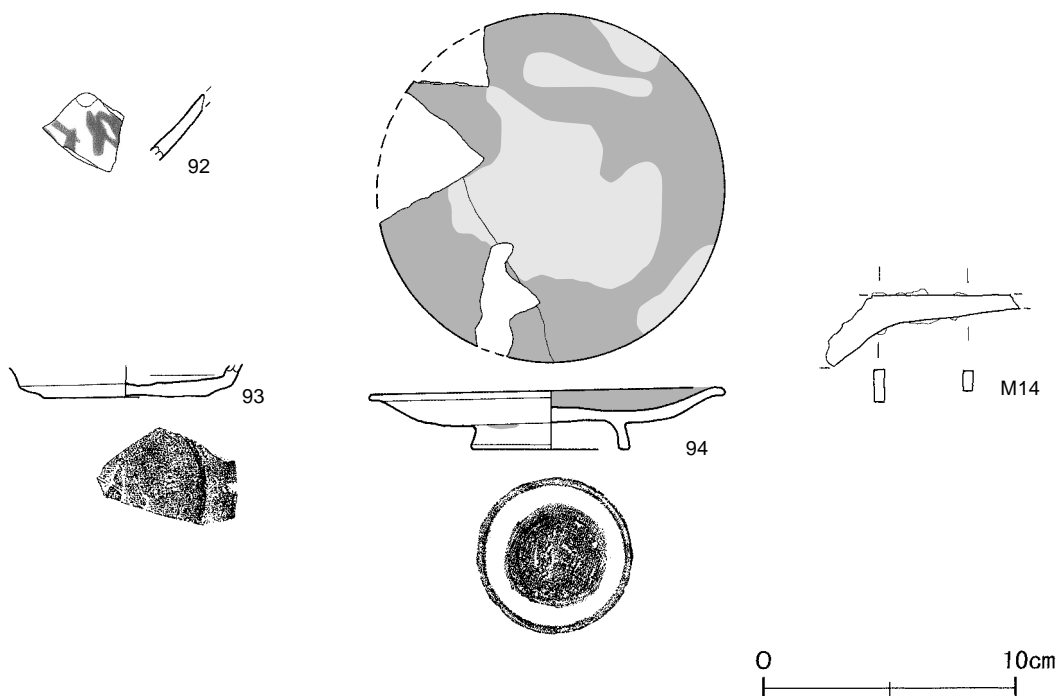
覆土 8層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 灰褐色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器2点(坏, 高台付皿), 土師器片227点(坏61, 高台付坏7, 甕159), 須恵器1点(坏), 須恵器片69点(坏35, 高台付坏1, 高盤1, 蓋6, 瓶3, 甕10, 鉢13), 金属製品1点(刀子)が出土している。92・94は北部覆土中, M14は北部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器や重複関係から9世紀後半と考えられる。



第67図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土師器	坏	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内面ナデ	北部覆土中	5% 外面墨書「」

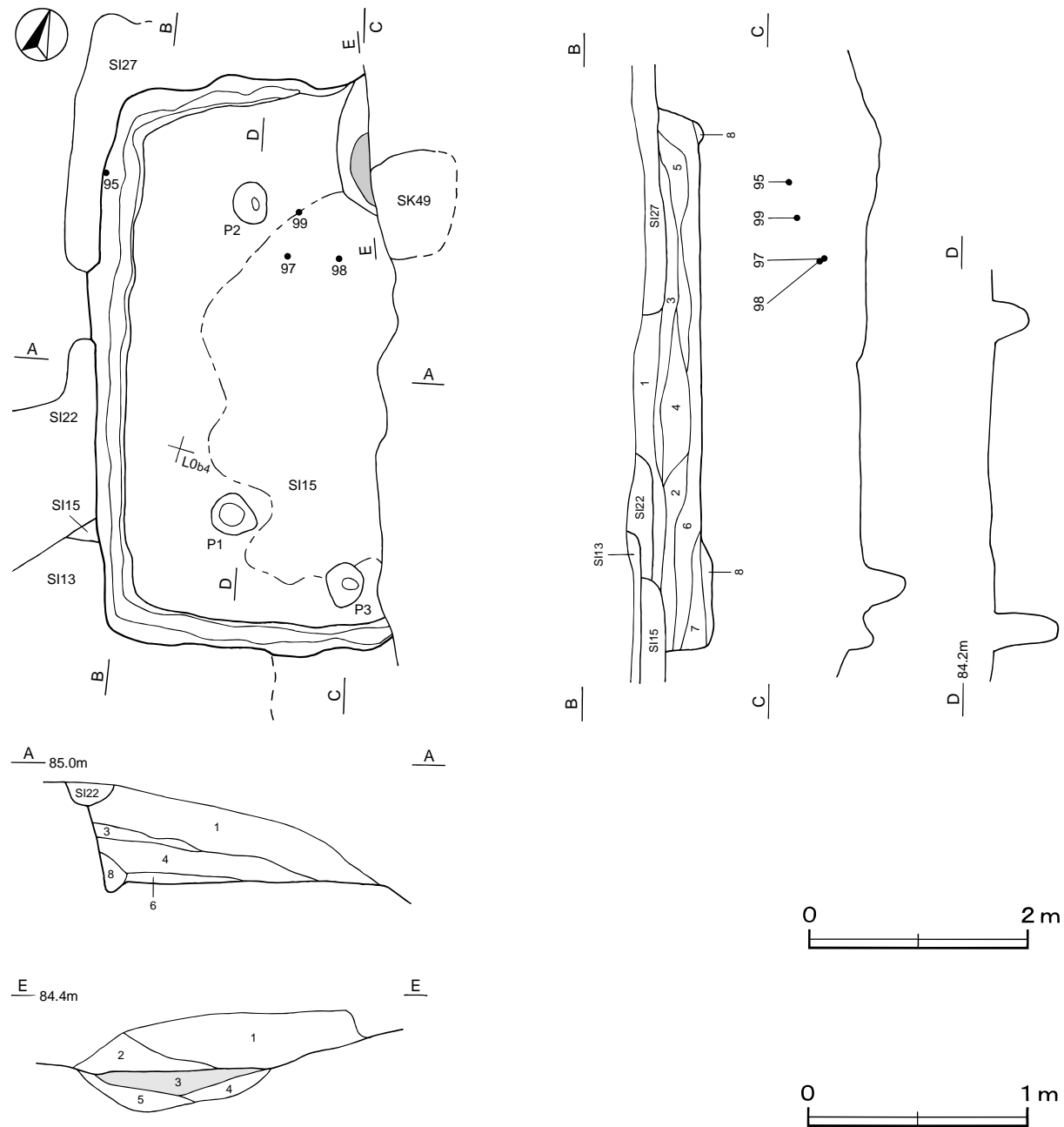
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	須恵器	坏	-	(1.8)	[8.6]	長石・礫	黄灰	普通	体部外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	壙覆土中	10%ヘラ記号「J」
94	土師器	皿	13.8	2.4	6.2	長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北部覆土中	80%内外面朱墨痕 P L 19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M14	刀子	(7.7)	2.9	0.4	(13.5)	鉄	刃部欠損	北部床面	

第16号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区東部のL 0 a3区, 標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第13号住居の下に位置し, 第15・22・27号住居, 第49号土坑に掘り込まれている。



第68図 第16号住居跡実測図

規模と形状 東部が削平により残存していないため規模や形状が明確でないが、確認された範囲は長軸5.24m、短軸2.80mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は50~88cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。確認された範囲は、焚口部から煙道部まで130cmである。火床部は床面を20cmほど掘りくぼめて使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------------|--------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 | 5 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量 | | |

ピット 3か所。P1・P2は深さ33cm・60cmで、規模と配置から支柱穴である。P3は深さ39cmで、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

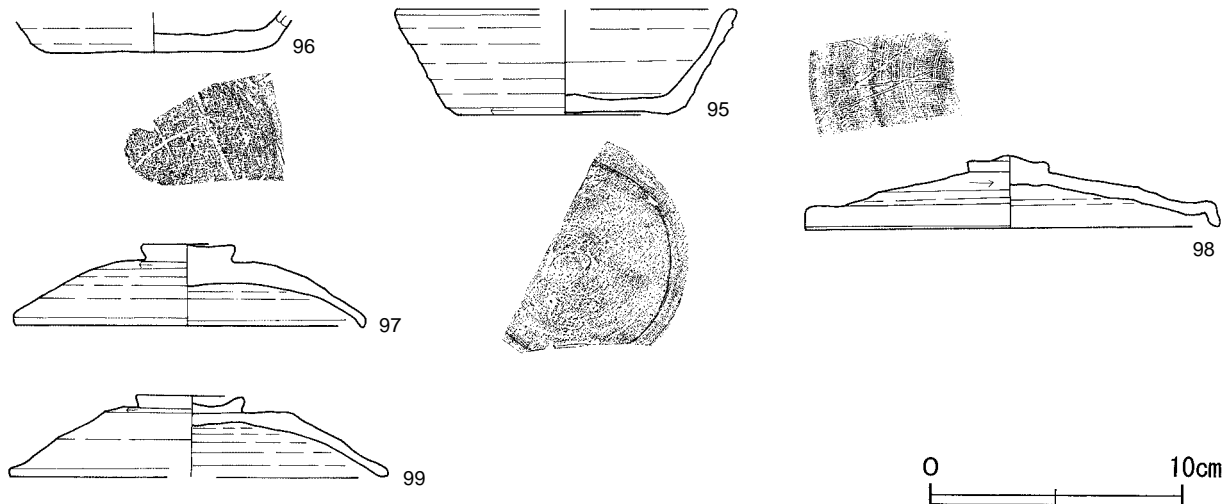
覆土 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片138点(坏24, 高台付坏2, 甕112), 須恵器5点(坏2, 蓋3), 須恵器片62点(坏22, 高台付坏1, 蓋10, 甕19, 甌10), 鉄製品1点(不明)が出土している。遺物は、特に北部から中央部にかけて出土している。95は北西壁際, 97・98・99は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第69図 第16号住居跡出土遺物実測図

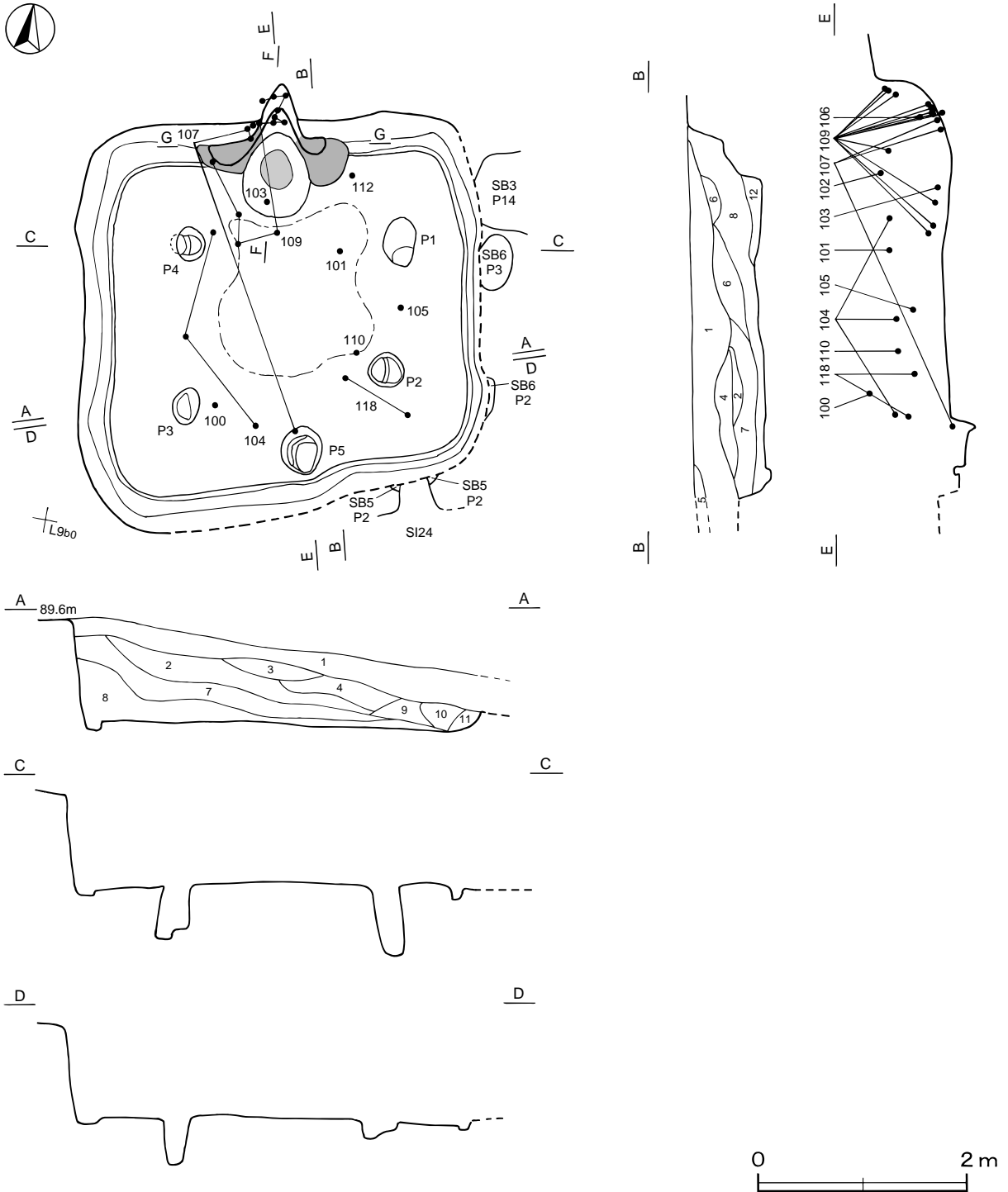
第16号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
95	須恵器	坏	[13.4]	4.2	[9.5]	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	西部上層	25%
96	須恵器	坏	-	(1.6)	[9.7]	石英・赤色粒子・小礫	浅黄	普通	体部外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	10% ヘラ記号「x」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
97	須恵器	蓋	13.8	3.2	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	中央部上層	90%
98	須恵器	蓋	16.3	2.9	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデヘラ削り 天井部回転	中央部上層	60% ヘラ記号「x」
99	須恵器	蓋	[15.0]	3.2	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデヘラ削り 天井部回転 つまみ貼り付け	北部上層	50%

第17号住居跡 (第70~73図)

位置 調査区東部のL 9 a0区, 標高89mの傾斜地に位置している。



第70図 第17号住居跡実測図(1)

重複関係 第24号住居跡，第3・5・6号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.95m，短軸3.80mの方形で，主軸方向はN-15°-Wである。壁高は93cmで，直立している。

床 平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝は全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで130cm，袖部幅143cmである。袖部は掘り残した地山面を基部として，第4・6・7層を積み重ねて構築されている。火床面は床面と同じ高さの面を使用し，火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に36cmほど掘り込み，火床面から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	5 暗赤褐色	焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量，炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
3 暗赤褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，粘土粒子・砂粒微量	7 暗褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・砂粒微量
4 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ18～66cmで，規模と配置から支柱穴である。P5は深さ23cmで，南壁際の中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

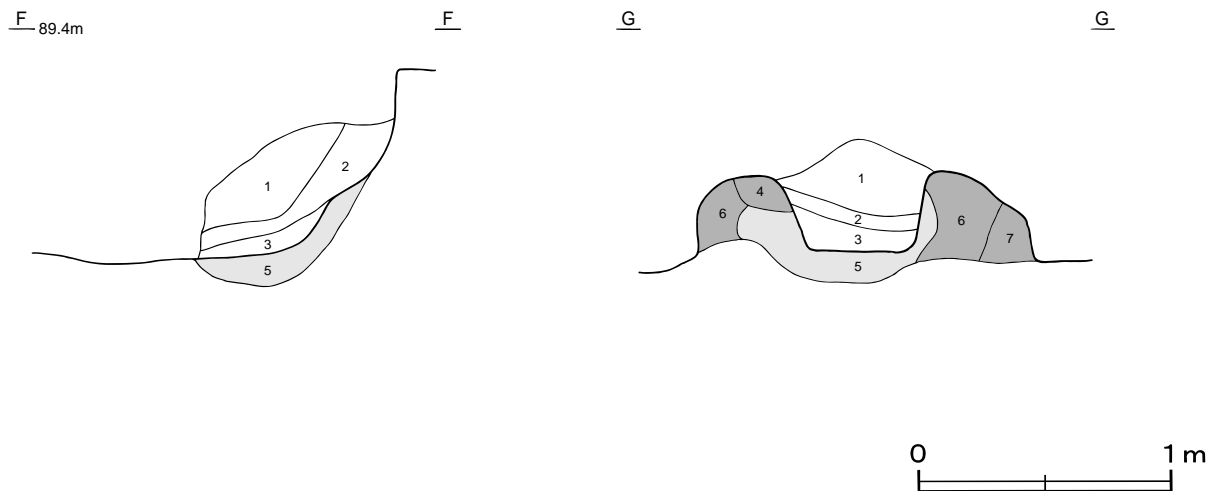
覆土 12層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

土層解説

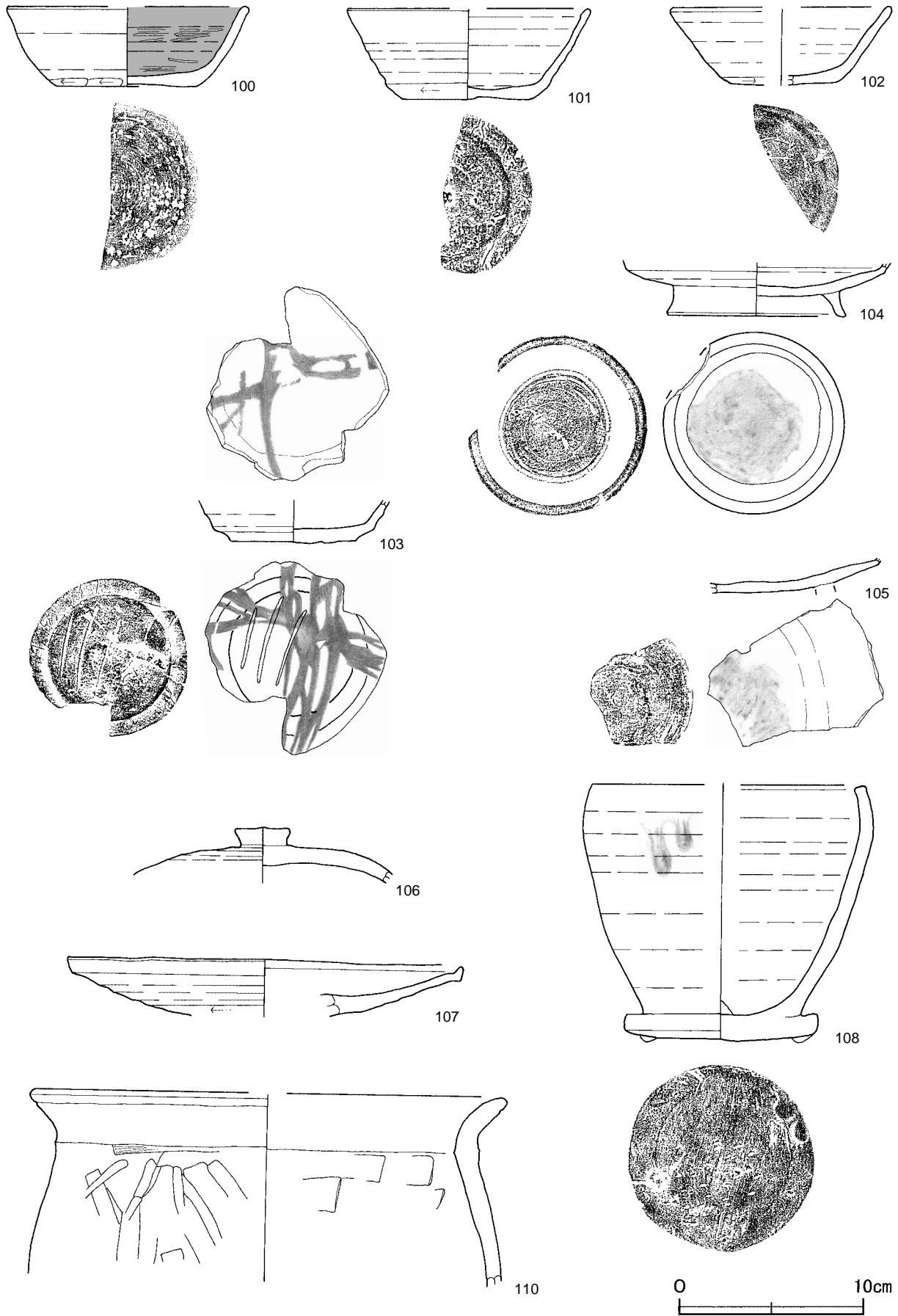
1 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	7 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
2 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス・砂粒微量	8 灰褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
3 褐色	鹿沼パミス少量，ローム粒子微量	9 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
4 褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	10 褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子微量
6 にぶい褐色	鹿沼パミス少量，ローム粒子微量	12 灰褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器3点（坏1，甕2），土師器片201点（坏13，甕188），須恵器8点（坏3，高台付坏2，蓋2，鉢1），須恵器片136点（坏48，高台付坏19，高盤9，蓋44，甕16）が全域に散在した状態で出土している。また，混入した弥生土器片2点（壺）も出土している。100は南部，102は北部のそれぞれ覆土上層，103は竈内の覆土下層から出土している。109は竈の覆土上層から下層と，竈周辺から出土した破片が接合したものである。104は西部，105は東部のそれぞれ覆土上層から出土しており，流れ込みと考えられる。

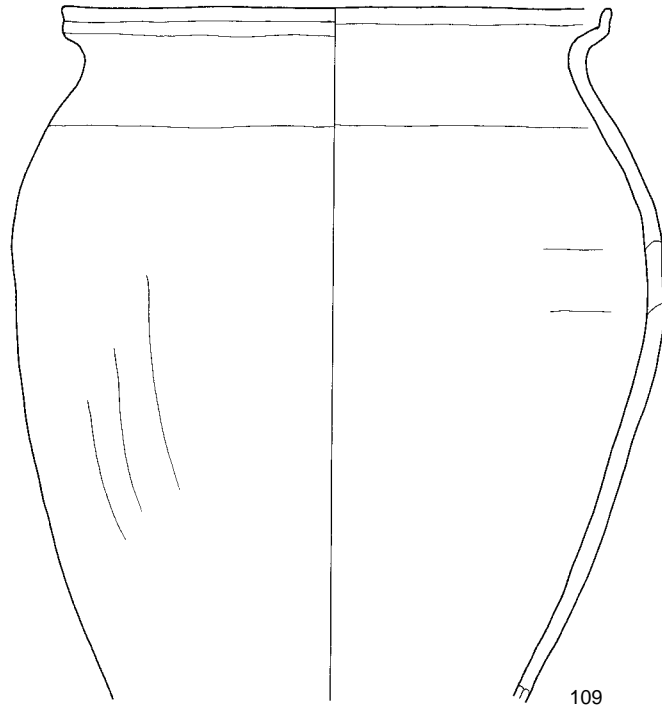
所見 時期は，出土土器や重複関係から9世紀中葉から後葉と考えられる。



第71図 第17号住居跡実測図(2)



第72図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第73図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表(第72・73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
100	土師器	坏	[12.8]	4.3	7.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面口クロナデ 体部内面ヘラミガキ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	南部上層	50%
101	須恵器	坏	[13.0]	4.9	[6.8]	長石・石英・礫	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	中央部上層	30%
102	須恵器	坏	[11.8]	4.2	[5.5]	長石・石英	灰	良好	体部下端回転ヘラ切り	北部上層	90% ヘラ記号「J」
103	須恵器	坏	-	(2.4)	6.6	長石・石英・小礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り 火襷	竈下層	20% ヘラ記号「J」
104	須恵器	盤	-	(2.9)	9.5	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	西部上層	60% 底部外面 墨痕 硯転用力
105	須恵器	盤	-	(1.9)	-	長石・石英・礫	灰	普通	高台剥離	東部上層	5% 墨痕 底部外面 硯転用力
106	須恵器	蓋	-	(2.9)	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ切り	竈下層	30%
107	須恵器	高盤	21.2	(3.1)	-	長石・石英	灰	普通	体部外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り	南部・竈下層	30% 自然釉
108	須恵器	捏鉢	[14.7]	13.9	10.3	長石・石英	灰	良好	体部内・外面口クロナデ	南部上層	30%
109	土師器	甗	21.7	(27.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ナデ	北部下層	30% P L 20
110	土師器	甗	[25.2]	(10.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部上層	5%

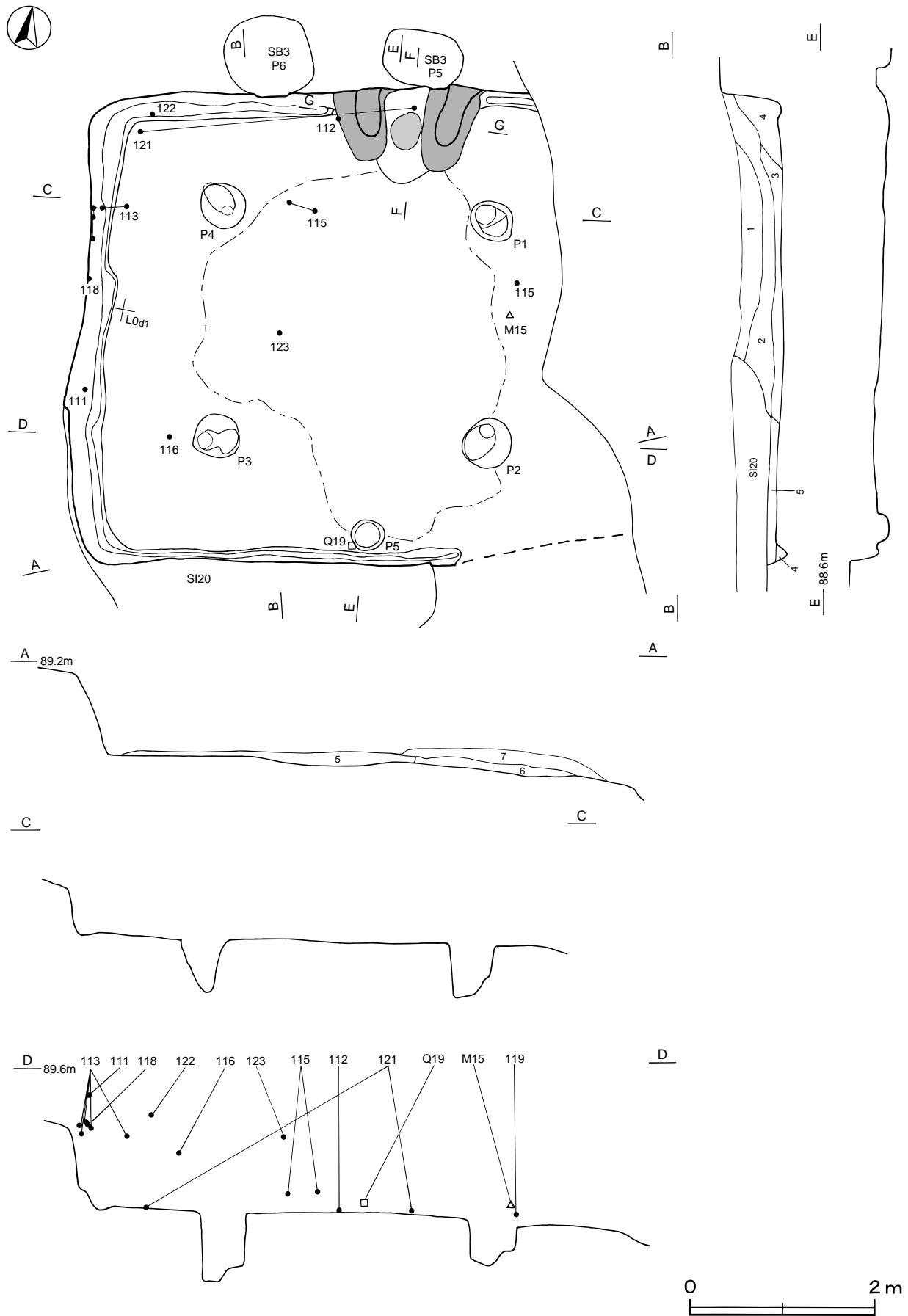
第18号住居跡(第74~78図)

位置 調査区東部のL 0 c1区、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第7号陥し穴を掘り込み、第20号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸5.20m、短軸5.08mである。平面形は長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は50~88cmで、直立している。

床 床面は1面確認された。廃絶時の床は平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で



第74图 第18号住居跡実测图(1)

確認されている。第1次の床面は確認されなかったため、掘り方内に4～35cm黒褐色土などを充填し、その上面を床面としていた。第1次の床面は、建て替えが行われた際にはがされたものと思われる。壁溝が西側に確認され、廃絶時より内側に位置することから、住居の拡張が想定される。

竈 北壁に付設されている。煙道部の一部が削平されており、焚口部から煙道部まで104cm、袖部幅154cmである。袖部は掘り残した地山面を基部とし、第6～10層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

1 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	7 にい黄褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗赤褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
3 極暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	9 暗赤褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
4 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、砂粒微量	11 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
6 にい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子微量		

ピット 9か所。P1～P4は深さ50～75cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ12cmほどで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は床面をはがした状態で確認され、深さ15～28cmで、規模と配置から建て替え前の支柱穴と考えられる。

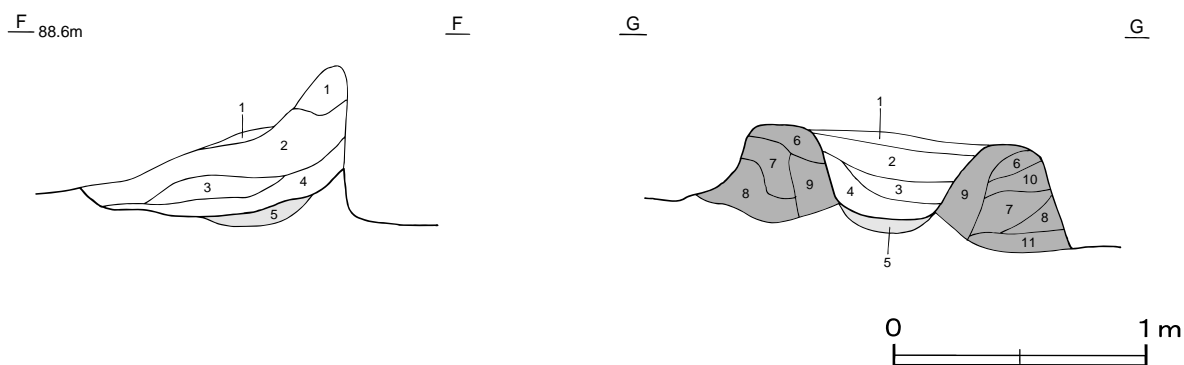
覆土 11層に分層される。第1～7層は廃絶時の住居の覆土、第8層は廃絶時の床面、第9～11層は貼り床の構築土である。

土層解説

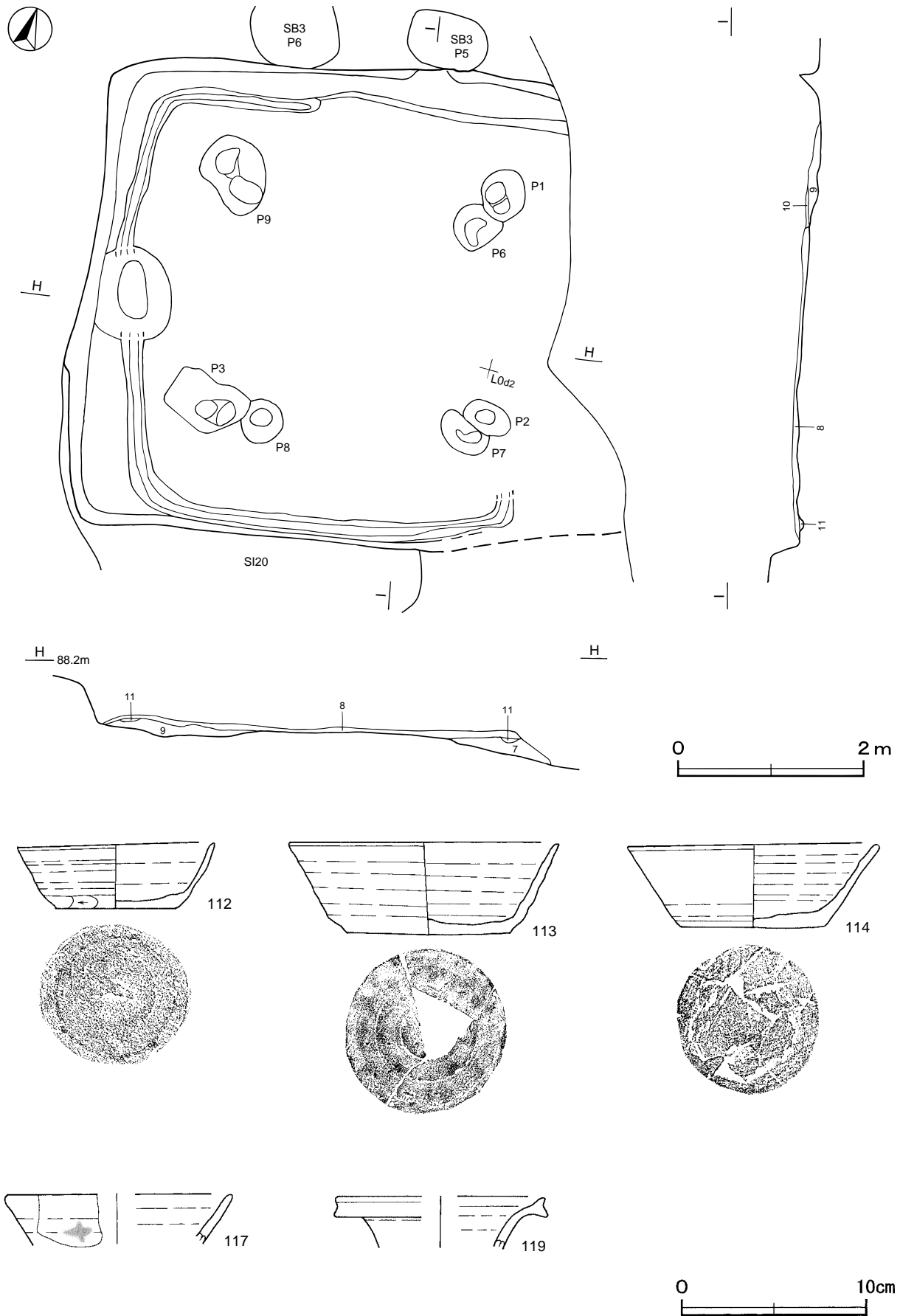
1 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	8 黒褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
5 極暗褐色	ローム粒子少量	10 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
		11 灰褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器4点(坏1, 甕3), 土師器片145点(坏6, 甕139), 須恵器9点(坏6, 盤1, 瓶1, 甕1), 須恵器片156点(坏138, 蓋7, 甕11), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 金属製品2点(刀子, 鉄斧)がそれぞれ出土している。112は竈の左袖付近, 115は北部の覆土下層, 116は南西部の覆土中層, 119・M15は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。121は北西部の覆土下層と竈内の覆土下層から出土した破片が接合したものである。111・113・118は西部壁際の覆土上層から出土しており, 流れ込んだ可能性が高い。

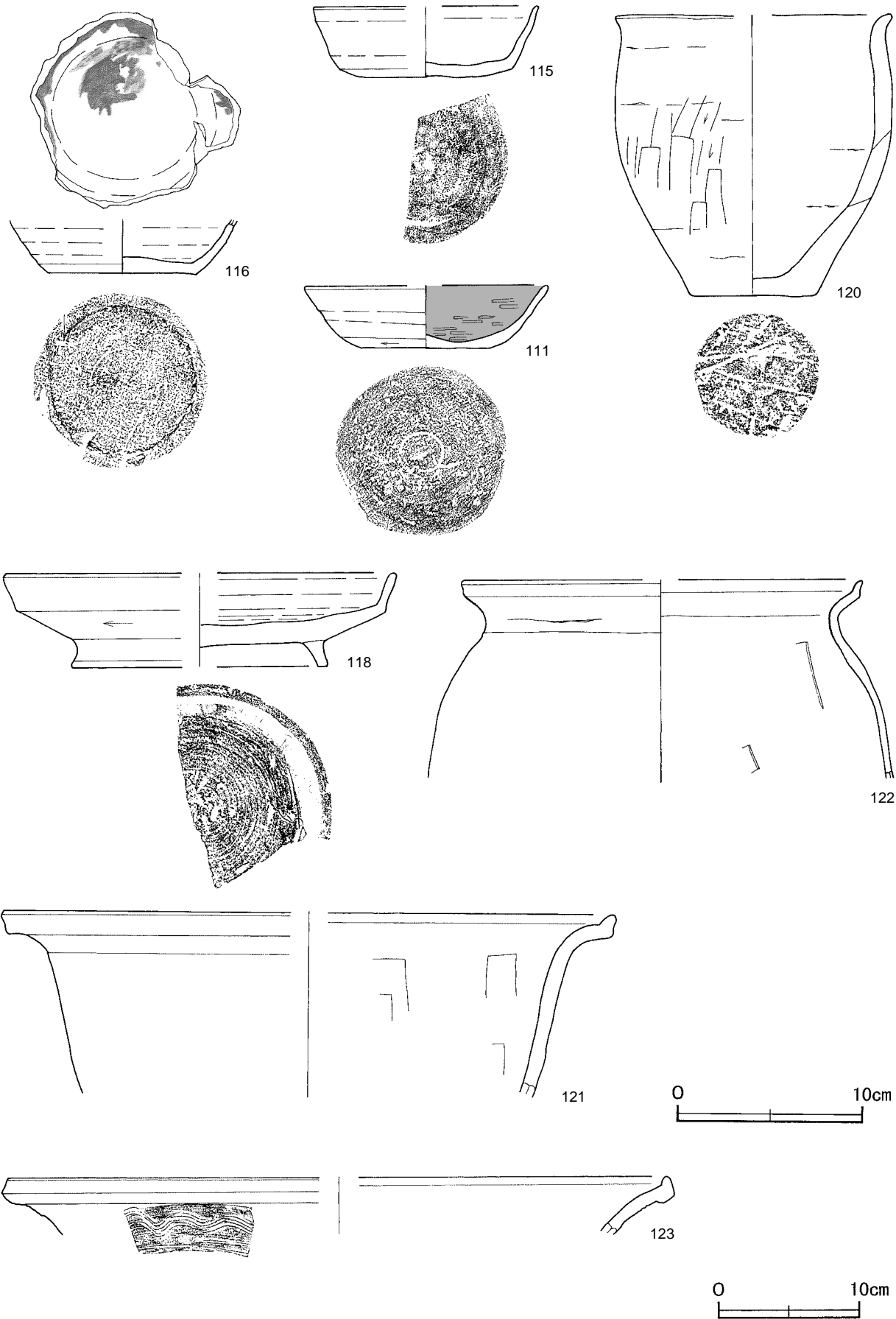
所見 貼床の下から, 支柱穴や壁溝が確認されたことから, 建て替えが行われている。貼床上で確認された支柱穴が, 下から確認されたものより外側に位置しており, 拡張しているものと想定される。時期は, 建て替え後の住居の出土土器から8世紀中葉から後葉と考えられる。



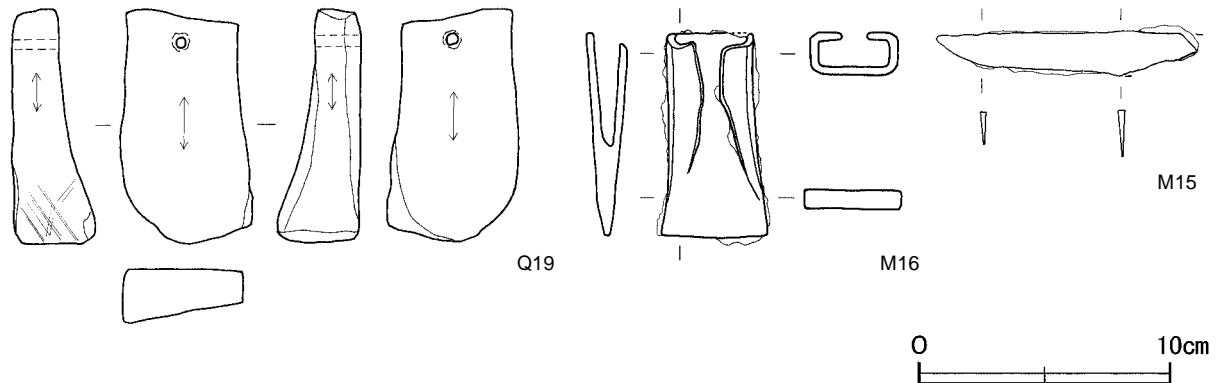
第75図 第18号住居跡実測図(2)



第76図 第18号住居跡・出土遺物実測図



第77図 第18号住居跡出土遺物実測図(1)



第78図 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

第18号住居跡出土遺物観察表(第76~78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
111	土師器	坏	[13.0]	3.3	8.8	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面口クロナデ 体部内面へラミガキ 底部回転へら切り	西部上層	85%
112	須恵器	坏	10.6	3.5	8.0	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転へら切り後ナデ	北部下層	90% P L 18
113	須恵器	坏	14.3	5.0	8.7	長石・石英・礫	灰オリーブ	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転へら切り	西部上層	70%
114	須恵器	坏	[13.4]	4.5	7.7	長石・石英・金雲母	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 底部下端回転へら削り 底部回転へら切り後ナデ	覆土下層	60%
115	須恵器	坏	11.8	3.8	[9.2]	長石・石英	黄灰	良好	体部内・外面口クロナデ 底部回転へら切り	北部下層	30%
116	須恵器	坏	-	(3.0)	9.1	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転へら切り後回転へら削り	西部上層	40% 内面漆
117	須恵器	坏	[12.0]	(2.6)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中層	外面墨書「大」カ
118	須恵器	盤	[20.9]	5.0	[13.8]	長石・石英	黄灰	良好	口縁部内・外面口クロナデ 体部下端回転へら削り 底部回転へら切り後回転へら削り	西部上層	30%
119	灰釉陶器	瓶	[11.0]	(2.8)	-	緻密	灰黄	良好	内・外面口クロナデ	東部下層	5%
120	土師器	甕	[14.6]	15.2	6.5	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦方向のケズリ後ナデ 輪積み痕 底部木葉痕	貼り床構築土内	70%
121	土師器	甕	[32.6]	(9.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ	北部・竈床面	10%
122	土師器	甕	[21.4]	(10.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ 体部内面当て具痕	北部上層	20% 体部外面火熱痕
123	須恵器	甕	[48.8]	(4.1)	-	長石・石英	黄灰	普通	口縁部内・外面横ナデ 頸部櫛歯状工具(4本櫛歯)による波状文施文	中央部上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	砥石	9.3	5.2	3.2	149.3	凝灰岩	砥面4面 下砥石	南部下層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M15	刀子	(10.4)	1.7	0.3	(14.4)	鉄	鋒欠損	東部下層	
M16	鉄斧	8.1	3.9	1.7	(103.9)	鉄	両刃の有袋鉄斧 刃部は楕形に開く	北部覆土中	

第19号住居跡(第79~81図)

位置 調査区東部のK 9 e0区, 標高89mの傾斜地に位置している。

規模と形状 北部が調査範囲外に延び, 東部は削平されているため規模や形状が明確ではないが, 確認された範囲は, 長軸5.64m, 短軸5.14mで, 主軸方向はN-13°-Wである。平面形は方形もしくは長方形と推定される。壁高は98cmで, 直立している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ34cm・74cmで, 規模と配置から支柱穴である。P 3は深さ27cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

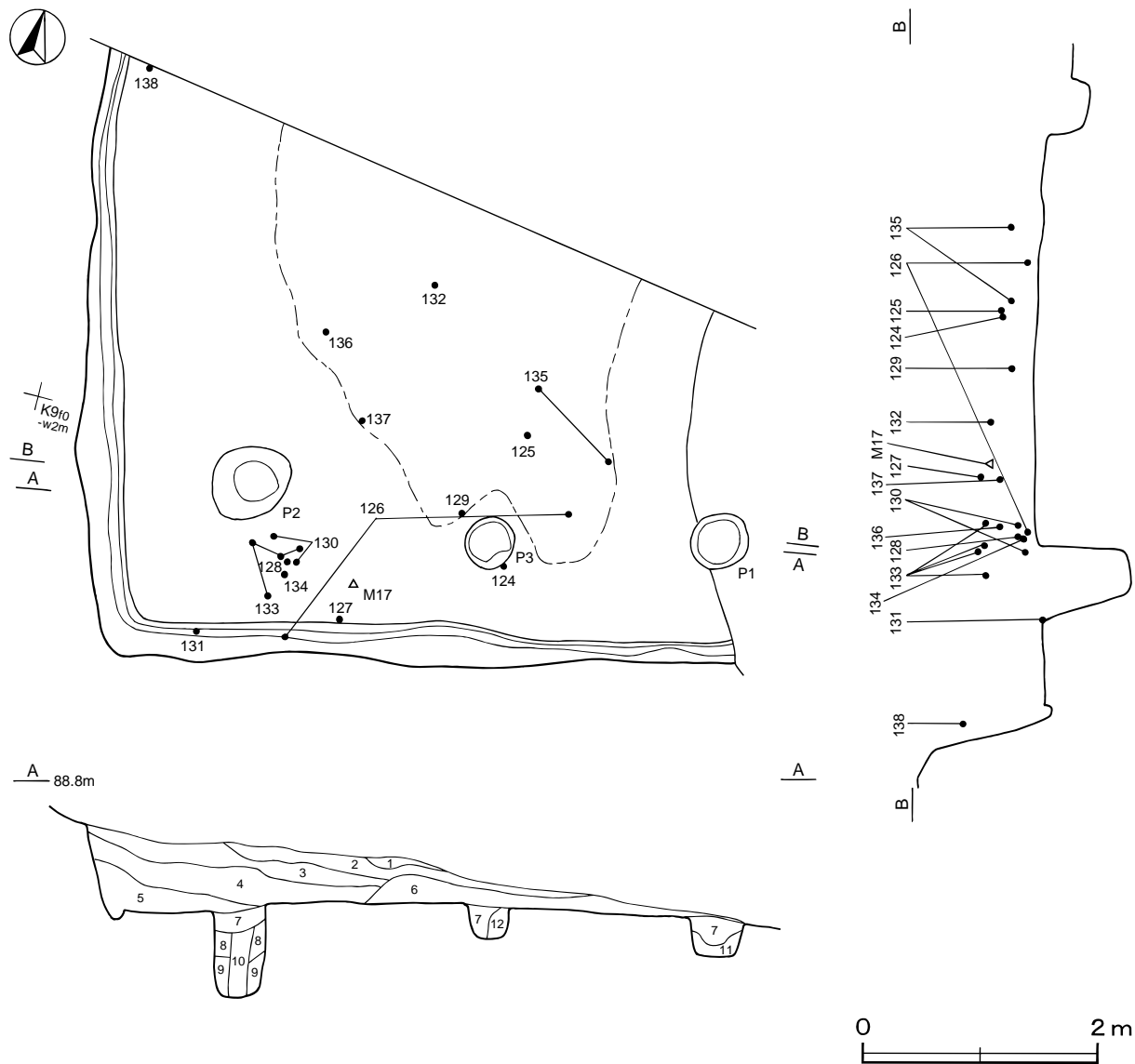
覆土 12層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

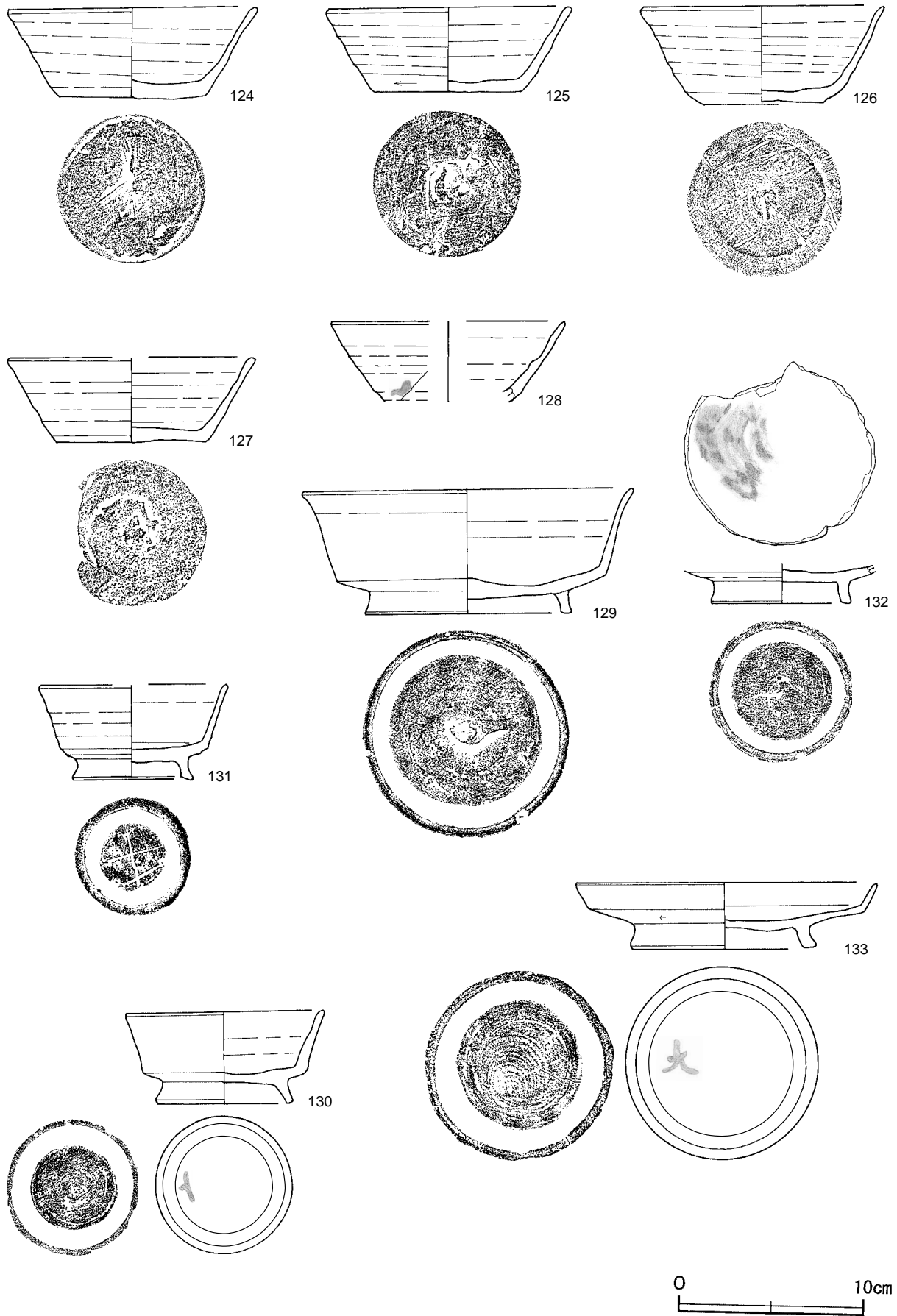
1 極暗褐色	ロームブロック少量	6 暗赤褐色	粘土粒子中量, ロームブロック, 焼土粒子, 炭化粒子・砂粒少量, 鹿沼パミス微量
2 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
3 暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量	8 褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量, 焼土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
5 褐色	ローム粒子多量, 鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
		12 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器9点(坏1, 甕8), 土師器片201点(坏14, 甕187), 須恵器21点(坏8, 高台付坏4, 盤3, 蓋3, 瓶1, 短頸壺1, 高坏1), 須恵器片212点(坏153, 高台付坏5, 盤2, 蓋24, 瓶5, 甕23), 金属製品1点(刀子)が出土している。また, 混入した陶器片2点(碗)も出土している。土器片は南東部の覆土上層から下層にかけて多く出土している。138は北西部の覆土上層, 133・M17は南部, 132・136は中央部の覆土中層, 124~126・130・131・134は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

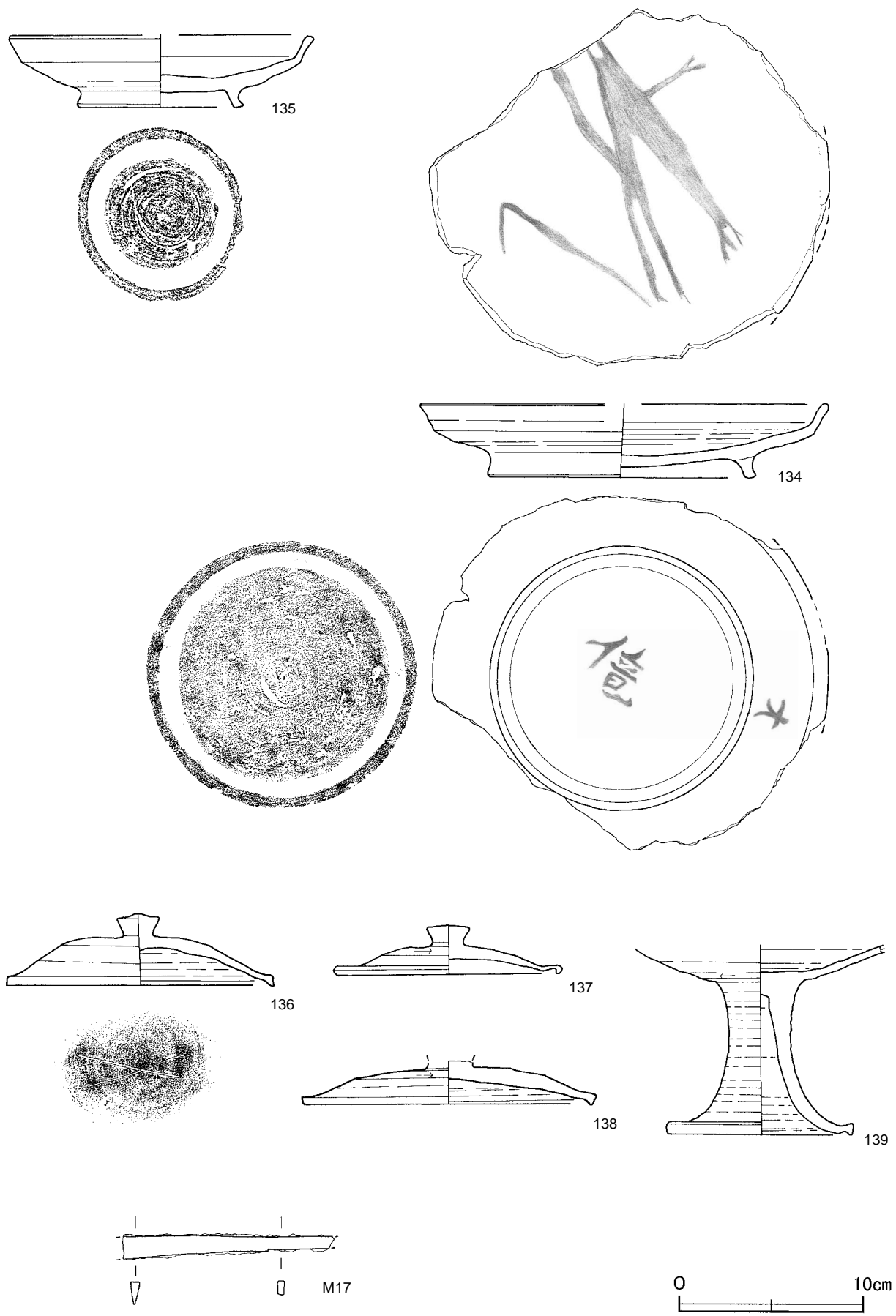
所見 須恵器の食器類が多く出土しているのが特徴的である。時期は, 出土土器より8世紀後葉と考えられる。



第79図 第19号住居跡実測図



第80図 第19号住居跡出土遺物実測図(1)



第81图 第19号住居跡出土遺物実測図(2)

第19号住居跡出土遺物観察表 (第80・81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
124	須恵器	坏	13.3	5.0	7.9	長石・石英・礫	灰黄	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後ナデ	南部下層	90% ヘラ記号「x」
125	須恵器	坏	13.0	4.6	8.0	長石・石英・雲母・ 礫	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 切り後ヘラ削り	南部下層	80%
126	須恵器	坏	12.9	5.2	8.2	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後ナデ	南部下層	70%
127	須恵器	坏	[13.0]	4.5	8.0	長石・雲母・礫	灰	普通	体部内・外面口ロナデ 体部下端回転 ヘラ削り	南部下層	60% P L 18
128	須恵器	坏	[12.4]	(4.2)	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口ロナデ	南部下層	10% 体部外面 墨書「J」
129	須恵器	高台付坏	17.5	6.7	11.0	長石・石英・礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	南部下層	80% P L 18
130	須恵器	高台付坏	10.5	5.0	6.8	長石・雲母	灰	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後高台貼り付け	南部下層	底部外面墨書 「J」 P L 18
131	須恵器	高台付坏	[10.0]	5.1	6.3	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後高台貼り付け	南部下層	底部ヘラ記号 「キ」 P L 18
132	須恵器	高台付坏	-	(2.1)	7.6	長石・石英・礫	灰	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後高台貼り付け後ナデ	中央部中層	20% 底部内面 墨痕 転用視力
133	須恵器	盤	16.1	3.5	10.0	長石・石英	灰	普通	底部回転糸切り後回転ヘラナデ	南部下層	底部外面墨書 「大」 P L 19
134	須恵器	盤	[21.9]	4.0	14.3	長石・石英・雲母・ 白色粒子	灰黄	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り 高台貼り付け後ナデ	南部下層	体部外面墨書 「大」 底部外面 墨書「億」 P L 19
135	須恵器	盤	[16.1]	3.9	9.0	長石・石英・雲母・ 礫	灰	普通	体部内・外面口ロナデ ラ切り後高台貼り付け	中央部下層	20%
136	須恵器	蓋	14.4	3.9	-	長石・礫	灰	普通	体部内・外面口ロナデ 天井部回転 ヘラ削り	中央部中層	天井部内面ヘラ記 号「x」 P L 19
137	須恵器	蓋	12.0	2.7	-	長石・礫	灰	普通	体部外面口ロナデ 天井部回転ヘラ 削り	中央部下層	90% P L 19
138	須恵器	蓋	15.6	(2.2)	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口ロナデ 天井部回転 ヘラ削り	西部中層	70%
139	須恵器	高坏	-	(10.2)	[10.0]	長石・石英・礫・ 白色粒子	灰	普通	外面口ロナデ 坏部下端回転ヘラ削り	西部上層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M17	刀子	(11.4)	1.2	0.05	(10.2)	鉄	刃部欠損	南部下層	P L 21

第20号住居跡 (第82図)

位置 調査区東部のL 0 d1区, 標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第18号住居跡, 第1号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.62m, 短軸3.34mの方形で, 主軸方向はN-29°-Wである。壁高は18~80cmで, 直立している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝は全周している。

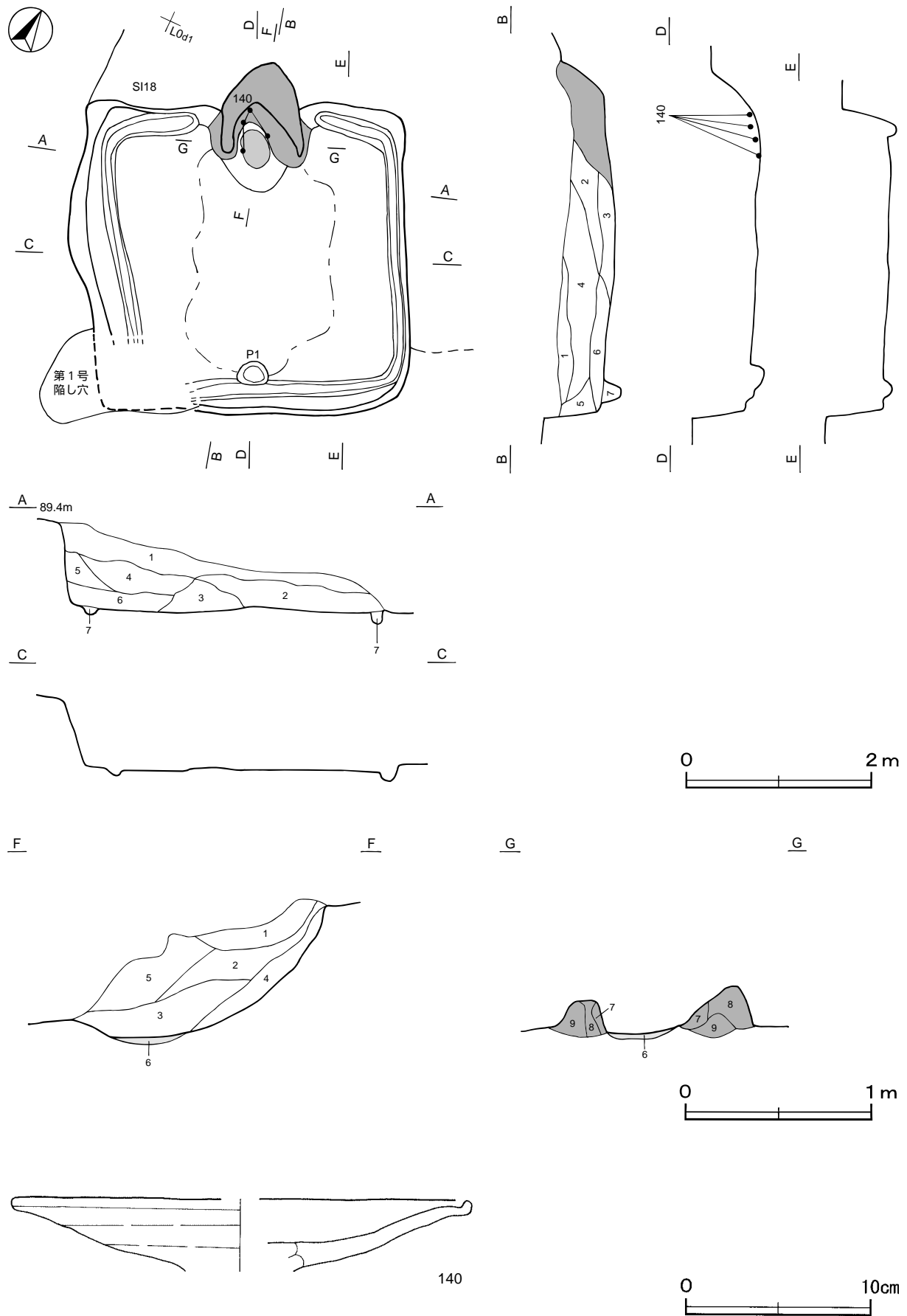
竈 北壁中央部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで140cm, 袖部幅110cmである。袖部は床面と同じ高さの面を基部とし, 第7~9層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめ, 火床面は火を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量	6	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子・砂粒微量
2	暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量	7	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子・砂粒微量	8	にぶ黄褐色	粘土粒子・砂粒中量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
4	暗褐色	砂粒多量, ロームブロック・粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	9	にぶ黄褐色	粘土粒子多量, 砂粒中量, ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量			

ピット 深さ18cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。



第82図 第20号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量, 粘土粒子・砂粒少量	4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック中量
3	極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子・砂粒微量	6	極暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
			7	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片66点（坏21，甕45），須恵器1点（高盤），須恵器片99点（坏74，高台付坏4，盤3，蓋13，甕5）が出土している。また，混入した弥生土器片3点（壺）も出土している。140は竈の覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器や重複関係から9世紀前葉と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表（第82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
140	須恵器	高盤	25.4	(4.3)	-	長石・石英	灰	普通	体部外面口クロナデ	竈下層	40%

第21号住居跡（第83～87図）

位置 調査区東部のK 9 f0区，標高86mの傾斜地に位置している。

重複関係 第48号土坑を掘り込み，第25・26号住居に掘り込まれている。

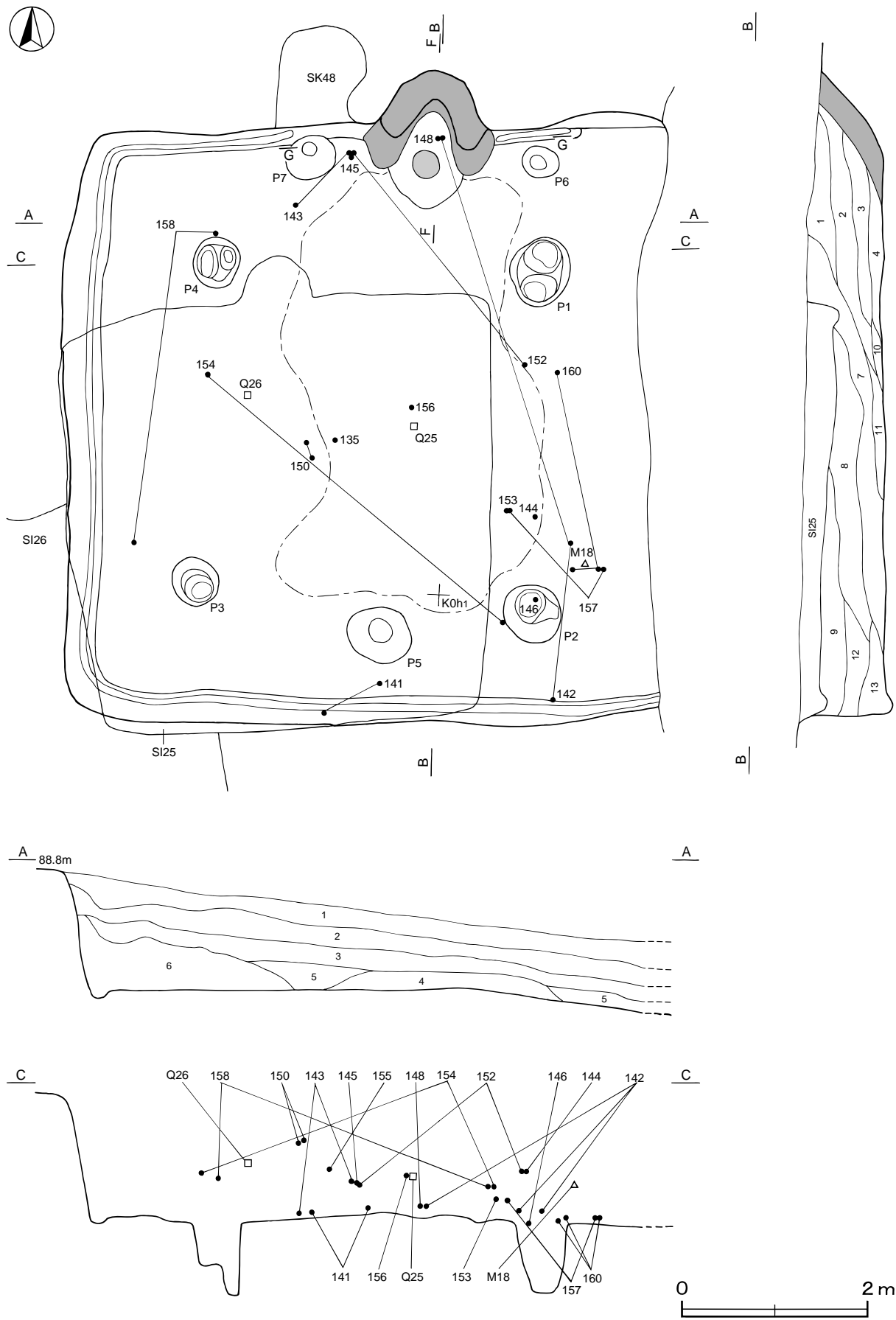
規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確ではないが，確認された範囲は，長軸6.50m，短軸5.83mである。平面形は方形と推定され，主軸方向はN-3°-Wである。壁高は105～125cmで，直立している。

床 床は3面あることが確認されている。廃絶時の床は中央部が踏み固められている。第2次面の床面上に，砂粒を含む褐色土（貼床構築土層断面図，第1・4層）を厚さ2～5cm埋土して構築されている。第2次面は，第1次面の上に，ロームブロックや鹿沼パミスを含む褐色土（貼床構築土層断面図，第2・5・6・8層）を厚さ2～7cm埋土して構築している。この第2次面は，南北軸5.44m，東西軸5.34mで，方形と推定される範囲の掘り方内に構築されている。北部はこの面を掘りくぼめて焼土を含む褐色土を埋土しており，赤変硬化しているため，第2次面使用時の竈の跡と考えられる。第1次面は地山面と掘り方内に，厚さ2～7cmの暗褐色土（貼床構築土層断面図，第3・7層）を埋土して構築されている。第2次面の竈の南から焼土を含む褐色土がみられ，第1次面使用時の竈の跡と考えられる。西部の掘り方は地山を20～70cm掘り込んだ土坑状になっており，焼土や砂粒を含む褐色土を充填している。土層から第1次面を掘り込んでいることが確認できるため，第1次面使用時の竈を廃棄したものを掘り方内に充填し，第2次面の床として使用したのと考えられる。

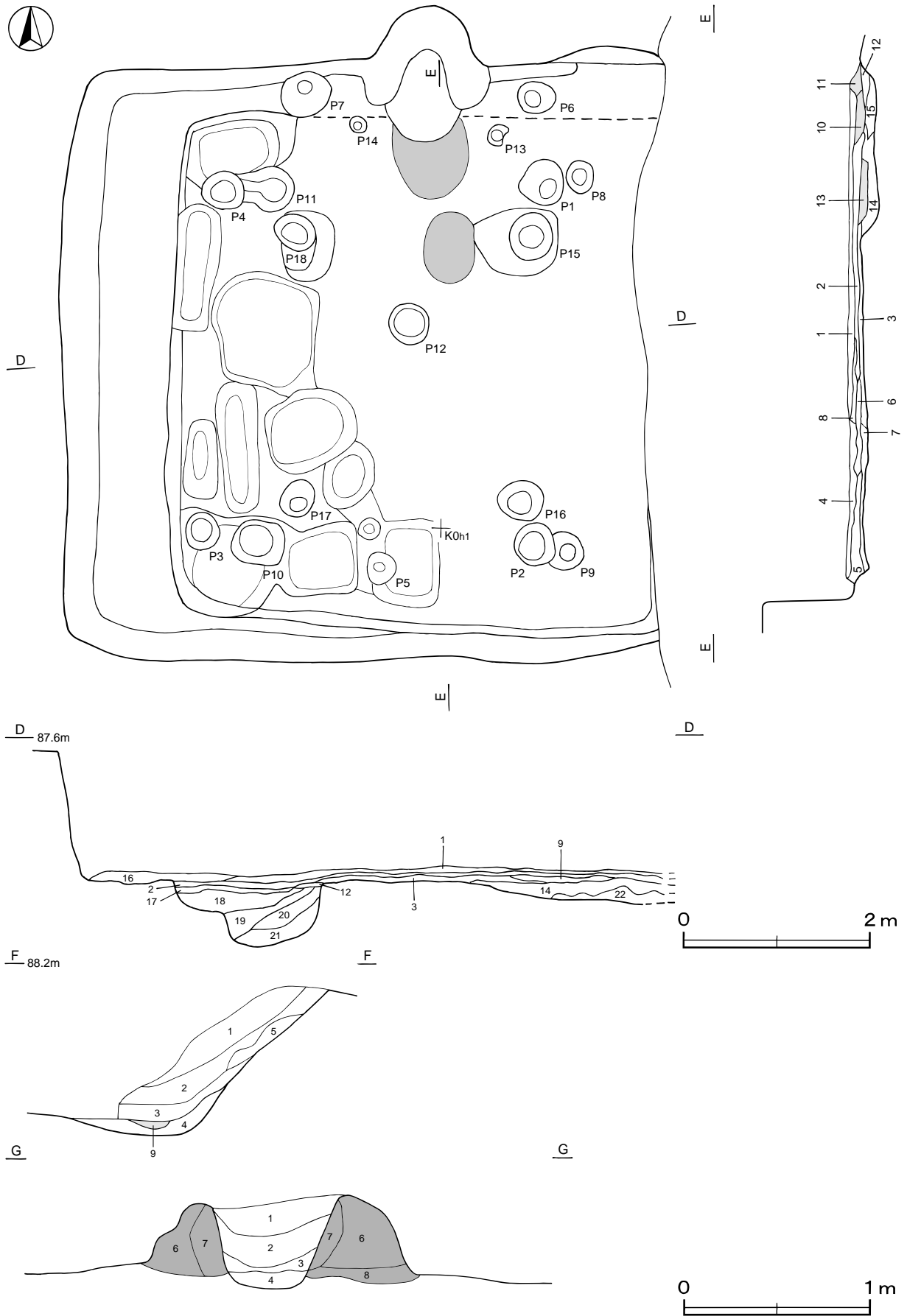
竈 3次面の竈は北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで150cm，袖部幅140cmである。袖部は地山を9cmほど掘り込み，第6～8層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を5cmほど掘りくぼめ，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に67cmほど掘り込み，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	褐色	ロームブロック中量, 粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量	5	暗赤褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック微量
2	にぶい黄褐色	粘土粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量	6	灰褐色	粘土粒子多量, 砂粒中量, ローム粒子少量
3	極暗赤褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	7	赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量, 炭化粒子・砂粒少量, ローム粒子微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量, ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量	8	にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量, 砂粒微量
			9	赤褐色	焼土粒子多量, 粘土粒子少量, 砂粒微量



第83图 第21号住居跡実測图(1)



第84图 第21号住居跡実測图(2)

ピット 18か所。P 1～P 7は第3次面に伴うものである。P 1～P 4は深さ74～89cmで、規模と配置から支柱穴である。P 5は深さ45cmほどで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7は深さ21cm・55cmで、竈の両側に均等に位置していることから竈施設に関するピットの可能性が考えられる。P 8～14は第2次面に伴うものである。P 8～11は深さ62～83cmで、規模と配置から支柱穴である。P 12は深さ45cmで、覆土中に炭化した稲の胚や穎、炭化物などが含まれており、竈周辺の灰などが捨てられたものと考えられる。P 13・P 14は深さ27cm・40cmで竈の両側に均等に位置することから3次面と同様に竈施設に関するピットの可能性が考えられる。P 15～P 18は第1次面に伴うものである。深さは43～96cmで規模と配置から支柱穴である。

覆土 13層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

土層解説

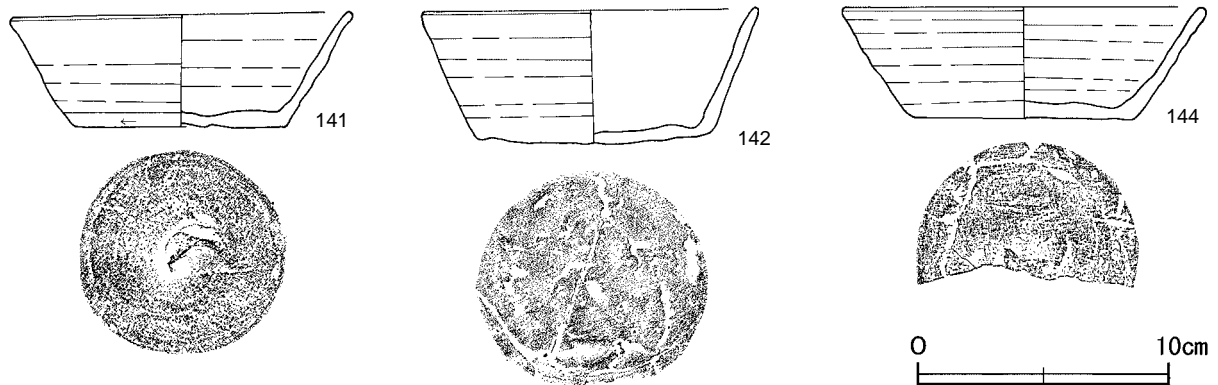
1 褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子・炭化粒子微量	7 褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子微量
2 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	8 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	9 暗褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子微量
4 暗褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐色	鹿沼パミス・粘土粒子微量	11 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
6 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量	12 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス・砂粒微量
		13 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・砂粒微量

貼り床構築土層解説

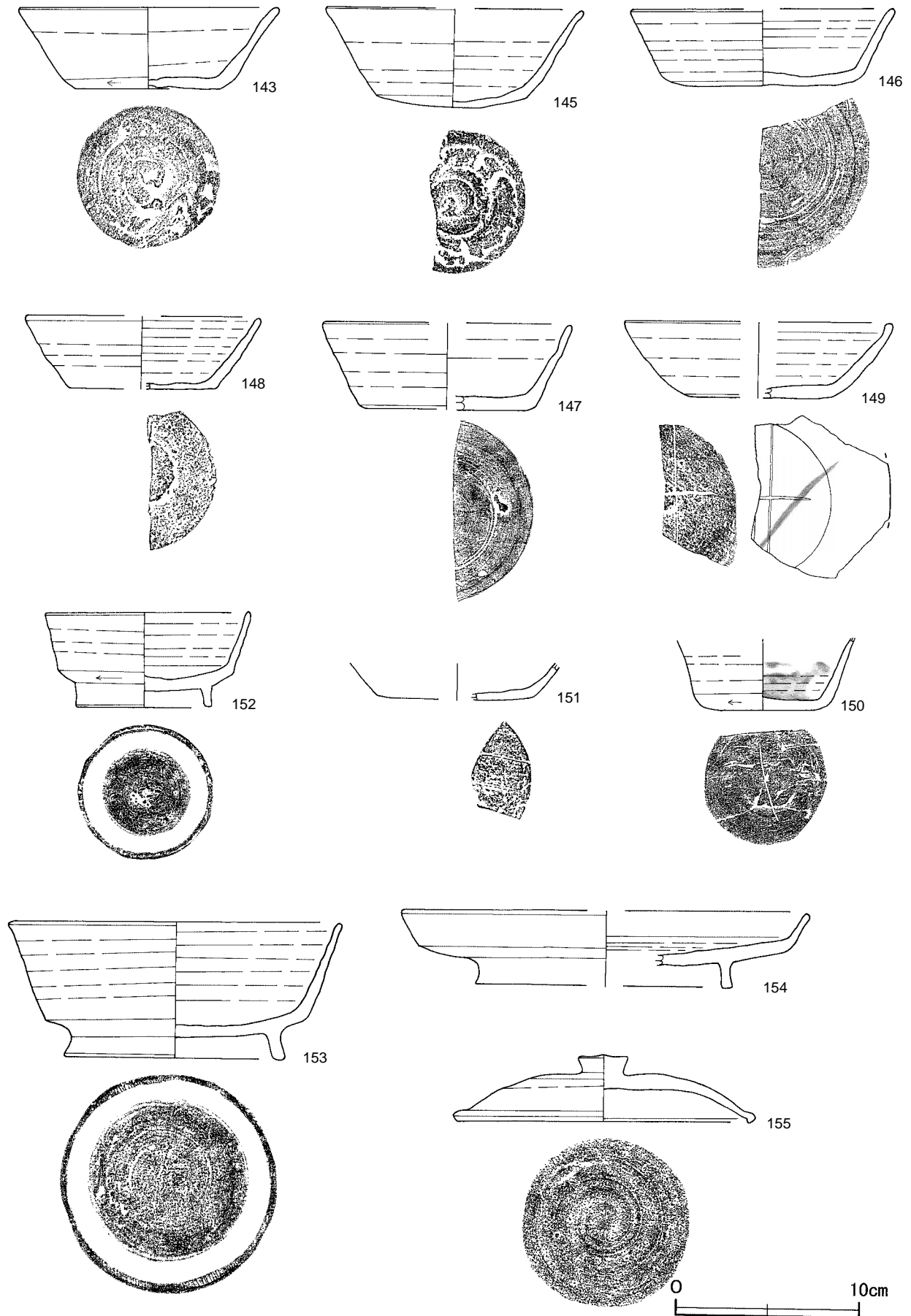
1 褐色	砂粒多量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量	14 褐色	ロームブロック・焼土粒子・鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	15 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子微量	16 にぶい褐色	炭化粒子・砂粒少量, ローム粒子微量
4 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	17 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス・砂粒少量, 焼土粒子微量
5 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量	18 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス・砂粒少量, 焼土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量	19 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量, 焼土粒子・砂粒微量
7 暗褐色	ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量	20 にぶい褐色	鹿沼パミス少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
8 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・鹿沼パミス・砂粒微量	21 にぶい褐色	焼土粒子・鹿沼パミス少量, ロームブロック・砂粒微量
9 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	22 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
10 にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量		
11 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量, ローム粒子・炭化粒子微量		
12 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 砂粒微量		
13 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量		

遺物出土状況 土師器片396点(坏13, 甕383), 須恵器20点(坏11, 高台付坏2, 盤1, 蓋3, 高坏1, 甑1), 須恵器片256点(坏219, 高台付坏4, 盤8, 蓋8, 甕17), 灰釉陶器1点(瓶)が全域から出土している。144は東部, 150・155・156・Q25・Q26は中央部の覆土中層, 141・146は南部, 143・145は北部, 153・160は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。特に須恵器坏が多く出土している。

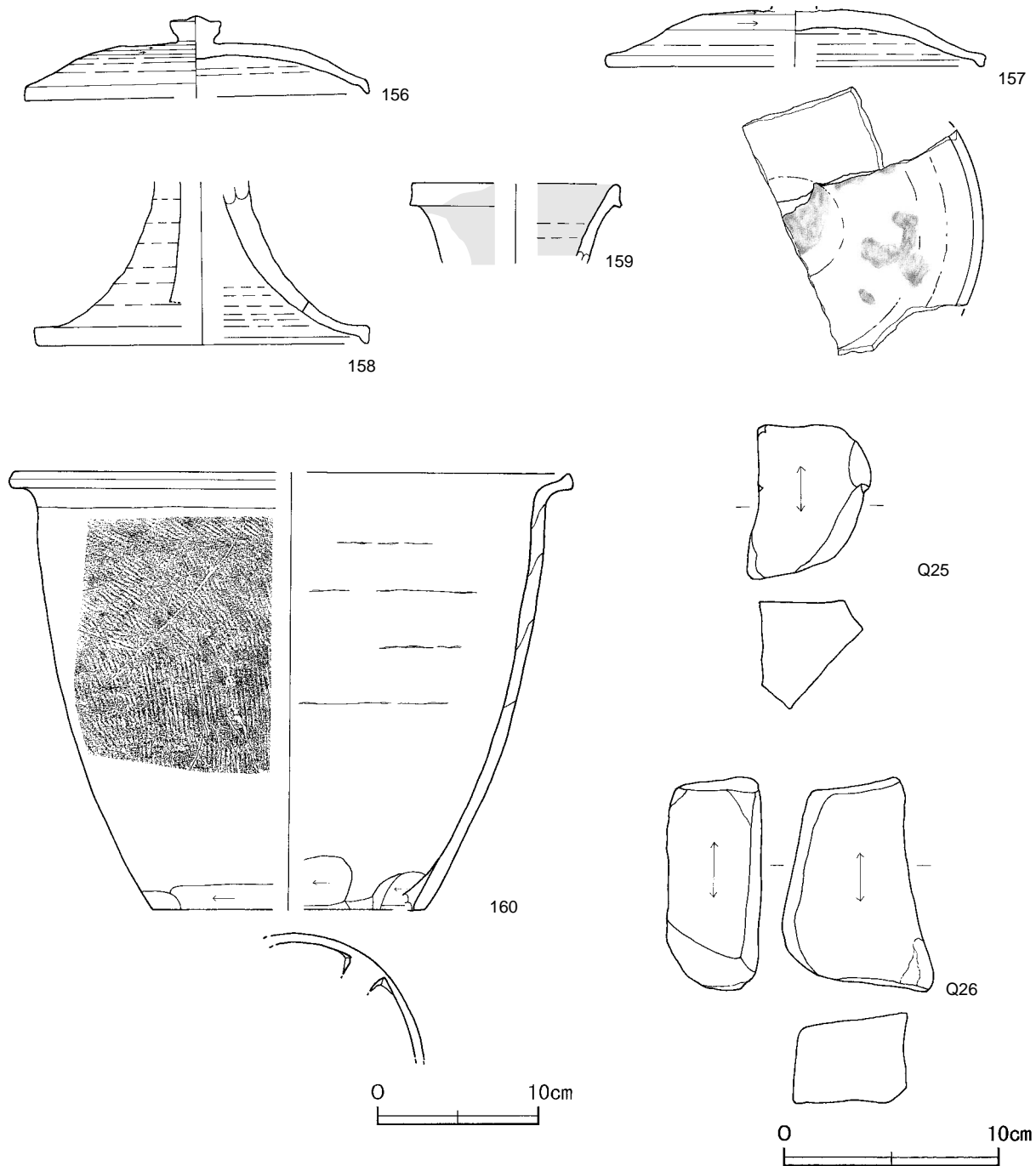
所見 規模や出土遺物は, 他の住居とは様相を異にし, 2度の建て替えて拡張している。時期は, 第三次面の覆土や床面から出土した土器から8世紀中葉と考えられる。



第85図 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第86図 第21号住居跡出土遺物実測図(2)



第87図 第21号住居跡出土遺物実測図(3)

第21号住居跡出土遺物観察表(第85~87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
141	須恵器	坏	13.5	4.1	8.3	長石・石英	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部下層	85%
142	須恵器	坏	13.1	5.4	9.2	長石・石英・雲母・礫	灰	普通	体部外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	東部・竈下層	85%
143	須恵器	坏	13.9	4.4	7.6	長石・雲母	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	北部下層	90% P L 18
144	須恵器	坏	14.2	4.5	8.6	長石・石英・雲母	灰オリーブ	普通	体部外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	東部中層	60%
145	須恵器	坏	[13.9]	5.3	(8.0)	長石・石英	灰	良好	体部内・外面ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	北部下層	40%
146	須恵器	坏	[14.2]	4.2	[11.2]	長石・石英・雲母・礫	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	南部下層	30%
147	須恵器	坏	[13.4]	4.7	[9.6]	長石・石英	灰	普通	体部外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	P 2 掘り方内	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
148	須恵器	坏	[12.8]	4.0	[7.9]	長石・石英	黄灰	良好	体部外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	竈下層	30%
149	須恵器	坏	[14.2]	4.1	[8.2]	長石	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部床面	15% ヘラ記号「x」カ
150	須恵器	坏	-	(4.0)	6.7	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	中央部中層	50% 底部ヘラ記号「-」内面墨痕
151	須恵器	坏	-	(2.0)	[8.3]	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り後ナデ	南部上層	10% 底部ヘラ記号「J」
152	須恵器	高台付坏	11.0	5.2	7.3	長石・石英・黒色粒子	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り 高台貼り付け後ナデ	北部下層	70%
153	須恵器	高台付坏	17.8	7.4	11.6	長石・雲母・礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	東部下層	80%
154	須恵器	盤	[22.1]	4.1	[13.9]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	南部・西部下層	30%
155	須恵器	蓋	15.8	3.7	-	長石・雲母・礫	オリーブ灰	普通	体部外面口クロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部中層	100% 内面ヘラ記号「J」 PL19
156	須恵器	蓋	[16.0]	3.8	-	長石・石英	灰	普通	内・外面口クロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部中層	50%
157	須恵器	蓋	[17.4]	(2.7)	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ	東部下層	30% 内面墨痕 転用硯カ
158	須恵器	高盤	-	(7.6)	[15.2]	長石・石英・雲母	灰	普通	脚部内・外面口クロナデ 脚部3窓カ	西部下層	15%
159	灰釉陶器	瓶	[9.4]	(3.7)	-	長石・石英	灰白	普通	内・外面口クロナデ	P3 掘り方内	5% 自然釉
160	須恵器	甌	[34.4]	27.3	[17.0]	長石・石英・雲母	灰白	普通	輪積み痕	東部下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	砥石	7.2	5.8	5.0	230	砂岩	砥面1面	中央部中層	
Q26	砥石	10	7.1	4.4	430	砂岩	砥面2面	中央部中層	

第22号住居跡（第88図）

位置 調査区東部のL 0 b3区，標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第16号住居跡を掘り込み，第13・15号住居に掘り込まれており，第23・24号土坑の下に位置する。

規模と形状 東部・南部が残存していないため規模や形状が明確ではないが，確認された範囲は，長軸3.75m，短軸2.90mである。平面形は長方形と推定される。壁高は65cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，竈前面が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで117cmである。袖部は確認されなかった。火床部は床面と同じ高さで，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に60cmほど掘り込み，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|------|--------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 | | |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | | |

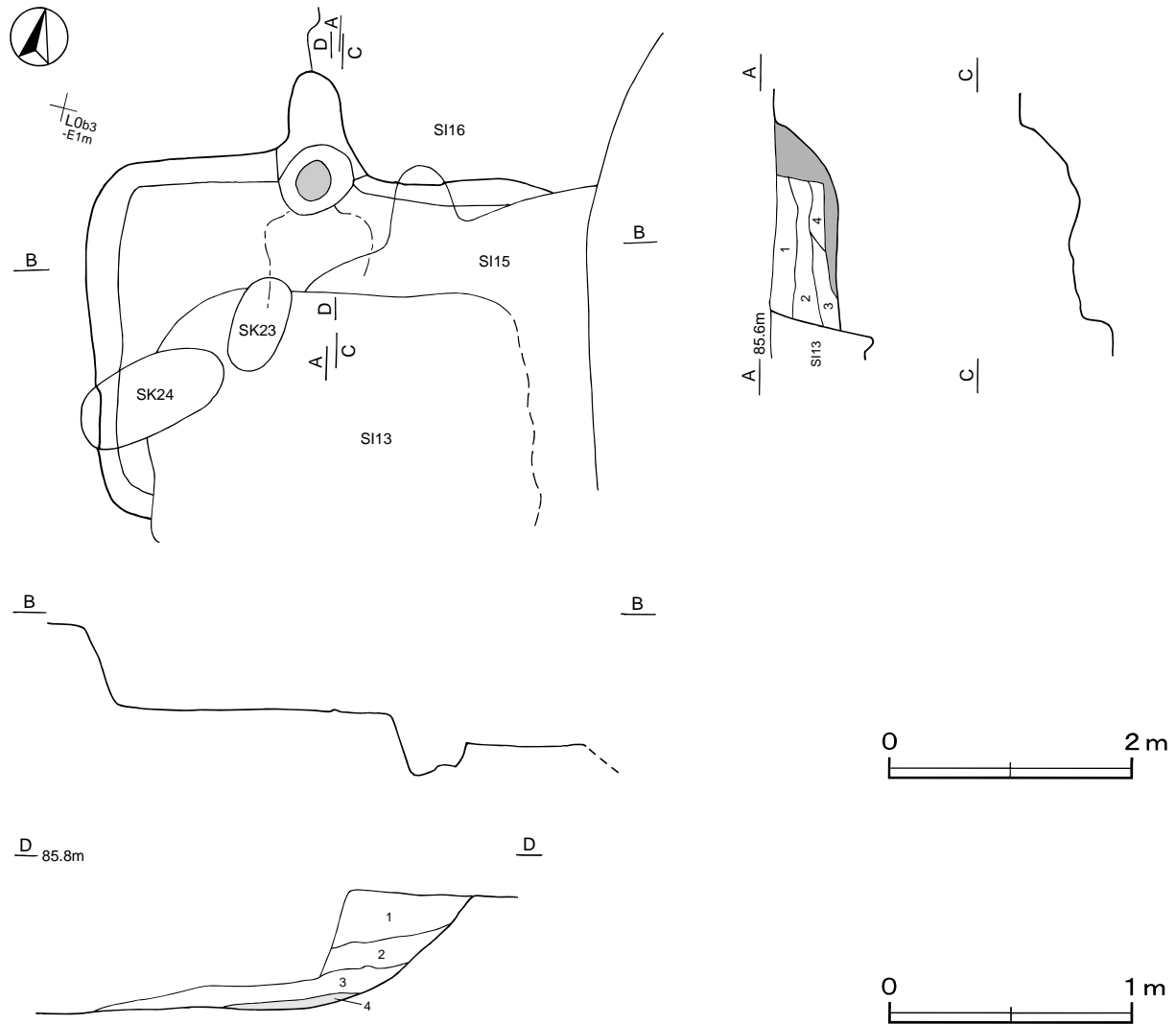
覆土 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片63点（坏10，甕53），須恵器片20点（坏5，蓋5，甌1，鉢9），鉄滓4点が出土している。

所見 時期は，重複関係や出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第88図 第22号住居跡実測図

第23号住居跡 (第89・90図)

位置 調査区東部のK 9 j0区, 標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第5号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.24m, 短軸3.06mの方形で, 主軸方向はN-13°-Wである。壁高は68~76cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 竈前面が踏み固められている。壁溝は全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで116cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめ, 火床面は火を受けて赤変している。

竈土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 にぶい褐色 焼土粒子・粘土粒子微量 | 3 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 極暗赤褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 深さ22cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うピットである。

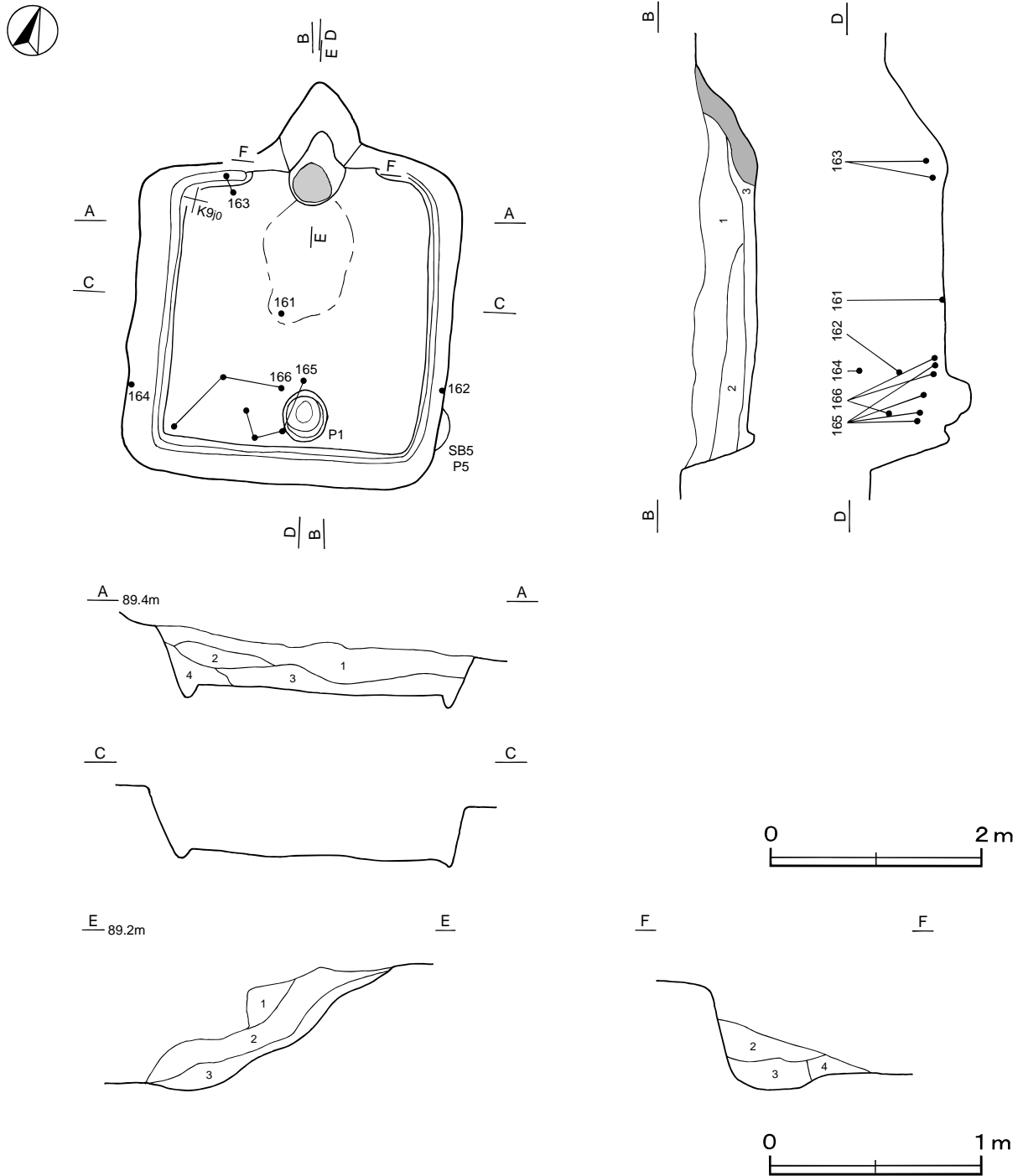
覆土 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

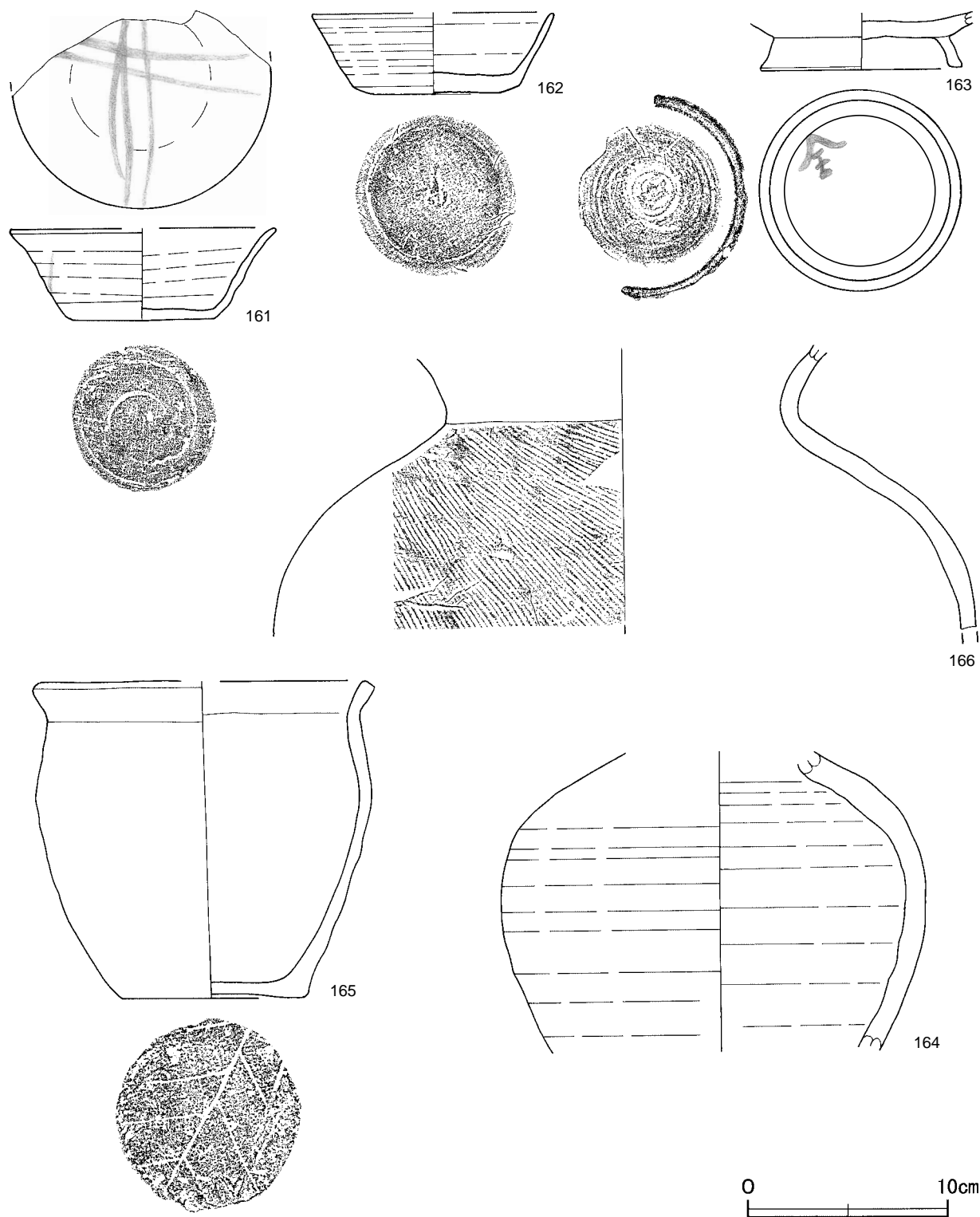
- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量, 砂粒微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量, 砂粒微量 | 4 褐色 | 鹿沼パミス中量, ロームブロック・砂粒少量 |

遺物出土状況 土師器1点(甕), 土師器片89点(坏5, 甕84), 須恵器5点(坏2, 高台付坏1, 瓶1, 甕1), 須恵器片46点(坏29, 高台付坏3, 盤1, 蓋6, 甕1, 高坏2, 鉢4)が出土している。163は北部の覆土下層, 165は南部の覆土中層, 166は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器より9世紀前葉と考えられる。



第89図 第23号住居跡実測図



第90図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
161	須恵器	坏	[13.0]	4.6	7.3	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ヘラ削り 火禱	中央部床面	60%
162	須恵器	坏	[12.0]	4.0	8.2	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	東部中層	60%
163	須恵器	高台付坏	-	(2.8)	[10.0]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北部下層	底部外面墨書 「全」 P L 20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
164	須恵器	瓶	-	(14.8)	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ	西部上層	30% 自然釉 P L 20
165	土師器	小形甕	[16.0]	14.8	9.0	長石・石英・雲母	にぶい澄	良好	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ 底部木葉痕	南部中層	40% P L 20
166	須恵器	甕	-	(14.3)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	頸部外面横ナデ 体部外面叩き目	南西部下層	10%

第24号住居跡 (第91・92図)

位置 調査区東部のL 9 b0区, 標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第28号住居跡, 第5号掘立柱建物跡を掘り込み, 第17号住居に掘り込まれている。

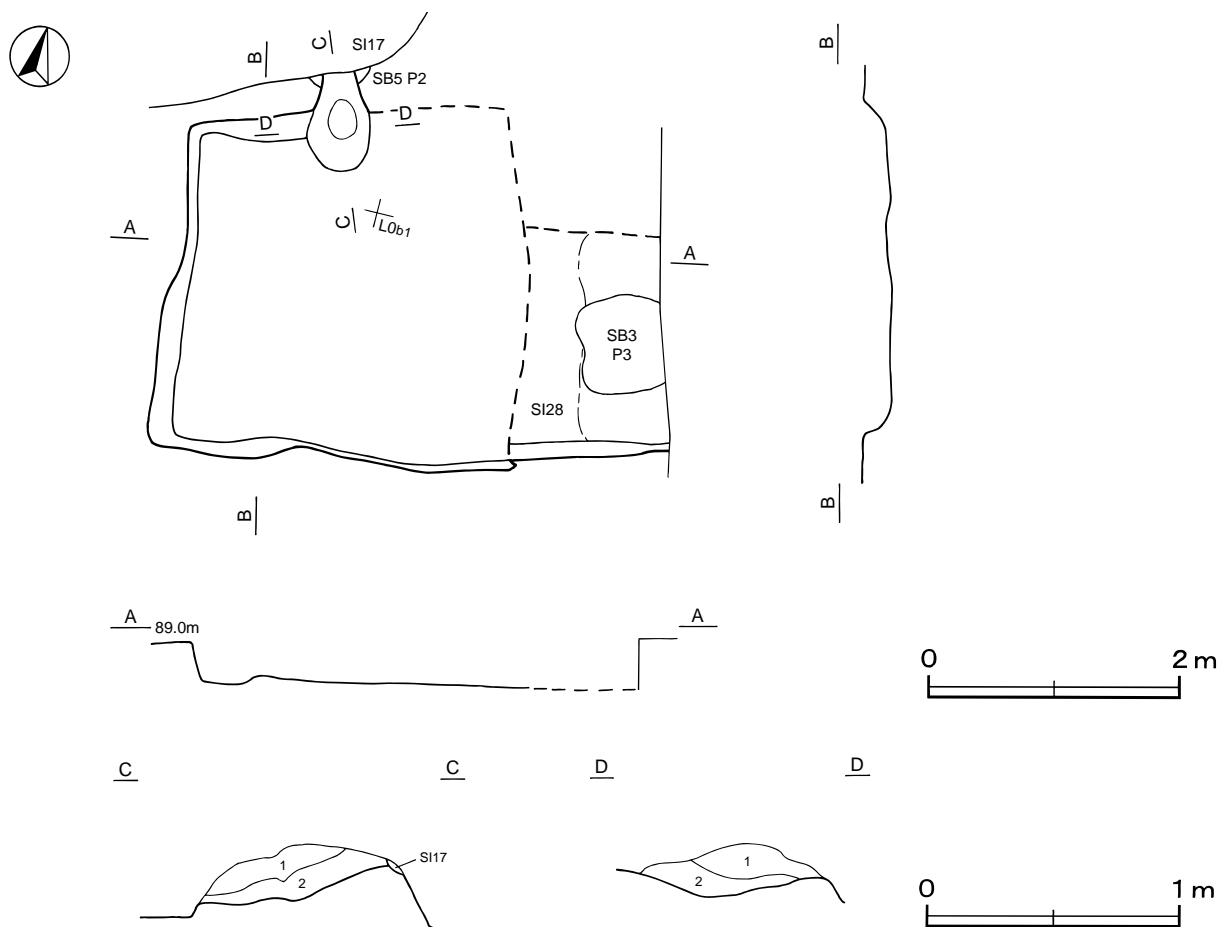
規模と形状 東壁が残存していないため規模や形状が明確ではないが, 確認された範囲は, 長軸2.90m, 短軸2.90mである。平面形は方形と推定され, 主軸方向はN-14°-Wである。壁高は20~31cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 全体的に平坦で軟弱である。

竈 北壁中央部に付設されている。煙道部の一部が掘り込まれており規模は明確ではないが, 確認された範囲は, 焚口部から煙道部まで77cmである。火床部は床面と同じ高さで, 赤変した部分は認められなかった。

竈土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒 少量, 炭化粒子微量
 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量



第91図 第24・28号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片11点（坏2，甕9），須恵器片4点（坏）が出土している。

所見 床面が露出した状況で確認されたため、覆土は確認できなかった。時期は、出土土器や重複関係から9世紀前葉と考えられる。



第92図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
167	須恵器	坏	13.1	3.8	[6.6]	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄	普通	体部内・外面口クロナデ 転ヘラ削り 体部下端回 底部回転ヘラ切り	甕覆土中	30%

第25号住居跡（第93・94図）

位置 調査区東部のK 9 g0区で、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第21・26号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.65m，短軸4.60mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は40～55cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。壁溝は全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで127cm，袖部幅95cmである。袖部は、床面と同じ高さの面を基部とし、第5～8層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に45cmほど掘り込み、第8層を貼り付けて構築している。

竈土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	6	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
2	にぶい褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量	7	にぶい褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3	褐色	焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	8	にぶい褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
4	暗赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量			
5	にぶい褐色	粘土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子・炭化粒子微量			

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ42～74cmで、規模と配置から支柱穴である。P 5は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

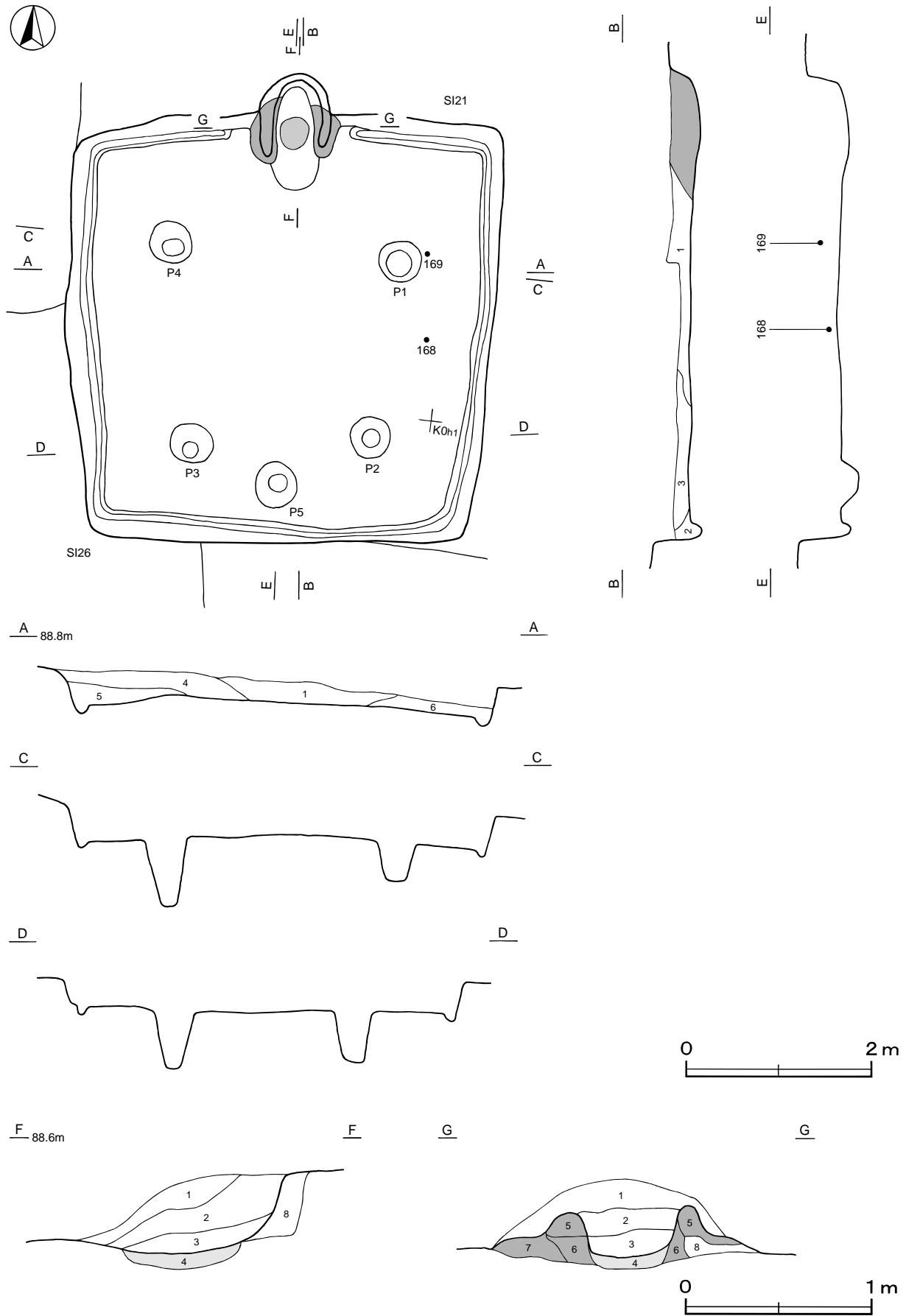
覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

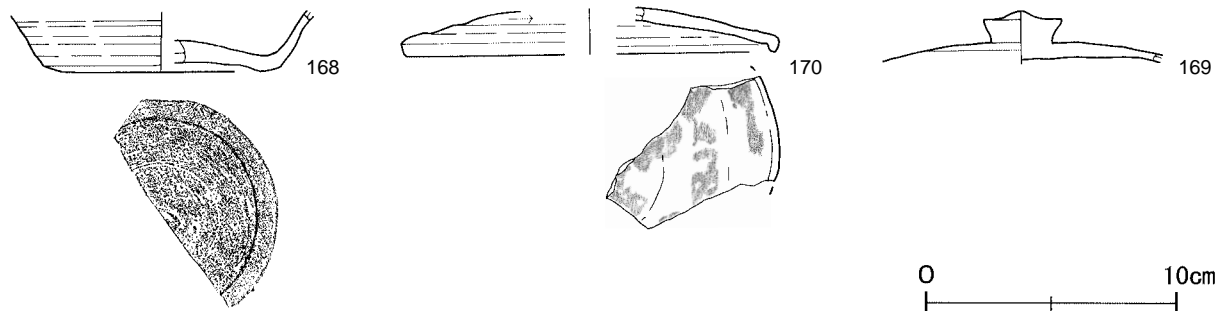
1	にぶい褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	4	にぶい褐色	炭化粒子・鹿沼バミス微量
2	褐色	ローム粒子微量	5	褐色	焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
3	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量	6	にぶい褐色	炭化粒子・鹿沼バミス微量

遺物出土状況 土師器片101点（坏1，甕100），須恵器3点（坏1，蓋2），須恵器片91点（坏53，高台付坏4，蓋20，瓶1，甕2，高坏2，鉢9）が出土している。また、混入した弥生土器片1点（壺）も出土している。168・169は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第93图 第25号住居跡実測图



第94図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
168	須恵器	坏	-	(2.4)	[9.4]	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	東部下層	20%
169	須恵器	蓋	-	2.2	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	東部下層	20%
170	須恵器	蓋	[14.6]	(1.8)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 天井回転ヘラ切り	西部下層	20% 内面墨痕 転用硯カ

第26号住居跡 (第95・96図)

位置 調査区東部のK 9 h9区, 標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第21号住居跡を掘り込み, 第25号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.00m, 短軸4.82mの方形で, 主軸方向はN-16°-Wである。壁高は70~110cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで127cm, 袖部幅151cmである。袖部は床面と同じ高さの面を基部とし, 第5・6層を積み重ねて構築されている。火床部は床面と同じ高さで, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に73cmほど掘り込み, 外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・砂粒微量	5 赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
2 にぶい褐色	焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・砂粒微量	6 にぶい褐色	粘土粒子多量, 砂粒中量, ローム粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・鹿沼パミス・砂粒少量	7 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量, 砂粒少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・鹿沼パミス・砂粒少量, 炭化粒子微量		

ピット 5か所。P 1~P 4は深さ19~69cmで, 規模と配置から支柱穴である。P 5は深さ30cmで, 南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットである。

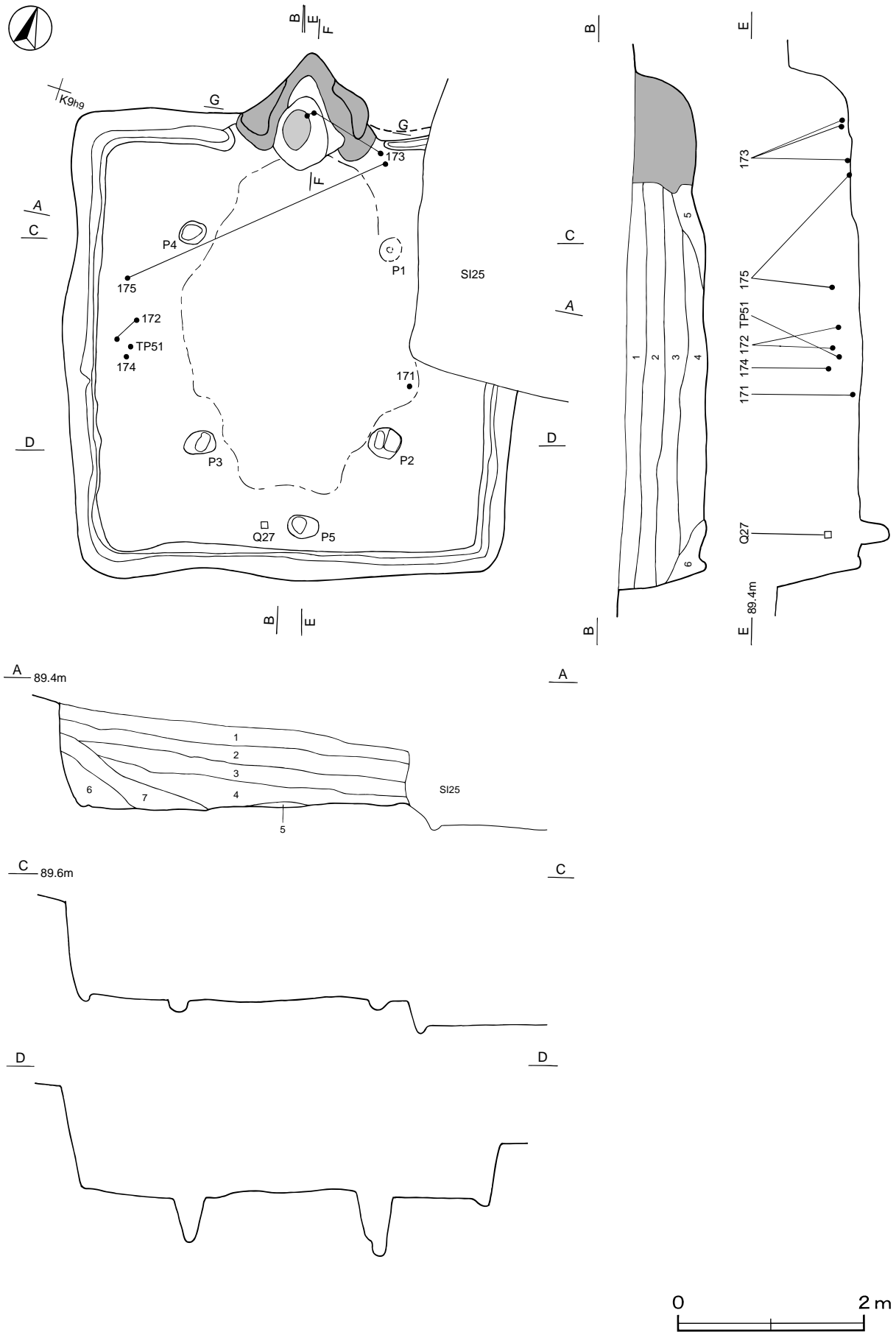
覆土 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	5 にぶい褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量
2 にぶい褐色	ローム粒子・砂粒微量	6 褐色	鹿沼パミス少量, ローム粒子・砂粒微量
3 にぶい橙色	砂粒少量, ローム粒子微量	7 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量
4 にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師器2点(高台付坏, 甕), 土師器片222点(坏3, 甕219), 須恵器3点(坏1, 盤2), 須恵器片152点(坏86, 高台付坏7, 高盤8, 蓋28, 甕12, 鉢11), 鉄滓5点が出土している。171は東部の覆土下層から出土している。173は竈内の覆土下層と右袖付近から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉と考えられる。



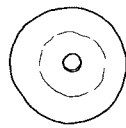
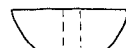
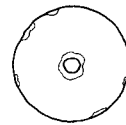
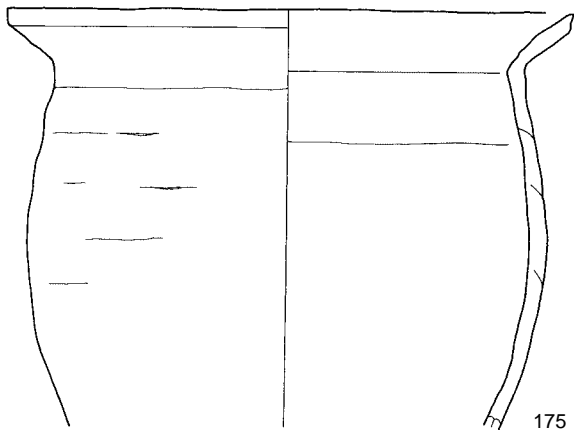
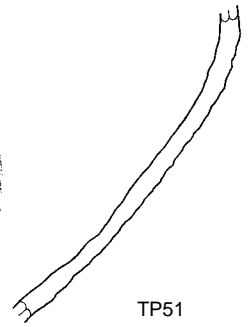
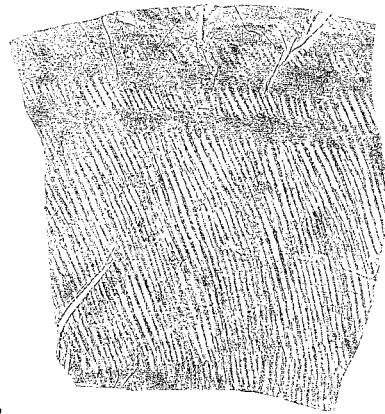
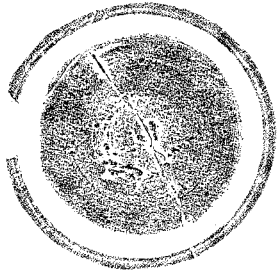
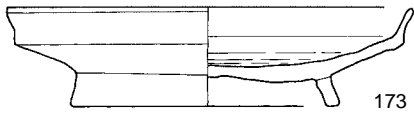
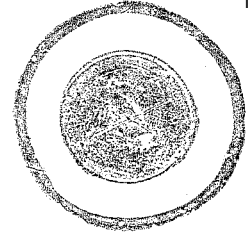
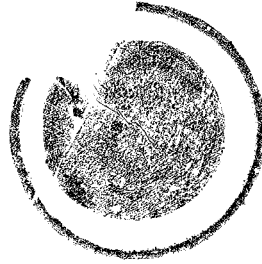
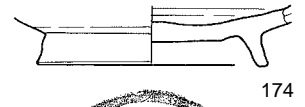
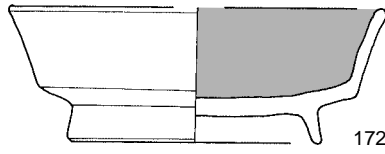
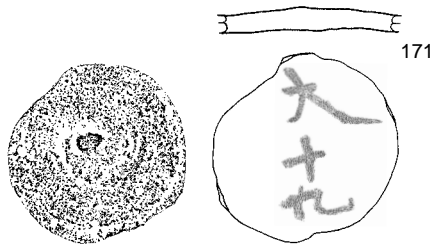
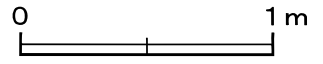
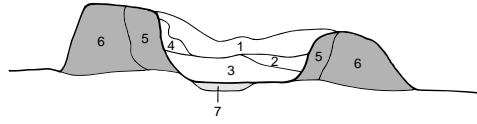
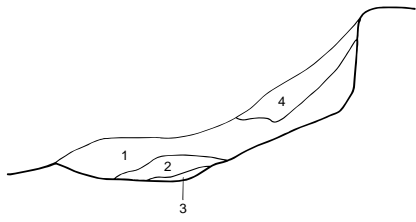
第95图 第26号住居跡实测图

F 89.2m

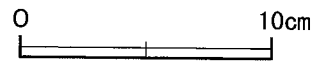
F

G

G



Q27



第96图 第26号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
171	須恵器	坏	-	(1.0)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	東部下層	底部墨書「大十九」 P L 20
172	土師器	高台付坏	[14.4]	5.4	9.8	長石・雲母	黄橙	普通	体部内・外面ナデ	西部中層	70%
173	須恵器	盤	16.1	4.0	10.6	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	竈下層	90%
174	須恵器	盤	-	(2.4)	9.1	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り 高台貼り付け後ナデ	西部中層	30% 底部ヘラ 記号「x」
175	土師器	甗	22.4	(16.5)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐	不良	口縁部内・外面ヨコナデ 輪積み痕	西部下層	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP51	須恵器	甗	-	(12.6)	-	長石・石英	暗灰黄	普通	体部外面斜位の平行叩き ナデ 当て具痕	西部下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	色	特徴	出土位置	備考
Q27	紡錘車	4.6	2.8	0.7	43.7	粘板岩	灰色		南部下層	

第27号住居跡 (第97・98図)

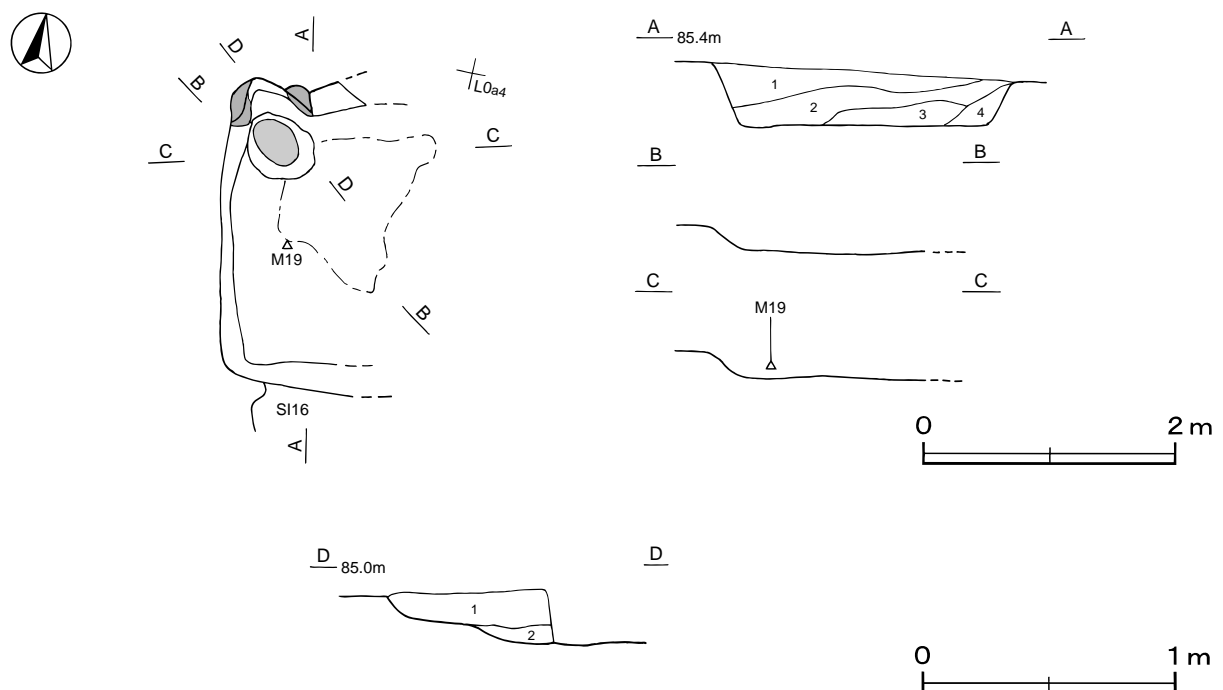
位置 調査区東部のL 0 a3区, 標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第16号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが, 長軸2.42m, 短軸1.70mが確認され, 主軸方向はN-40°-Wである。平面形は方形と推定され, 壁高は16~18cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 竈前面が踏み固められている。

竈 北西コーナー部に付設されている。規模は, 焚口部から煙道部まで87cmである。右袖の一部が残存しており, 粘土を含む極暗褐色土で構築されている。火床部は床面と同じ高さで, 火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に17cmほど掘り込み, 外傾して立ち上がっている。



第97図 第27号住居跡実測図

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少 2 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量，粘土粒子・砂粒微量
 量，炭化粒子微量

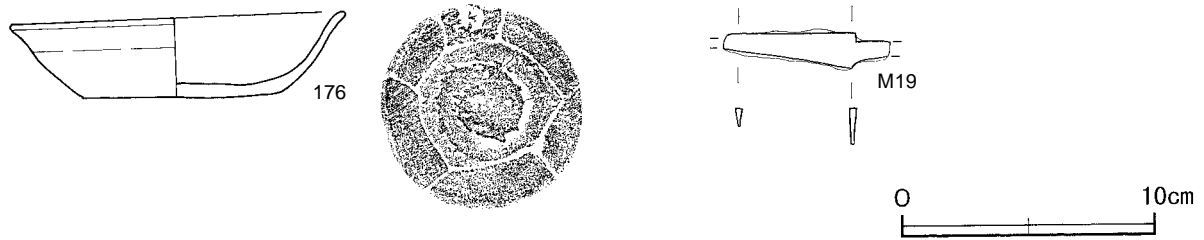
覆土 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗赤褐色 ロームブロック少量 4 極暗褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量，焼土粒子・炭化粒子
 2 極暗褐色 ロームブロック少量
 3 極暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器1点（坏），土師器片152点（坏43，甕109），須恵器片42点（坏31，甕11），金属製品2点（刀子，釘），鉄滓1点が出土している。M19は西部の覆土中層から出土している。ほとんどが細片であるが，須恵器片より土師器片の出土が多い。

所見 時期は，重複関係や出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第98図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表（第98図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
176	土師器	坏	13.2	3.2	7.9	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M19	刀子	(6.7)	1.4	0.3	(6.7)	鉄	刀身・茎一部欠損 両開	西部中層	

第28号住居跡（第91図）

位置 調査区東部のL 0 b1区，標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第24号住居，第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが，長軸1.91m，短軸1.32mが確認されている。

床 平坦で，東部が踏み固められている。

所見 硬化面に焼土の散布が若干みられたため住居と判断した。時期は，重複関係から8世紀代と考えられる。

表9 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古 新)
								支柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
11	L 0 a2	N - 12° - W	方形	3.48 × 3.38	64 - 82	平坦	一部	-	1	5	1	-	人為	土師器 土製品 須恵器	8世紀後葉	SK29・47 本跡 S 114, SD8-9
12	K 0 f3	N - 17° - W	[方形・ 長方形]	(4.06) × (3.80)	72	平坦	一部	-	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器	9世紀後葉	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古 新)
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
13	L 0b3	N - 17 ° - W	方形	3.32 × 3.10	73 - 88	平坦	ほぼ全周	4	1	-	1	-	自然 人為	土師器 土製品 須恵器 金属製品	9世紀末 - 10世紀初頭	SI15・16・22 本跡 SK23・24
14	K 0j3	N - 21 ° - W	[長方形]	4.00 × 2.87	33 - 53	平坦	(全周)	-	-	2	-	-	人為	土師器 須恵器 緑釉陶器	10世紀代	SI11,SK47 本跡
15	L 0b4	N - 36 ° - W	[方形]	3.52 × (3.37)	50 - 85	平坦	(全周)	2	1	-	1	-	人為	土師器 金属製品 須恵器	9世紀後半	SI16・22 本跡 SI13,SK23・24
16	L 0a3	N - 18 ° - W	[方形]	5.24 × (2.80)	50 - 88	平坦	(全周)	2	1	-	1	-	自然	土師器 金属製品 須恵器	8世紀後葉	本跡 SI13・15・22・ 27,SK49
17	L 9a0	N - 15 ° - W	[方形]	(3.95) × 3.80	93	平坦	全周	4	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀中 - 後葉	SI24,SB3・5・6 本跡
18	L 0c1	N - 13 ° - W	[長方形]	(5.20) × 5.08	50 - 88	平坦	(全周)	8	1	-	1	-	人為	土師器 土製品 金属製品 須恵器 石製品	8世紀中 - 後葉	TP7 本跡 SI20, SB3
19	K 9e0	N - 13 ° - W	[方形・扇形]	(5.64) × (5.14)	98	平坦	(全周)	2	1	-	-	-	自然	土師器 金属製品 須恵器	8世紀後葉	
20	L 0d1	N - 29 ° - W	方形	3.62 × 3.34	18 - 80	平坦	全周	-	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀前葉	SI18,TP1 本跡
21	K 9f0	N - 3 ° - W	[方形]	6.50 × (5.83)	105 - 125	平坦	[全周]	12	1	5	1	-	人為	土師器 灰釉陶器 須恵器	8世紀中葉	SK48 本跡 SI25・ 26
22	L 0b3	N - 17 ° - W	[長方形]	(3.75) × (2.90)	65	平坦	-	-	-	-	1	-	自然	土師器 須恵器	9世紀中葉	SI16 本跡 SI13・1 5,SK23・24
23	K 9j0	N - 13 ° - W	方形	3.24 × 3.06	68 - 76	平坦	全周	-	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器	9世紀前葉	SB5 本跡
24	L 9b0	N - 14 ° - W	[方形]	[2.90] × [2.90]	20 - 31	平坦	-	-	-	-	1	-	土師器	須恵器	9世紀前葉	SI28,SB5 本跡 SI17
25	K 9g0	N - 9 ° - W	方形	4.65 × 4.60	40 - 55	平坦	全周	4	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀後葉	SI21・26 本跡
26	K 9h9	N - 16 ° - W	方形	5.00 × (4.82)	70 - 110	平坦	(全周)	4	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器	8世紀後葉	SI21 本跡 SI25
27	L 0a3	N - 40 ° - W	[方形]	2.42 × [1.70]	16 - 18	平坦	-	-	-	-	1	-	自然	土師器 金属製品 須恵器	10世紀中葉	SI16 本跡
28	L 0b1	-	不明	(1.91) × (1.32)	-	平坦	-	-	-	-	-	-	-	-	8世紀代	本跡 SI24,SB3

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第99図)

位置 調査区東部のK 0 h3区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第4号掘立柱建物、第1・2号柵列、第10号溝、第20号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 東部が残存していないため規模と構造は明確ではない。桁行3間、梁行1間が確認され、側柱建物跡と推定される。桁行方向がN - 4° - Eの南北棟である。規模は桁行6.9m (23尺)、梁行2.1m (7尺)以上で、面積は14.49㎡と推定される。柱間寸法は、北妻から桁行2.4m (8尺)、2.1m (7尺)、2.4m (8尺)で、梁行は2.1m (7尺)を基調としている。

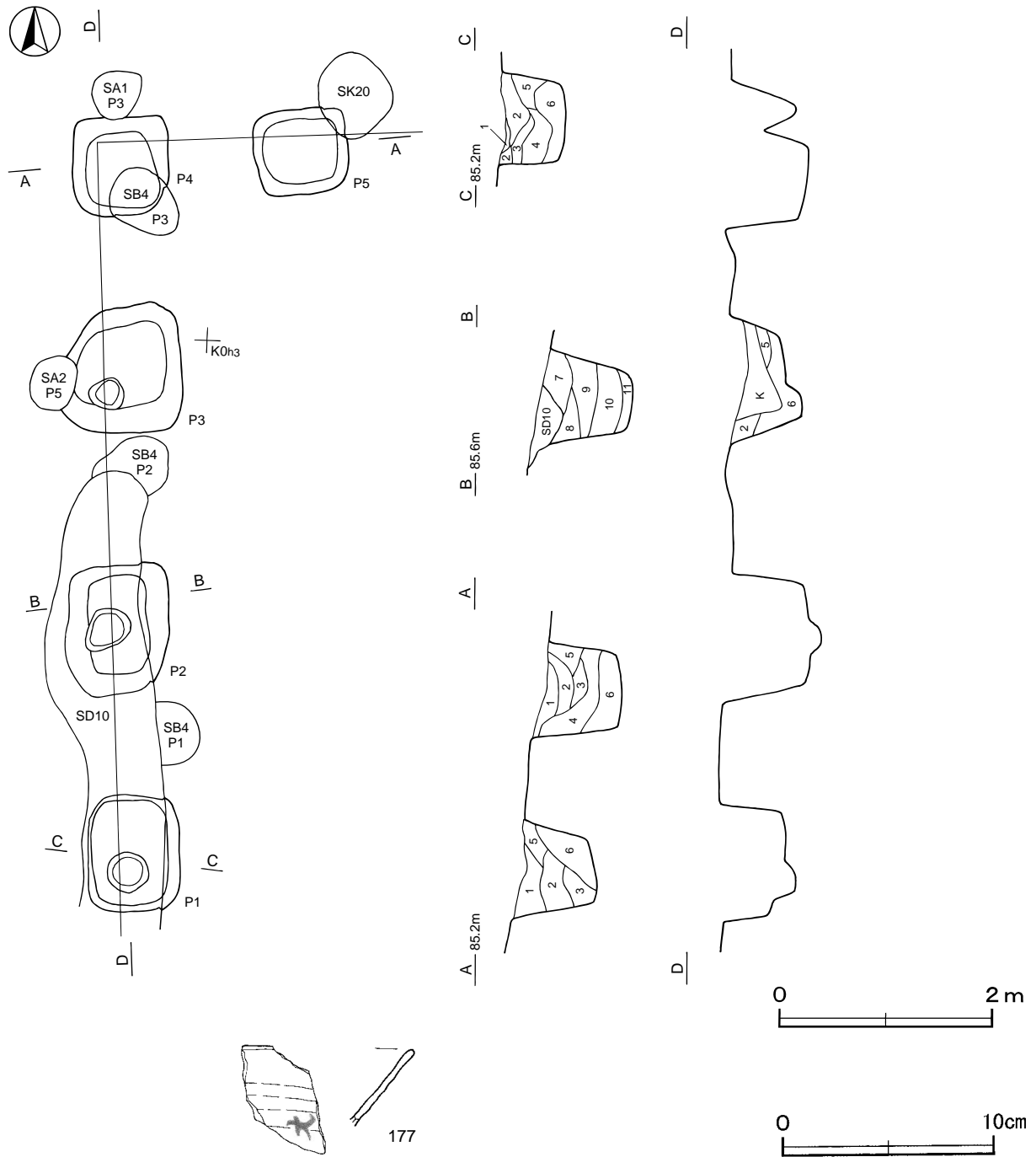
柱穴 5か所。平面形は隅丸長方形で、規模は長径90~118cm、短径81~95cmである。深さは66~90cmで、断面形は逆台形である。土層断面中の第1~3層は柱抜き取り後の覆土である。その他の層は埋土である。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ロームブロック中量	7 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼パミス少量	8 黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量	9 灰褐色	ロームブロック微量
4 褐色	鹿沼パミス多量、ロームブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック少量、砂粒微量
5 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	11 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
6 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量		

遺物出土状況 土師器片44点 (坏2, 甕42), 須恵器1点 (坏), 須恵器片63点 (坏51, 高台付坏1, 蓋4, 瓶3, 甕4) が各柱穴から出土している。また混入した縄文土器片2点, 鉄滓1点も出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第99図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

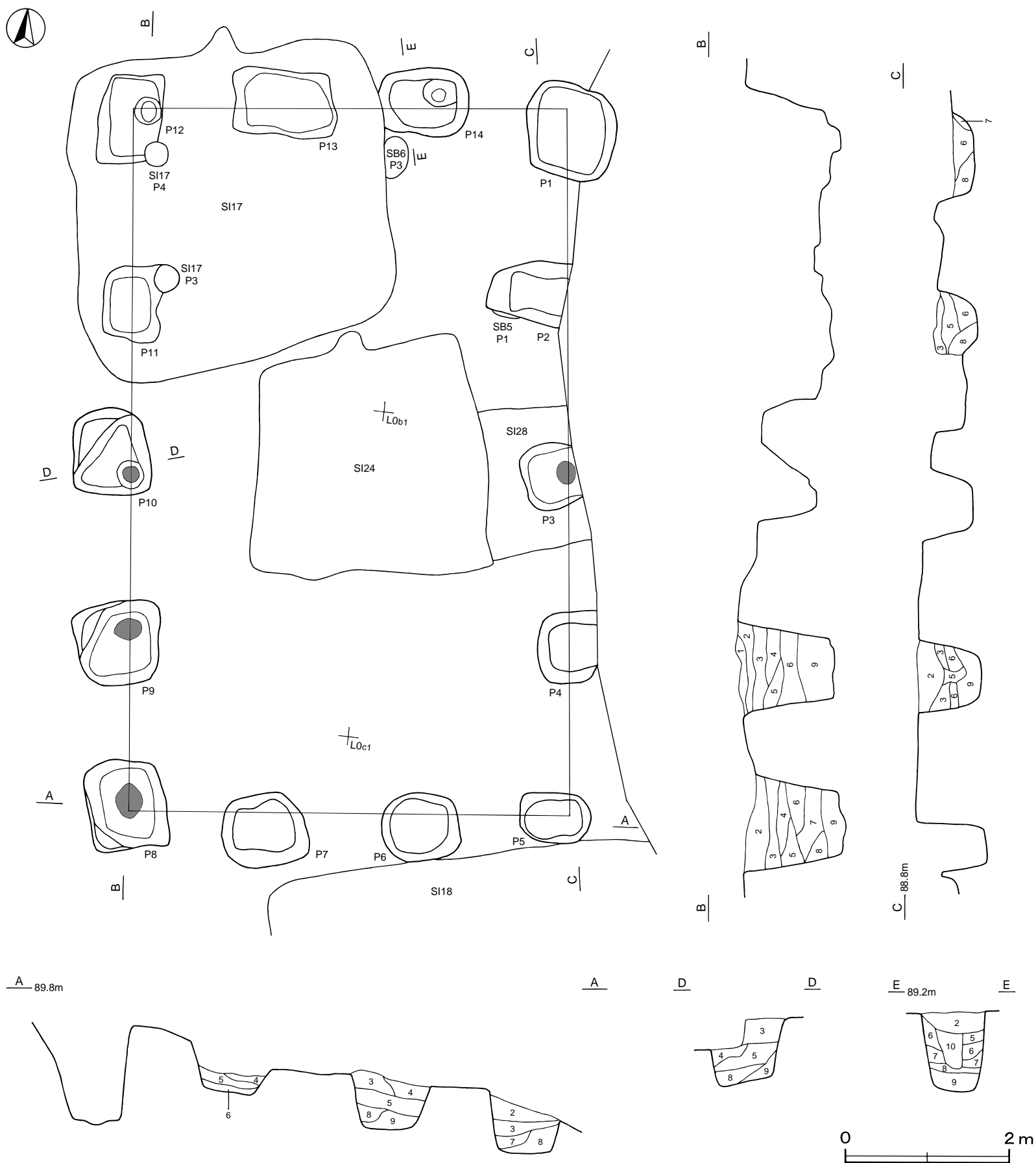
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
177	土師器	坏	-	(3.6)	-	長石・雲母	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ	P 4 抜き取り痕	体部外面墨書「大」 P L 20

第3号掘立柱建物跡 (第100図)

位置 調査区東部のL 9 b0区, 標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第18・28号住居跡, 第5・6号掘立柱建物跡を掘り込み, 第17・24号住居に掘り込まれている。



第100図 第3号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向がN-6°-Wの南北棟である。規模は桁行8.7m、梁行5.4mで、面積は46.98㎡である。柱間寸法は、桁行は北から2.25m（7.5尺）、1.95m（6.5尺）、1.95m（6.5尺）、2.25m（7.5尺）で、梁行は1.8m（6尺）を基調としている。

柱穴 14か所。平面形は長方形および隅丸長方形で、規模は長軸82~150cm、短軸60~121cmである。深さは50~120cmで、断面形は逆台形である。第10層は柱痕に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。その他の層は埋土で、ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土が互層をなしている。深く掘り込まれているP8~10には、掘り方のコーナー部に段差をもつ。掘り込みの際にこの段を足場として利用していたものと考えられる。

土層解説（各柱穴共通）

1 灰褐色 粘土粒子中量, ローム粒子微量	6 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
2 褐色 ロームブロック微量	7 褐色 ロームブロック中量, 鹿沼パミス微量
3 暗褐色 ロームブロック微量	8 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
4 褐色 ロームブロック少量	9 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
5 黒褐色 ロームブロック少量	10 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片12点（坏2，甕10），須恵器片7（坏6，蓋1）が各柱穴から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

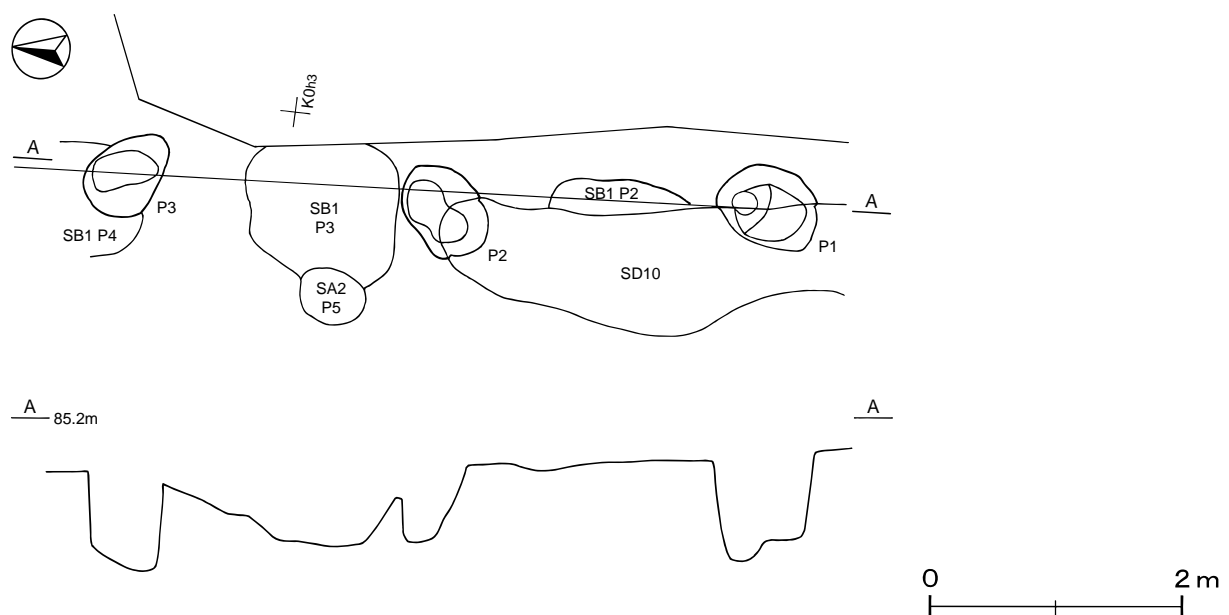
所見 桁行4間、梁行3間の大形の掘立柱建物跡である。斜面に築かれており、現在水田がある平地との比高差は10m以上あることから、倉庫としてみることは難しく、居宅と想定される。時期は、重複関係から8世紀後葉から9世紀初頭と考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第101図）

位置 調査区東部のK0h3区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込み、第10号溝に掘り込まれている。

規模と構造 東部が残存していないため規模と形状が明確でなく、桁行2間のみが確認されている。西側に柱



第101図 第4号掘立柱建物跡実測図

穴は確認できないため、東側に展開していたものと思われる。桁行方向はN-4°-Wで、他の掘立柱建物跡や斜面に位置している点を考慮すると、南北棟と推定される。規模は桁行4.8mである。柱間寸法は、2.4m（8尺）を基調としており、均等に配置されている。

柱穴 3か所。平面形は楕円形で、規模は長径70~83cm、短径53~62cmである。深さは60~80cmで、断面形はU字形または逆台形である。

遺物出土状況 土師器片1点（甕）、須恵器片4点（坏）が各柱穴から出土している。いずれも細片のため、図示できない。

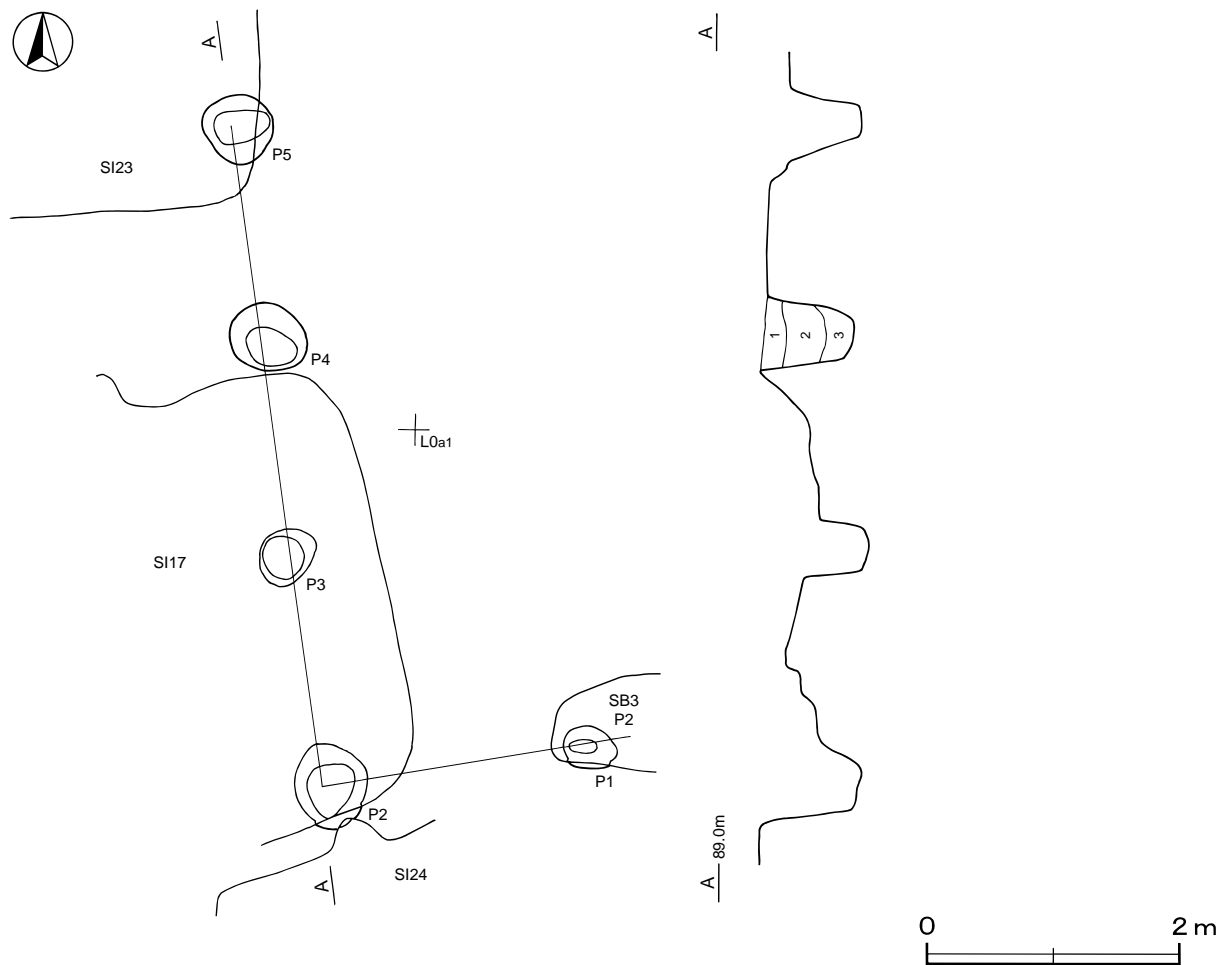
所見 掘立柱建物跡のみが重複し、竪穴住居跡との重複はみられないため、この場所を意識して構築したものと思われる。時期は、重複関係から9世紀代と考えられる。

第5号掘立柱建物跡（第102図）

位置 調査区東部のK 9 j0~L 0 a1区、標高89mの丘陵東斜面に位置している。

重複関係 第17・23号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部が削平されているため、規模や形状は明確でない。桁行3間、梁行1間以上の側柱建物跡で、桁行方向はN-8°-Wの南北棟と推定される。規模は桁行5.4m、梁行2.1mが確認され、面積は11.34㎡である。



第102図 第5号掘立柱建物跡実測図

る。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）で、梁行は2.1m（7尺）を基調としており、規則的に配置されている。

柱穴 5か所。平面形は円形および楕円形で、規模は長軸43～68cm，短軸33～58cmである。深さは40～82cmで、断面形はU字形及び逆台形である。第1～3層は埋土で、ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が互層をなしている。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 3 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量 | |

所見 L字状に規則的に並び、ほぼ同じ深さで掘られていることから掘立柱建物跡と考えられる。時期は、重複関係や同斜面部に奈良・平安時代の遺構が広がっていることから、8世紀前半と想定される。

第6号掘立柱建物跡（第103図）

位置 調査区東部のK 9 j0～L 9 a0区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第17号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

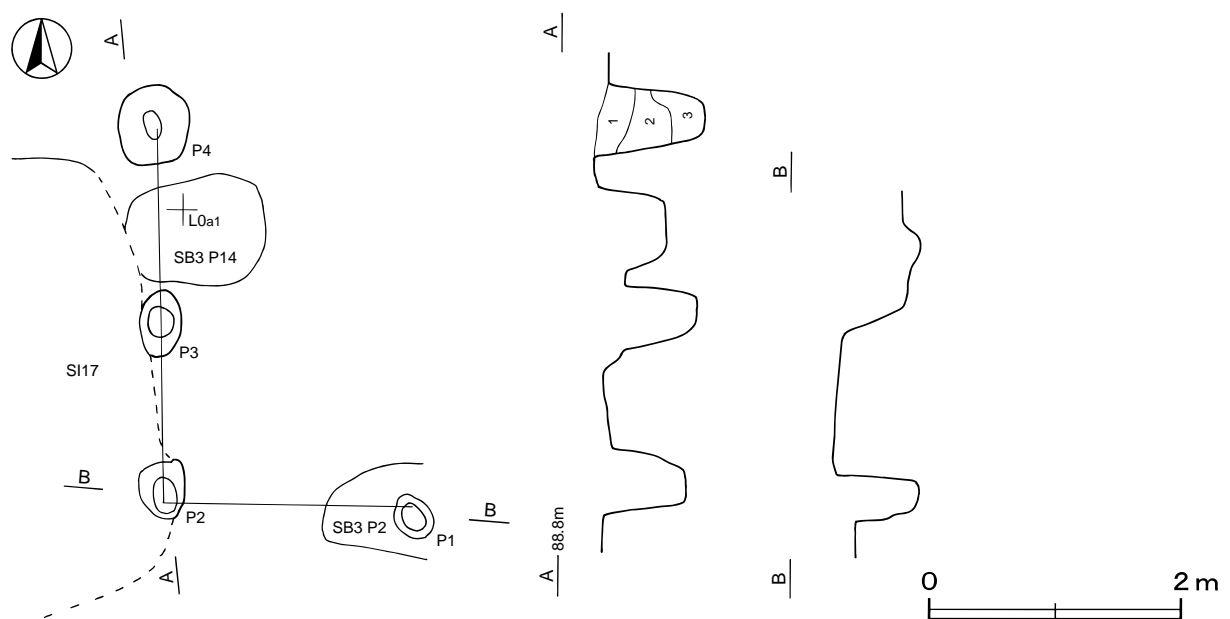
規模と形状 東部が削平されているため、規模や形状は明確でない。桁行2間以上、梁行1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Wの南北棟と推定される。規模は桁行3.0m，梁行2.1mが確認され、面積は6.3㎡である。柱間寸法は桁行が1.5m（5尺），梁行が2.1m（7尺）を基調としており、規則的に配置されている。

柱穴 4か所。平面形は円形及び楕円形で、規模は長軸37～63cm，短軸28～56cmである。深さは60～87cmで、断面形は逆台形である。第1～3層は埋土で、ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が互層をなしている。

土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 3 褐色 ロームブロック微量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量 | |

所見 L字状に規則的に並び、ほぼ同じ深さで掘られていることから掘立柱建物跡と考えられる。時期は、重複関係や同斜面部に奈良・平安時代の遺構が広がっていることから、8世紀前半と想定される。



第103図 第6号掘立柱建物跡実測図

表10 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

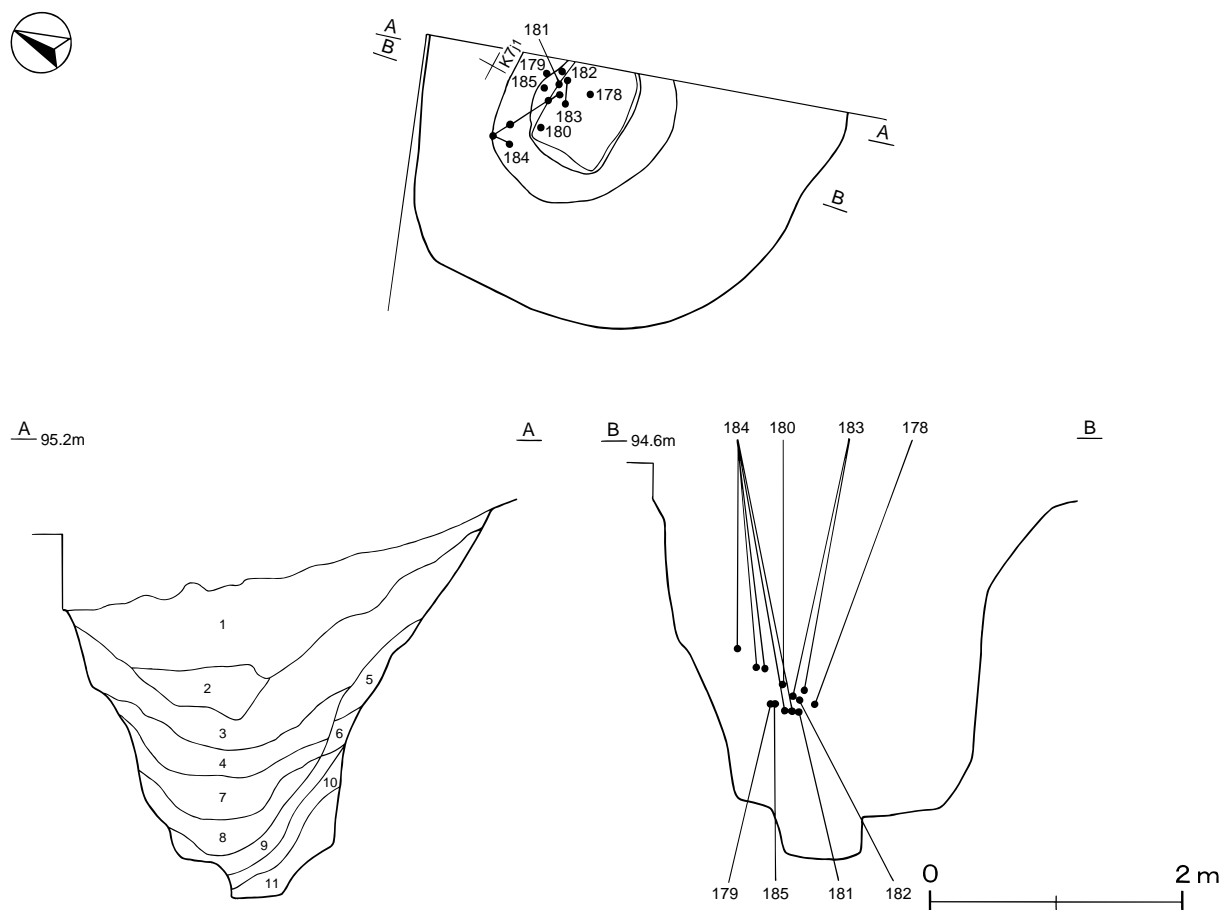
番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模 (m) (長軸×短軸)	面積 (㎡)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古・新)
1	K 0h3	N - 4° - W	3 × (1)	6.9 × (2.1)	(14.49)	側柱	2.4 / 2.1	2.1	隅丸長方形	66 - 90	土師器(坏・甕) 須惠器(坏・高台付 坏・蓋・瓶・甕)	8世紀後葉	本跡 SB4,SD10,SA1・2, SK20
3	L 9b0	N - 6° - W	4 × 3	8.7 × 5.4	46.98	側柱	2.25 / 1.95	1.8	長方形・隅丸長方形	50 - 120	土師器(坏・甕) 須惠器(坏・蓋)	8世紀後葉 - 9世紀初頭	SI18・28,SB5・6 本跡 SI17・24
4	K 0h3	N - 4° - W	2 × -	4.8 × -	-	-	2.4	2.4	楕円形	60 - 80	土師器(甕) 須惠器(坏)	9世紀代	SB1 本跡 SD10
5	K 9j0	N - 8° - W	3 × (1)	5.4 × (2.1)	(11.34)	側柱	1.8	2.1	円形・楕円形	40 - 82		8世紀前半	本跡 SI17・23,SB3
6	L 9a0	N - 1° - W	2 × (1)	3.0 × 2.1	(6.3)	側柱	1.5	2.1	円形・楕円形	60 - 87		8世紀前半	本跡 SI17,SB3

(3) 土坑

第51号土坑 (第104~106図)

位置 調査区西部のK 6 j0区, 標高94mの丘陵西斜面部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外のため, 規模や形状は明確ではない。長径3.1m, 短径は2.1mの楕円形と推定され, 長径方向はN - 16° - Wである。深さは2.5mである。確認面から挿鉢状に深さ150cm掘り込んだ後, 下部はほぼ円筒状に掘り込んでいる。



第104図 第51号土坑実測図

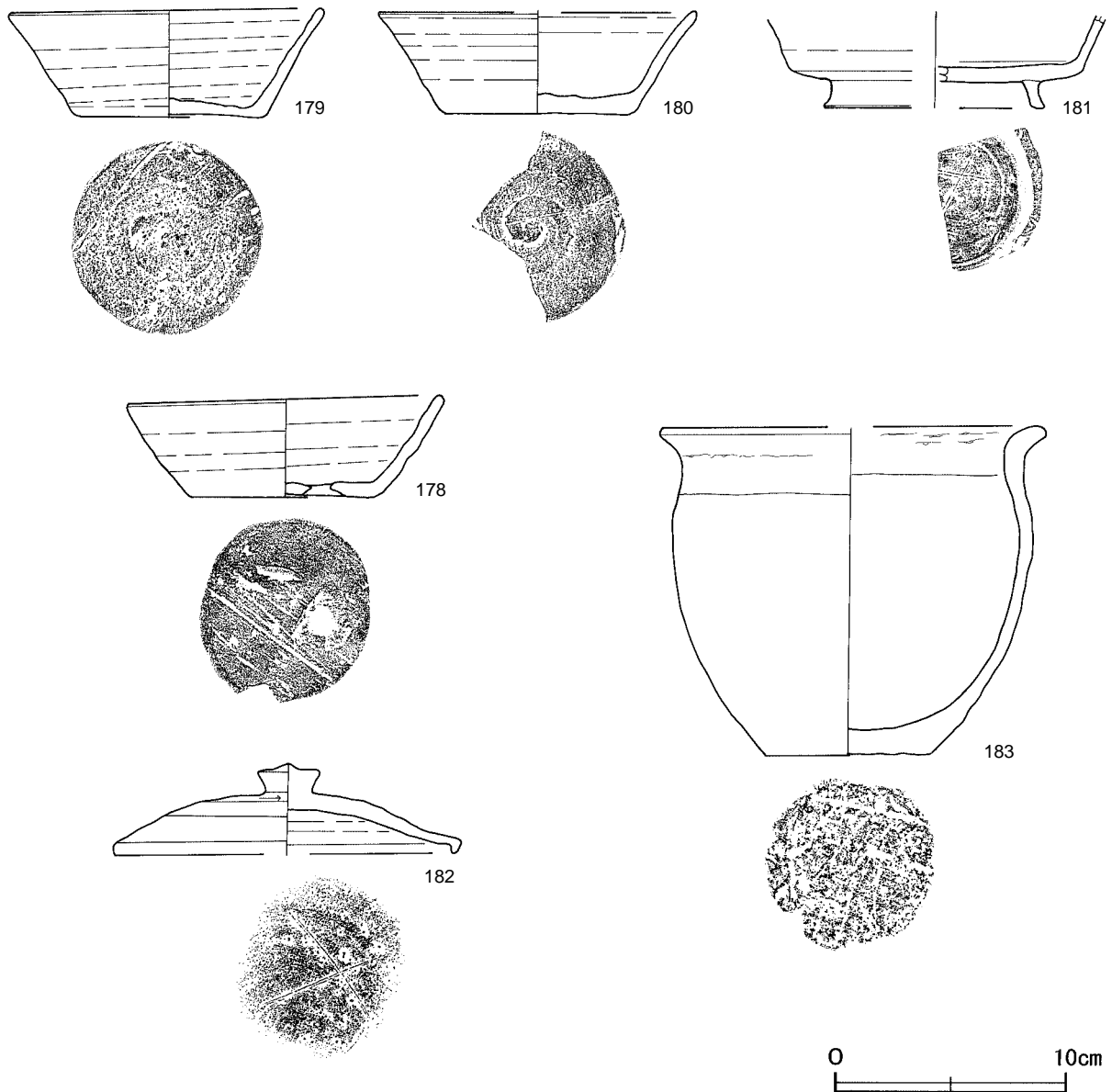
覆土 11層に分層される。周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

土層解説

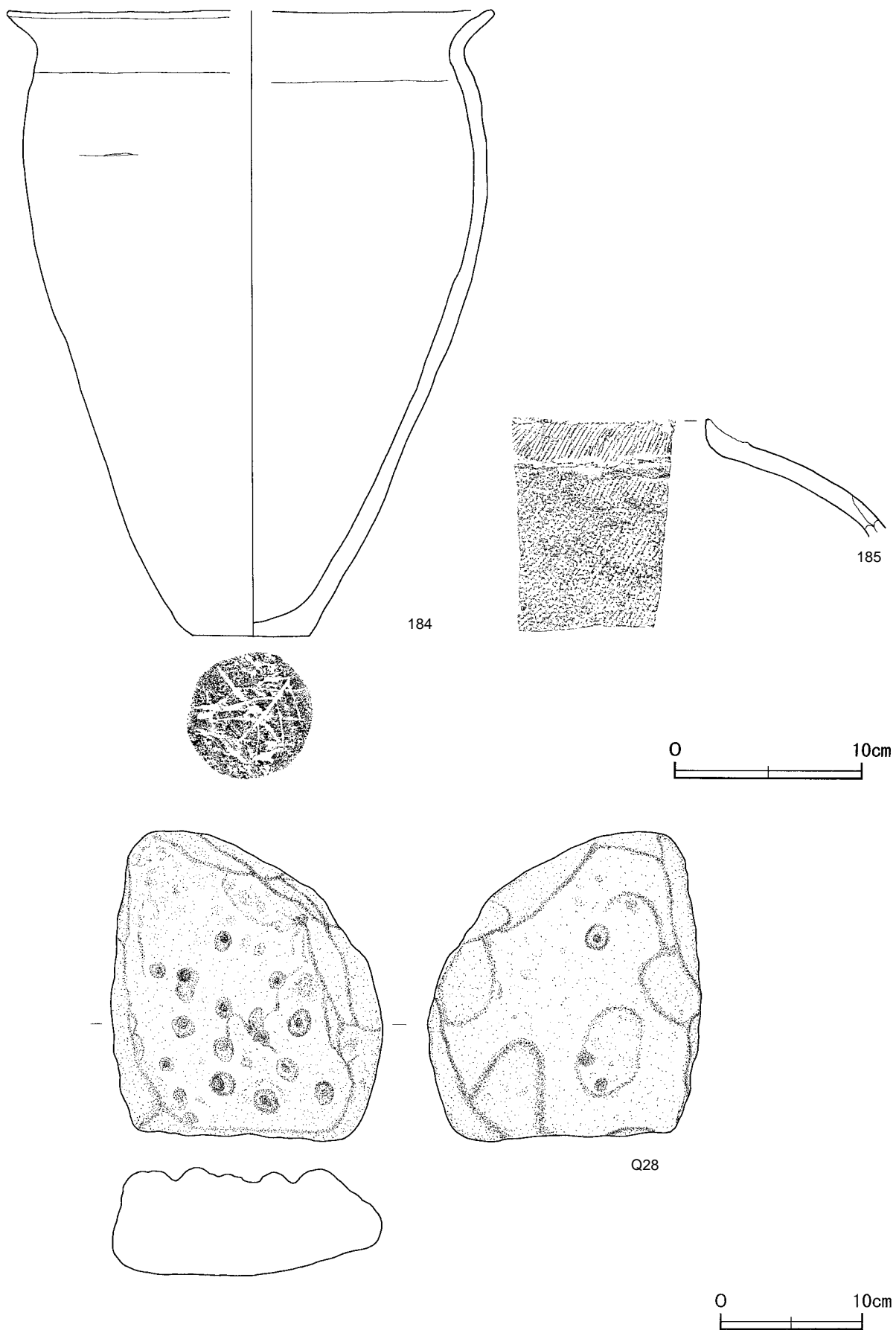
1 黒 褐 色	ローム粒子微量	7 極暗 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色	炭化粒子少量, ローム粒子微量	8 暗 褐 色	焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒 褐 色	ローム粒子, 炭化粒子微量	9 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック微量
4 黒 褐 色	ローム粒子中量	10 褐 色	ロームブロック多量
5 暗 褐 色	ローム粒子中量	11 褐 色	ロームブロック中量
6 暗 褐 色	ローム粒子多量		

遺物出土状況 土師器2点(甕), 土師器片39点(甕), 須恵器6点(坏3, 高台付坏1, 蓋1, 甕1), 須恵器片10点(坏4, 蓋1, 甕5), 石器1点(凹石)が出土している。また, 混入した縄文土器片1点, 弥生土器片39点(壺)が出土している。178~185は中央部の覆土中層からまとまって出土している。

所見 丘陵西斜面部に位置し, 底面にくぼみをもつ楕円状の土坑であり, 氷室として使用されていたと考えられる。遺物が覆土中層に集中していることから, 氷室としての機能が終了し, 埋没途中に投棄されたと思われる。時期は, 出土遺物から8世紀後葉と考えられる。



第105図 第51号土坑出土遺物実測図(1)



第106图 第51号土坑出土遗物实测图(2)

第51号土坑出土遺物観察表 (第105・106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
178	須恵器	坏	13.5	4.4	7.9	長石・石英・白色 粒子	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 持ちヘラ削り 底部穿孔	中央部中層	98% P L 18
179	須恵器	坏	13.4	4.7	8.2	長石・石英・礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ ラ切り後一方向のヘラ削り	中央部中層	80% P L 18
180	須恵器	坏	[13.6]	4.4	[8.0]	長石・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ ラ切り	中央部中層	40% 底部ヘラ 記号「x」
181	須恵器	高台付坏	-	(4.2)	[9.4]	長石・礫	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ ラ切り後高台貼り付け	中央部中層	20% 底部ヘラ 記号「x」
182	須恵器	蓋	[14.8]	3.9	-	長石・雲母・小礫	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	中央部中層	内面ヘラ記号 「x」 P L 19
183	土師器	小形甕	[16.7]	14.2	7.2	長石・石英・雲母・ 礫	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 後ナデ 体部内面ナデ	中央部中層	60% P L 20
184	土師器	甕	[25.8]	33.3	6.2	長石・石英・金雲 母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 向のナデ 底部木葉痕	中央部中層	70% P L 20
185	須恵器	甕	-	(6.2)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面斜位の平行叩き ナデ 体部内面ナ デ	中央部中層	自然釉

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q28	凹石	21.7	19.0	7.6	4480.0	安山岩	表面14孔 裏面1孔	覆土下層	

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第107図, 付図)

位置 調査区西部のL 6 b4~L 7 b2区, 標高95~98mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1・2号墳, 第3号溝跡を掘り込んでいる。

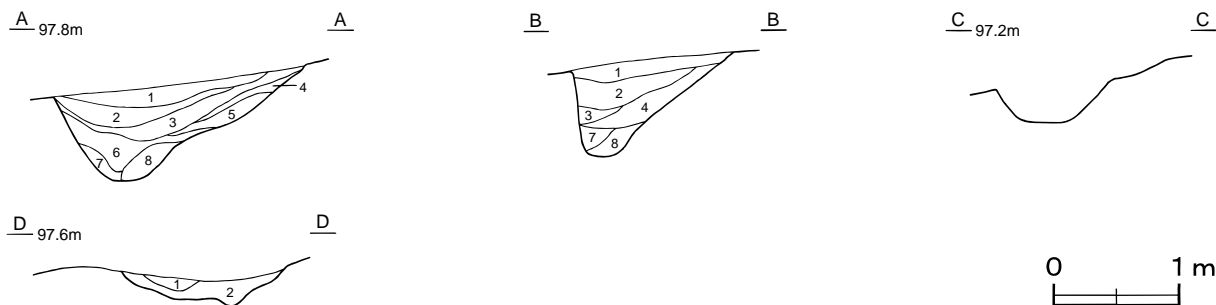
規模と形状 北西部が削平によって消失している。L 6 b4区から南東方向 (N-48°-W) へ直線的に約17m延びており, L 6 e7区で屈曲し, 北東方向 (N-59°-E) に直線的に約21m延びている。第1号墳の周溝に重なるように掘り込んでいる。確認された長さは37.44mで, 上幅0.77~2.20m, 下幅0.20~0.60m, 深さ30~70cmである。断面形はU字形である。

覆土 8層に分層される。上層の第1層は硬化しており, 埋没途中に道路として二次利用しているものと思われる。第2~8層は周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子少量, ロームブロック微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量, 鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 流れ込みと思われる弥生土器片65点 (壺), 土師器片 5点 (坏) が出土している。



第107図 第1号溝跡実測図

所見 第1・3号墳間を通り、第1号墳の周溝を掘り込んでいることから、古墳を意識して掘り込んでいることがうかがえる。溝の時期や性格は不明である。二次利用されている道路は、尾根筋にあたり、丘陵上に近世の祠が存在することから、峠道として利用されていたものと考えられる。二次利用された道路の時期は、祠と同時期に存在していたとすると近世が想定されるが、明確な時期や性格は不明である。

第3号溝跡（第108図、付図）

位置 調査区西部のL 6 c5～L 6 d6区、標高95mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

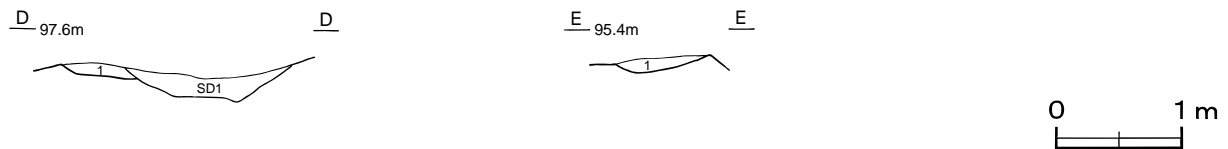
規模と形状 L 6 c5区から南東方向（N-52°-W）に直線的に伸びている。確認された長さは7.40mで、上幅0.50～0.70m、下幅0.22～0.40m、深さ10cmである。断面形はU字形である。

覆土 単一層で、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 炭化粒子・鹿沼パミス少量、ローム粒子・焼土粒子微量

所見 出土遺物が無いため、時期や性格は不明である。



第108図 第3号溝跡実測図

第4号溝跡（第109図、付図）

位置 調査区西部のL 6 d5～L 7 j8区、標高95mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1号住居跡、第3号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部が削平によって消失している。L 6 d5区から南東方向（N-44°-W）に直線的に約14m伸びており、L 6 f7区で屈曲し、南方向（N-14°-W）に直線的に約16m伸びている。第3号墳の周溝と重なるように掘り込んでいる。確認された長さは30.50mで、上幅1.40～2.70m、下幅0.27～0.83m、深さ20～40cmである。断面形はU字形である。

覆土 9層に分層される。上層の第1層は硬化しており、埋没途中で道路として二次利用しているものと思われる。第2～9層は周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

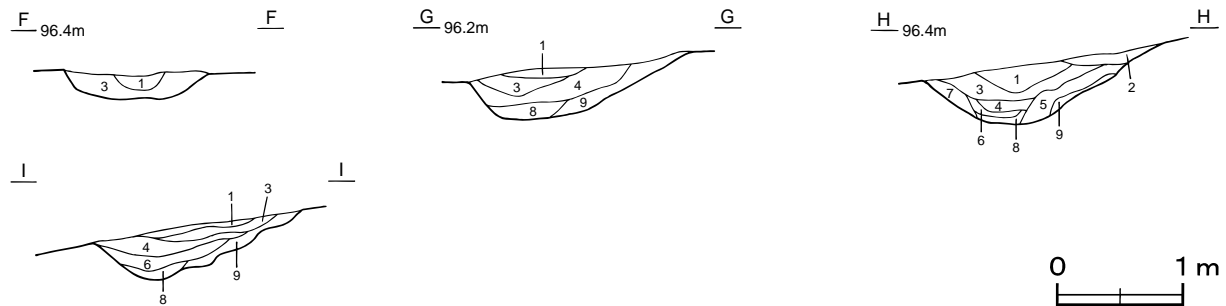
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量、鹿沼パミス微量 | 7 褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス中量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 9 明褐色 | 鹿沼パミス多量、ローム粒子中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 流れ込みと思われる弥生土器片18点（壺）、土師器片2点（坏、甕）、須恵器片2点（坏、甕）が出土している。

所見 第1・3号墳の間を通り、第3号墳の周溝を掘り込んでいることから、第1号溝のように古墳を意識し

て掘り込んだものと考えられる。溝の時期や性格は不明である。二次利用されている道路は、尾根筋にあたり、丘陵上に近世の祠が存在することから、第1号溝跡と同様に峠道として利用されていたものと考えられる。道路の時期は、祠と同時期に存在していたとすると近世が想定されるが、明確な時期は不明である。



第109図 第4号溝跡実測図

第5号溝跡（第110図，付図）

位置 調査区西部のL 6 f7～L 7 h1区，標高96～98mの丘陵東斜面部に位置している。

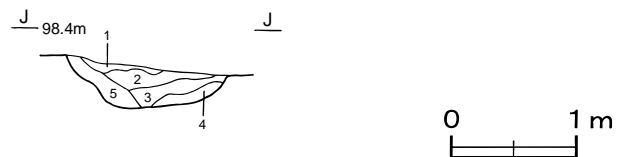
重複関係 第2・3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 L 6 f7区から南東方向（N-59°-W）に直線的に延びている。確認された長さは18.40mで，上幅0.90～1.40m，下幅0.40～0.94m，深さ34cmである。断面形はU字形である。

覆土 5層に分層される。周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 黒色 | ローム粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量，焼土粒子微量 |
| 4 | 褐色 | 鹿沼パミス中量，ローム粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |



第110図 第5号溝跡実測図

遺物出土状況 流れ込みと思われる弥生土器片22点（壺），土師器片21点（坏3，高台付碗10，鉢7，甕1），須恵器片2点（坏，瓶）が出土している。

所見 時期は，弥生時代の堅穴住居跡を掘り込んでおり，土師器・須恵器が出土していることから，奈良・平安時代以降であるが，明確な時期は不明である。

第8号溝跡（第111図，付図）

位置 調査区東部のK 0 h2～L 0 c2区，標高86mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第2号陥し穴，第11号住居跡，第9号溝跡，第2～4号柵列跡，第5号ピット群を掘り込んでいる。

規模と形状 K 0 h2区から南方向（N-2°-W）に直線的に延びている。確認された長さは20.10mで，上幅0.47～0.85m，下幅0.15～0.50m，深さ6cmである。断面形はU字形である。

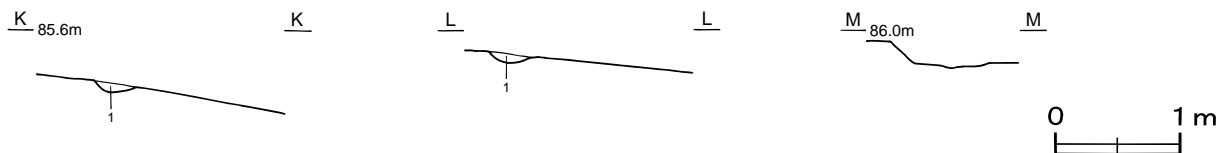
覆土 単一層で，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック微量 |
|---|-----|-----------|

遺物出土状況 流れ込みと思われる土師器片1点(甕), 須恵器片6点(坏3, 甕3)が出土している。

所見 時期は, 平安時代の竪穴住居跡を掘り込んでいることから9世紀後葉以降であるが, 明確な時期は不明である。



第111図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡 (第112図, 付図)

位置 調査区東部のK 0 f2~L 0 a2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第11号住居跡, 第1~4号柵列跡, 第5号ピット群を掘り込み, 第8・10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部は調査区域外に延びており, K 0 f2区から南方向(N-2°-W)に直線的に延びている。確認された長さは17.00mで, 上幅0.66~1.20m, 下幅0.20~1.00m, 深さ10~12cmである。断面形はU字形である。

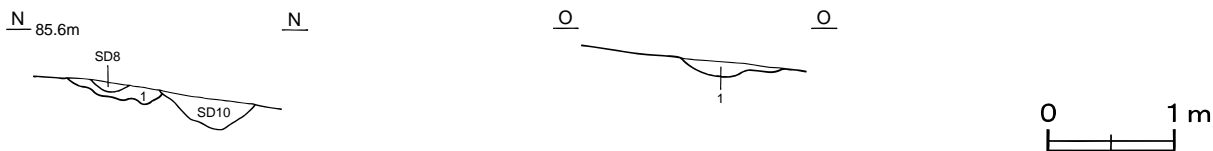
覆土 単一層で, 自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 流れ込みと思われる土師器片24点(坏2, 甕22), 須恵器片14点(坏13, 蓋1)が出土している。

所見 時期は, 平安時代の竪穴住居跡を掘り込んでいることから9世紀後葉以降であるが, 明確な時期は不明である。



第112図 第9号溝跡実測図

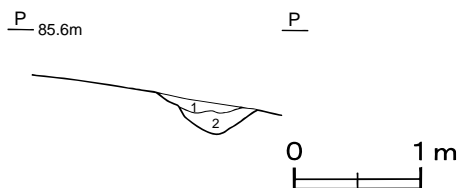
第10号溝跡 (第113図, 付図)

位置 調査区東部のK 0 h2~K 0 j2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1・4号掘立柱建物跡, 第9号溝跡, 第1・2号柵列跡を掘り込んでいる。

規模と形状 K 0 h2区から南方向(N-2°-W)に直線的に延びている。確認された長さは8.80mで, 上幅0.36~0.88m, 下幅0.13~0.50m, 深さ25cmである。断面形はU字形である。

覆土 2層に分層され, 自然堆積と考えられる。



第113図 第10号溝跡実測図

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量

2 褐色 鹿沼パミス少量, ローム粒子微量

所見 時期は、重複関係より9世紀後葉以降であるが、明確な時期は不明である。

表11 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規 模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古 新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	L 6 b4 ~ L 7 b2	N - 48° - W N - 59° - E	U字形	(37.44)	0.77 ~ 2.20	0.20 ~ 0.60	30 ~ 70	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片	TM1・2,SD3 本跡
3	L 6 c5 ~ L 6 d6	N - 52° - W	U字形	(7.40)	0.50 ~ 0.70	0.22 ~ 0.40	10	緩斜	平坦	自然		本跡 SD1
4	L 6 d5 ~ L 6 j8	N - 44° - W N - 14° - W	U字形	(30.50)	1.40 ~ 2.70	0.27 ~ 0.83	20 ~ 40	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片 須恵器片	SI1, TM3 本跡
5	L 6 f7 ~ L 7 h1	N - 59° - W	U字形	18.40	0.90 ~ 1.40	0.40 ~ 0.94	34	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片 須恵器片	SI2・3 本跡
8	K 0 h2 ~ L 0 c2	N - 2° - W	U字形	20.10	0.47 ~ 0.50	0.15 ~ 0.50	6	緩斜	平坦	自然	土師器片 須恵器片	SI11, TP2, SD9, SA2 ~ 4, PG5 本跡
9	K 0 f2 ~ K 0 a2	N - 2° - W	U字形	(17.00)	0.66 ~ 1.20	0.20 ~ 1.00	10 ~ 12	緩斜	皿状	自然	土師器片 須恵器片	SI11, SA1 ~ 4, PG5 本跡 SD8・10
10	K 0 h2 ~ K 0 j2	N - 2° - W	U字形	8.80	0.36 ~ 0.88	0.13 ~ 0.50	25	緩斜	平坦	自然		SB1・4, SD9, SA1・2 本跡

(2) 柵列跡

第1号柵列跡 (第114図)

位置 調査区東部のK 0 f2~K 0 i2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込み, 第9・10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長さは10.7mで, 方向はN - 1° - Wである。柱間寸法は1.0~3.7mである。

柱穴 6か所。長径36~56cm, 短径28~50cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く, すべて抜き取り痕と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みと思われる須恵器片2点(坏, 蓋)が出土している。

所見 柱間尺に統一性がなく, 崖部の下に沿って並んでいるため, 土止めとして使われていた可能性がある。時期は不明である。

第2号柵列跡 (第114図)

位置 調査区東部のK 0 f2~K 0 i2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

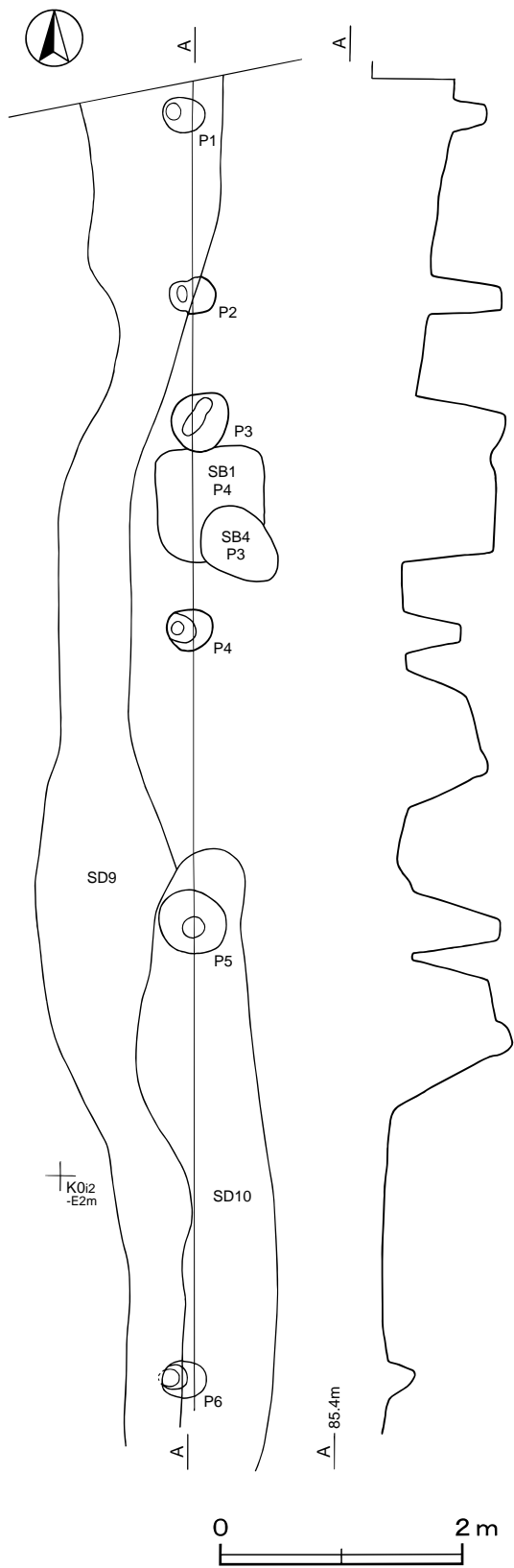
重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込み, 第8~10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長さは10.3mで, 方向はN - 0°である。柱間寸法は0.4~1.8mである。

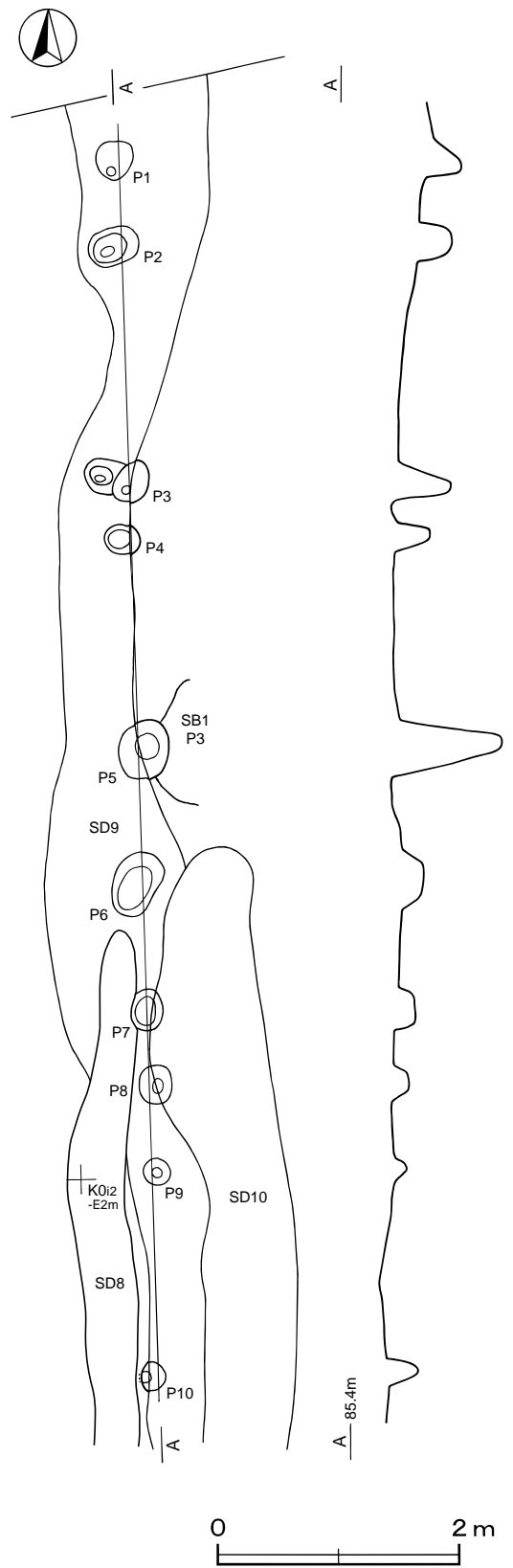
柱穴 10か所。長径20~54cm, 短径20~42cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く, すべて抜き取り痕と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みと思われる土師器片2点(甕)が出土している。

所見 柱間尺に統一性がなく, 崖部の下に沿って並んでいるため, 土止めとして使われていた可能性がある。時期は不明である。



第 1 号柵列跡



第 2 号柵列跡

第 114 图 第 1・2 号柵列跡実測图

第3号柵列跡 (第115図)

位置 調査区東部のK0h2~K0i2区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

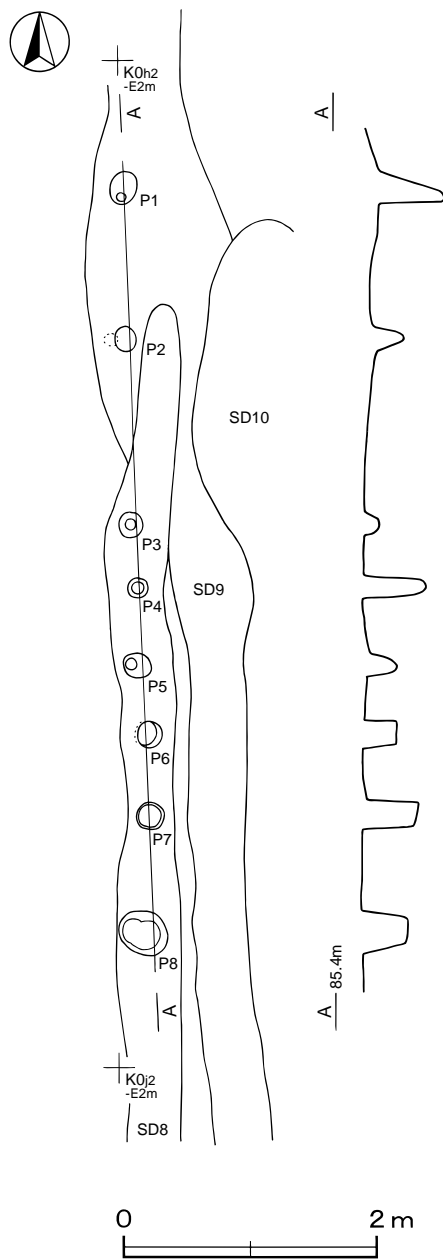
重複関係 第8・9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長さは6.2mで、長軸方向はN-1°-Wである。柱間寸法は0.5~1.4mである。

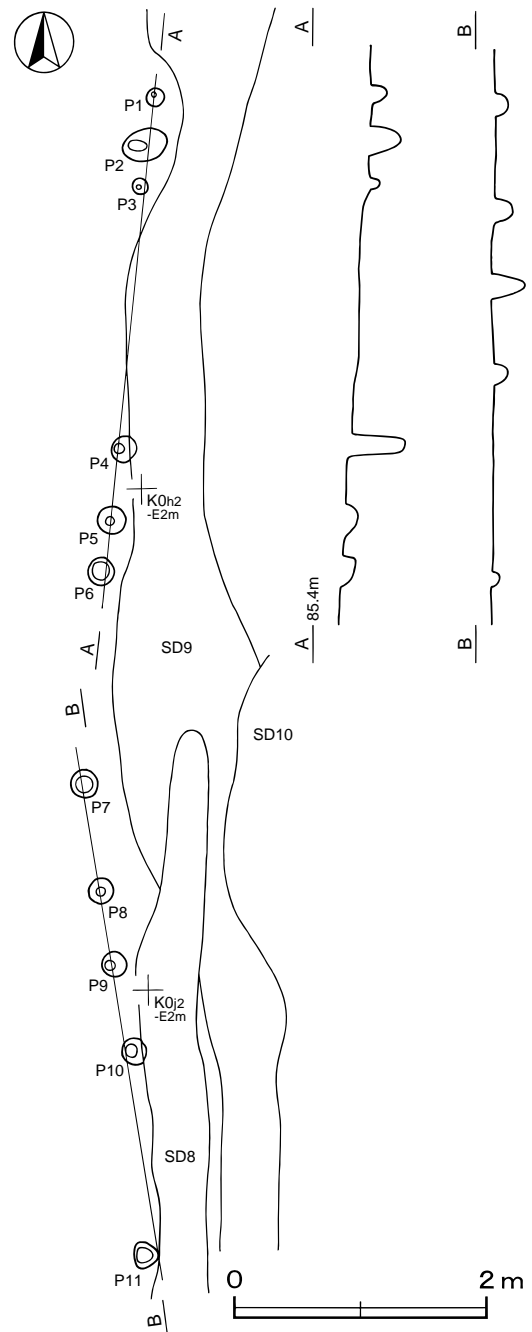
柱穴 8か所。長径15~40cm、短径15~34cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く、すべて抜き取り痕と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みと思われる土師器片3点(坏1, 甕2)が出土している。

所見 崖部の下に沿って並んでいるため、土止めとして使われていた可能性がある。時期は不明である。



第3号柵列跡



第4号柵列跡

第115図 第3・4号柵列跡実測図

第4号柵列跡（第115図）

位置 調査区東部のK0g2～K0j2区，標高85mの丘陵東斜面部に位置し，崖部の下に沿って並んでいる。

重複関係 第8・9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長さは9.4mで，方向はN-7°-Eである。柱間寸法は0.4～2.1mである。

柱穴 11か所。長径14～38cm，短径14～26cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く，すべて抜き取り痕と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みと思われる須恵器片1点（甕）が出土している。

所見 崖部の下に沿って並んでいるため，土止めとして使われていた可能性がある。須恵器片が出土しているが，明確な時期は不明である。

表12 柵列一覧表

番号	位置	方向	柱穴数	柱穴平面形	長さ(m)	柱穴間距離(m)	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考 重複関係(古新)
1	K0f2～K0i2	N-1°-W	6	円形，楕円形	(10.7)	1.0～3.7	28～56	25～73	須恵器片	SB1 本跡 SD9-10
2	K0f2～K0i2	N-0°	10	円形，楕円形	(10.3)	0.4～1.8	20～54	10～93	土師器片	SB1 本跡 SD8-10
3	K0h2～K0i2	N-1°-W	8	円形，楕円形	6.2	0.5～1.4	15～40	15～53	土師器片	本跡 SD8-9
4	K0g2～K0j2	N-7°-E	11	円形，楕円形	9.4	0.4～2.1	14～38	8～45	須恵器片	本跡 SD8-9

(3) 道路跡

第1号道路跡（第116図，付図）

位置 調査区中央部のL7h5～M8a2区，標高101～105mの丘陵西斜面部に位置している。

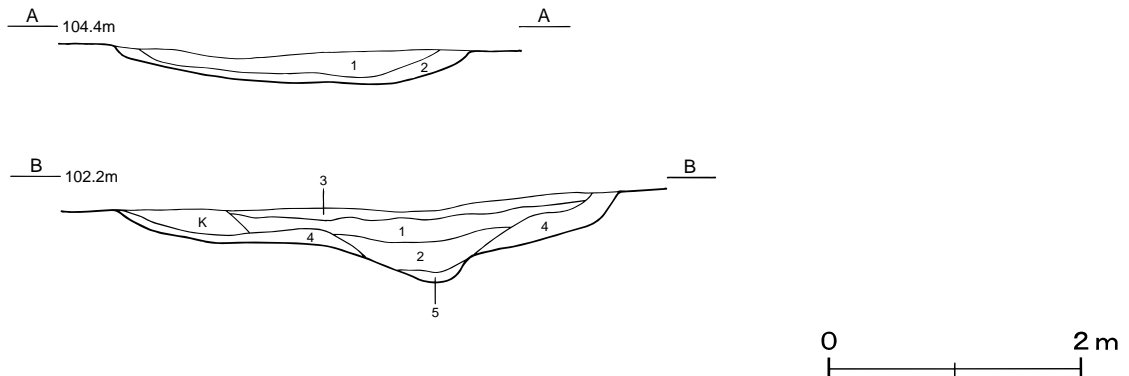
重複関係 第8・9号住居跡，第8号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外に延びている。L7h5区から東方向(N-68°-W)にむかって緩やかな弧状を呈している。溝状に掘り込んだ部分の底面を路面としている。確認された長さは31.60mで，上幅1.24～4.10m，下幅0.28～0.62m，深さ22～58cmである。断面形はU字形である。

覆土 5層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|-------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 褐色 | 鹿沼パミス中量，ロームブロック少量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |



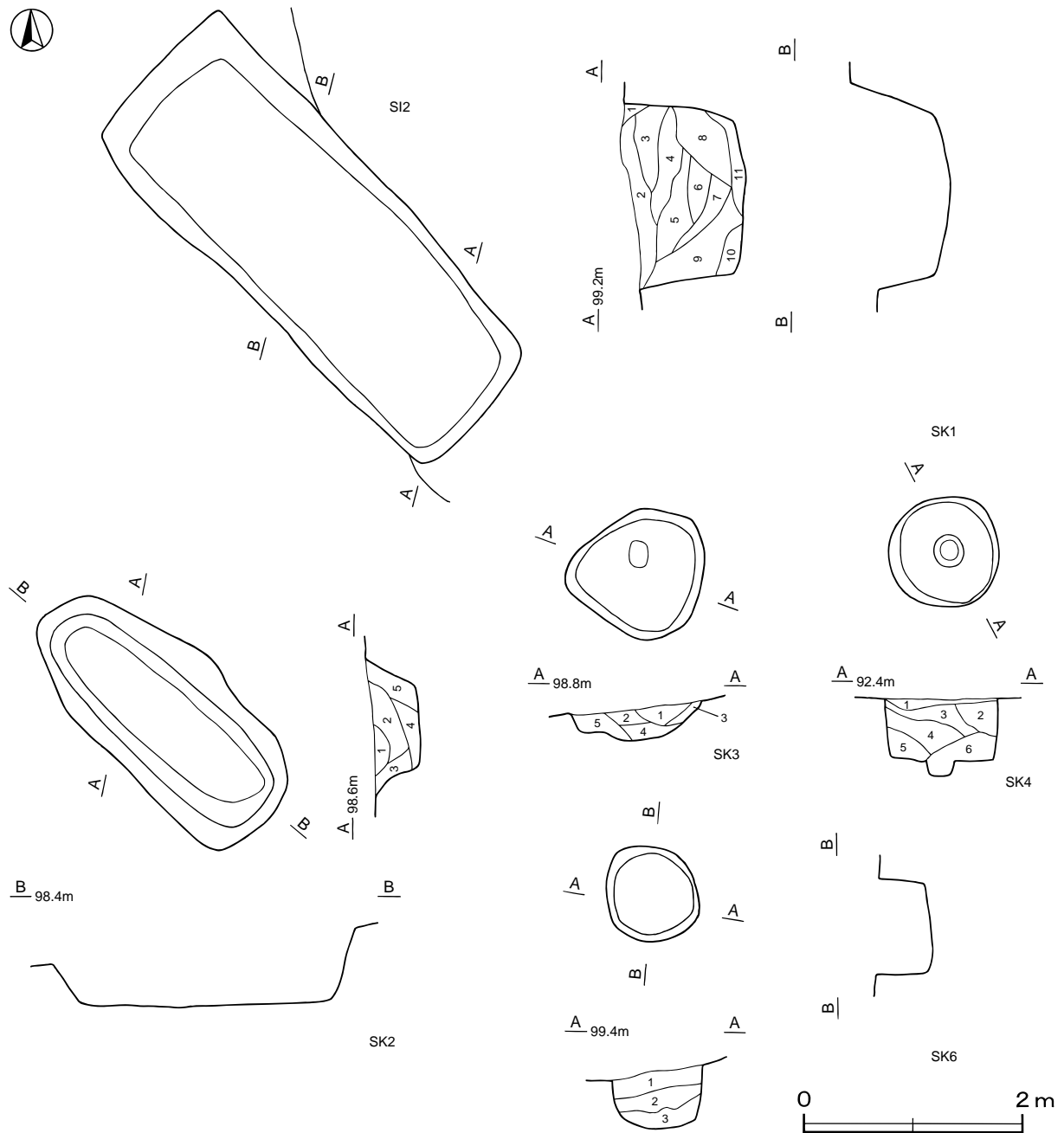
第116図 第1号道路跡実測図

遺物出土状況 流れ込みと思われる弥生土器片105点（壺），土師器1点（甕），土師器片49点（坏28，甕21），須恵器片4点（甕）が出土している。

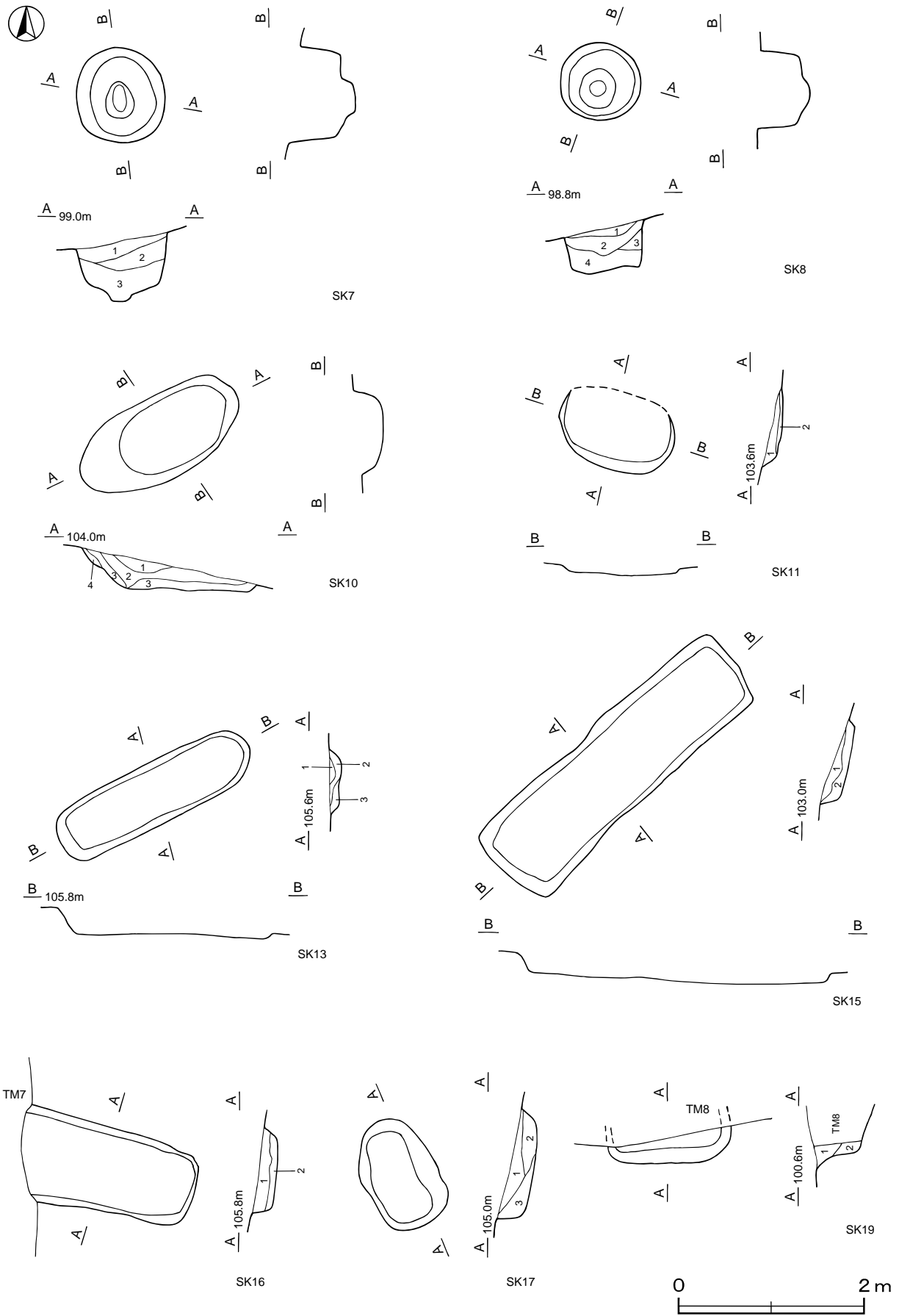
所見 この道路は、尾根筋にあたり、丘陵頂上部にある舟止め石に向かって延びている。丘陵上には舟止め石の他、近世の祠も存在することから、参道を兼ねた峠道として利用されていたものと考えられる。時期は、出土土器から奈良・平安時代以降であるが、明確な時期は不明である。

(4) 土坑（第117～120図）

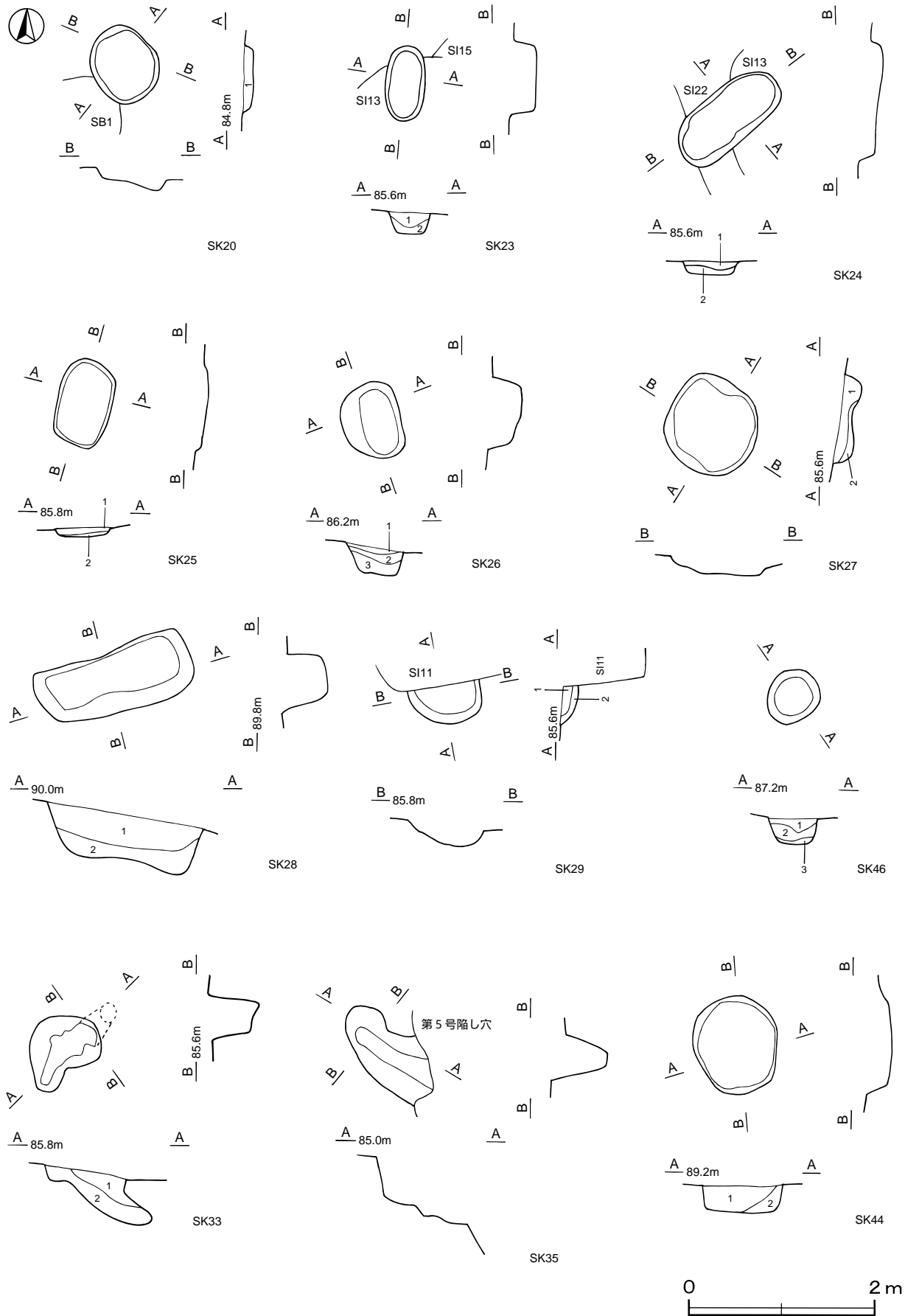
時期及び性格不明の土坑について、実測図と一覧表を記載する。



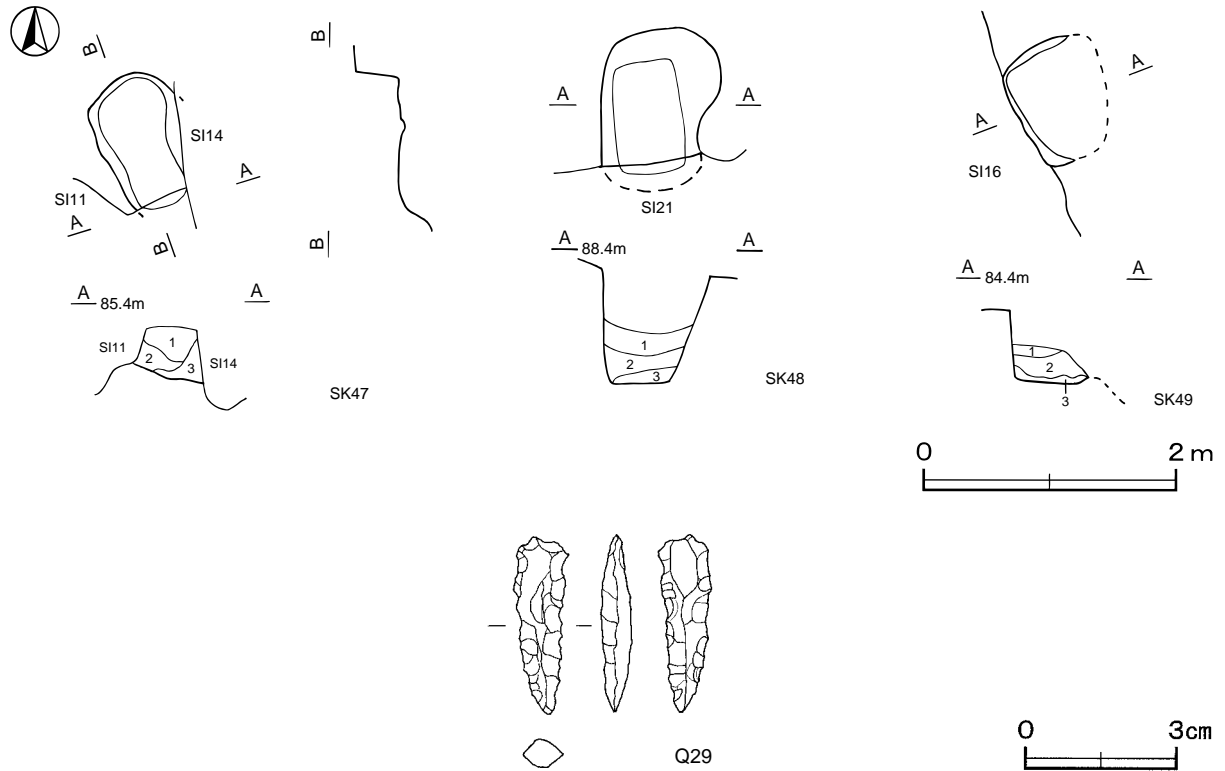
第117図 第1～4・6号土坑実測図



第118图 第7·8·10·11·13·15~17·19号土坑实测图



第119图 第20・23～29・33・35・44・46号土坑实测图



第120図 第47～49号土坑・第1号土坑出土遺物実測図

第1号土坑土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス中量
- 6 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量
- 7 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量, 粘土ブロック少量
- 8 褐色 鹿沼パミス多量, ローム粒子中量
- 9 暗褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック・粘土ブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック多量, 鹿沼パミス少量
- 11 褐色 ロームブロック多量, 鹿沼パミス微量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量
- 4 暗褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量

第3号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 4 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
- 5 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 褐色 ロームブロック多量
- 6 灰褐色 ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 灰褐色 鹿沼パミス少量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鹿沼パミス少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 灰褐色 ローム粒子・鹿沼パミス・黒色粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス・黒色粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第11号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第15号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第16号土坑土層解説

- 1 にぶい褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第17号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量

第23号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

第24号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子微量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第28号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 鹿沼パミス少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量

第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量

第44号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 鹿沼パミス少量, ロームブロック微量

第46号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

第47号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第48号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第49号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量, 砂粒微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量

第1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q29	錐	3.5	1.1	0.6	1.92	チャート	上部は薄く扁平 先端摩耗	覆土中	

表13 土坑一覧表

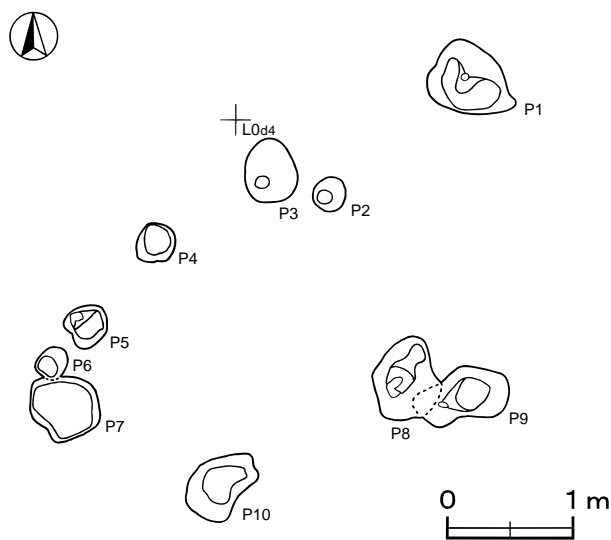
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古・新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	高さ(cm)					
1	L 7 h1	N - 45° - W	長方形	4.36 × 1.70	84	外傾	平坦	人為	石器(錐)	SI2 本跡
2	L 6 f9	N - 50° - W	長楕円形	2.78 × 1.24	64	外傾	平坦	人為		
3	L 7 g0	N - 103° - W	不整楕円形	1.30 × 1.18	28	外傾	皿状	人為		
4	L 5 c0	-	円形	1.06 × 1.02	68	直立	凹凸	人為		
6	L 7 f2	N - 60° - W	楕円形	0.94 × 0.86	52	直立	平坦	人為		
7	L 7 e1	N - 70° - W	楕円形	1.40 × 0.96	70	直立	平坦	自然		
8	L 7 e1	N - 94° - W	円形	0.86 × 0.82	54	直立	平坦	人為		
10	L 9 j1	N - 64° - E	長楕円形	1.90 × 0.87	30	外傾	皿状	自然		
11	L 8 e0	N - 72° - W	長楕円形	1.26 × [0.84]	10	外傾	平坦	自然		
13	L 8 i9	N - 60° - E	長楕円形	2.28 × 0.64	26	外傾	平坦	自然		
15	L 7 e9	N - 45° - E	長方形	3.35 × 1.00	24	外傾	平坦	自然		
16	L 8 h8	N - 107° - E	長方形	(1.98) × 0.98	20	外傾	平坦	自然		TM7 本跡
17	L 8 g1	N - 23° - W	楕円形	1.22 × 0.82	28	外傾	平坦	自然		
19	L 7 h4	-	-	(1.36) × (0.32)	52	傾斜	平坦	自然		本跡 TM8
20	K 0 g3	N - 33° - W	楕円形	0.78 × 0.68	12	外傾	平坦	自然		SB1 本跡
23	L 0 b3	N - 5° - E	長楕円形	0.80 × 0.42	30	直立	平坦	自然		SI13・15・22 本跡
24	L 0 b3	N - 51° - E	長楕円形	1.26 × 0.58	18	外傾	平坦	自然		SI13・15・22 本跡
25	L 0 b3	N - 13° - E	楕円形	0.92 × 0.56	9	外傾	傾斜	自然		

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古 新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)						
26	L 0 c3	N - 14 ° - W	不整楕円形	0.83 × 0.65	28		外傾	傾斜	自然		
27	L 0 c4	-	円形	1.12 × 1.05	14		緩斜	平坦	自然		
28	K 9 j9	N - 70 ° - E	長方形	1.70 × 0.74	46		外傾	平坦	自然		
29	L 0 a2	N - 79 ° - E	-	0.78 × (0.41)	21		外傾 緩斜	傾斜	自然		本跡 SI11
33	L 0 d4	N - 43 ° - E	不定形	0.91 × 0.74	54		外傾	傾斜	自然		
35	L 0 c4	N - 54 ° - W	[不定形]	(1.26) × (0.65)	69		外傾	平坦	-		本跡 TP5
44	L 9 b0	N - 19 ° - W	楕円形	1.03 × 0.92	25		直立	平坦	自然		
46	L 0 e3	-	円形	0.60 × 0.55	27		外傾	平坦	人為		
47	K 0 j3	N - 25 ° - W	[不定形]	(1.09) × (0.71)	42		外傾	凹凸	人為		本跡 SI11・14
48	K 9 f0	N - 6 ° - W	[長方形]	(1.20) × 0.95	108		外傾	平坦	自然		本跡 SI21
49	L 0 a4	N - 18 ° - W	-	(0.96) × -	58		直立	平坦	人為		SI16 本跡

(5) ピット群

第1号ピット群(第121図)

位置 調査区東部のL 0 c4～L 0 d5区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



規模と形状 南北4.0m, 東西5.0mの長方形の範囲にピット10か所が確認された。最大のものは長径78cm, 短径40cmの不定形で, 最小のものは長径27cm, 短径22cmの楕円形である。深さは5～46cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず, 暗褐色土または黒褐色土で締まりが弱い。

遺物出土状況 土師器片1点(坏)が出土しているが, いずれも細片で図示できない。

所見 配置に規則性がなく, 性格は不明である。時期は, 出土土器が流れ込みのため不明である。

第121図 第1号ピット群実測図

第1号ピット群計測表

ピット番号	形状	規 模 (cm)			ピット番号	形状	規 模 (cm)		
		長軸(径)	短軸(径)	深さ			長軸(径)	短軸(径)	深さ
1	不整楕円形	73	54	34	6	楕円形	27	22	13
2	円形	28	28	46	7	不整楕円形	61	52	5
3	楕円形	52	43	31	8	不定形	68	55	34
4	円形	35	43	31	9	不定形	[78]	40	45
5	不整円形	33	33	23	10	不定形	64	42	13

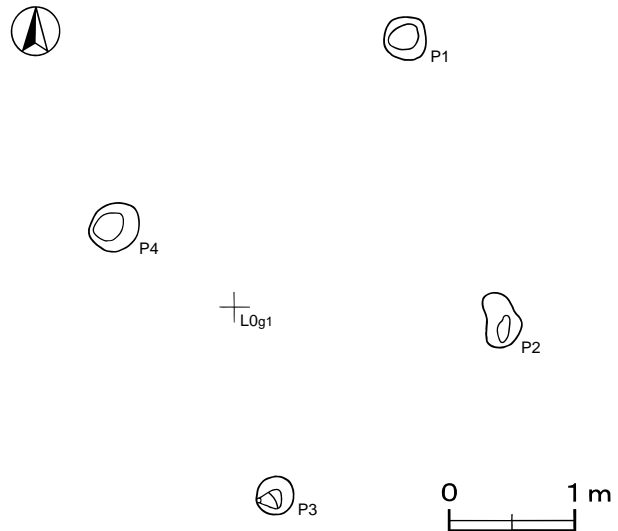
第3号ピット群 (第122図)

位置 調査区東部のL 9 f0~L 0 g1区, 標高90mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 南北4.1m, 東西3.6mの長方形の範囲にピット4か所が確認された。最大のものは長径45cm, 短径30cmの不整楕円形で, 最小のものは長径31cm, 短径30cmの円形である。深さは11~56cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず, 灰褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性がなく, 性格は不明である。時期は, 出土土器が無いため不明である。



第122図 第3号ピット群実測図

第3号ピット群計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)			ピット番号	形状	規模 (cm)		
		長軸(径)	短軸(径)	深さ			長軸(径)	短軸(径)	深さ
1	円形	38	36	11	3	円形	31	30	56
2	不整楕円形	45	30	35	4	楕円形	43	37	15

第4号ピット群 (第123図)

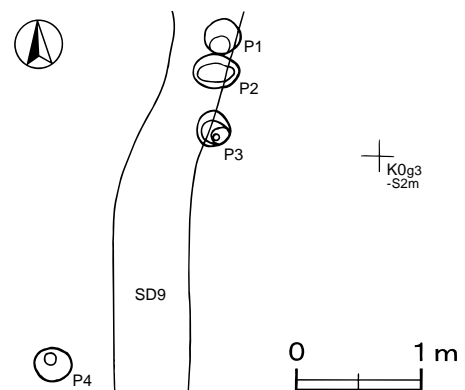
位置 調査区東部のK 0 g2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北3.0m, 東西1.8mの長方形の範囲にピット4か所が確認された。最大のものは長径38cm, 短径27cmの楕円形で, 最小のものは径28cmの円形である。深さは26~55cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず, 暗褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性がなく, 性格は不明である。時期は出土遺物が無いため不明である。



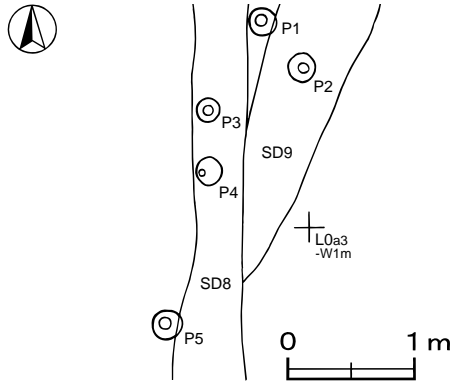
第123図 第4号ピット群実測図

第4号ピット群計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)			ピット番号	形状	規模 (cm)		
		長軸(径)	短軸(径)	深さ			長軸(径)	短軸(径)	深さ
1	円形	30	28	26	3	楕円形	30	27	44
2	楕円形	38	27	45	4	円形	28	28	55

第5号ピット群 (第124図)

位置 調査区東部のK 0 j2～K 0 a2区，標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



第124図 第5号ピット群実測図

重複関係 第8・9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北2.8m，東西0.8mの長方形の範囲にピット5か所が確認された。最大のものは長径25cm，短径24cmの円形で，最小のものは径18cmの円形である。深さは20～31cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず，暗褐色土または黒褐色土である。

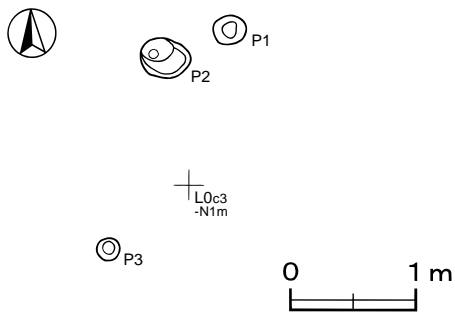
所見 配置に規則性がなく，性格は不明である。時期は，出土遺物が無いため不明である。

第5号ピット群計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)			ピット番号	形状	規模 (cm)		
		長軸(径)	短軸(径)	深さ			長軸(径)	短軸(径)	深さ
1	円形	23	21	28	4	円形	23	21	27
2	円形	24	22	20	5	円形	25	24	31
3	円形	18	18	23					

第6号ピット群 (第125図)

位置 調査区東部のL 0 b2～L 0 b3区，標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



第125図 第6号ピット群実測図

規模と形状 南北2.0m，東西1.5mの長方形の範囲にピット3か所が確認された。最大のものは長径40cm，短径31cmの楕円形で，最小のものは径18cmの円形である。深さは27～32cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず，暗褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性が無く，性格は不明である。時期は，出土遺物が無いため不明である。

第6号ピット群計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)			ピット番号	形状	規模 (cm)		
		長軸(径)	短軸(径)	深さ			長軸(径)	短軸(径)	深さ
1	楕円形	27	22	32	3	円形	18	18	28
2	楕円形	40	31	27					

表14 ピット群一覧表

番号	位置	範囲 (m)		ピット数	ピット 平面形	ピット規模 (cm)			主な出土遺物	備考 重複関係 (古・新)
		南北	東西			長径	短径	深さ		
1	L 0 c4 ~ L 0 d5	4.0	5.0	10	円形, 楕円形, 不定形	27~91	22~64	5~46	土師器片(坏)	
3	K 9 f0 ~ L 0 g1	4.1	3.6	4	円形, 楕円形	38~45	30~37	11~56		
4	K 0 g2	3.0	1.8	4	円形, 楕円形	28~38	27~28	26~55		本跡 SD9
5	K 0 j2 ~ K 0 a2	2.8	0.8	5	円形	18~25	18~24	20~31		本跡 SD8・9
6	L 0 b2 ~ L 0 b3	2.0	1.5	3	円形, 楕円形	18~40	18~31	27~32		

(6) 舟止め石

舟止め石 (第126図)

位置 調査区中央部のM 8 e2区を中心とし、標高103mの丘陵頂上付近に位置している。

確認状況 丘陵頂上付近に自然石が確認されており、トレンチ調査を行った。

規模と形状 石は地山の中まで入り込んでいるため、規模や形状は明確ではない。地表面で確認された石は2個である。1つは長軸4.04m、短軸2.0m、地表面からの高さ2.3mの不定形で、長軸方向はN-10°-Eと推定される。この石を支えるように、長軸2.6m、短軸2.0m、地表面からの高さ1.0mの楕円形の石が位置している。トレンチを入れた際に、これらの他に長さ0.6~1.7mの石が3個確認された。石の材質はそれぞれ花崗岩である。

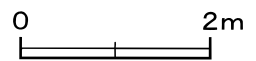
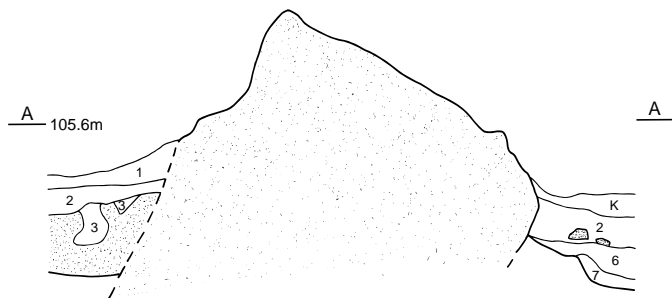
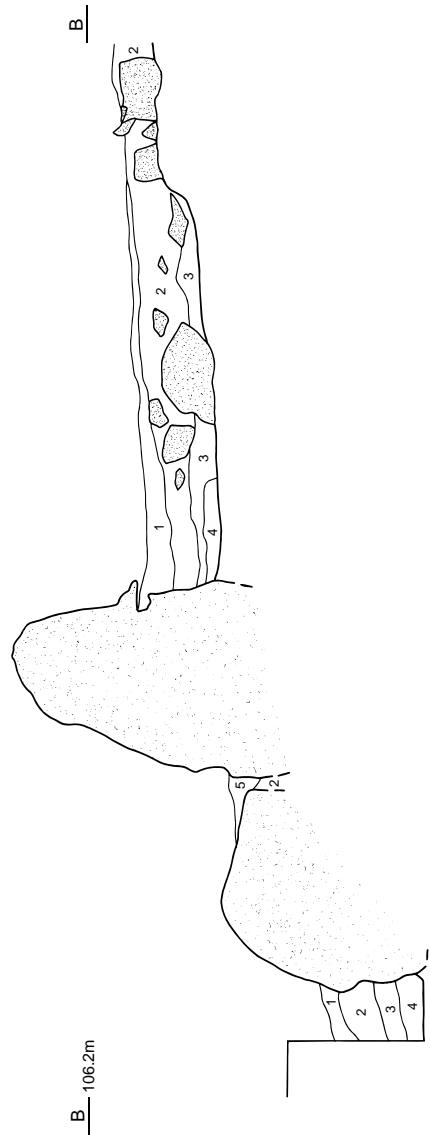
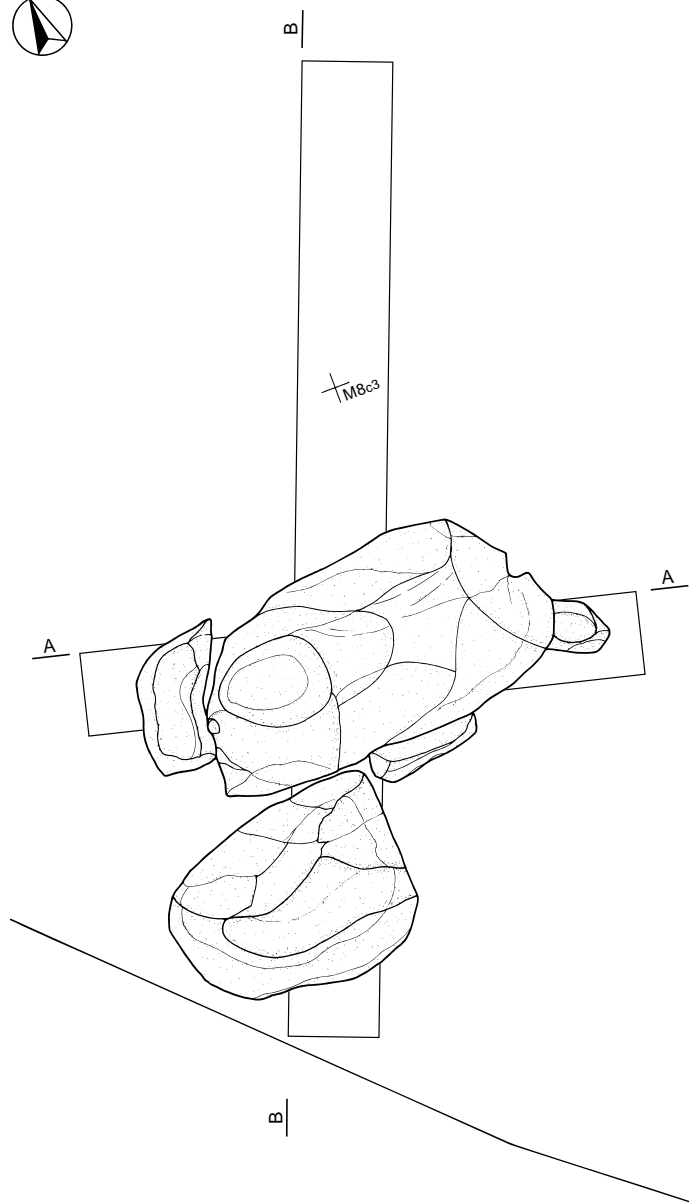
土層 土層断面図の第1~4・6・7層は規則的な堆積がみられるため、自然堆積である。第5層は、石の隙間に堆積した層である。

土層解説

1	暗褐色	花崗岩粒子中量, ローム粒子微量	5	褐色	ローム粒子・花崗岩粒子微量
2	褐色	花崗岩粒子中量, ローム粒子微量	6	褐色	ローム粒子多量・花崗岩粒子微量
3	褐色	花崗岩粒子多量, ローム粒子・鹿沼パミス微量	7	褐色	ローム粒子多量・花崗岩粒子少量
4	明褐色	花崗岩粒子多量, ローム粒子・鹿沼パミス微量			

伝承 この石は信仰の対象とされ、現在でもこの地域の御神体として奉られている。地域に伝わる伝承では、神代の時代にこの石に舟の綱をつなげていたとされ、このことから舟止め石と呼ばれている。

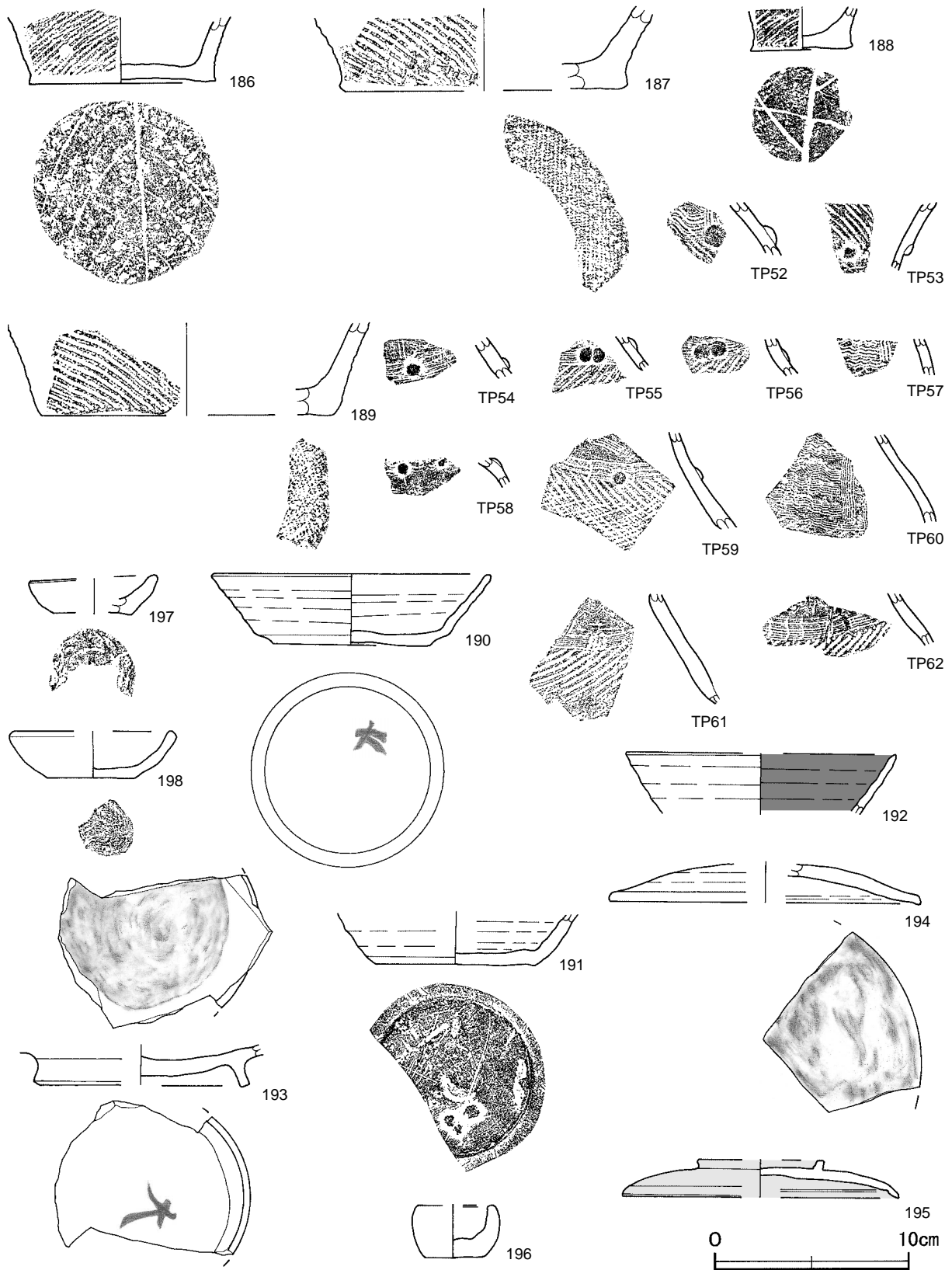
所見 トレンチの土層から、石は地山内に入り込んでおり、故意に設置されたような痕跡が無いため、自然石である。この周囲に位置する第6・7号墳の周溝からは、奈良・平安時代の高台付坏や中世のかわらけが混入しており、供献土器として使われていた可能性がある。同丘陵の東斜面には奈良・平安時代の集落、北東に位置する丘陵には式内社の加茂大神御子神主玉神社が存在し、この当時より舟止め石は地域の信仰の対象とされ、奉られていたことが想定される。



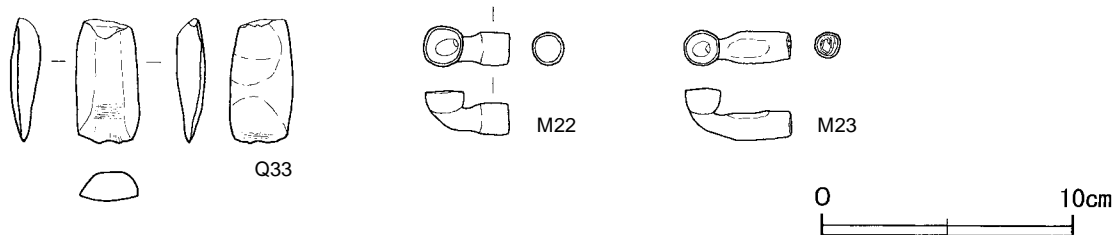
第126図 舟止め石実測図

(7) 遺構外出土遺物 (第127・128図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第127図 遺構外出土遺物実測図(1)



第128図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第127・128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
186	弥生土器	壺	-	(3.4)	9.5	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	TM 3周溝 覆土中	20%
187	弥生土器	壺	-	(4.2)	[14.8]	長石・石英	明黄褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	表土	10%
188	弥生土器	壺	-	(2.2)	5.3	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部木葉痕	SD 4 覆土中	20%
189	弥生土器	壺	-	(4.7)	[15.0]	長石・石英	にぶい黄褐	普通	胴部付加条一種(付加2条)縄文施文 底部布目痕	TM 7 墳丘 盛土内	10%
190	須恵器	坏	14.0	3.7	9.8	長石・石英・小礫	黄灰	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	L 0 a1	底部外面 墨書 「大」
191	須恵器	坏	-	(2.7)	9.2	長石・石英	灰黄	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	K 0 h2	底部ヘラ記号 「x」
192	須恵器	坏	[13.6]	(3.1)	-	長石・石英	灰黄	普通	内外面口クロナデ	L 9 c0	10% 内面油煙付着
193	須恵器	盤	-	(2.1)	[10.2]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	表探	底部内面墨痕 底部外面墨書 「大」 転用硯カ
194	須恵器	蓋	[16.0]	(2.0)	-	雲母	灰オリーブ	普通	体部外面口クロナデ	L 9 c0	内面墨痕 転用硯カ
195	緑釉陶器	蓋	[14.1]	2.0	-	緻密	浅黄	良好	内外面口クロナデ 鉛釉	L 0 e5	20%
196	手捏土器	-	[3.8]	2.7	3.1	長石・石英	橙	普通	内外面ナデ	L 0 d2	70%
197	かわらけ	小皿	6.4	2.0	4.0	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	内外面口クロナデ	表探	70%
198	かわらけ	小皿	[7.8]	2.4	[4.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内外面口クロナデ 底部回転糸切り	TM 6周溝 覆土中	25%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP52	弥生土器	壺	-	(2.8)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具による波状文施文後縦 区画 下端貼瘤付	TM 4 墳丘 盛土内	5%
TP53	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部付加条一種(付加2条)縄文施文 下端貼瘤付	TM 4 墳丘 盛土内	5%
TP54	弥生土器	壺	-	(2.1)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具による波状文施文 下端櫛 歯状工具による横走文施文後貼瘤付	TM 4 墳丘 盛土内	5%
TP55	弥生土器	壺	-	(1.7)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	頸部下端横走文施文後貼瘤付 胴部付 加条一種(付加2条)縄文施文	TM 9周溝 覆土中	5%
TP56	弥生土器	壺	-	(1.8)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	頸部下端横走文施文後貼瘤付 胴部付 加条一種(付加2条)縄文施文	TM 3周溝 南部上層	5%
TP57	弥生土器	壺	-	(1.8)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部波状文施文後縦区画	TM 9周溝 覆土中	5%
TP58	弥生土器	壺	-	(1.8)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部下端貼瘤付	TM 7 墳丘 盛土内	5%
TP59	弥生土器	壺	-	(4.8)	-	長石・石英	明赤褐	普通	頸部下端簾状文施文後貼瘤付 胴部付加条 一種(付加2条)縄文を羽状構成	TM 4周溝 覆土中	5%
TP60	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	長石・石英	浅黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(6本櫛歯)による縦区 画後波状文充填	TM 7周溝 覆土中	5%
TP61	弥生土器	壺	-	(5.5)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具による波状文施文 下端簾状 文 胴部付加条一種(付加2条)縄文施文	TM 3周溝 南部下層	5%
TP62	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	頸部下端簾状文 胴部付加条一種(付加 2条)縄文施文	TM 6周溝 北部下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q33	磨製石斧	4.9	2.5	1.1	19.9	泥岩	片刃 器面研磨	TM 1周溝 覆土中	

番号	器種	長さ	小口径	火口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M22	煙管	3.3	1.2	1.4	8.25	銅	火皿部円形	TM 1 墳丘 盛土内	
M23	煙管	5.1	1.0	1.4	4.22	銅	火皿部円形 小口内木質残存	TM 1 墳丘 盛土内	

第4節 ま と め

1 はじめに

当古墳群は、標高100m程の丘陵に位置する古墳群である。今回の調査では古墳の他に、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代の陥し穴、弥生時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などが確認され、古墳時代以前から人々がこの地を利用していたことがわかる。以下、確認された遺構と遺物について概観し、各時代の様相について考察を加えてまとめたい。

2 旧石器時代

本跡では、調査区西部と中央部で石器集中地点が確認された。標高96mに位置する第1号石器集中地点は、黒曜石とチャートを素材とした石器製作跡で、北西に位置する第4号住居跡の覆土からは黒曜石の未製品も出土している。本地点から出土している黒曜石のほとんどが栃木県高原山産で、わずかに信州産のものがみられる¹⁾。第1号石器集中地点より10m高い、標高106mに位置する第2号石器集中地点は、黒曜石より硬質なチャートを主な素材とした石器製作跡である。チャートの石核の他に石英の石核も出土しており、チャート以外を石材とした石器製作も行っている。

両地点では縦長剥片が少なく、尖頭器製作の際に剥離する鱗状の剥片がみられることから槍先形尖頭器を製作していたものと考えられる。岩瀬地域での槍先形尖頭器は、裏山遺跡において²⁾、黒曜石やチャート製の尖頭器が遺構の覆土中から出土しており、本跡と石材や製作器種が類似している。槍先形尖頭器はこの他にも加茂遺跡では黒曜石³⁾、犬田神社前遺跡ではチャート⁴⁾、辰海道遺跡では珪質頁岩製のものがそれぞれ出土している⁵⁾。

3 縄文時代

調査区東部の標高85～89mの東斜面部に7基の陥し穴が分布している。ここでは、鈴木素行氏の分類⁶⁾に従って当古墳群の陥し穴を分類し、考察を加えたい。

鈴木氏は、短軸の断面形状と、平面形状との組み合わせで分類を行っている。当古墳群で確認されたのは3種類で、C類は断面形状がU字状、平面形状が楕円形を呈するもので、第4号陥し穴があたり、標高85mほどの東斜面に直交するように位置している。C-p類はC類の底面に小ピットが検出されたもので、第1・2・5号陥し穴が含まれる。第1号陥し穴は、標高89mほどの東斜面に直交し、第2・5号陥し穴は、標高85mほどの東斜面に平行している。D-p類は、断面形がU字状、平面形状が隅丸方形を呈するD類の底面に小ピットが検出されたもので、第3・6・7号陥し穴があてはまり、第3号陥し穴は、標高85mほどの東斜面に平行し、第6号陥し穴は、標高89mほどの東斜面に直交、第7号陥し穴は、標高89m程の東斜面に平行している。分類ごとにみると、標高や斜面に対しての配置に統一性はみられないが、標高でみると、標高85m付近と89m付近に分かれているのが認められる。規則性がうかがえる陥し穴の配置としては、標高89mに第1・7号陥し穴が斜面に対し直交しているものがあげられ、2基一組と捉えることもできる。

当古墳群で確認された陥し穴が、同時期に機能していたかは定かではないが、標高を意識して構築している様相はうかがうことができる。周辺の遺跡で縄文時代の遺構が確認されているのは、高幡遺跡⁷⁾と加茂遺跡⁸⁾で、高幡遺跡からは陥し穴2基、加茂遺跡からは後期の住居跡が確認されており、周辺の丘陵に集落や狩猟場が営まれていたと考えられる。

4 弥生時代

(1) 集落の立地

当時代の遺構は、標高95～106mの丘陵斜面から竪穴住居跡10軒が検出された。丘陵下に広がる沖積地の標高は62～65mで、その比高は30m以上認められる。水田経営には困難な場所で、川沿いに広がる沖積地に水田を営んでいたとしても、集落との行き来は非効率的である。また、丘陵上には湧水地なども認められず、生活を営むうえでも極めて不便な場といえる。この集落は通常の集落と立地が大きく異なっており、通常の集落とは違う性格をもっていたと思われる。これに類似する集落は、瀬戸内地域や近畿地方など西側の地域に多くみられ⁹⁾、高地性集落とされている。当古墳群の集落を立地の異常性から高地性集落として考察したい。

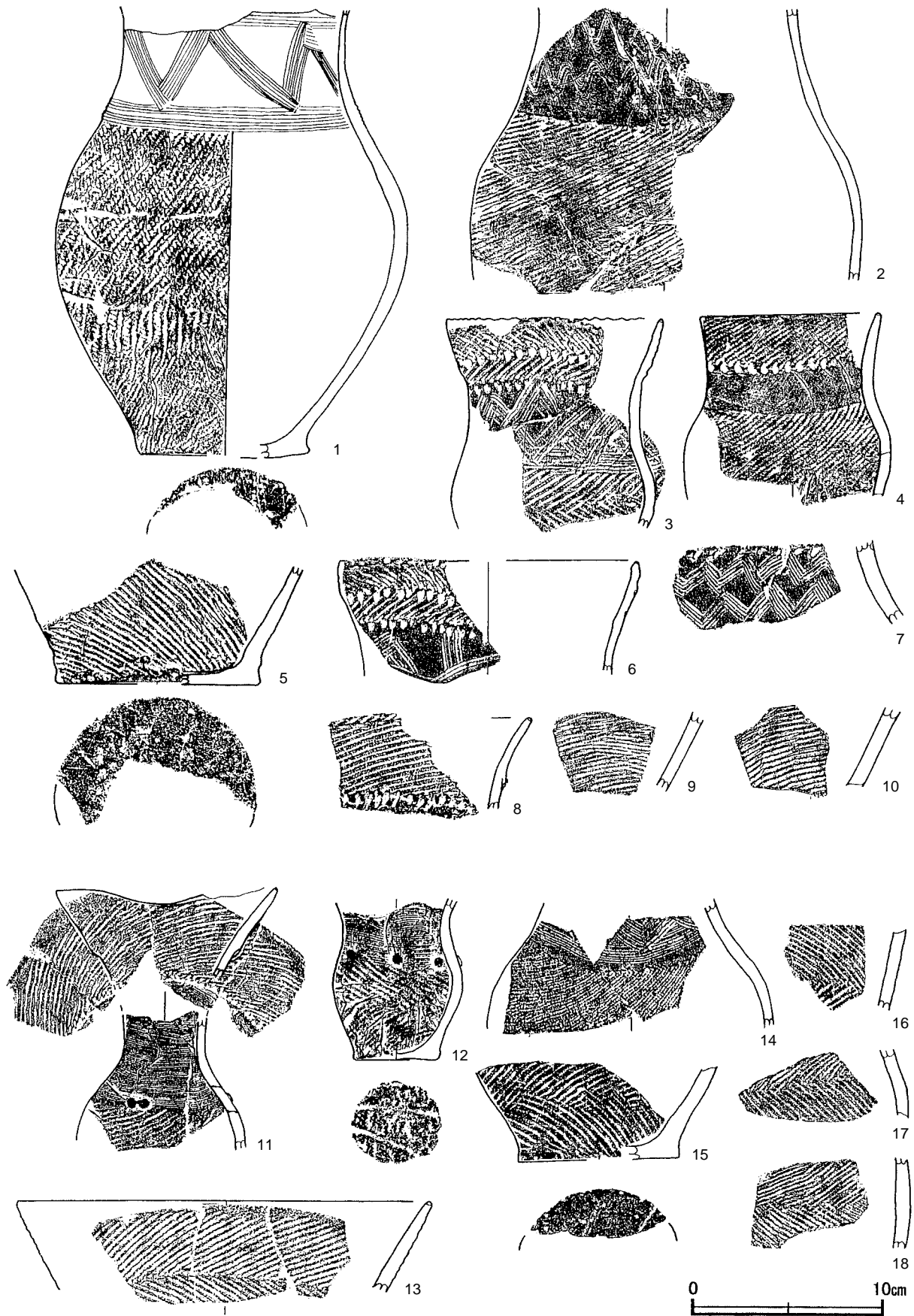
高地性集落については、小野忠熙氏が論じており、その概念は広義と狭義があるとされ、広義のものは、時代の趨勢に反する異常な集落、狭義のものは、防御機能をもつものとしている¹⁰⁾。広義の高地性集落には4つの機能があるとされ、①縄文時代以来の伝統的生業を営む集落で、狩猟や、原始陸耕すなわち焼畑耕作のムラ、②稲作手動の農耕社会に発生した、政治集団間の緊張にともなう軍事的防衛機能をもつ集落、③低地の農村から分村した開拓村落、④祭祀の施設が考えられている。土塁や堀などの防御施設や祭祀として使用された遺構や遺物は本跡では確認されず、上記の②、④とは考え難い。当古墳群の集落で出土している遺物をみると弥生土器の他に紡錘車や石鏃があり、石鏃はアメリカ式石鏃で、2点のみと出土数は少ない。石鏃に使用された痕跡は無く、欠けた部分や破損もみられず、保管されていたものか、あるいは石鏃としてではなく別の用途として用いられたものとも考えられる。また、農業に使われたような遺物は無いが、生活を営み、紡織を行っていたと考えられ、①や③のような機能をもった集落と考えるのが妥当であろう。

周辺の弥生時代の集落跡は、本跡の丘陵下に位置する加茂遺跡¹¹⁾、高幡遺跡¹²⁾、筑輪川の対岸に位置する松田古墳群¹³⁾などがあり、今後これらの遺跡をふまえた検討が必要である。

(2) 弥生土器（第129図）

弥生土器は、主に竪穴住居跡から出土しているが、表土中や後世の遺構に混入したものが目立っている。出土した弥生土器はそのほとんどが破片で、器形全体をうかがえるようなものは少ない。壺形土器の文様は、口縁部、頸部、胴部の3つの文様帯で構成されている。口縁部は複合口縁が多く、口唇部には縄文原体の押圧を行っているものが目立っている。口縁部下端にも同様に縄文原体の押圧が施されているものが多くみられる。また、付加条一種（付加2条）縄文が施されているものが多い。単純口縁には、口唇部にキザミを施しているものがほとんどで、文様は複合口縁と同じように付加条一種（付加2条）縄文が施されている。頸部は、無文のものと有文のものがある。有文のものには、櫛歯状工具による連弧文、横位の波状文、山形文などが多く、斜格子文や縦区画内に横位の波状文を充填したものがわずかではあるが含まれている。頸部と胴部を区画する部分には廉状文や横走文が施され、その上にボタン状の貼瘤を貼り付けているものも存在する。胴部は、付加条一種（付加2条）縄文が施されているものがほとんどで、羽状構成のものともそうでないものが混在している。底部は木葉痕が大部分を占めているが、布目痕や無文のものもわずかにみられる。

本跡で出土している弥生土器は、高幡遺跡¹⁴⁾や松田古墳群¹⁵⁾で出土している二軒屋式の様相を示すもので、わずかに十王台の様相を有するものも含まれ、これらの遺跡をふまえた土器の検討をすることで県西地域の土器の様相が明確になっていくであろう。



第129図 松田古墳群(1~10), 高幡遺跡(11~18)出土弥生土器
(『茨城県教育財団文化財調査報告』第226・228集より)

(3) アメリカ式石鏃

アメリカ式石鏃は、有柄式で柄の部分の先端がT字形に突出したもの¹⁶⁾とされており、東北地方や北陸に多く出土している。一様にアメリカ式石鏃といっても、刃部や基部に形状の違いがみられ、坂本和也氏はそれらをふまえた形態分類を行っており¹⁷⁾、刃部が直線的で三角形を形つくるものをⅠ類、刃部が膨らみを持ち、先端付近に肩部を有し五角形を形つくるものをⅡ類としている。そこからさらに基部の形状を3つに分類し、基部が直線的で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するものをa種、基部が凹形で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するものをb種、基部が直線又は凹形で、刃部幅より小さいものをc種としている。これに準じ、本跡出土のアメリカ式石鏃は、Q13・Q14が同じ形状をしており、同じ形態に分類される。刃部の形状は、抉りの部分からやや丸みをおびながら先端に向かい、三角形の形状を呈している。基部は丸みをおびた凹形で、刃部幅より小さいことから、Ⅱ類c種に分類できるものと思われる。県内では、ひたちなか市（旧勝田市）東中根遺跡から1点出土しており、Ⅱ類a種とされ¹⁸⁾、加茂遺跡¹⁹⁾でも1点出土し、刃部は直線的で、基部は刃部幅よりも小さいためⅠ類c種と考えられる。

本跡で出土したアメリカ式石鏃は、前述したように、保管あるいは石鏃本来の用途意外に用いられた可能性がある。坂本氏は、機能や用途についても論じており²⁰⁾、直接もたらされたものは矢としては使用されず、装飾品として手にいれたものと想定している。このように想定すると、加茂B古墳群出土のアメリカ式石鏃も装飾品として考えることも十分可能である。今後、県内からの資料が増加することを期待するとともに、社会的背景や用途についても考察していく必要がある。

5 古墳時代

(1) 古墳

加茂B古墳群は、旧岩瀬町の分布調査で円墳6基からなる古墳群と捉えられてきた。今回の調査の結果、方墳1基、円墳8基が確認され、丘陵の頂上部から斜面にかけて築かれていることが判明した。周辺を踏査したところ、南に延びる尾根上に地膨れ状の高まりが確認できることから、同丘陵の尾根から斜面にかけても、さらに分布が広がることが予想される。

第1号墳は、一辺13.8mの方墳である。周辺で確認されている方墳は、間中古墳²¹⁾と花園古墳²²⁾で、これらの古墳は6世紀後葉から7世紀初頭の年代が想定されており、本墳より時期が下るもので、同時期のものは確認されていない。墳丘は、西に向かって傾斜する斜面部を利用して構築され、盛土をしない低墳丘で、葺石は認められない。周溝は、南側の上幅が狭く、北側より20cmほど深く掘り込まれているなど、墳丘と周溝の形状から、斜面部を意識して構築していることがわかる。埋葬施設は、墳頂部に位置する木棺直葬で、掘り方内に木棺を安置し、その周囲に鹿沼土を多く含む暗褐色土を埋め込んでいる鹿沼土槨である。周辺で発掘された古墳の埋葬施設は、石室が形成される前までは、狐塚古墳²³⁾や青柳古墳²⁴⁾でみられるような粘土槨であった。本墳でみられる鹿沼土槨は、岩瀬地域においては確認されておらず、稀有な例といえる。粘土の採取できない丘陵上に位置するため、地山の一部である鹿沼土層を掘り込んで使用したと思われる。

第6号墳は、丘陵の東斜面に位置する径約13mの円墳で、高さ0.2mほどの低墳丘である。今回調査された古墳の多くは斜面部に築かれ、斜面側の周溝を深く掘り込み、盛土をせずに地形を利用して墳丘としたものや、わずかに盛土しているものばかりで、墳丘を高く見せるための工夫がなされていることが想定される。埋葬施設は、墳頂部に東西に並んで2基確認され、東側の第1主体部は、墳丘の中心部に位置し、

長方形の掘り方内に2基の木棺が安置されていた。2基の木棺は、土層断面からは時期差が認められず、平行に並んでいることからほぼ同時に埋葬されたものと考えられる。西側の第2主体部は、長方形の掘り方内に木棺が安置されたものである。副葬品として、直刀1振り、ガラス小玉11点²⁵⁾が出土している。

本墳は第1主体部の被葬者の古墳として築造され、後に第2主体部の被葬者が埋葬される。第1主体部には、近親者同士が埋葬され、そのすぐ隣に構築された第2主体部には、第1主体部の被葬者の近親者が埋葬されたものと想定される。第2主体部の上面から出土した甌は、周溝内から出土した須恵器坏より時期は古く、伝世したものとすると第1主体部の被葬者から伝わった可能性が高く、その他の副葬品も伝世されたと考えられ、副葬品が第2主体部から出土し、第1主体部で出土しないことも肯ける。これに従うと、第6号墳の築造時期は5世紀後葉が想定され、6世紀前葉に第2主体部の被葬者が埋葬された継続的に使用されていた古墳で、第1主体部の被葬者と密接な関わりをもつ人々の墓として使用されていたのであろう。

第7号墳は、丘陵頂上部に位置する径約13mの円墳である。墳丘は第6・8号墳と同じように50cmほど盛土した低墳丘で、規模も類似している。周溝は、斜面部に位置する古墳のように一部分を深く掘り込むことはなく、均等である。周溝底面からは土師器坏がほぼ完形で出土している。南側は、地山が一部掘り残され土橋状になり、すぐ北の墳丘部には主体部が位置しており、土橋として機能していたと考えられる。周溝の底面にも埋葬施設と考えられる土坑状の掘り込みがみられ、同様の周溝内埋葬施設は第8・9号墳にも確認することができ、いずれも周溝の底面を掘り込んで構築している。本墳の主体部は木棺直葬で、同じ埋葬施設内への追葬は困難であるが、墳丘裾部に位置しているため、追葬可能な部分は多い。しかし、周溝内に埋葬していることから、被葬者の近親者のような人物のではなく、従属的な身分の人物が考えられる。

当古墳群の埋葬施設にみられる粘土は、丘陵で採取することができず、丘陵下から採取してきたものと考えられる。また、古墳はいずれも斜面部に位置し、第1～5・8・9号墳は西斜面、第6・7号墳は北から東にかけての斜面部に構築されている。これらの古墳の立地は、被葬者に関わる人々の目に入る位置に構築され、地形を利用した構築法も、より大きく古墳を見せるための工夫を施したものと考えられる。これに従うと、西側の筑輪川沿いに広がる沖積地や、東側の丘陵上など古墳を望むことができる場所に集落を形成していたものと推測される。

(2) 石棺

当古墳群からは、小形の箱式石棺3基も確認されている。第1・3号石棺は第8号墳の北側、第2号石棺は第8号墳の周溝内に位置している。3基の石棺は、長軸1.4～1.6mと小形で、第2号石棺のみ、底面に石が敷かれているが、板状の石を組み合わせている点に共通の構築方法が認められる。

3基の石棺には、側壁の板石の数や組み方に違いがみられ、第1号石棺は、長方形の石を横位、その他の大きさの揃った石を2・3枚縦位で組み、第2号石棺は、長方形の石を3枚横位で立てている。第3号石棺は長方形の石を縦位で5枚立てており、重なり合わないよう構築している。阿久津久・片平雅俊の両氏による箱式石棺の分類²⁶⁾によると、板石を横位で組むものや横位と縦位を合わせて組むものから、縦位で組むものへの変化がみられるようで、第1・2号石棺は前者、第3号石棺は後者に当てはまる。従って、第1・2号石棺の後に第3号石棺が構築されたという時期差が存在する可能性が考えられるが明確ではない。

(3) 出土遺物

出土遺物は、土師器、須恵器、直刀、刀子、ガラス小玉などで、土器類はそのほとんどが周溝内からである。また、直刀、刀子、ガラス小玉は副葬品であり、主体部からの出土である。第3号墳から出土している須恵器の坏・蓋はTK23併行期、第6号墳の須恵器の甗はTK208併行期、坏はTK10の併行期でそれぞれ東海産のものである。第6号墳の甗は、やや肩張りの形状をしており、残存する頸部に文様は確認できない。体部には孔を通るように沈線が施文され、その沈線を中心として刺突文が羽状に施文されている。文様が異なるが美浦村沢田古墳群²⁷⁾2号墳から出土しているものと同時期とみられる。第6号墳出土の甗は、唯一周溝外の第2主体部上面から一か所に破片の状態出土し、故意に破砕された様相を示していることから、主体部の上で土器を破砕した祭祀行為が考えられる。第9号墳からも甗が出土しており、口縁部や頸部は破損により不明であるが、体部には刺突文が施され、第6号墳の甗と同時期に位置づけられる。第7号墳から出土している土師器坏は、ひたちなか市半分山遺跡第44号住居跡から出土しているものと同時期²⁸⁾で、MT15の時期が与えられる。

岩瀬地域では、墳丘上に埴輪を配置する代わりに土器を置く特徴が多く古墳でみられ、当古墳群でも埴輪は確認されず、墳丘上や周溝内に土器が配置されていたものと推測される。出土した土器は周溝内の一か所に集中しており、その位置は各古墳とも様々で、配置されていた場所がそれぞれ異なっていたと考えられる。今回確認された主体部4基のうち2基から直刀2振り出土している。どちらも刀身のみで、鞘や鏢などは出土していないため、刀身を布などで包んで埋葬したものと思われる。

(4) 古墳群の変遷と様相 (第130図)

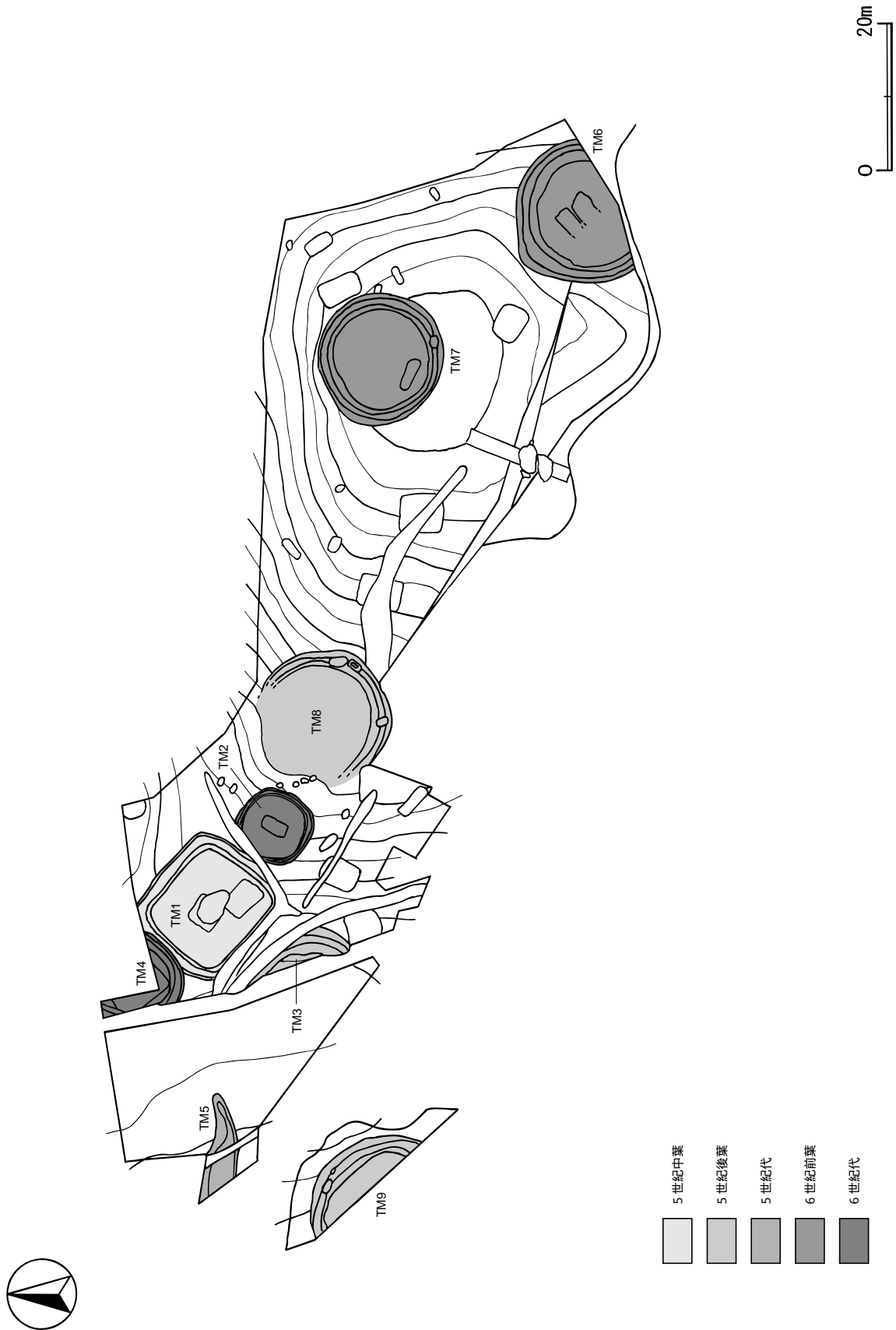
当古墳群が形成された古墳時代中期は、大和王権が前代に数多く出現した首長層を序列化し、編成しなおすことにより支配を強化することで、弥生的な地方連合が消滅する時期である。

今回の調査で最も古い5世紀中葉を示す第1号墳は、方墳という墳形から、王権の直接的支配に入っておらず、地域首長の支配下にある共同体成員層の墓地としてわずかに残る古墳と考えられる。また、岩瀬地域の古墳の特徴である埴輪を持たない古墳築造をしていることから、これまでとは別系統の新興勢力の被葬者は考え難く、長辺寺山古墳や狐塚古墳を頂点とする支配体制にのっとった前代の伝統を継承する被葬者像が想定される。

関東においてもこの時期の方墳は神奈川県御屋敷添1号墳²⁹⁾、同県加瀬台8号墳³⁰⁾、千葉県安須2号墳³¹⁾などわずかにみられるが、本墳に関しては、遺物も少なく、様相が明確ではないため、今後の方墳調査の成果をふまえて再考したい。

第1号墳以降、方墳は消滅し、小形の円墳から成る群集墳が築造されていく。方墳に続く5世紀後葉に位置づけられるものとして、第2・3・8・9号墳があげられる。この時期の円墳は、前代の第1号墳の周辺に集中して立地し、丘陵の下方に向かって築造されている様相がうかがえる。また、同時期に古墳が築造されているにも関わらず、墳丘の規模、埋葬施設、出土遺物や副葬品はそれぞれ様相を異とし、このことは6世紀前葉の第6・7号墳も同様で、これらの古墳の被葬者は、首長層ではなく、その下位に位置する中小豪族、いわゆる当地域の有力者層が推測される。

前述したように次の時期の古墳には第6・7号墳が位置づけられる。ただし、各古墳から出土している土器の時期をふまえると、TK23のものは確認できず、第7号墳の前段階に位置する6世紀初頭の古墳は認められない。第6号墳は、出土土器の様相から第7号墳より若干新しく、古い時期の甗が出土していることや主体部が2基あることから、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて使用されていた可能性がある。5世紀後葉の古墳が、丘陵下に向かって築造されていくのとは対照的に、第6・7号墳は丘陵の頂上や尾根筋



第130図 古墳変遷図

といった丘陵の上を意識して築造されているようである。

次の6世紀中葉以降の古墳は今回の調査で確認されず、6世紀後半から7世紀前半にかけて、墳丘や周溝などの施設を持たない箱式石棺が出現する。第2号石棺は第8号墳の周溝内に位置しており、古墳の被葬者との縁故関係が想定される。第3号石棺からは隣接する第8号墳と同時期の5世紀後半を示す鉄鏃³²⁾が出土しており、伝世したものと考えられ、この鉄鏃は第8号墳の被葬者との血縁・地縁的なつながりを示すものと考えられる。第1・3号石棺は、古墳の周溝外に構築されており、簡易的な構造を呈している。この存在は、6世紀後半から7世紀前半に入り、古墳を構築できる力も無く、当古墳群が衰退する状況を示しているものと考えられる。第7号墳の北東に位置する第2号墓坑は、第6・7号墳の主体部と様相が類似し、石棺と同様に周囲に墳丘や周溝を持たないことから、古墳と石棺の間の時期に当てはまる可能性があり、これに従うと、「古墳→墓坑→石棺」という当古墳群の盛衰が想定される。

当古墳群の第6・7号墳が築造される頃、対岸の丘陵に位置する松田古墳群では前方後円墳の第1号墳が築造される。この古墳からは、銅鏡、直刀、刀子、鉄鏃、ガラス小玉が副葬品として出土しており、当古墳群よりも上位の階層の人物が埋葬された墳墓と考えられている³³⁾。また、埴輪が出土していることは、古墳に埴輪を樹立していたことを示すもので、前代までのこの地域における古墳の特徴にはみられないことから、前方後円墳を築造し得る在地首長権を獲得し、新たに羽黒盆地に分立した首長層と想定できる。従って、当古墳群の被葬者は、松田古墳群の被葬者である首長クラスの人物を頂点とし、同じ筑輪川流域に位置する木植古墳群や曾根古墳群などと共に、それぞれの小さな地域や集落を治めた中小豪族と考えられる。さらに、当古墳群は石棺を加えると5世紀中葉から7世紀前半までの古墳であるが、わずかに途絶える時期が認められ、時期に継続性がみられないことや、古墳の形状・規模の変化、立地する場所の変化などから、当古墳群の被葬者内でも権力の移り変わりがあったことが考えられる。加茂部地区という狭い範囲内に、当古墳群を築造した中小豪族を有力者層とする人々の存在が想定でき、その中で、世襲のみではなく、他の有力者への権力の移譲もあったものと考えられる。

6 奈良・平安時代

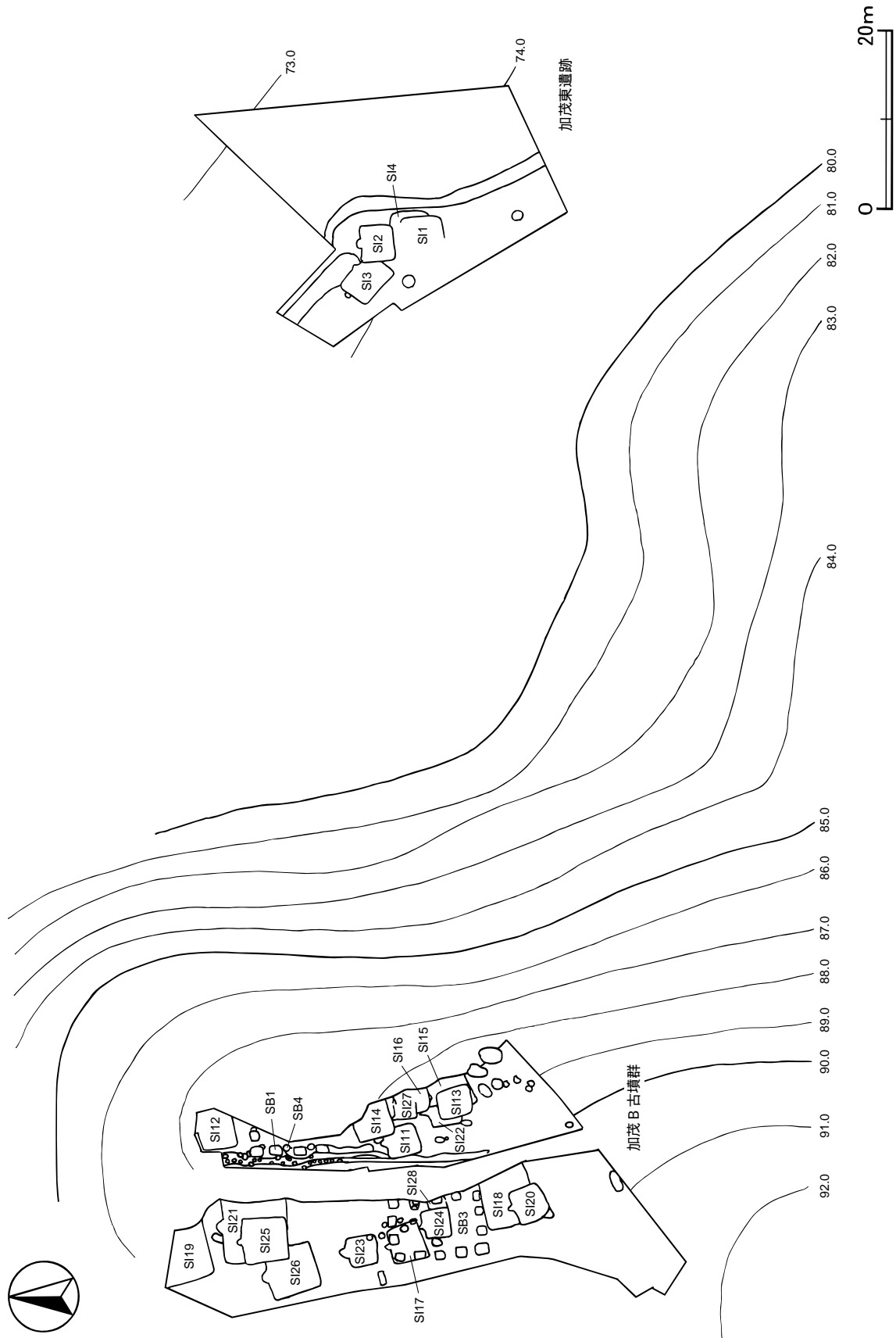
当時代の遺構は、調査区東部の標高84～90mの東斜面から竪穴住居跡18件、掘立柱建物跡6棟、調査区西部の標高94mの西斜面に土坑1基が確認されている。この斜面は段状になっており、上下2段に遺構が存在し、南北に延びる斜面上に集落が広がっているものと考えられる。確認された遺構の時期は、8世紀から10世紀までで、集落が継続して営まれていることがわかる。ここでは、集落の変遷と出土遺物から若干の考察を加え、当遺跡の様相に迫りたい。

(1) 集落の変遷

8世紀

この時期の遺構には第11・16・18・19・21・26号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第51号土坑が該当する。遺構が立地する場所は、斜面に整形された狭い段切状の部分で、集落を形成するのに適した場所とはいえない。

この集落で最も古い時期の8世紀中葉には第18・21号住居跡の2軒が該当し、段差の上段に立地している。第21号住居跡は一辺が6.5mを測る当集落最大の住居跡で、遺物の出土量が特徴的である。特に坏の数は11点と突出しており、この他にも供膳具が多い。竈は、砂質粘土を用いた頑丈な造りで、火床面は煉瓦の様に硬化し、他の住居跡の竈にはみられない両袖の外側に竈施設に伴うピットが存在している。また、



第131図 加茂B古墳群・加茂東遺跡 奈良・平安時代遺構位置図
(『茨城県教育財団文化財調査報告』第228集より一部加筆)

本跡は二度の建て替えが行われており、地山の岩盤層を掘り込んで拡張していることがわかる。後葉に入ると上段に掘立柱建物が構築されるようになり、下段には竪穴住居が構築される。

集落から丘陵を越えた反対側の西斜面に位置する土坑は氷室として利用されていたものと考えられる。この土坑の覆土中層から土器がまとまって出土し、その中には底部が穿孔された須恵器坏も検出されている。この土坑が位置する西側は、現在でも雨乞い信仰が残る加波山をのぞむことができ、意識して作られたように思われる。氷室としての機能が失われた後、土器を投棄したものであろう。

8世紀代の住居跡は、第21号住居跡をはじめ比較的規模が大きく、一辺5mを超えるものが5軒を数えることができる。これらの配置をみると、上段に構築された中葉の住居廃絶後に第3号掘立柱建物が構築され、上・下段に住居が構築されるようになる。特筆すべき遺物は、墨書土器で、「大」と書かれているものはこの時期に多くみられる。

9世紀

この時期では、第12・15・17・20・22～25号住居跡の8軒が該当する。前葉の住居跡は、8世紀中葉の分布と同様に上段に構築され、中葉から後葉に入ると下段にも住居跡がみられるようになる。規模は前代に比べて小形化し、最大のもので一辺4.6mで、その他は3～4mのものとなり、8世紀代より1m以上の差が認められる。前葉の住居跡である第20・23・24号住居跡は、5～6mの間隔をおいて、一列に並ぶように位置し、第24号住居跡は第3号掘立柱建物跡と重複して構築されていることから、この時期に掘立柱建物跡が廃絶していることがわかる。8世紀後葉の第16号住居跡の上には中葉の第22号住居跡、さらに後葉の第15号住居跡が重複しており、短期間で住居の構築・廃絶が認められ、この後の10世紀代の住居跡も重複してくることから、この位置が居住区として長期間にわたり、使用されてきたと考えられる。北には、第1・4号掘立柱建物跡が存在し、それらとの関連性が想定される。この時期の特徴的な遺物は、墨書土器の他に前代より転用硯が多くみられることで、第12・15号住居跡から出土しているような朱墨のついたものもこの時期にみられる。また、斜面下に位置する加茂東遺跡³⁴は、9世紀代から10世紀代の集落跡で、当遺跡の集落として時期は同じであり、住居の構築・使用・廃絶が短期間であることなど当遺跡の集落の特徴と同じであり、密接に関連した集落と考えることができる。

10世紀

この時期では第13・14・27号住居跡の3軒が該当する。住居跡は下段のみで、集落が下に移動している。第13号住居跡からは、「弥山」と墨書された土師器坏の他に、积文不明の墨書土器片2点があり、第14号住居跡からは二次焼成を受けた緑釉陶器皿が出土している。墨書土器が継続的に出土しているのに対し、転用硯の出土はこの時期からみられなくなる。この時期を最後に遺構は確認されなくなり、加茂東遺跡でも同じような状況を示し、集落の終焉を迎えるものと思われる。

(2) 墨書土器 (表15)

今回確認された墨書土器は計17点である。墨書土器が出土しているのは、第11～13・15・18・19・23・26号住居跡、第1号掘立柱建物跡の抜き取り痕で1点、表土中で2点確認されている。器種は、坏が11点と多く、高台付坏、盤、蓋がそれぞれ2点ずつで、明確な文字は「大」「弥山」「億」「全」「大十九」などであり、その他のものは破損や摩耗により判読は不可能である。

最も多く検出されているのは「大」で、第11・12・18・19号住居跡、第1号掘立柱建物跡で出土している。これらの遺構は、8世紀代のものが多く、以降の時期ではほとんどみられず、9世紀後葉の第12号住居跡で「大」と思われる墨書土器片が出土している。他の遺跡でも「大」はでるが、「大」はこの地が古

代新治郡の大幡郷に比定されている³⁵⁾ことから、「大幡郷」の「大」を称したものと考えられる。

特徴的なものは、「弥山」で、10世紀初頭の土師器坏に記されている。「弥」は、「めずらしい、貴重な」といった意味合いをもつ字で、「山」は本跡が位置する丘陵を指すものと考えられる。遺跡の北側には式内社加茂大神御子神主玉神社が鎮座し、丘陵上には古墳や御神体とされる「舟止め石」も存在することから、当時の人々にとってこの丘陵は特別な場と想定され、「弥山」の文字はこの土地を指し示していたものと推測している。この他にも特徴的な文字資料があるが、意味について現時点では不明であり、今後の文字資料の増加を期待し、それをふまえて再考察したい。

表15 奈良・平安時代墨書土器一覧表

番号	积文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	所属時期	遺物番号	備考
1	大	墨書	須恵器	蓋	天井部外面	横位	第11号住居跡	8世紀後葉	65	内面墨痕
2	田カ	墨書	土師器	坏	体部外面	横位カ	第12号住居跡	9世紀後葉	72	内面黒色処理
3	大カ	墨書	土師器	坏	体部外面	正位カ	第12号住居跡	9世紀後葉	73	内面黒色処理
4	弥山	墨書	土師器	坏	体部外面	正位	第13号住居跡	9世紀末～10世紀初頭	80	内外面油煙
5		墨書	土師器	坏	口縁部外面		第13号住居跡	9世紀末～10世紀初頭	81	内面黒色処理
6		墨書	土師器	坏	体部外面		第13号住居跡	9世紀末～10世紀初頭	82	内面黒色処理
7		墨書	土師器	坏	体部外面		第15号住居跡	9世紀後葉	92	
8	大カ	墨書	須恵器	坏	体部外面	正位カ	第18号住居跡	8世紀中葉～後葉	117	
9		墨書	須恵器	坏	体部外面		第19号住居跡	8世紀後葉	128	
10		墨書	須恵器	高台付坏	底部外面		第19号住居跡	8世紀後葉	130	
11	大	墨書	須恵器	盤	底部外面		第19号住居跡	8世紀後葉	133	
12	億大	墨書	須恵器	盤	底部・体部外面		第19号住居跡	8世紀後葉	134	
13	全	墨書	須恵器	高台付坏	底部外面		第23号住居跡	9世紀前葉	163	
14	大十九	墨書	須恵器	坏	底部外面		第26号住居跡	8世紀後葉	171	
15	大	墨書	土師器	坏	体部外面	横位	第1号掘立柱建物跡	8世紀代	177	
16	大	墨書	須恵器	坏	底部外面		表採		193	
17	大	墨書	須恵器	盤	底部外面		表採(L9c0)		194	内面墨痕

(3) 転用硯(表16)

転用硯は9点確認されている。7点は堅穴住居跡から検出され、出土している第19・21号住居跡を除くと、いずれも9世紀代の住居跡である。転用器種は、坏、高台付坏、皿、盤、蓋で、特に盤の底部外面が

表16 転用硯一覧表

番号	種類	材質	器種	部位	遺構	所属時期	遺物番号	備考
1	墨 朱墨	須恵器	盤	底部内面(墨) 底部外面((朱墨))	第12号住居跡	9世紀後葉	78	
2	朱墨	土師器	皿	内外面	第15号住居跡	9世紀後葉	94	内面黒色処理
3	墨	須恵器	盤	底部外面	第17号住居跡	9世紀中葉～後葉	104	
4	墨	須恵器	盤	底部外面	第17号住居跡	9世紀中葉～後葉	105	
5	墨	須恵器	高台付坏	底部内面	第19号住居跡	8世紀後葉	132	
6	墨	須恵器	坏	内面	第21号住居跡	8世紀中葉	150	
7	墨	須恵器	蓋	内面	第25号住居跡	9世紀後葉	170	
8	墨	須恵器	蓋	内面	表採		188	
9	墨	須恵器	盤	底部内面	表採		1.94	

多く使用されている。第12号住居跡のものも盤の底部外面を使用した朱墨の付着が認められ、内面には墨の付着が確認できる。第15号住居跡では、皿に朱墨が付着しているものが出土しており、単なる識字層の存在だけでなく、文書事務に携わる人物の存在をうかがうことができる。

(4) 奈良・平安時代の集落の様相

丘陵の頂上部から西斜面にかけての、5世紀中葉から6世紀前半、石棺の構築を含めると7世紀前半までの継続が考えられる当古墳群が選地し、集落は、集落を形成するには適した場所ではない東斜面である。この地に集落を形成した人々は丘陵の古墳を意識しており、この場所に住む必然性のあった被葬者に関連する人々であり、当古墳群の被葬者の末裔を想定したい。

加茂部地区という狭い範囲を治めていた中小豪族は、丘陵の東側を居住基盤にしたものと考えられ、周辺では当古墳群をのぞむ丘陵上やその斜面に位置していたと考えられる。奈良時代に入り、居住基盤に変わりが無い狭い谷津内に住み、墓域の意識は薄れ、東斜面部上段の第3号掘立柱建物跡は、当古墳群の被葬者の末裔で、在地の有力者層の居宅と考えられ、その人物を中心に集落が形成されていったと想定される。この時期には、西側に祭祀を行った土坑が存在し、第8号墳と重複する第1号道路がこの時期より機能していたと想定でき、これは尾根筋を通るように舟止め石に向かっており、土坑と舟止め石を結ぶ通路と想定できる。『延喜式』新名上に常陸国二十八座新治郡三座として「稲田神社 佐志能神社 鴨大神御子神主神社」とある式内社加茂大神御子神主玉神社が、当古墳群をのぞむ北東の斜面部に位置しており、9世紀には鎮座していたため、当地域の祖先である古墳の被葬者を祭るための祭祀や信仰が執り行われたものと推測される。集落の居住者も、この丘陵を示すと考えられる墨書土器「弥山」にみられるように、古墳に眠る祖先への想いがあったのだろう。この集落は10世紀前半を最後に終わりを迎えるが、その背景には、住居を構築できる場所がなくなっただけでなく、祖先への想いの薄れからも、集落は徐々に下へと移動していったものと考えられる。

7 おわりに

当古墳群からは、旧石器時代から平安時代までのものが確認された。

旧石器時代の石器集中地点の発見は、岩瀬地域の発見であり確認されなかった石器製作場の貴重な資料である。弥生時代の集落跡や出土している土器は、県西における後期の文化の交流を解明する上で、重要な遺跡であり、古墳群の調査も松田古墳群など周辺の古墳との関連や岩瀬盆地における古墳文化解明の重要な資料となる。また、斜面部に奈良・平安時代の集落が発見されたことは、今後の集落跡研究においても検討を要する事例であり、地域史研究にも大きな成果となった。

註

- 1) 窪田恵一氏の御教授による。
- 2) 黒澤秀雄「一般県道西小埜真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告 裏山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第73集 1992年3月
- 3) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書X I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第249集 2005年3月
- 4) 寺内久永・須賀川正一「犬田神社前遺跡3 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書X IV」『茨城県教育財団文化財調査報告』第270集 2007年3月

- 5) 仲村浩一郎・後藤一成・宮田和男・芳賀友博・鴨志田祐一「辰海道遺跡Ⅰ 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第222集 2004年3月
- 6) 鈴木素行「武田石高遺跡の陥穴状遺構について」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』 1998年1月
- 7) 横倉要次・早川麗司・越田真太郎「高幡遺跡 加茂東遺跡 犬田山神古墳 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第228集 2004年3月
- 8) 前掲3)と同じ
- 9) 森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究』第7巻 弥生集落 雄山閣 1986年1月
- 10) 小野忠熙『高地性集落論』學生社 1984年2月
- 11) 前掲3)と同じ
- 12) 前掲7)と同じ
- 13) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集 2004年3月
- 14) 前掲7)と同じ
- 15) 前掲13)と同じ
- 16) 坂本和也「アメリカ式石鏃考」『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集』菅原文也先生還暦記念論集刊行会 1995年9月
- 17) 前掲16)と同じ
- 18) 前掲16)と同じ
- 19) 前掲11)と同じ
- 20) 前掲16)と同じ
- 21) 西宮一男『間中古墳』岩瀬町教育委員会 1982年3月
- 22) 伊藤重敏・川崎純徳「花園壁画古墳（第3号墳）調査報告」『岩瀬町文化財調査報告』第7集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 23) 西宮一男『常陸狐塚』岩瀬町教育委員会 1969年3月
- 24) 伊藤重敏「青柳2号墳調査報告」『岩瀬町文化財調査報告書』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 25) 松井氏により、ガラス小玉の分析を行った。G1・G2は銅と鉛が特異的に検出され、鉛ガラスを銅で着色した可能性がある。G3～G13は、銅があまり検出されず、鉄や鉛、カルシウムが検出されている。カルシウムが含まれていることから鉛ガラスとはいえず、断定することができない。
- 26) 阿久津久・片平雅俊「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民族博物館研究報告第44集 東国における古墳の終末〈本編〉』国立歴史民族博物館 1992年3月
- 27) 本橋弘巳「沢田古墳群 国道125号大谷バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第276集 2007年3月
- 28) 稲田健一氏の御教授による。
- 29) 西川修一・天野賢一・寺村光晴・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・植田弥生『御屋敷添遺跡・高森一ノ崎遺跡・高森・窪谷遺跡』かながわ考古学財団調査報告33 1998年3月
- 30) 浜田晋介・長谷川祐紀・菅野和郎・畠山禎・折茂克哉『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』加瀬台8号墳の発掘調査報告書 財団法人川崎市市民ミュージアム 1996年12月

- 31) 小澤洋「房総における古墳中期から後期への移行」『第6回東北・関東前方後円墳研究大会〈シンポジウム〉中期古墳から後期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会 2001年1月
- 32) 稲田健一氏の御教授による。
- 33) 前掲13)と同じ
- 34) 前掲7)と同じ
- 35) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史』通史編 岩瀬町 1987年3月

参考文献

- ・茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- ・川又清明「鉦のあるころー岩瀬盆地を中心としてー」『菟玖波ー川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集ー』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会 2007年2月
- ・津野仁・谷中隆・森嶋秀一・江原英・篠原祐一『寺野東遺跡Ⅶ』栃木県埋蔵文化財調査報告第209集 財団法人栃木県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 1998年3月
- ・石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎『古墳時代の研究』第7巻 雄山閣 1992年4月
- ・石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣 1991年11月
- ・小澤重雄「山ノ入古墳群 大日下遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第255集 2006年3月

第4章 金谷遺跡

第1節 遺跡の概要

金谷遺跡は、桜川市（旧茨城郡岩瀬町）西飯岡金谷882番地の2ほかに所在し、桜川市北西部の泉川左岸、標高49～52mの台地上に位置している。調査前の現況は道路である。平成14・15年度に、調査が行われており、調査面積は53,419.04㎡である。調査区を東西に分断する道路部分を平成18年度に調査を行った。今回は道路部分の整理を行う。

遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、時期不明の土坑2基、溝跡1条、ピット列1か所が確認されている。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱が出土している。主な出土遺物は、土師器（坏・甕）、土製品（支脚・土玉）などである。

1 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第112号住居跡（第133図）

位置 中央1区西部S43h3区の平坦な台地上に位置している。東部は平成14年度に調査が終了している。

規模と形状 上面が削平されているため、確認された範囲は南北軸6.15m、東西軸は6.40mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。

ピット 2か所。P4・P5は深さ93cm・84cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。

所見 今回の調査では遺物が出土していないため、時期は不明であるが、平成14年度調査区分の『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集で、時期は8世紀中葉以前と報告されている。

第245号住居跡（第133図）

位置 中央1区西部のT43b2区、標高48mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1416号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南北軸3.32m、東西軸3.88mの長方形で、主軸方向はN-7°-Eである。

床 平坦である。

竈 北壁中央部からやや東寄りに付設されている。火床面は火を受けて赤変している。

覆土 堆積状況は、層厚が薄いため不明である。

所見 遺物が出土していないため、時期は不明である。

表17 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古 新)
								主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
112	S43h3	N - 5° - E	長方形	(6.40) × (6.15)	-	平坦	-	2	-	-	1	-	-		8世紀中葉以前	
245	T43b2	N - 7° - E	長方形	3.88 × 3.32	-	平坦	-	-	-	2	1	-	-			

(2) 掘立柱建物跡

第32号掘立柱建物跡 (第133図)

位置 中央1区西部のS43e2区, 平坦な台地上に位置している。

重複関係 第111号住居跡と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間で, 桁行方向はN-80°-Wである。規模は桁行8.1mである。柱間寸法は2.7m (9尺)を基調とし, ほぼ均等に配置されている。

柱穴 4か所。平面形は方形又は隅丸方形で, 規模は長軸80~100cm, 短軸71~97cmである。深さは46~77cmである。P2の底面からは柱のあたりが, P3からは抜き取り痕が確認されている。

所見 桁の1列のみ確認され, 北あるいは南側の桁柱穴は削平により失われた可能性がある。時期は, 規模や形状から奈良・平安時代と考えられる。

(3) 溝跡

第22号溝跡 (第133図)

位置 中央1区西部のS43j1~T43a1区, 台地の平坦部に位置している。東部は平成14年度に調査が終了されている。

規模と形状 上面が削平されているため, 規模や形状は明確ではないが, 南部が調査区域外に延びている。S43j1区から7.5mほど西方向 (N-88°-E) に直線的に延びており, S43j1区ではL字に屈曲し, 南方向 (N-2°-E) に直線的に延びている。平成14年度分は, 幅1.64~2.52mで今回確認した部分は, 上部が削平されているため幅0.69~1.12mである。

所見 平成14年度調査区分の『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集において, 第1号ピット列とさほど時期差なく作られ, 防御的役割を果たしていたとされ, 時期は9世紀中葉以降と考えられている。今回確認された部分では, 本跡とピット列が共に南に屈曲しており, 本跡を意識してピット列が構築された可能性が高い。

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で, 土坑2基, ピット列1列が確認された。以下, 確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

第1416号土坑 (第132・133図)

位置 中央1区西部のT43b2区, 標高48mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第245号住居と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸0.50m, 短軸0.46mの隅丸方形で, 長軸方向はN-6°-Wである。深さは26cm, 底面は平

坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 覆土中から混入した土師器片14点（坏4，甕10），土製品1点（支脚）が出土している。DP430は、覆土上層から出土している。

所見 古墳時代の土師器が混入しているが、時期や性格は不明である。

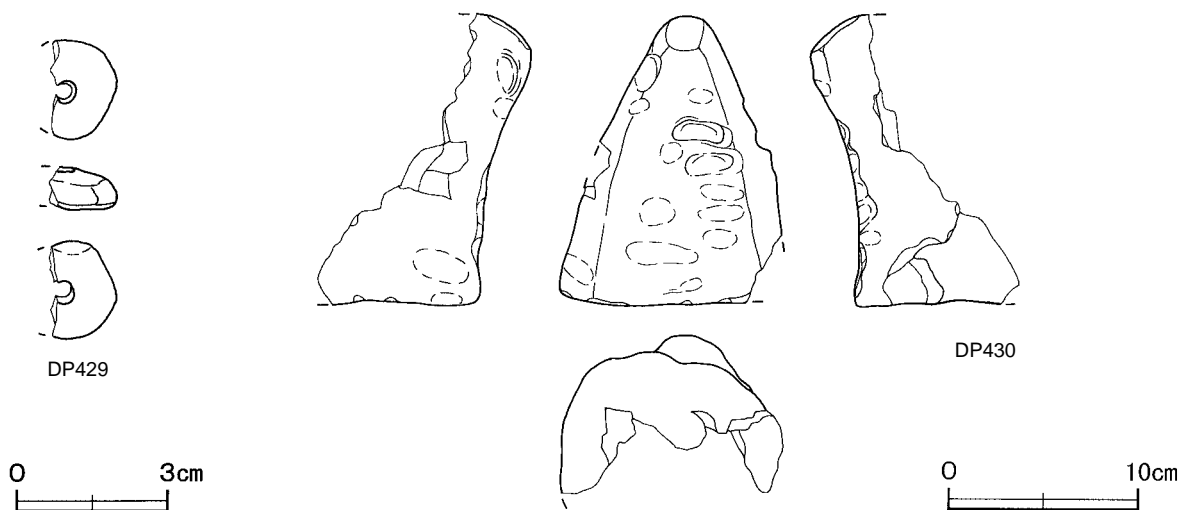
第1417号土坑（第132・133図）

位置 中央1区西部のT43d2区，標高48mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸0.87m，短軸0.71mの隅丸方形で，長軸方向はN-83°-Wである。深さは39cm，底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 覆土中から混入した土師器片30点（坏16，高坏3，甕11），土製品1点（土玉）が出土している。DP429は覆土中からの出土である。

所見 古墳時代の土師器が混入しているが，時期や性格は不明である。



第132図 第1416・1417号土坑出土遺物実測図

第1416・1417号土坑出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP429	土玉	2.0	(1.3)	0.9	(1.96)	土(石英)	ナデ	覆土中	SK1417出土
DP430	支脚	10.4	(11.8)	(11.0)	(460)	土(石英・赤色粒子)	指頭痕	覆土上層	SK1416出土

(2) ピット列

第1号ピット列（第133図）

位置 中央1区西部のS43j3区からT43b1区で，標高48mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第22号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 S43j3区から西に7mほど延び，S43j1区でL字に屈曲して，南方向（N-5°-E）に7mほど延びる。柱間寸法は0.1~1.6mである。

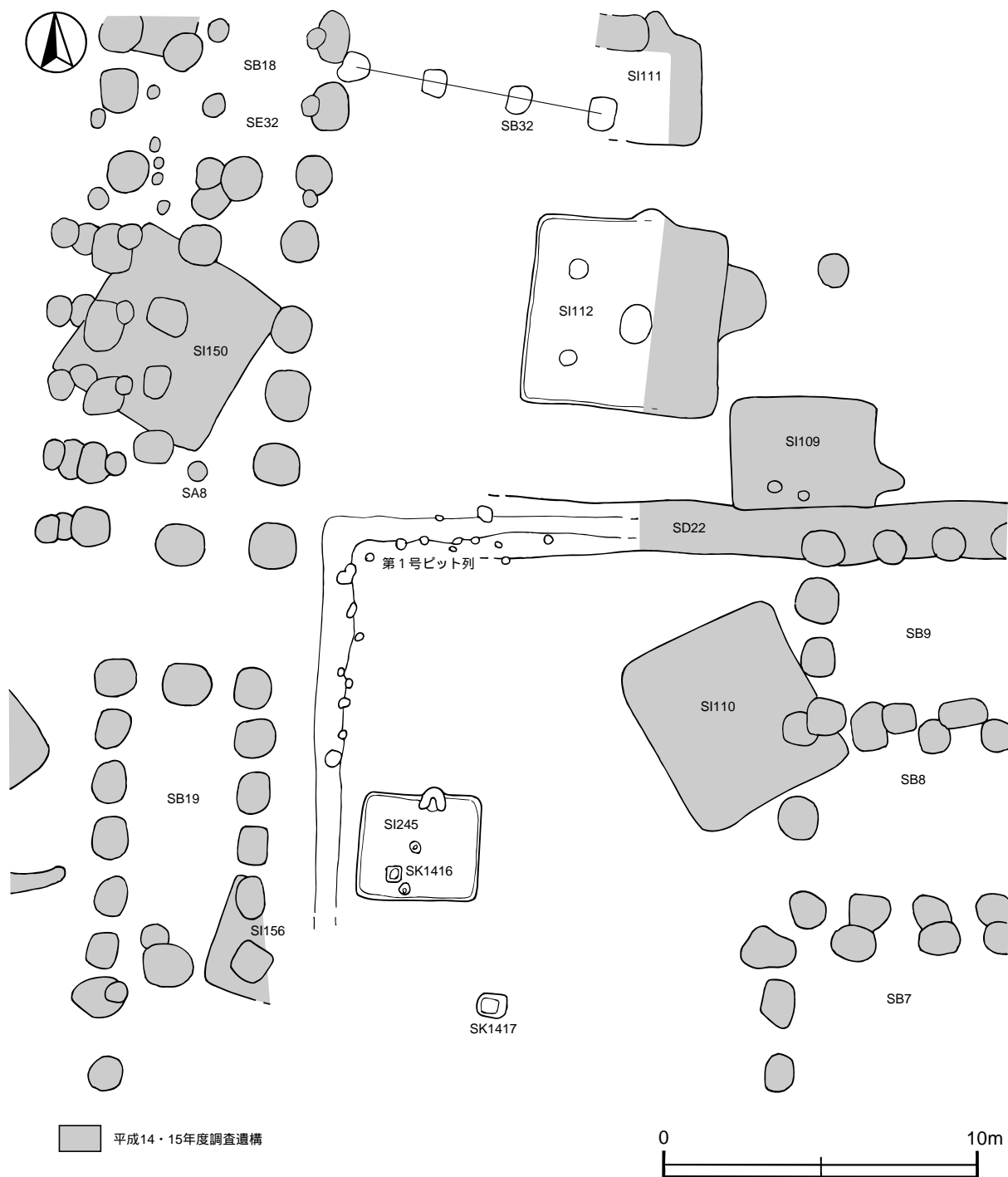
柱穴 新たに19か所確認された。長径16~62cm，短径16~40cmの円形及び楕円形で，深さは14~65cmである。

所見 『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集で，本跡の東側が報告されており，溝と複合した施設で，

柵のような施設であったとされている。今回確認された部分で、第22号溝跡と同じように南に屈曲していることが判明したことから、溝と複合した施設である可能性は高い。

表18 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古新)
				長軸(径) × 短軸(径) (m)	深さ(cm)					
1416	T 43b2	N - 6° - W	隅丸方形	0.50 × 0.46	26	外傾	平坦	-	土師器 土製品	
1417	T 43d2	N - 83° - W	隅丸方形	0.87 × 0.71	39	外傾	平坦	-	土師器 土製品	



第133図 金谷遺跡遺構全体図（『茨城県教育財団文化財調査報告』第254集より一部加筆）

付 章

加茂B古墳群第21号住居跡の腐植土に係る自然科学分析

<目次>

はじめに	174
1. 試料	174
2. 分析方法	174
(1) 土壌化学分析	174
(2) 微細物分析	175
3. 結果	175
(1) 土壌化学分析	175
(2) 微細物分析	175
4. 考察	176
引用文献	177

<表・図版一覧>

表 1 土壌化学分析結果

表 2 微細物分析結果

図版 1 砂分の状況・種実遺体

加茂B古墳群第21号住居跡の腐植土に係る自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桜川市に所在する加茂B古墳群は、筑波山塊北部の山麓を構成する標高100mほどの緩やかな丘陵上に位置する。吉岡ほか（2001）や宮崎ほか（1996）などの地質記載によれば、丘陵を構成する地質は、新生代古第三紀に貫入したとされる稲田花崗岩であり、丘陵と沖積低地との間に、中期更新世の砂礫層からなる標高70m前後の狭小な段丘が分布している。

発掘調査では、丘陵上に古墳時代中期の終わり頃から後期の初め頃とされる古墳3基と弥生時代の竪穴住居跡などが確認され、丘陵の東斜面には古代の8世紀～9世紀頃とされる竪穴住居跡が多数検出されている。この古代の竪穴住居跡の中には、その中央部にピットを有するものがあり、そのピットを埋めている土が周囲の床面に比べて暗色を呈することが確認されている。発掘調査所見では、ピットは住居構築に伴う地鎮祭の跡である可能性があると考えられている。

本報告では、上述したピットの性格に係わる情報を得ることを目的として、ピットの土壌の理化学性および微細な植物片等の確認を行い、ピット覆土の由来や埋納物の存否を検討する。

1. 試料

試料は、古墳群の位置する丘陵の東斜面に設定された調査区の2区で検出された第21号住居跡より採取された土壌である。第21号住居跡では、住居の中心とされる位置にピットが確認されており、試料はそのピットの覆土である。発掘調査所見では、腐植土と呼ばれているが、白色の細礫および砂を多量に含む暗褐色のシルト分からなる土壌である。

なお、試料から、超音波洗浄装置にて泥分を除去し、残渣を実体顕微鏡にて概査したところ、白色の細礫～砂は、最大径約7.5mmの角礫状を呈する石英や長石類の碎屑片であることが確認された。また、微量の角閃石の鉱物粒や表面の風化した黒雲母片なども認められた（図版1-1）。

2. 分析方法

(1)土壌化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法、腐植含量はチューリン法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法（土壤環境分析法編集委員会、1997）でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

1)分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mm篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2)リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（ HNO_3 ）約5ml加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ HClO_4 ）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（ CaO ）

濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) とカルシウム含量 (CaO mg/g) を求める。

3) 腐植含量

粉碎土試料0.100~0.500 g を100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

4) リン酸吸収係数

乾土として10.00 g になるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液 (pH7.0) 20 mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100 μ lを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色 a 液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液 (pH7.0) のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

(2) 微細物分析

試料200cc (301.12 g) を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材 (主に径 4 mm以上) を抽出する。現生標本および石川 (1994), 中山ほか (2000) 等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は70℃48時間乾燥後の重量を求める。分析後の種実を容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して返却する。

3. 結果

(1) 土壌化学分析

分析結果を表1に示す。腐植含量は0.83%, リン酸含量は1.87mg/g, カルシウム含量は1.06mg/gであり, リン酸吸収係数は1240mg/100 gであった。

表1 土壌化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量 (%)	P2O5 (mg/g)	CaO (mg/g)	リン酸吸収係数 (mg/100g)
腐植土	SCL	7.5YR3/4 暗褐	0.83	1.87	1.06	1240

注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖 (農林省農林水産技術会議監修, 1967) による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野外土性による。

SCL...砂質塩壌土 (粘土15~25%、シルト0~20%、砂5~85%)

(2) 微細物分析

結果を表2に示す。栽培種のイネの胚乳5個, 穎11個が検出された他, 炭化材が0.33 g 確認された。

以下に同定された種実の形態的特徴を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳の完形1個, 破片4個, 穎 (果) の破片11個

表2 微細物分析結果

分類群	部位	状態	試料名 分析量	腐植土 200cc(301.12g)
イネ	胚乳	完形	炭化	1個
		破片	炭化	4個
	穎	破片	炭化	11個
炭化材		破片	炭化	0.33g

が検出された。いずれも炭化しており黒色、胚乳は長さ4.2mm、幅2.8mm、厚さ1.2mm程度のやや扁平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2 - 3本の隆条が縦列する。

胚乳を包む穎果は、完形ならば長さ6 - 7.5mm、幅3 - 4mm、厚さ1 - 2mm程度のやや扁平な長楕円体で、基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲朶を構成する。破片は基部の果実序柄の部分で、大きさは1mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

4. 考察

試料中に含まれる多量の細礫および砂は、実体鏡観察により、古墳群の位置する丘陵を構成している稲田花崗岩に由来する石英片や長石片であると考えられる。角閃石および黒雲母の鉱物粒を伴うことも、稲田花崗岩の主岩相が粗粒角閃石含有黒雲母花崗岩である（宮崎ほか、1996）ことと整合する。したがって、試料の採取されたピットの覆土は、古墳群の立地する丘陵の表層に形成された稲田花崗岩を母材とする土壤であると考えられる。なお、土壤の理化学性においてリン酸吸収係数が1200を若干超える値となった。庄子（1983）は、リン酸吸収係数が1200mg/100gないし1500mg/100g以上を火山灰土の目安としている。これに従えば、今回の試料は、火山灰土ではないと判断され、上述した花崗岩を母材とする土壤であることを支持する。火山灰土の基準に近い値を示すことについては、おそらく、桜川市付近にまで、赤城火山や男体火山の噴出物が分布している（例えば町田・新井（2003））ことの影響であると考えられる。

他の土壤の理化学性をみると、試料の腐植含量は1%にも満たないことから、特に腐植含有量の高い土壤とは言えない。また、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか、1991；天野ほか、1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0 P₂O₅ mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5 P₂O₅ mg/g（川崎ほか、1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0 P₂O₅ mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1 - 50 CaO mg/g（藤貫、1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これらの事例と比較すると、今回の試料は、リン酸量およびカルシウム量ともに天然賦存量の範囲内にあることから、特にリン酸やカルシウムの富化した土壤であるとは言えない。上述した腐植含量も考慮すれば、ピット中に植物質および動物質の遺体などが埋納されていた可能性は低いと考えられる。

一方、微細物分析からは、栽培種のイネの胚乳と穎が確認された。可食部である胚乳が確認されたことから、住居内に持ち込まれ利用されたことが推定され、当該期の集落周辺域におけるイネの利用が示唆される。したがって、第21号住居跡内の他の遺構や周辺住居からも、イネやイネ以外の栽培種が検出される可能性がある。ピット内にイネが「埋納」されたことについては、検出された数が非常に少ないことと、上述した土壤の理化学性を考慮すれば、その可能性は低いといえる。

なお、イネと共に検出された炭化材は、遺跡周辺遺跡の森林植生に由来すると思われる。住居内から検出されていることから、構築材の可能性もある。これらの植物遺体は、何れも炭化していることから、火を受け残存したことが推定される。

以上に述べたように、今回の分析からは、第21号住居跡中央のピットが地鎮祭に係わる遺構であったことを示唆あるいは支持するような結果は得られなかった。ただし、本分析をもって、地鎮祭に係わる遺構であったことを否定するものではない。今後の類例等における検討も必要であると考えられる。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36.
- Bowen, H.J.M., 1983, 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p.
- Bolt, G.H. ・Bruggenwert, M.G.M, 1980, 土壤の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 学会出版センター, 309p.
- 土壤環境分析法編集委員会編, 1997, 土壤環境分析法. 博友社, 427p.
- 藤貫 正, 1979, カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 川崎 弘・吉田 滢・井上恒久, 1991, 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 宮崎一博・笹田政克・吉岡敏和, 1996, 真壁地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 103p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会編, 1984, 土壤調査ハンドブック. 博友社, 156p.
- 庄子貞雄, 1983, 火山灰土の鉱物学的性質. 日本土壤肥料学会編 火山灰土－生成・性質・分類－. 博友社, 31-72.
- 吉岡敏和・滝沢文教・高橋雅紀・宮崎一博・坂野靖行・柳沢幸夫・高橋 浩・久保和也・関 陽児・駒澤正夫・広島俊男, 2001, 20万分の1地質図幅「水戸」(第2版), 地質調査所.

図版 1 砂分の状況・種実遺体



1mm
(1)

1



2mm 1mm
(2) (3,4)

2a

2b

3

4

1 . 砂分の状況 (第21号住居跡 ; 腐植土)
3 . イネ穎 (第21号住居跡 ; 腐植土)

2 . イネ胚乳 (第21号住居跡 ; 腐植土)
4 . イネ穎 (第21号住居跡 ; 腐植土)

写 真 图 版

加 茂 B 古 墳 群

金 谷 遺 跡



調査区西部全景（西から）



調査区中央部全景（南から）



調査区東部全景（北から）



調査区東部全景（北から）



第 1 号墳完掘状況



第 1 号墳主体部完掘状況

PL 4



第 2 号墳完掘状況



第 2 号墳主体部遺物出土状況（直刀）

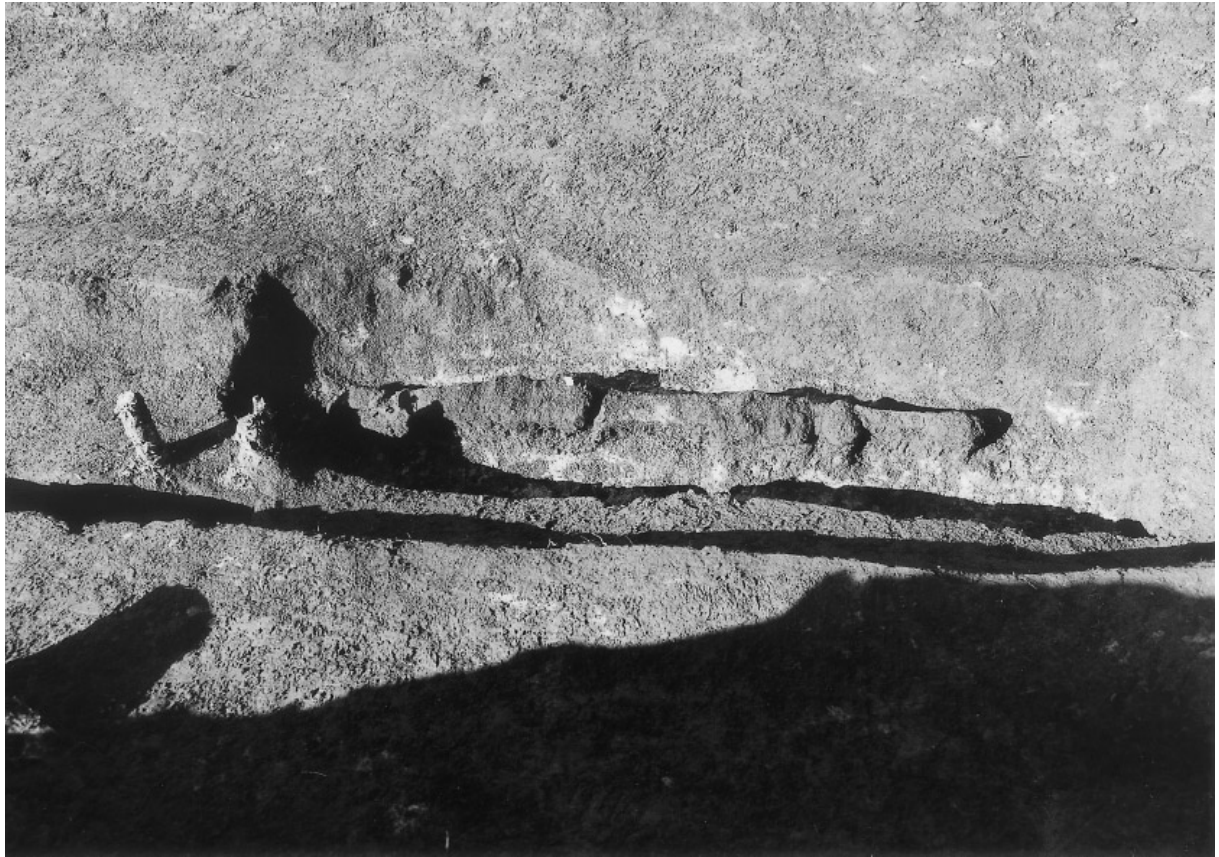


第 6 号墳完掘状況



第 6 号墳第 1 主体部完掘状況

PL 6



第6号墳第2主体部棺内遺物出土状況（直刀）



第6号墳周溝遺物出土状況



第 7 号墳完掘状況



第 7 号墳主体部完掘状況



第 1 号 石 棺
確 認 状 況



第 1 号 石 棺
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 石 棺
確 認 状 況

第 2 号 石 棺
完 掘 状 况



第 3 号 石 棺
確 認 状 况

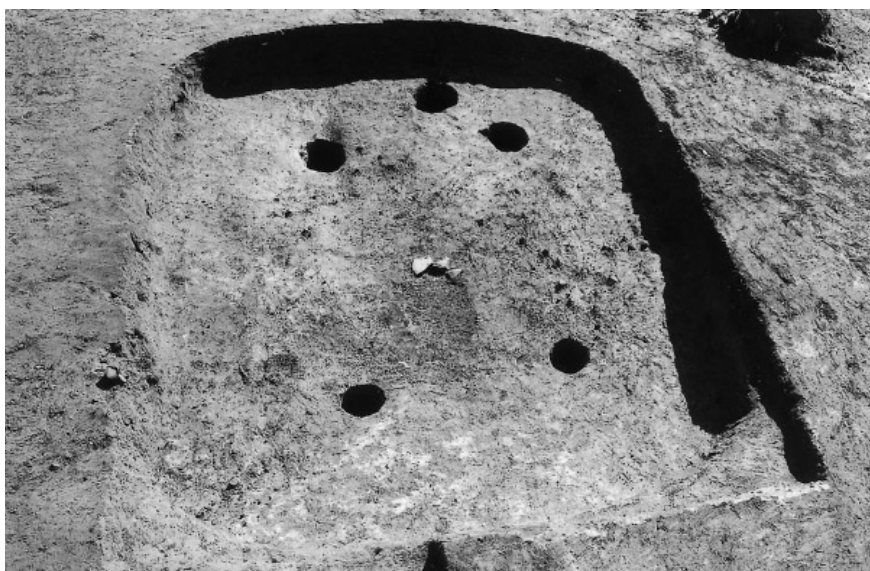


第 3 号 石 棺
遺 物 出 土 状 况





第 1 号 住 居 迹
完 掘 状 况



第 7 号 住 居 迹
完 掘 状 况



第 7 号 住 居 迹
炉 完 掘 状 况

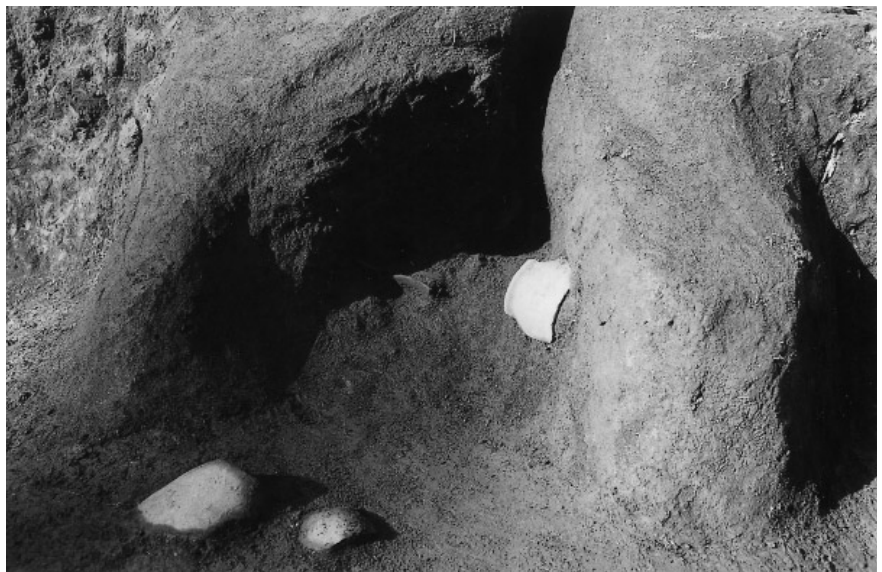
第 11 号住居跡
完 掘 状 況

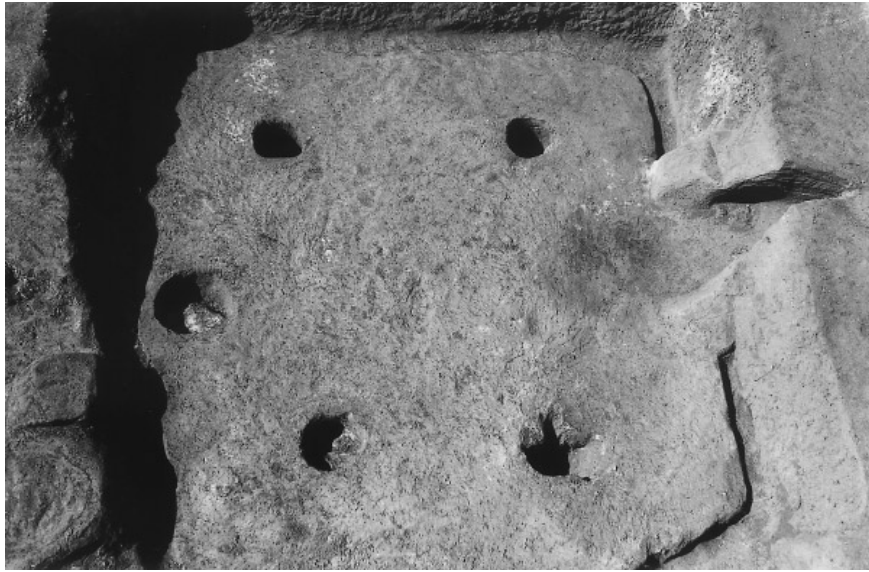


第 11 号住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 11 号住居跡
竈 遺 物 出 土 状 況





第 17 号住居跡
完 掘 状 況



第 18 号住居跡
完 掘 状 況



第 21 号住居跡
完 掘 状 況

第 21 号住居跡
遺物出土状況



第 21 号住居跡
竈完掘状況



第 25 号住居跡
完掘状況





第1号掘立柱建物跡
完掘状況



第3号掘立柱建物跡
完掘状況



第4号陥し穴
完掘状況

第 5 号 陥し 穴
完 掘 状 況



第 5 1 号 土 坑
完 掘 状 況



第 5 1 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況





SI7 22



SI10 33



SI10 30



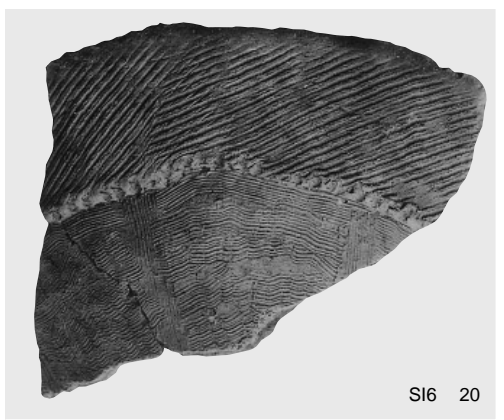
SI2 9



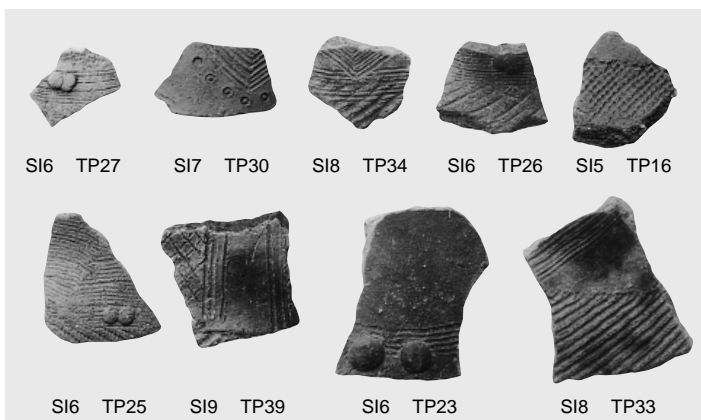
SI10 29



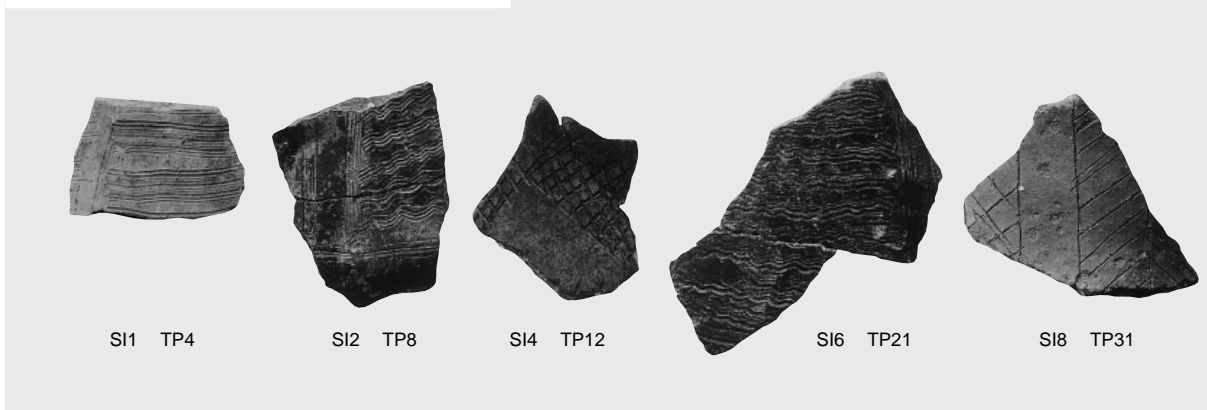
SI10 28



SI6 20

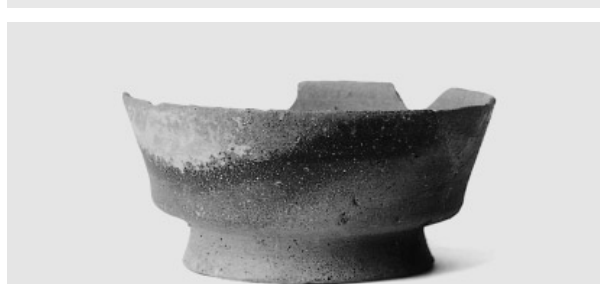


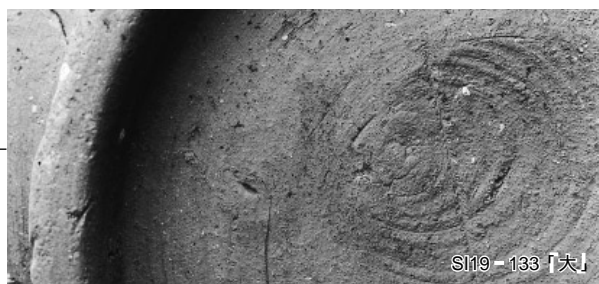
SI6 TP27 SI7 TP30 SI8 TP34 SI6 TP26 SI5 TP16
SI6 TP25 SI9 TP39 SI6 TP23 SI8 TP33

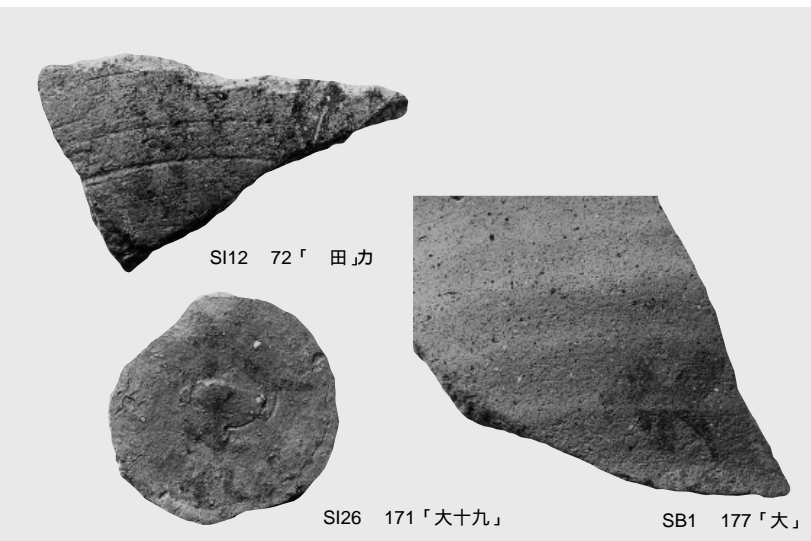
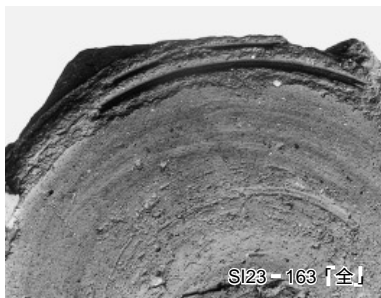


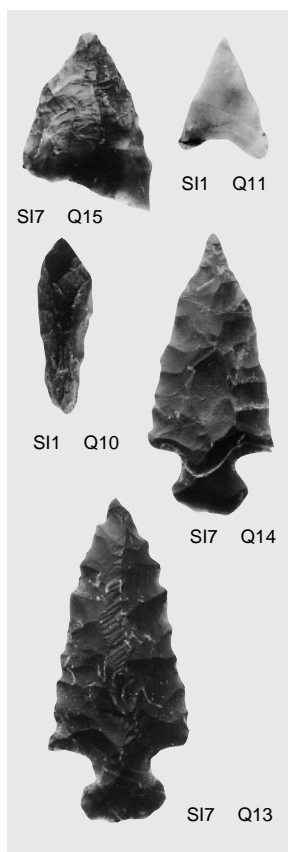
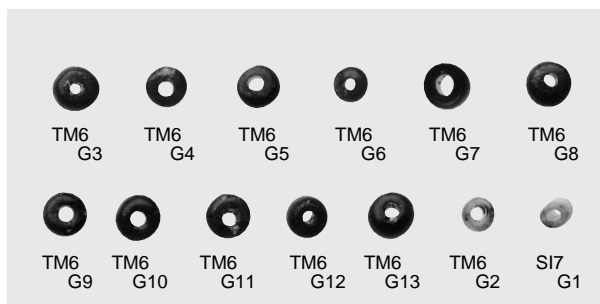
SI1 TP4 SI2 TP8 SI4 TP12 SI6 TP21 SI8 TP31













金谷遺跡
調査前全景



金谷遺跡
完掘全景（北より）



金谷遺跡
完掘全景（東より）

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

加茂B古墳群
金谷遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書XV

平成20（2008）年3月19日 印刷

平成20（2008）年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 (有)平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土西ノ内13番地
TEL 0246-23-9051